

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 240

辺 谷 製 鉄 遺 跡  
辺 谷 中 田 遺 跡  
成 ル 古 屋 遺 跡  
水 口 遺 跡  
谷 山 遺 跡 ほか

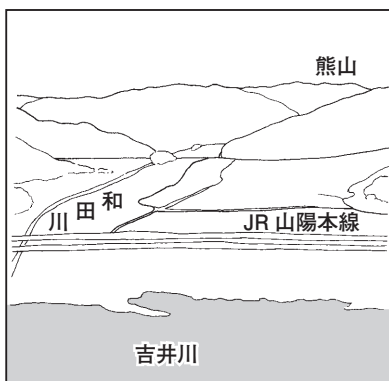
経営体育成基盤整備事業（奥吉原地区）に伴う発掘調査

2014

岡山県教育委員会



奥吉原地区全景（北上空から）





1 辺谷中田遺跡  
竪穴住居 12 カマド周辺  
(南から)



2 辺谷中田遺跡  
土坑 16 床面被熱状況  
(南東から)



3 辺谷中田遺跡  
土坑 16 土層堆積状況  
(南東から)

# 序

本書は、経営体育成基盤整備事業（奥吉原地区）に伴い発掘調査を実施した、辺谷製鉄遺跡、辺谷中田遺跡、成ル古屋遺跡、水口遺跡、谷山遺跡ほかの発掘調査報告書です。

調査地は、岡山県東部を南北に流れる吉井川の下流左岸に位置し、熊山山塊から流れる和田川をはじめとした小河川によって作られた平野を形成していますが、この地域を対象とする圃場整備事業が計画されました。

圃場整備事業予定地内には周知の遺跡が存在していることから、新たな遺跡の有無も併せて、平成21年度に赤磐市教育委員会による試掘・確認調査が実施されました。

この調査結果に基づき、岡山県教育委員会は埋蔵文化財の取り扱いについて関係機関と協議を重ねた結果、現状保存が困難な遺跡については、平成23・24年度に岡山県古代吉備文化財センターが本発掘調査を実施することとしました。

調査の結果、辺谷製鉄遺跡では、7世紀初め頃に磁鉄鉱石を原料とした製鉄が行われていたことが明らかになるとともに、辺谷中田遺跡や水口遺跡でも同時期の製鉄関連の遺構・遺物が確認されたことから、吉井川中・下流域における鉄生産研究に関わる貴重な資料を得ることができました。また、辺谷中田遺跡では、弥生～古墳時代の竪穴住居や墓、土坑などを多数検出し、これまで調査例が少なかった東備地域における該期の様相を知ることができました。

こうした発掘調査の成果を収載した本報告書が学術研究に寄与するとともに、埋蔵文化財の保護・保存のために活用され、また地域の歴史研究のための資料として広く役立つならば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成に際しましては、関係機関や地元住民の皆様から御理解、御協力を賜りました。記して厚く御礼申し上げます。

平成26年3月

岡山県古代吉備文化財センター  
所長 平井 泰男

# 例 言

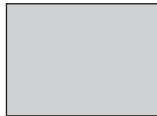
- 1 本書は、経営体育成基盤整備事業（奥吉原地区）に伴い発掘調査を実施した、岡山県赤磐市奥吉原地区に所在する遺跡の調査報告書である。
- 2 本報告書に掲載した遺跡のうち、辺谷中田遺跡、成ル古屋遺跡及び谷山遺跡は調査時の名称を変更している。調査時の名称はそれぞれ辺谷・成ル遺跡、水口・成ル遺跡、満願寺遺跡である。また、満願寺は万願寺の誤記であることから、併せて訂正する。
- 3 試掘・確認調査は、赤磐市教育委員会が赤磐市産業建設部建設課から事業地内の埋蔵文化財包蔵地について照会を受け、谷山遺跡、万願寺遺跡、万願寺跡、水口遺跡、善坊跡、奥吉原廃寺、熊山町No.262散布地、辺谷中田遺跡、辺谷遺跡、辺谷製鉄遺跡、成ル遺跡及び成ル古屋遺跡について実施した。
- 4 本発掘調査は、岡山県教育委員会が岡山県備前県民局農林水産事業部東備地域農地農村整備室の依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センターが辺谷製鉄遺跡、辺谷中田遺跡、成ル古屋遺跡、水口遺跡及び谷山遺跡について実施した。
- 5 それぞれの遺跡の所在地は次のとおりである。

谷山遺跡	奥吉原899外	万願寺遺跡・万願寺跡	奥吉原851
水口遺跡	奥吉原621-2外	善坊跡	奥吉原495-1外
奥吉原廃寺	奥吉原162-1外	熊山町No.262散布地	奥吉原230-1外
辺谷中田遺跡	奥吉原335外	辺谷遺跡	奥吉原277-1外
辺谷製鉄遺跡	奥吉原198外	成ル遺跡	奥吉原423-1
成ル古屋遺跡	奥吉原686-1外		
- 6 試掘・確認調査は、平成21年度に赤磐市教育委員会職員 澤山孝之・有賀祐史・畑地ひとみが担当した。調査面積は、237㎡である。
- 7 本発掘調査は、平成23年度に岡山県古代吉備文化財センター職員 渡邊恵里子・杉山一雄、平成24年度に渡邊・内藤善史・杉山が担当した。調査面積は4,022㎡である。
- 8 本発掘調査に当たっては、埋蔵文化財専門委員の稲田孝司氏から御指導と御助言を頂いた。記して感謝の意を表す次第である。
- 9 本書の作成は、平成24年度に渡邊・内藤・杉山、平成25年度に杉山が担当した。
- 10 本書の執筆は、調査担当者が当たり、文責はそれぞれ文末に記した。全体編集は杉山が行った。
- 11 遺物の鑑定・同定・分析については次の諸氏に依頼し、有益な御教示を得た。記して御礼申し上げる。

石材鑑定	鈴木茂之（岡山大学）
製鉄関連遺物の金属学的調査	大澤正己（日鉄住金テクノロジー（株）八幡事業所・TACセンター）
陶磁器鑑定	家田淳一（佐賀県九州陶磁文化館）
黒曜石の蛍光X線分析	白石 純（岡山理科大学）
- 12 種子同定・赤色顔料分析・年代測定については、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、実施した。
- 13 遺物写真の撮影については、江尻泰幸氏の協力と援助を得た。
- 14 本書に関する出土遺物並びに図面、写真等のうち、試掘・確認調査に係るものは赤磐市教育委員会（赤磐市下市337）に、本発掘調査に係るものは岡山県古代吉備文化財センター（岡山市北区西花尻1325-3）に保管している。

# 凡 例

- 1 本報告書に用いた高度値は標高である。
- 2 各遺跡の調査に用いたグリッドは世界測地系に準拠している。
- 3 方位は平面直角座標第Ⅴ系の座標北である。
- 4 本報告書に掲載した遺構図及び遺物図の縮尺は、基本的には次のとおり統一している。  
遺構 竪穴住居・掘立柱建物：1/60 墓・土坑：1/30  
遺物 土器：1/4 土製品・金属製品：1/3 石製品：1/2・1/3・1/4
- 5 全体図では遺構名に次のような略称を用いている。  
竪穴住居：住 掘立柱建物：建 土壙墓：墓 土坑：土 土器溜まり：溜  
河道：河 柱穴：柱 石組：石 火処：火
- 6 掲載遺物番号については、遺跡ごとに土器、土製品、石製品及び金属製品（鉄滓含む）に分けて通し番号を付け、土器以外については次の略号を番号の前に付している。  
土製品：C 石製品：S 金属製品：M
- 7 土器実測図における口縁部又は底部の水平線で、中軸線を境に左右を白抜きにしたものは、小破片のため口径又は底径復元が不確実であることを示す。
- 8 掲載した遺構図の網かけは、以下の範囲を示すものである。特殊な場合は各図に例示する。



被熱



炭

- 9 土層及び遺物観察表の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』1970によるものである。ただし、土器観察表中で陶磁器の色調については、永田泰弘監修『新版色の手帖』小学館 2002を参考に表記している。
- 10 本報告書に掲載した第5図の地割図は、『熊山町史 大字史』熊山町 1993掲載の「大字奥吉原地籍図」を複製・加筆したものである。
- 11 本報告書に掲載した第6図の遺跡分布図は、国土地理院発行の1/25,000地形図「和気」・「万富」を複製・加筆したものである。
- 12 本書で使用した時代区分は、一般的な政治史区分に準拠し、必要な場合には世紀などを併用した。弥生時代から古墳時代の時期区分については、次の文献を参考にして記載している。  
「百間川兼基遺跡1 百間川今谷遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』51 岡山県教育委員会ほか 1982  
「津寺遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』104 岡山県教育委員会 1996
- 13 遺構一覧表及び遺物観察表の数値欄に記載した数値は、以下の意味を示している。  
実数値：完全な場合の計量値。ただし、土器は1/6以上残存した個体復元値。  
( )：残存値。  
[ ]：推定復元値。ただし、土器は1/6未満残存した個体復元値。  
空欄：該当部分は残存するが、計測不能。  
—：該当部分が残存しないか、存在しない。

# 目 次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

第1章 発掘調査の経緯と経過	1
第1節 試掘・確認調査	1
第2節 本発掘調査及び報告書作成	6
第2章 地理的・歴史的環境	11
第3章 辺谷製鉄遺跡	13
第1節 調査の概要	13
第2節 遺構・遺物	14
第3節 小結	22
第4章 辺谷中田遺跡	23
第1節 調査の概要	23
第2節 弥生時代以前の遺構・遺物	26
第3節 古墳時代の遺構・遺物	59
第4節 古代以降の遺構・遺物	71
第5節 小結	82
第5章 成ル古屋遺跡	83
第1節 調査の概要	83
第2節 遺構・遺物	85
第3節 小結	88
第6章 水口遺跡	89
第1節 調査の概要	89
第2節 古墳時代以前の遺構・遺物	92
第3節 古代以降の遺構・遺物	97
第4節 小結	102
第7章 谷山遺跡	103
第1節 調査の概要	103
第2節 弥生時代の遺構・遺物	105
第3節 中世以降の遺構・遺物	108
第4節 小結	110
第8章 辺谷製鉄遺跡及び辺谷中田遺跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査	111
第9章 総括	123
第1節 調査の概要	123

第2節 吉井川中下流域の製鉄関連遺跡	126
遺構一覧表	128
遺物観察表	128
遺構名称新旧対照表	136
図版	
報告書抄録	

## 目 次

第1図 遺跡位置図 (1/2,000,000)	1	第43図 竪穴住居7屋内土坑2 (1/30)・ 屋内土坑1・2出土遺物 (1/3・1/4)	40
第2図 事業対象範囲と試掘・確認トレンチ配置図 (1/8,000)	2	第44図 竪穴住居7出土遺物② (1/2・1/3・1/4)	40
第3図 T3・8・15・16 (1/80)	4	第45図 竪穴住居8 (1/60)・出土遺物 (1/2・1/4)	41
第4図 トレンチ出土遺物 (1/3・1/4)	4	第46図 墓1 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/4)	42
第5図 地割図及び調査区位置図 (1/10,000)	7	第47図 土坑1 (1/30)・出土遺物 (1/4)	43
第6図 遺跡分布図 (1/40,000)	12	第48図 土坑2 (1/30)	43
<辺谷製鉄遺跡>		第49図 土坑3 (1/30)	44
第7図 基盤整備計画と調査区配置図 (1/2,500)	13	第50図 土坑4 (1/30)・出土遺物 (1/4)	44
第8図 T1・3・4北壁 (1/80)	13	第51図 土坑5 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/4)	44
第9図 全遺構配置図 (1/200)	14	第52図 土坑6 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/3・1/4)	45
第10図 土坑1 (1/30)・出土遺物 (1/3)	15	第53図 土坑7 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/3・1/4)	46
第11図 土坑2 (1/30)	15	第54図 土坑8 (1/30)・出土遺物 (1/4)	47
第12図 土坑3 (1/30)	15	第55図 土坑9 (1/30)・出土遺物 (1/4)	47
第13図 土坑4 (1/30)・出土遺物 (1/4)	16	第56図 土坑10 (1/30)・出土遺物 (1/4)	48
第14図 土坑5 (1/30)	16	第57図 土坑11 (1/30)	49
第15図 土坑6 (1/30)・出土遺物 (1/4)	16	第58図 土坑12 (1/30)・出土遺物 (1/4)	49
第16図 溝1 (1/30)・出土遺物 (1/4)	17	第59図 土坑13 (1/30)	50
第17図 作業面 (1/30)・出土遺物 (1/4)	17	第60図 土坑14 (1/30)	50
第18図 排滓場① (1/60)	18	第61図 土坑15 (1/30)・出土遺物 (1/4)	51
第19図 排滓場② (1/60)	19	第62図 溝1 (1/30)	51
第20図 排滓場出土遺物① (1/4)	19	第63図 溝2 (1/30)	51
第21図 排滓場出土遺物② (1/3)	20	第64図 溝3 (1/30・1/60)	51
第22図 排滓場出土遺物③ (1/4)	21	第65図 河道1 (1/80)	53
第23図 その他の出土遺物 (1/4)	21	第66図 河道1出土遺物① (1/4)	54
第24図 奥吉原周辺の製鉄関連遺跡 (1/50,000)	22	第67図 河道1出土遺物② (1/2・1/3・1/4)	55
<辺谷中田遺跡>		第68図 河道2 (1/60・1/80)・出土遺物① (1/2・1/3・1/4)	56
第25図 基盤整備計画と調査区配置図 (1/2,500)	23	第69図 河道2出土遺物② (1/3・1/4)	57
第26図 全遺構配置図 (1/1,000)	24	第70図 柱穴1～7出土遺物 (1/4)	57
第27図 調査区土層断面 (1/80)	25	第71図 その他の出土遺物 (1/2・1/3・1/4)	58
第28図 1・3区弥生時代以前の遺構配置図 (1/500)	26	第72図 古墳時代の遺構配置図 (1/600)	59
第29図 2区弥生時代以前の遺構配置図 (1/300)	27	第73図 竪穴住居9 (1/60)	60
第30図 竪穴住居1～8 (1/150・1/60)	28	第74図 竪穴住居10 (1/60)・出土遺物 (1/4)	61
第31図 竪穴住居1 (1/60)・出土遺物① (1/2・1/3・1/4)	29	第75図 竪穴住居11 (1/60)	62
第32図 竪穴住居1出土遺物② (1/4)	30	第76図 竪穴住居12 (1/60)	62
第33図 竪穴住居2 (1/80)	31	第77図 竪穴住居12内カマド (1/30)・出土遺物 (1/3・1/4)	63
第34図 竪穴住居2内柱穴・中央土坑断面 (1/60)・ 出土遺物① (1/2・1/3)	32	第78図 竪穴住居13 (1/60)・出土遺物 (1/4)	64
第35図 竪穴住居2出土遺物② (1/4)	33	第79図 竪穴住居14 (1/60)	64
第36図 竪穴住居3 (1/60)	34	第80図 竪穴住居14出土遺物① (1/4)	65
第37図 竪穴住居3P6断面 (1/60)・出土遺物 (1/2・1/3・1/4)	35	第81図 竪穴住居14出土遺物② (1/3)	66
第38図 竪穴住居4 (1/60)・出土遺物 (1/4)	36	第82図 土坑16 (1/30)・出土遺物 (1/3)	66
第39図 竪穴住居5 (1/60)・出土遺物 (1/3)	37	第83図 土坑17 (1/30)	67
第40図 竪穴住居6 (1/60)・出土遺物 (1/4)	37	第84図 土坑18 (1/30)	67
第41図 竪穴住居7① (1/60)・出土遺物① (1/4)	38	第85図 土坑19 (1/30)	67
第42図 竪穴住居7② (1/60)	39	第86図 土坑20 (1/30)・出土遺物 (1/4)	68
		第87図 土坑21 (1/30)・出土遺物 (1/4)	68



第88図	土坑22 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	69	第121図	竪穴住居1 (1/60)・出土遺物① (1/3・1/4) ……	93
第89図	溝4 出土遺物 (1/4) ……	69	第122図	竪穴住居1 出土遺物② (1/2・1/4) ……	94
第90図	河道1 出土遺物 (1/3・1/4) ……	70	第123図	竪穴住居2 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……	95
第91図	その他の出土遺物 (1/3・1/4) ……	70	第124図	土坑1 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	96
第92図	古代以降の遺構配置図 (1/600) ……	71	第125図	その他の出土遺物 (1/2・1/3・1/4) ……	96
第93図	墓2 (1/30)・出土遺物 (1/3・1/4) ……	72	第126図	古代以降の遺構配置図 (1/500) ……	97
第94図	土坑23 (1/30) ……	73	第127図	掘立柱建物1 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……	98
第95図	土坑24 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	73	第128図	掘立柱建物2 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……	99
第96図	土坑25 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	74	第129図	掘立柱建物3 (1/60) ……	99
第97図	溝5 (1/60)・出土遺物 (2/3・1/4) ……	75	第130図	土坑2 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……	100
第98図	溝6・7 (1/150・1/60)・溝7 出土遺物 (1/3・1/4) ……	75	第131図	溝1 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	100
第99図	溝8 (1/30・1/60) ……	76	第132図	溝2・3 (1/30) ……	101
第100図	溝9 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	76	第133図	溝4 出土遺物 (1/3・1/4) ……	101
第101図	溝10 (1/60) ……	76	第134図	柱穴1～3・その他の出土遺物 (1/3・1/4) ……	102
第102図	河道1 出土遺物 (1/3・1/4) ……	77	第135図	中世以前の主要遺構配置図 (1/1,500) ……	102
第103図	河道2 出土遺物① (1/4) ……	78	<b>&lt;谷山遺跡&gt;</b>		
第104図	河道2 出土遺物② (1/3・1/4) ……	79	第136図	基盤整備計画と調査区配置図 (1/2,500) ……	103
第105図	河道2 出土遺物③ (1/3) ……	80	第137図	全遺構配置図 (1/600) ……	104
第106図	柱穴8～17・その他の出土遺物 (1/3・1/4) ……	81	第138図	T1・2 東壁 (1/60) ……	104
第107図	主要遺構変遷図 (1/1,500) ……	82	第139図	調査区北壁 (1/80) ……	104
<b>&lt;成ル古屋遺跡&gt;</b>			第140図	弥生時代の遺構配置図 (1/300) ……	105
第108図	基盤整備計画と調査区配置図 (1/2,500) ……	83	第141図	土坑1 (1/30)・出土遺物 (1/3) ……	105
第109図	T1 東壁・T2 北壁 (1/80) ……	83	第142図	土坑2 (1/30) ……	106
第110図	調査区南壁 (1/80) ……	84	第143図	土坑3 (1/30) ……	106
第111図	T3～7 東壁 (1/80)・出土遺物 (1/3・1/4) ……	84	第144図	土坑4 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	106
第112図	全遺構配置図 (1/400) ……	85	第145図	土坑5 (1/30) ……	106
第113図	たわみ1 (1/30) ……	86	第146図	溝1 (1/60)・出土遺物 (1/2・1/4) ……	107
第114図	たわみ2 (1/30)・出土遺物 (1/3・1/4) ……	86	第147図	柱穴1・その他の出土遺物 (1/2・1/4) ……	107
第115図	河道出土遺物 (1/4) ……	87	第148図	中世以降の遺構配置図 (1/300) ……	108
第116図	その他の出土遺物 (1/2・1/3・1/4) ……	88	第149図	掘立柱建物1 (1/60) ……	109
<b>&lt;水口遺跡&gt;</b>			第150図	溝2 (1/60) ……	109
第117図	基盤整備計画と調査区配置図 (1/2,500) ……	89	第151図	柱穴2・3・その他の出土遺物 (1/3・1/4) ……	110
第118図	3区西壁・4区東壁・T2～5 西壁 (1/80) ……	90	第152図	中期後半以降における松菊里型住居の分布 ……	124
第119図	全遺構配置図 (1/800) ……	91	第153図	旭川東岸から吉井川中下流域の主な製鉄関連 遺跡 (1/625,000) ……	127
第120図	古墳時代以前の遺構配置図 (1/500) ……	92			

## 表目次

表1	文化財保護法に基づく提出書類一覧① ……	3	表6	供試材の組成 ……	115
表2	試掘・確認調査結果一覧 ……	5	表7	供試材の調査結果 ……	116
表3	本発掘調査一覧 ……	6	表8	遺構一覧表 ……	128
表4	文化財保護法に基づく提出書類一覧② ……	9	表9	遺物観察表 ……	128
表5	供試材の歴史と調査項目 ……	115	表10	遺構名称新旧対照表 ……	136

## 写真目次

写真1	刃谷中田遺跡現地説明会 (平成25年7月1日) ……	9	写真12	石組調査風景 (北西から) ……	80
写真2	水口遺跡4区発掘調査風景 (東から) ……	9	写真13	3区完掘状況 (南東から) ……	92
写真3	遺構全景 (北東から) ……	14	写真14	1区完掘状況 (北西から) ……	97
写真4	2区空撮 (南東から) ……	27	写真15	鉄塊系遺物のEPMA調査 ……	116
写真5	竪穴住居8周辺調査風景 (南西から) ……	41	写真16	鉄塊系遺物・炉壁のEPMA調査 ……	117
写真6	土坑10土器出土状況 (南から) ……	48	写真17	炉壁溶融滓のEPMA調査 ……	118
写真7	3区河道1調査風景 (北東から) ……	52	写真18	顕微鏡組織① ……	119
写真8	竪穴住居9P2土層断面 (南から) ……	60	写真19	顕微鏡組織② ……	120
写真9	溝4埋土掘り下げ状況 (北から) ……	69	写真20	顕微鏡組織③ ……	121
写真10	墓2遺物出土状況 (北西から) ……	72	写真21	顕微鏡組織④ ……	122
写真11	河道2土層断面 (北から) ……	77			

# 巻頭図版目次

巻頭図版 1	奥吉原地区全景（北上空から）		
巻頭図版 2	1 辺谷中田遺跡 竪穴住居12カマド周辺（南から）	3	辺谷中田遺跡 土坑16土層堆積状況（南東から）
	2 辺谷中田遺跡 土坑16床面被熱状況		

## 図版目次

図版 1	1 奥吉原地区北部遠景（南東上空から）		
	2 奥吉原地区南部遠景（南上空から）		
<b>&lt;辺谷製鉄遺跡&gt;</b>			
図版 2	1 調査区全景（南西上空から）		
	2 遺構全景（南西から）		
	3 排滓場土層堆積状況（東から）		
図版 3	1 排滓場下層遺構全体（西から）		
	2 排滓場上面検出状況（西から）		
	3 排滓場検出状況（西から）		
	4 土坑 4（南東から）		
	5 土坑 6（北から）		
図版 4	出土土器、土製品、石器、金属製品		
<b>&lt;辺谷中田遺跡&gt;</b>			
図版 5	1 1・3区調査区全景（上空から、上が北）		
	2 1区西半古墳時代以前の遺構全景（北から）		
	3 1区東半遺構全景（南西から）		
図版 6	1 2区調査区全景（上空から、上が北東）		
	2 2区西半遺構全景（南東から）		
図版 7	2区弥生～古墳時代の竪穴住居群（北西から）		
図版 8	1 竪穴住居 1 遺物出土状況（北東から）		
	2 竪穴住居 1 埋土完掘状況（南西から）		
	3 竪穴住居 2 埋土完掘状況（南西から）		
図版 9	1 竪穴住居 7・8 埋土完掘状況（南西から）		
	2 竪穴住居 7 検出状況（南西から）		
	3 竪穴住居 7 屋内土坑 1（北から）		
	4 竪穴住居 7 屋内土坑 2（北から）		
	5 竪穴住居 3（北東から）		
図版 10	1 土坑 9～15、溝 3（上空から、上が北）		
	2 土坑 7 遺物出土状況（南東から）		
	3 土坑 11（南から）		
	4 土坑 13 埋土完掘状況（東から）		
	5 土坑 13 底面堆積土完掘状況（東から）		
図版 11	1 墓 1 埋土完掘状況（北西から）		
	2 墓 1 掘り方完掘状況（南西から）		
	3 墓 1 石器出土状況（南東から）		
	4 溝 3（南東から）		
	5 竪穴住居 9（北西から）		
		6 竪穴住居 10（北西から）	
図版 12	1 竪穴住居 12（南から）		
	2 竪穴住居 14 炭化材・遺物出土状況（南東から）		
	3 竪穴住居 14 埋土完掘状況（南東から）		
	4 土坑 21（北から）		
図版 13	1 土坑 24（北から）		
	2 墓 2 遺物出土状況（南東から）		
	3 溝 6・7（東から）		
	4 河道 2（南西から）		
図版 14	出土土器①（縄文土器）		
図版 15	出土土器②（竪穴住居 1・2）		
図版 16	出土土器③（竪穴住居 3・10・12、土坑 6・10、河道 1、ピット）		
図版 17	出土土器④（竪穴住居 13・14、墓 2）		
図版 18	出土土器⑤（墓 2）、土製品、金属製品		
図版 19	出土石器①		
図版 20	出土石器②		
<b>&lt;成ル古屋遺跡&gt;</b>			
図版 21	1 調査区全景（西から）		
	2 出土土器、石器、金属製品		
<b>&lt;水口遺跡&gt;</b>			
図版 22	1 竪穴住居 1 炭化材検出状況（北から）		
	2 竪穴住居 1 埋土完掘状況（北から）		
	3 4区遺構全景（南東から）		
	4 竪穴住居 2（南東から）		
	5 土坑 1 土器出土状況（南東から）		
図版 23	1 土坑 2、溝 2・3（南東から）		
	2 溝 1（北西から）		
	3 2区東半遺構全景（南東から）		
図版 24	出土土器、石器、金属製品		
<b>&lt;谷山遺跡&gt;</b>			
図版 25	1 調査区全景（上空から、下が北）		
	2 遺構全景（上空から、下が北）		
図版 26	1 調査区西半遺構全景（南東から）		
	2 掘立柱建物 1（北東から）		
	3 土坑 2（北西から）		

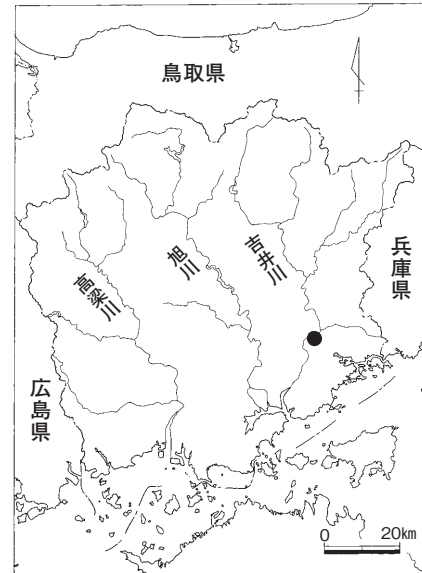
# 第1章 発掘調査の経緯と経過

## 第1節 試掘・確認調査

### 1 経緯と経過

赤磐市奥吉原地区において県営圃場整備事業（経営体育成基盤整備事業）が計画され、平成20年6月に赤磐市産業建設部建設課から同市教育委員会へ事業予定地内の埋蔵文化財の取扱いについて照会があった。予定地内には、水口遺跡、万願寺遺跡等の周知の遺跡があり、その他にも散布地や未周知の遺跡が存在する可能性が高い地域が含まれていたため、市教育委員会が試掘・確認調査を実施することになった。

試掘・確認調査は、平成21年10月20日から平成22年1月19日まで市教育委員会が平成21年度国庫補助を受けて実施した。事業予定地が広範囲に及ぶため、周知の遺跡の範囲や周辺の現地形を考慮しながら合計30か所のトレンチを設定して調査に着手した。調査の過程で、検出した遺跡の広がり等を把握するため、トレンチ6か所を追加し、最終的には調査地点は35か所、トレンチ数は合計38か所（調査面積237㎡）となった。



第1図 遺跡位置図 (1/2,000,000)

### 2 体制

#### 赤磐市教育委員会

教育長	土井原敏郎	主幹(文化財係長事務取扱)	澤山 孝之 (調査担当者)
教育次長	藤原 洋文	主 事	有賀 祐史 (調査担当者)
〈社会教育課〉		嘱 託	畑地ひとみ (調査担当者)
課 長	奥田 智明		

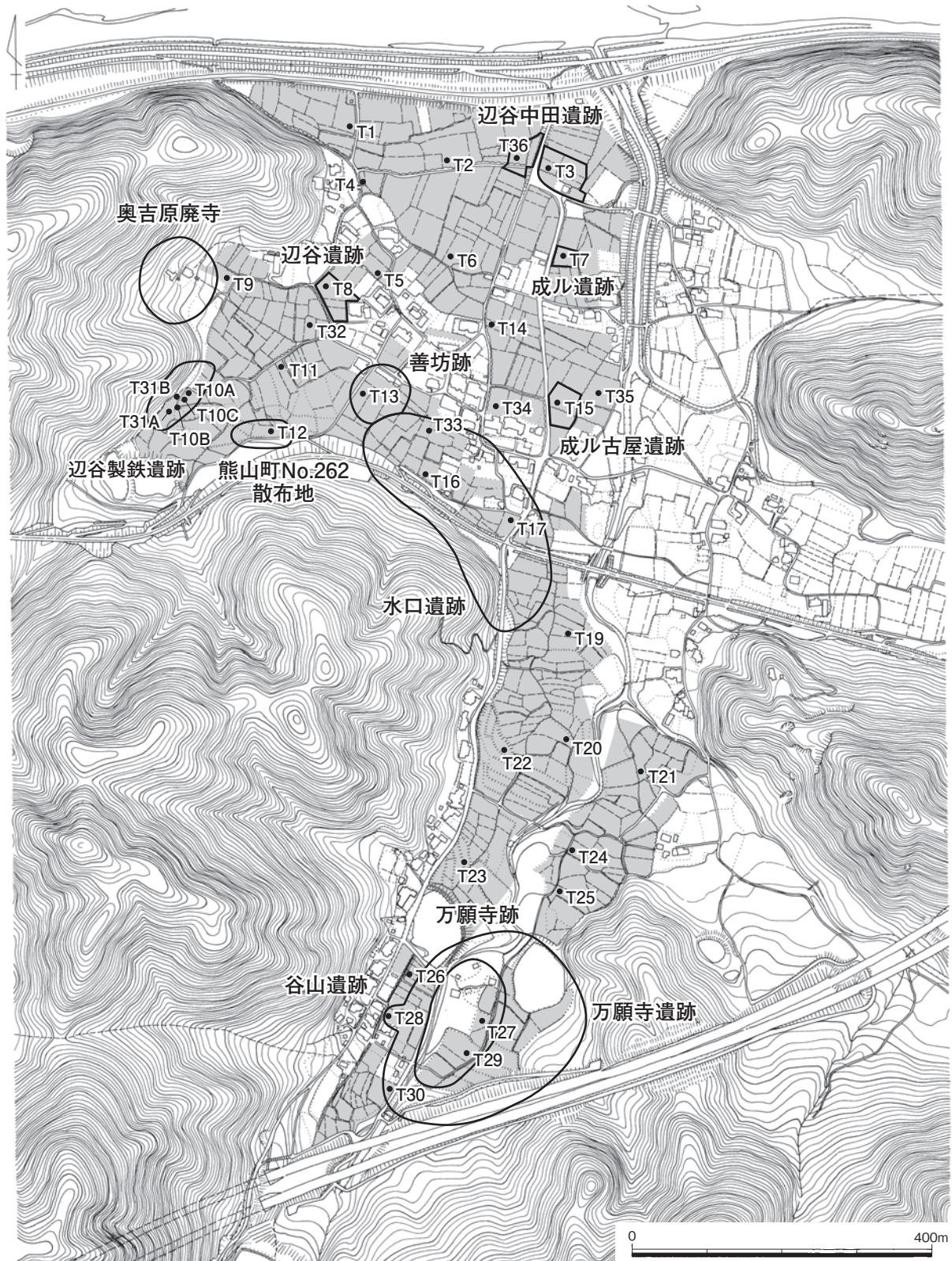
### 3 概要

試掘・確認調査の結果、周知の遺跡である辺谷製鉄遺跡、水口遺跡、善坊跡、奥吉原廃寺、熊山町No.262散布地、万願寺遺跡、万願寺跡の遺存状況が明らかになったほか、辺谷中田遺跡、辺谷遺跡、成ル古屋遺跡、成ル遺跡が新規に発見された。詳細は表2のとおりである。

ここでは、遺構等が検出された遺跡のうち、工事計画高が遺構面まで及ばず本発掘調査の対象外となり現状保存された主要なトレンチについて概要を述べる。

T3は事業予定地北部で吉井川の氾濫原と考えられた地点であったが、表土からの深さ20cmで弥生

時代の遺物包含層を確認した。また、遺構として弥生時代後期の土坑・柱穴を検出し、土坑からは弥生土器1が出土した。この土坑の形状は不明であるが検出面からの深さは76cmを測る。この新規発見の辺谷中田遺跡は、西に設定したT36においてもT3の遺構面である褐色粘質土が認められ、比較的安定した微高地上に遺跡が広がっていると予想された。T8は新規に発見された辺谷遺跡で、表土か



第2図 事業対象範囲と試掘・確認トレンチ配置図 (1/8,000)

らの深さ58cmで弥生時代の遺物包含層と土坑・柱穴を検出した。現在の奥吉原地区の集落と重なるこの一帯は、弥生時代以来、集落形成に適した地形であったと推定される。T15も新規に発見された成ル古屋遺跡で、表土からの深さ30cmで古代から中世と考えられる遺物包含層と土坑・柱穴を確認したが、遺構面は土石流によって形成されたと考えられる礫層と砂質土層からなり、それほど安定した地形とはいえない。須恵質土器の小皿2と土錘C1が出土している。T16の水口遺跡においては古代から中世と思われる遺物包含層とたわみ・柱穴を検出した。このトレンチの南側は広域営農団地農道整備事業に伴って、岡山県古代吉備文化財センターが平成11年度に発掘調査を実施した水口遺跡4区に当たる。同調査区においても地山上に中世の包含層が確認されており、近似した遺跡の遺存状況を呈しているものと考えられる。

このほかに、T4から漁具ではないかと考えられる加工痕のある木製品W1が出土した。なお、周知の遺跡である善坊跡、万願寺跡に設定したT13・29では遺物包含層を確認したが、遺構は検出されなかった。

以上、現状保存した主要なトレンチの概要を述べた。一方で、事業予定地の中で万願寺池や山の上池より北の谷部に設定したT19～25周辺は、山側からの土石流を想起させる拳大から人頭程度の礫を含む層が認められたことから、遺跡が存在していない、又は消滅しているものと判断した。また、

表1 文化財保護法に基づく提出書類一覧①

遺跡発見の通知（法第97条）

岡山県文書番号・日付	種類及び名称	所在地	発見年月日	発見の事情	発見者	出土遺物	主な勧告事項
教文理第1363号 H22.3.30	集落跡 辺谷・成ル遺跡	赤磐市奥吉原387-1 ほか10筆	H.21.10.20～ H.22.1.19	試掘調査	赤磐市教育委員会 教育長 土井原敏郎	弥生土器・土師器・須恵器・備前焼・近世陶磁片など 計整理箱1箱	手続き
教文理第1364号 H22.3.30	集落跡 辺谷遺跡	赤磐市奥吉原277-1 ほか3筆	H.21.10.20～ H.22.1.19	試掘調査	赤磐市教育委員会 教育長 土井原敏郎	土師器・須恵器・備前焼・近世陶磁片・土錘など 計整理箱1箱	手続き
教文理第1365号 H22.3.30	集落跡 水口・成ル遺跡	赤磐市奥吉原687-1 ほか1筆	H.21.10.20～ H.22.1.19	試掘調査	赤磐市教育委員会 教育長 土井原敏郎	土師器・須恵器・備前焼・近世陶磁片・土錘など 計整理箱1箱	手続き
教文理第1366号 H22.3.30	集落跡 成ル遺跡	赤磐市奥吉原423-1 ほか	H.21.10.20～ H.22.1.19	試掘調査	赤磐市教育委員会 教育長 土井原敏郎	土師器・須恵器・備前焼・近世陶磁片・鉄器など 計整理箱1箱	手続き

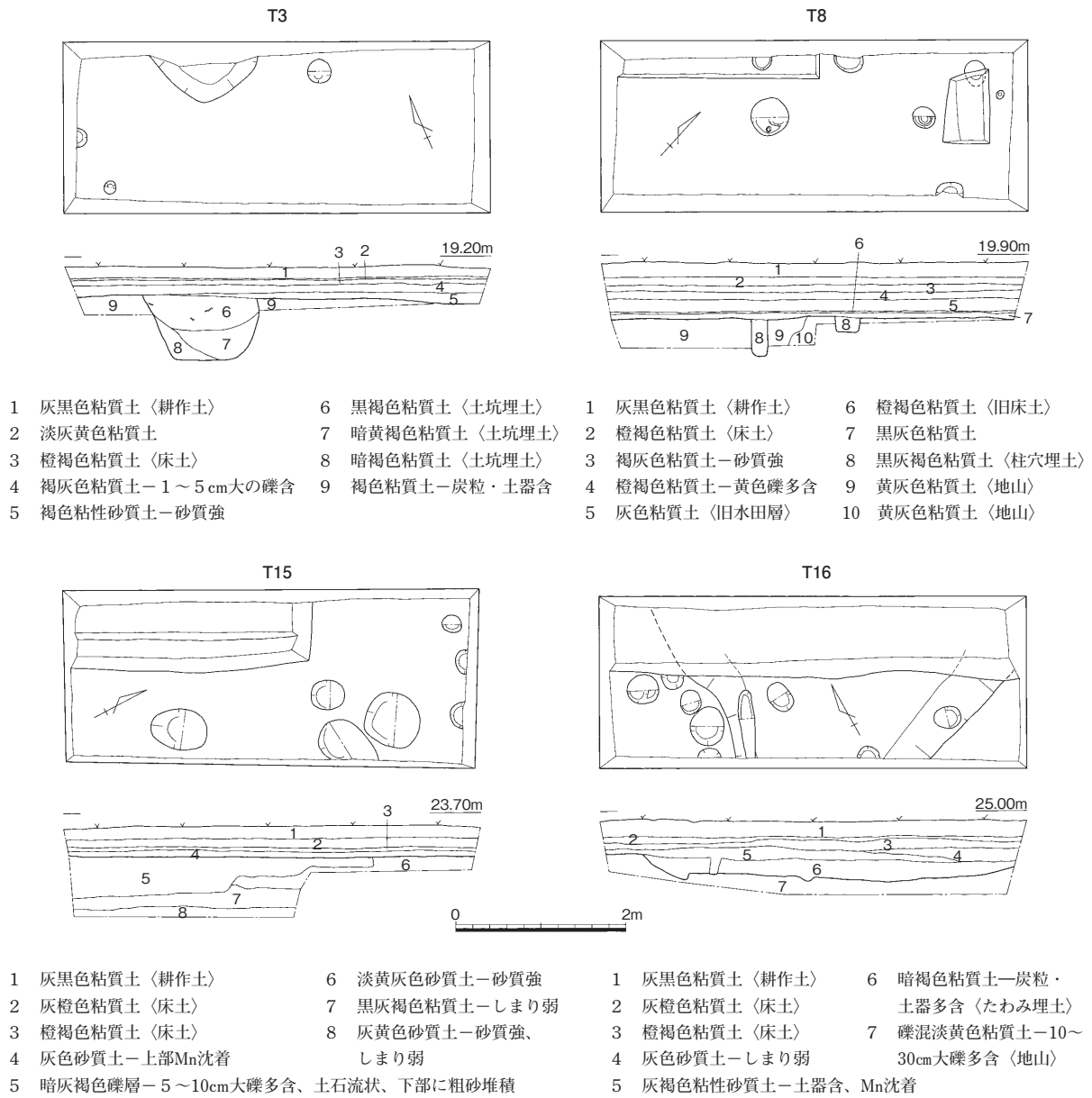
埋蔵文化財試掘・確認調査の報告

文書番号 日付	周知・周知外	遺跡の種類及び名称	所在地	面積 (㎡)	原因	包蔵地の有無	報告者	担当者	期間
赤教社 第1177号 H22.3.26	周知	散布地 満願寺遺跡	赤磐市奥吉原899ほか	237	農業基盤整備	有	赤磐市 教育委員会 教育長 土井原敏郎	澤山 孝之 有賀 祐史 畑地ひとみ	H21.10.20～ H22.1.19
	周知	社寺跡 満願寺跡	赤磐市奥吉原851ほか						
	周知	集落跡 水口遺跡	赤磐市奥吉原635-1ほか						
	周知	社寺跡 善坊跡	赤磐市奥吉原495-1ほか						
	周知	社寺跡 奥吉原廃寺	赤磐市奥吉原162-1ほか						
	周知	散布地 熊山町No262散布地	赤磐市奥吉原230-1ほか						
	周知外	集落跡 辺谷・成ル遺跡	赤磐市奥吉原387-1ほか						
	周知外	集落跡 辺谷遺跡	赤磐市奥吉原77-1ほか						
	周知	生産遺跡 辺谷製鉄遺跡	赤磐市奥吉原198ほか						
	周知外	集落跡 水口・成ル遺跡	赤磐市奥吉原687-1ほか						

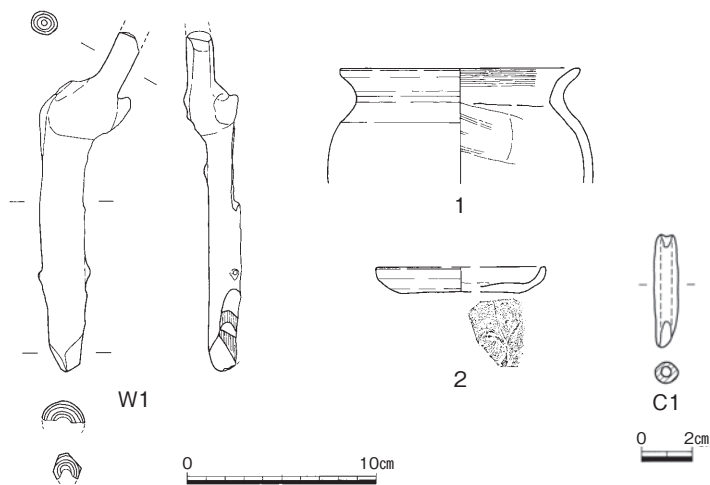
埋蔵文化財発見通知（法第100条第2項）

岡山県文書番号・日付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	土地所有者	現保管場所
教文理第1374号 H22.3.26	弥生土器、須恵器、土師器、瓦質土器、白磁、備前焼、近世陶器、土製品、瓦、鉄器、鉄滓、炉壁ほか計整理箱2箱	赤磐市奥吉原473ほか満願寺遺跡、満願寺跡、水口遺跡、善坊跡、奥吉原廃寺、旧熊山町No262散布地、辺谷・成ル遺跡、辺谷遺跡、辺谷製鉄遺跡<旧熊山町No261散布地>、水口・成ル遺跡、成ル遺跡ほか	H21.10.20～ H22.1.19	赤磐市教育委員会 教育長 土井原敏郎	個人	赤磐市山陽郷土資料館

第1章 発掘調査の経緯と経過



第3図 T3・8・15・16 (1/80)



第4図 トレンチ出土遺物 (1/3・1/4)

低位部のT1・2・4・6周辺も砂層の堆積が認められ、同様と考えられる。この試掘・確認調査によって、熊山山塊から北に延びる扇状地形を  
 広範囲にわたって調査したため、奥吉原地区における遺跡の分布状況が明らかになった。また、辺谷製鉄遺跡の状況が判明したことで、近隣の猿喰池製鉄遺跡を含めこの地域の製鉄関連遺跡のあり方は特に注目される。(有賀)

表2 試掘・確認調査結果一覧

調査 トレン チ No	包含層		遺構				遺物		計画高		調査時の遺跡名 →本書収載の遺跡名	対応
	上面標 高(m)	地表か らの深 さ(m)	種類	検出面 の標高 (m)	地表か らのさ (m)	時期	種別	量	工事高 (m)	包含層 との差 (m)		
1	—	—	—	—	—	—	土師器・陶磁器	△	15.70	—		
2	—	—	—	—	—	—	須恵器・土師器・陶磁器	△	16.80	—		
3	18.86	0.20	土坑 柱穴	18.76	0.30	弥生	弥生土器・須恵器・土師器・陶磁器	○	19.07	0.21	辺谷・成ル遺跡 →辺谷中田遺跡	現状 保存
4	—	—	—	—	—	—	須恵器・土師器・瓦質土器・陶磁器・石器・木器	○	17.55	—		
5	—	—	—	—	—	—	須恵器・土師器・陶磁器	△	19.30	—		
6	—	—	—	—	—	—	土師器・陶磁器	△	19.10	—		
7	19.53	0.46	ピット? しみこみ?	19.59	0.73	古代～ 中世	須恵器・土師器・陶磁器・鉄器	○	20.00	0.47	成ル遺跡	現状 保存
8	19.21	0.58	土坑 柱穴	19.19	0.60	弥生	弥生土器・須恵器・土師器・土錘・石器	△	19.80	0.59	辺谷遺跡	現状 保存
9	23.65	0.35	—	—	—	—	須恵器・土師器・青磁・瓦	△	24.09	—	奥吉原廃寺	
10A	28.08	0.50	(製鉄炉)	—	—	古墳	鉄滓・炉壁・須恵器・陶磁器	◎	27.70	-0.38	辺谷製鉄遺跡	発掘
10B	28.49	0.17	(製鉄炉)	—	—	古墳	鉄滓・炉壁	△	27.70	-0.79	辺谷製鉄遺跡	発掘
10C	—	—	—	—	—	—	鉄滓・炉壁	△	27.70	—	辺谷製鉄遺跡	発掘
11	—	—	しみこみ?	22.00	0.40	—	須恵器・土師器・陶磁器	△	23.40	—		
12	—	—	自然流路	26.33	0.67	—	土師器・陶磁器	△	26.50	—	散布地(熊山町No262)	
13	22.05	0.55	—	—	—	—	弥生土器・須恵器・土師器・瓦質土器・白磁・陶磁器	△	22.65	0.60	善坊跡	
14	—	—	—	—	—	—	弥生土器・須恵器・土師器・陶磁器・鉄器・鉄滓	△	21.26	—		
15	23.25	0.30	土坑 柱穴	23.17	0.38	古代～ 中世	須恵器・土師器・陶磁器・土錘・鉄器	○	22.70	-0.55	水口・成ル遺跡 →成ル古屋遺跡	発掘
16	24.59	0.30	柱穴 たわみ	24.53	0.36	古代～ 中世	弥生土器・須恵器・土師器・青磁・陶磁器・焼土塊	○	24.89	0.30	水口遺跡	現状 保存
17	27.18	0.40	—	—	—	—	弥生土器・須恵器・土師器・陶磁器	△	27.05	-0.13	水口遺跡	発掘
18	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	欠番	
19	—	—	しみこみ?	30.20	0.40	—	(弥生土器)・土師器・白磁・陶磁器	△	30.20	—		
20	—	—	—	—	—	—	土師器	△	34.70	—		
21	—	—	—	—	—	—	(弥生土器)・土師器・陶磁器	△	34.43	—		
22	—	—	—	—	—	—	(弥生土器)・土師器・陶磁器	△	36.90	—		
23	—	—	—	—	—	—	—	—	43.45	—		
24	—	—	—	—	—	—	—	—	38.95	—		
25	—	—	—	—	—	—	土師器・青白磁・陶磁器・土製円板	△	41.35	—		
26	—	—	—	—	—	—	—	—	49.60	—	満願寺遺跡→万願寺遺跡	
27	—	—	—	—	—	—	土師器	△	48.55	—	満願寺跡→万願寺跡 満願寺遺跡→万願寺遺跡	
28	—	—	柱穴	52.73	0.24	弥生	弥生土器・須恵器・土師器・陶磁器	△	51.95	-0.78	満願寺遺跡 →谷山遺跡	発掘
29	51.07	0.23	—	—	—	—	須恵器・土師器・陶磁器・石器	△	51.30	0.23	満願寺跡→万願寺跡 満願寺遺跡→万願寺遺跡	現状 保存
30	—	—	—	—	—	—	—	△	56.18	—	満願寺遺跡→万願寺遺跡	
31A	—	—	—	—	—	—	鉄滓・炉壁・(弥生土器)・須恵器・土師器	△	29.50	—		
31B	—	—	—	—	—	—	鉄滓・炉壁・(弥生土器)・須恵器・土師器・陶磁器	△	29.50	—		
32	—	—	—	—	—	—	弥生土器・須恵器・土師器・陶磁器	△	21.00	—		
33	22.97	0.25	ピット? しみこみ?	23.06	0.36	?	弥生土器・須恵器・土師器・陶磁器	△	23.00	—	水口遺跡	現状 保存
34	22.39	0.40	柱穴 さがり	22.11	0.68	?	弥生土器・須恵器・土師器・陶磁器	△	22.87	0.48	水口遺跡	現状 保存
35	—	—	—	—	—	—	土師器・陶磁器	△	22.70	—		
36	—	—	柱穴 さがり	18.05	0.16	弥生	弥生土器・須恵器・土師器・陶磁器・石器	△	17.50	-0.55	辺谷・成ル遺跡 →辺谷中田遺跡	発掘

\* 遺物量のうち、◎は整理用ナイロン袋 (+12号、23×34cm) 2袋以上、○は1袋程度、△は1袋未満を示す。

## 第2節 本発掘調査及び報告書作成

### 1 経緯と経過

赤磐市教育委員会による試掘・確認調査の結果、奥吉原地区圃場整備施工予定範囲には埋蔵文化財包蔵地が含まれることが明らかとなった。これら埋蔵文化財の保存について、岡山県教育庁文化財課及び赤磐市教育委員会と岡山県備前県民局との間で協議を重ねた。その結果、水路など掘削範囲が狭小な工事に際しては、主に赤磐市教育委員会が立会などの対応をとることとした。また、工事の実施によって遺跡に掘削が及ぶなどのため現状保存が困難な辺谷製鉄遺跡、辺谷中田遺跡、成ル古屋遺跡、水口遺跡及び谷山遺跡の5遺跡4,022㎡については、岡山県古代吉備文化財センターが本発掘調査を実施することとした。本発掘調査は平成23年11月～平成24年10月に実施した。各遺跡の調査期間、面積及び担当者は表3に示したとおりである。

平成23年度の調査は調査員2名で当たり、工事が急がれた辺谷製鉄遺跡から着手した。既に耕作により大きく地形改変を受け、また調査区間際まで工事が進められていたため遺存状態が良いとは言えなかったが、鉄滓・炉壁を大量に含む排滓層と製鉄に伴うと思われる土坑を数基確認することができた。一方、当初の想定より基盤がなだらかに下がっており、工事掘削深度から調査対象ではなかった一段低い南東側まで遺跡が広がる可能性が生じたため確認を行ったが、遺物包含層は延びるものの遺構は検出されず、12月22日に調査を終了した。

辺谷中田遺跡の調査は、辺谷製鉄遺跡の調査と並行して12月6日に、工事の進捗に合わせて西側の1区から開始した。古墳時代の竪穴住居や土坑、近世の溝などを検出したが、遺構のあり方から遺跡が更に西に延びることが明らかとなり、1区と現標高に大差ない水田2区画を調査対象地に追加して3区とし、引き続き調査を行った。3区では古墳時代後期の被熱土坑を検出した。調査対象面積が増加したものの、比較的遺構が希薄であったため、予定どおり平成23年度末に調査を終えた。なお、平成23年12月6・7日には辺谷遺跡地内の水路工事に伴う立会を行った。確認調査T8の水田の西側に当たり、包含層や弥生基盤となる黄色土層を確認したが遺構は検出されず、地層の観察・記録にとどめている。また成ル古屋遺跡については、遺構面を確認したが工事による削平が及ばないことから、調査対象から外すこととなった。

平成24年度は調査員3名で発掘調査に従事した。まず辺谷中田遺跡2区に着手する予定であったが条件整備が整わず、成ル古屋遺跡から開始した。柱穴・たわみのほか明確な遺構は検出されなかった

表3 本発掘調査一覧

掲載遺跡名	調査時遺跡名・地区名	調査面積 (㎡)	調査年度	調査期間	調査担当者
辺谷製鉄遺跡	辺谷製鉄遺跡	190	23	H23.11.1～12.22	渡邊恵里子 杉山 一雄
辺谷中田遺跡	辺谷・成ル遺跡1・3区	1,480		H23.12.6～H24.3.31	
	辺谷・成ル遺跡2区	835	24	H24.4.23～8.10	渡邊恵里子 内藤 善史 杉山 一雄
成ル古屋遺跡	水口・成ル遺跡	335		H24.1.12、4.9～5.2	
水口遺跡	水口遺跡	715		H24.6.25～26、7.6～9.21	
谷山遺跡	満願寺遺跡1区	457		H24.9.3～10.31	
万願寺遺跡	満願寺遺跡2区	10		H24.10.12～10.19	

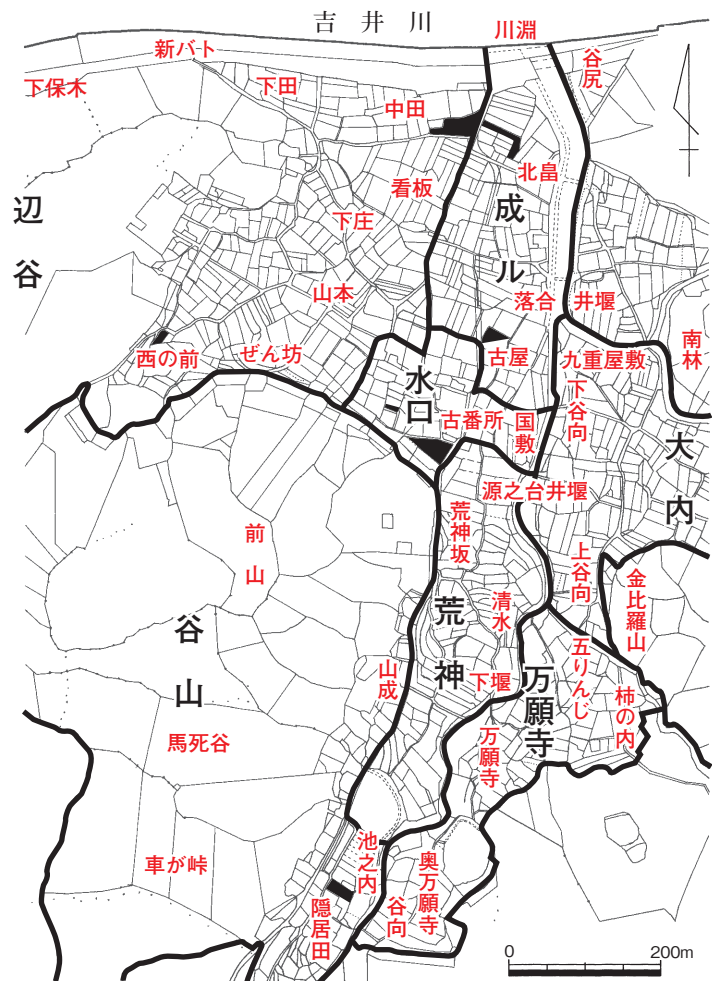


が、古代～中世の基盤となる砂礫層下部において弥生時代後期の包含層及び弥生基盤層と同様の黄色土層が確認され、弥生遺構の有無を検証するため、調査区より1段低く対象地外となっていた北側の水田についても部分的に調査を行ったが遺構は検出されず、5月2日に調査を終了した。4月23日からは辺谷中田遺跡2区の調査に着手することができた。ここでは予想以上に弥生時代中期～後期の遺構が多く検出され、直径9mを超える竪穴住居や石鍬が副葬された木棺墓、中世の土坑墓など貴重な発見が相次いだため、予定していた調査期間を大幅に延長し、調査完了までに4か月を要した。7月1日には現地説明会を実施し、調査成果を公開した。辺谷中田遺跡の調査後半には水口遺跡の調査に着手し、2遺跡並行して調査を進めた。水口遺跡は広範囲に広がる集落遺跡で、調査対象地も広がったが、遺構面や包含層に削平の及ばない東側の水田の北半分については現状保存することとなった。南半については7月6日から着手し、弥生時代中期の竪穴住居や中世の掘立柱建物を検出して9月21日に調査を終了した。谷山遺跡も水口遺跡の終了間際から着手し、進めた。当初は和田川を挟んで西側の水田部分を万願寺1区（谷山遺跡）、東側の道路建設予定地を万願寺2区（万願寺遺跡）としていた。2区は遺跡の広がりが想定された水田部分であるが、施工箇所は谷川に近接する部分であったため土層の確認を行ったところ、土石流と思われる巨礫を含む礫層が厚く堆積し、遺構・遺物共に見られなかったため、2区を調査対象から外すこととした。1区では弥生時代の土坑・溝、中世の掘立柱建物が検出され、万願寺遺跡とは別の集落遺跡であることが明らかとなった。また、ここでも当初の想定より遺跡が北に延びる可能性が生じたため確認を行ったが、急な傾斜で基盤が下がることから、当初の予定範囲内に収まる結果となった。谷山遺跡の調査が終了する10月31日を以て奥吉原地区の発掘調査を完了した。

## 2 報告書作成の経過

報告書の作成は、平成23年度から平成25年度に岡山県古代吉備文化財センターで行った。

まず、平成24年2月～3月に調査員2名で行ったが、発掘調査途上であり、また発掘調査と並行していることから、主に辺谷製鉄遺跡の整理作業に従事した。平成24年度は発掘調査の完了を待って、11月～翌3月に調査員3名で行った。辺谷製鉄遺跡、成ル古屋遺跡、水口遺跡及び谷山遺跡の整理・割付作業をほぼ終え、一部執筆に



第5図 地割図及び調査区位置図 (1/10,000)

着手した。辺谷中田遺跡については整理対象となる出土遺物の量も多く、一部翌年度に持ち越さざるを得なかった。平成25年度は6月～8月に調査員1名が当たり、辺谷中田遺跡ほかすべての整理作業を完了し、執筆・編集に従事した。対象となった遺物は辺谷製鉄遺跡の鉄滓・炉壁101箱を含めて整理箱173箱であり、そのうち767点を図化した。なお辺谷製鉄遺跡の鉄滓・炉壁について、平成24年11月27～29日に当センターにおいて大澤正己氏による肉眼鑑定を行い、御教示・御指導を頂いた。

さて、例言にも記したとおり、本書では一部の遺跡の名称を調査時から変更して掲載している。試掘・確認調査で新たに発見された遺跡の名称は、所在する字名をもとに付けられており、複数の字にまたがる場合はそれぞれの名称を併記して表していた。しかし、これでは指し示す範囲が広域となり、他と重複する箇所も生じることから、字名と中心となる小字名を組み合わせることにし、辺谷・成ル遺跡を辺谷中田遺跡、水口・成ル遺跡を成ル古屋遺跡に改めた。

また、試掘・確認調査において万願寺遺跡に含められていたT28の周辺は、和田川によって周知の範囲と隔てられており、本発掘調査の結果からもこれと異なる集落遺跡であることが判明したため、字名に因んで谷山遺跡とした。

なお、奥吉原地区の地名について、山田博典氏から御教示にあずかった。末筆ながら記して感謝したい。

### 3 日誌抄

#### 平成23年度

平成23年

11月 1日(火) 辺谷製鉄遺跡発掘調査開始。

12月 6日(火) 辺谷中田遺跡1区発掘調査開始。

12月22日(木) 辺谷製鉄遺跡発掘調査終了。

平成24年

1月20日(金) 辺谷中田遺跡3区発掘調査開始。

2月 1日(水) 整理作業開始。

3月 7日(水) 辺谷中田遺跡現地公開開催。

3月 8日(木) ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影。

3月30日(金) 辺谷中田遺跡1・3区発掘調査終了。

#### 平成24年度

平成24年

4月 2日(月) 調査準備開始。

4月 9日(月) 成ル古屋遺跡発掘調査開始。

4月23日(月) 辺谷中田遺跡2区発掘調査開始。

5月 2日(水) 成ル古屋遺跡発掘調査終了。

7月 1日(日) 辺谷中田遺跡現地説明会開催。

7月 4日(水) 埋蔵文化財専門委員現地指導。

7月 6日(金) 水口遺跡発掘調査開始。

7月10日(火) ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影。

8月10日(金) 辺谷中田遺跡2区調査終了。

9月 3日(月) 谷山遺跡発掘調査開始。

9月21日(金) 水口遺跡発掘調査終了。

10月24日(水) ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影。

10月31日(水) 谷山遺跡発掘調査終了。

本発掘調査完了。

11月 1日(木) 報告書作成作業開始。

平成25年

3月31日(日) 報告書作成作業終了。

#### 平成25年度

平成25年

6月 1日(土) 報告書作成作業開始。

8月31日(土) 報告書作成作業完了。

事業終了。

表4 文化財保護法に基づく提出書類一覧②

埋蔵文化財発掘の通知（法第94条）

岡山県文書 番号・日付	遺跡の種類及び名称	所在地	面積	目的	通知者	期間	主な 勧告事項
教文埋 第179号 H23.5.13	散布地・集落跡・社寺跡・生産遺跡（製鉄関係） 辺谷・成ル遺跡ほか	赤磐市奥吉原地内	28.9ha	農業基盤整備	岡山県備前県民 局長	H23.5.16～ H26.3.31	発掘調査 工事立会

埋蔵文化財発掘調査の報告（法第99条）

岡山県文書 番号・日付	遺跡の種類及び名称	所在地	面積 (㎡)	目的	報告者	担当者	期間
岡吉調第83号 H23.11.1	集落跡・生産遺跡（製鉄関係） 辺谷製鉄遺跡、辺谷・成ル遺跡、 水口・成ル遺跡	赤磐市奥吉原198 ほか	1,500	農業基盤整備	岡山県古代吉備文 化財センター所長	渡邊恵里子 杉山一雄	H23.11.1～ H24.3.31
岡吉調第2号 H24.4.2	集落跡辺谷・成ル遺跡、水口・成 ル遺跡、水口遺跡、満願寺遺跡	赤磐市奥吉原 687-1ほか	3,593	農業基盤整備	岡山県古代吉備文 化財センター所長	渡邊恵里子 内藤善史 杉山一雄	H24.4.1～ H24.10.31

埋蔵文化財発見通知（法第100条第2項）

岡山県文書 番号・日付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	土地 所有者	現保管場所
教文埋 第1043号 H23.12.22	土器（弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器）、石器、鉄滓、炉壁 計整理箱80箱	赤磐市奥吉原198 辺谷製鉄遺跡	H23.11.1～ H23.12.22	岡山県教育委員会 教育長 竹井千庫	個人	岡山県古代吉備 文化財センター
教文埋 第1375号 H24.3.16	土器（縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器）、土製品（錘など）、石製品（石鎌・石斧・石包丁など）、その他（青銅製品・鉄製品・鉄滓など） 計整理箱13箱	赤磐市奥吉原335、337、 385-4 辺谷・成ル遺跡	H23.12.6～ H24.3.16	岡山県教育委員会 教育長 竹井千庫	個人	岡山県古代吉備 文化財センター
教文埋 第196号 H24.5.2	土器（弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器）、石製品、鉄製品など 計整理箱2箱	赤磐市奥吉原686-1、 687-1、689 水口・成ル遺跡	H24.4.9～ H24.5.2	岡山県教育委員会 教育長 竹井千庫	個人	岡山県古代吉備 文化財センター
教文埋 第585号 H24.8.10	土器（縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器など）、土製品（錘など）、石製品（鎌・斧・鍬・錘など）、鉄製品など 計整理箱40箱	赤磐市奥吉原385-1、 388-1、388-4、389-1 辺谷・成ル遺跡	H24.4.25～ H24.8.10	岡山県教育委員会 教育長 竹井千庫	個人	岡山県古代吉備 文化財センター
教文埋 第741号 H24.9.21	土器（弥生土器・土師器・須恵器・備前焼・陶磁器）、石製品、鉄製品など 計整理箱15箱	赤磐市奥吉原621-2、627、 628-1、629-1、633-1、 634、635-1 水口遺跡	H24.7.17～ H24.9.21	岡山県教育委員会 教育長 竹井千庫	個人	岡山県古代吉備 文化財センター
教文埋 第869号 H24.10.25	土器（弥生土器・土師器・須恵器・備前焼・陶磁器）、石製品、鉄製品など 計整理箱1箱	赤磐市奥吉原899、951 満願寺遺跡	H24.9.3～ H24.10.25	岡山県教育委員会 教育長 竹井千庫	個人	岡山県古代吉備 文化財センター



写真1 辺谷中田遺跡現地説明会  
(平成25年7月1日)



写真2 水口遺跡4区発掘調査風景  
(東から)

4 体制

本発掘調査は平成23・24年度に、報告書作成は平成24・25年度に実施した。その体制は以下のとおりである。

		(渡邊)	
<b>平成23年度</b>		総括参事(調査第一課長事務取扱)	中野 雅美
<b>岡山県教育委員会</b>		〈総務課〉	
教育長	竹井 千庫	総括主幹(総務班長)	岡部 一
<b>岡山県教育庁</b>		主任	行守 智和
教育次長	阿部 淳二	主任	岡村 涼平
<b>文化財課</b>		〈調査第二課〉	
課長	村木 生久	課長	弘田 和司
参事	光永 真一	総括主幹(第二班長)	渡邊恵里子
総括副参事(埋蔵文化財班長)	宇垣 匡雅		(調査・整理担当)
主任	石田 爲成	副参事	内藤 善史
主任	一色 武		(調査・整理担当)
<b>岡山県古代吉備文化財センター</b>		主任	杉山 一雄
所長	平井 泰男		(調査・整理担当)
次長(総務課長事務取扱)	片山 淳司	<b>平成25年度</b>	
参事	中野 雅美	<b>岡山県教育委員会</b>	
〈総務課〉		教育長	竹井 千庫
総括副参事(総務班長)	上田 利弘	<b>岡山県教育庁</b>	
主任	植木寿美子	教育次長	伊藤 史恵
主任	行守 智和	<b>文化財課</b>	
〈調査第二課〉		課長	谷名 隆治
課長	弘田 和司	参事	宇垣 匡雅
総括主幹(第一班長)	渡邊恵里子	総括副参事(埋蔵文化財班長)	大橋 雅也
	(調査・整理担当)	主任	石田 爲成
主任	杉山 一雄	主任	河野 但彰
	(調査・整理担当)	<b>岡山県古代吉備文化財センター</b>	
<b>平成24年度</b>		所長	平井 泰男
<b>岡山県教育委員会</b>		次長(総務課長事務取扱)	大崎 智浩
教育長	竹井 千庫	参事	光永 真一
<b>岡山県教育庁</b>		総括参事(調査第一課長事務取扱)	島崎 東
教育次長	松尾 茂樹	〈総務課〉	
<b>文化財課</b>		総括主幹(総務班長)	岡部 一
課長	光永 真一	主任	宮岡 佳子
参事	嶋田健一郎	主任	岡村 涼平
総括副参事(埋蔵文化財班長)	宇垣 匡雅	〈調査第二課〉	
主任	石田 爲成	課長	亀山 行雄
主任	河野 但彰	総括主幹(第二班長)	氏平 昭則
<b>岡山県古代吉備文化財センター</b>		主任	杉山 一雄
所長	平井 泰男		(整理担当)
次長(総務課長事務取扱)	大崎 智浩		

## 第2章 地理的・歴史的環境

辺谷製鉄遺跡ほか本書で報告する遺跡は、岡山県南東部の赤磐市（旧赤磐郡熊山町）奥吉原に所在する。熊山町は、明治4年の廃藩置県によって、吉井川右岸の磐梨郡18村と左岸の和気郡4村が合併して誕生した町で、旧奥吉原村は和気郡に属していた。磐梨郡と和気郡の境界となる吉井川は、岡山県の三大河川の一つで、中国山地から標高300～600mの吉備高原を抜けて、瀬戸内海へと南流する。吉備高原の南東端に位置する奥吉原地区の地形は、熊山山塊から延びる丘陵に囲まれた盆地状を呈しており、中小の河川が吉井川に流れ込んでいくため、中央に広い氾濫平野と丘陵裾に小規模な扇状地が作られている。

周辺で人々の営みが確認できるのは縄文時代後期になってからである。吉井川右岸の松木東山で晩期の遺物が採集されているが、辺谷中田遺跡で後・晩期の土器や石器が出土したことから、この時期から集落が営まれ始めたようだ。弥生時代中期になると吉井川の本・支流域に集落が増えていく。辺谷中田遺跡、水口遺跡や勢力遺跡などでは、住居や墓など多数の遺構が調査された。確認された遺構・遺物からは、吉備南部をはじめとして美作や播磨といった広域な地域交流が読み取れる。

古墳時代に入ると、前半期の集落は辺谷中田遺跡で調査された以外には様相が明らかではない。吉井川を望む丘陵上に前方後円墳の武宮古墳（全長59m）や大明神古墳（全長29m）が所在することから本地域を統治した首長が存在していたことは確かであろう。後半期になると吉井川の本流だけでなく支流の谷底平野を望む丘陵上に古墳が増加する。吉井川左岸には、横穴式石室を持つ和田1～4号墳、竪穴式石槨や木棺を持つ矢部1～4号墳がある。右岸には浅木山古墳1・2号墳や鼓山古墳群、山根古墳群、塚山古墳群など数多く築かれており、集落がますます発展していったことがわかる。この地域での注目すべき産業として鉄生産があり、流域には6世紀後半～7世紀代の製鉄遺跡が知られている。辺谷製鉄遺跡もその一つだが、猿喰池製鉄遺跡や時期は不明だが和田たたら跡、和田奥たたら跡など丘陵斜面部での操業が確認される。吉井川右岸でも山吹たたら跡などが散見される。一方、平野部においては辺谷中田遺跡で鍛冶関連遺物を持つ住居跡や被熱土坑が発見された。このことから、鉄生産が集落内においても行われていたことは明らかで、古墳群の発展を考えるうえで興味深い。また、9世紀初頭頃の石生天皇遺跡で製鉄炉が調査されたことにより、継続的に鉄生産が行われていたことが窺い知れる。この地域は奈良時代以降、和気清麻呂等を輩出した和気氏が台頭していくが、鉄生産が経済的基盤の一つであったことは容易に推測できる。

ところで、この地域では弥生時代以来広域な地域交流を示唆する遺構・遺物が確認されている。この交流手段として、一つには吉井川を用いた南北地域を結ぶ河川交通が上げられる。これに対して東西地域を結ぶ交通手段として陸路があり、奈良時代以降古代山陽道が整備され一層盛んに利用されるようになる。古代山陽道は、兵庫県との県境にある船坂山峠を越え、和気郡衙のある藤野駅（和気町藤野）に向かい、珂磨駅（旧熊山町）から高月駅（旧山陽町馬屋）へと西進する。諸説あるルートのうち、和気―吉原―松木のコースをとる場合に、松木寺跡が珂磨駅と推定されている。藤野駅から珂磨駅へは吉井川を渡る場所としての「和気渡」が和気又は奥吉原に比定されている。

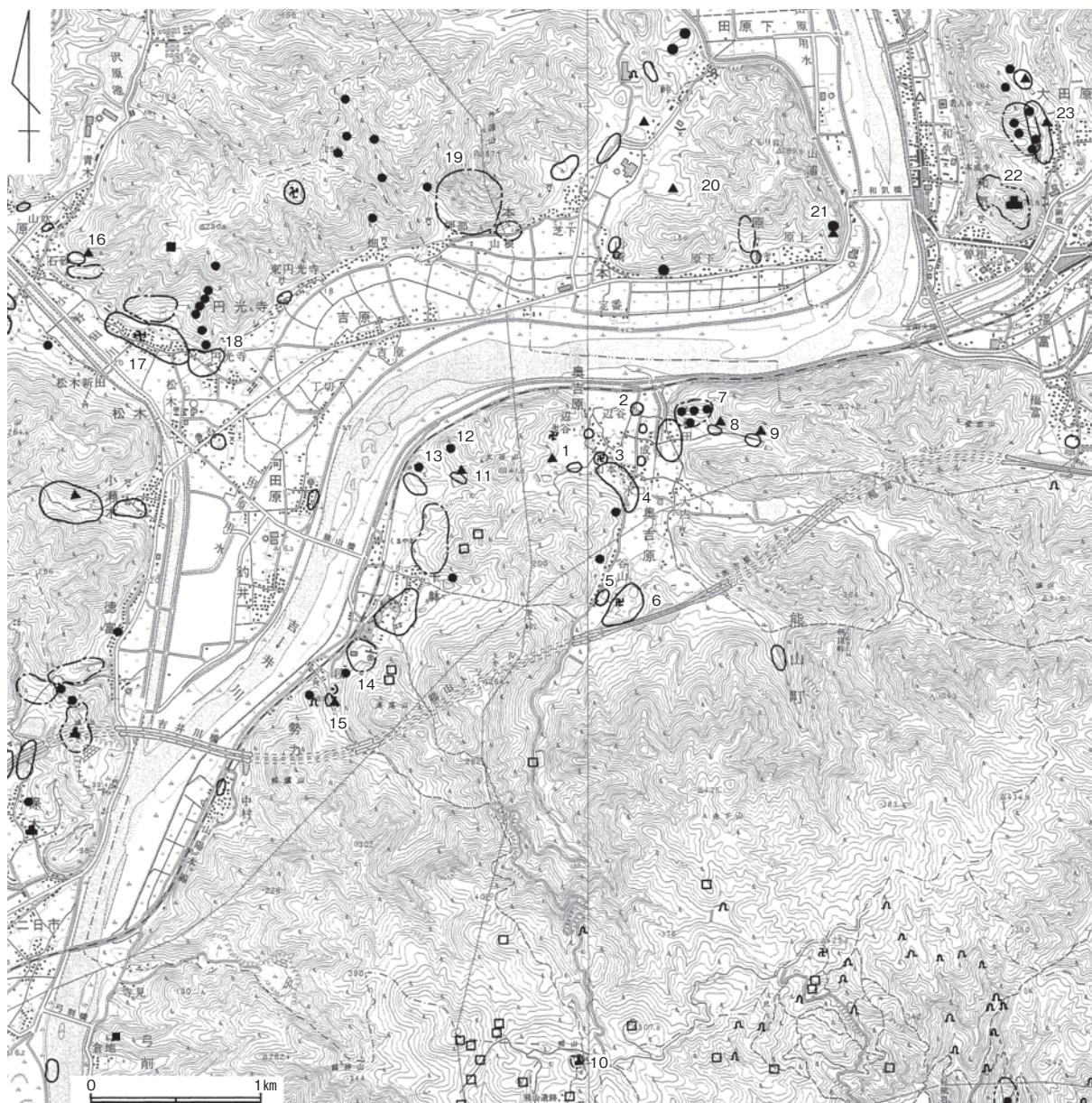
これらのように和気を中心としたこの地域は、早くから交通が発達し、物流の拠点として発展して

きた状況を示唆する遺跡が数多く確認できる。古代における和気氏の台頭や、尾根上に築かれた戦国期の多くの山城からも東備地域の中において重要な役割を果たす地域であったことが想像できる。

(杉山)

参考文献

- ・『熊山町史』通史編 熊山町 1994
- ・『和気郡史』和気郡史刊行会2002
- ・武部健一『完全踏査 続古代の道』2005
- ・「水口遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』163 岡山県教育委員会 2002
- ・「改訂 岡山県遺跡地図」第9分冊東備地区 岡山県教育委員会 2003
- ・「猿喰池製鉄遺跡」『熊山町埋蔵文化財発掘調査報告』熊山町教育委員会 2004



- ▲：製鉄関連遺跡 □：石積み遺構 ●：古墳 ■：城跡 - - - (一点鎖線)：古墳群 - (実線)：散布地
- 1 辺谷製鉄遺跡 2 辺谷中田遺跡 3 成ル古屋遺跡 4 水口遺跡 5 谷山遺跡 6 万願寺遺跡・万願寺跡  
 7 和田1～4号墳 8 和田たたら跡 9 和田奥たたら跡 10 熊山遺跡、熊山城跡 11 猿喰池製鉄遺跡 12 大谷山遺跡  
 13 武宮古墳 14 勢力遺跡・矢部1～4号墳 15 段たたら跡 16 山吹たたら跡 17 松木寺跡(珂磨?) 18 円光寺遺跡  
 19 鼓山古墳群 20 石生天皇山遺跡 21 大明神古墳 22 曾根城跡 23 王子山製鉄跡

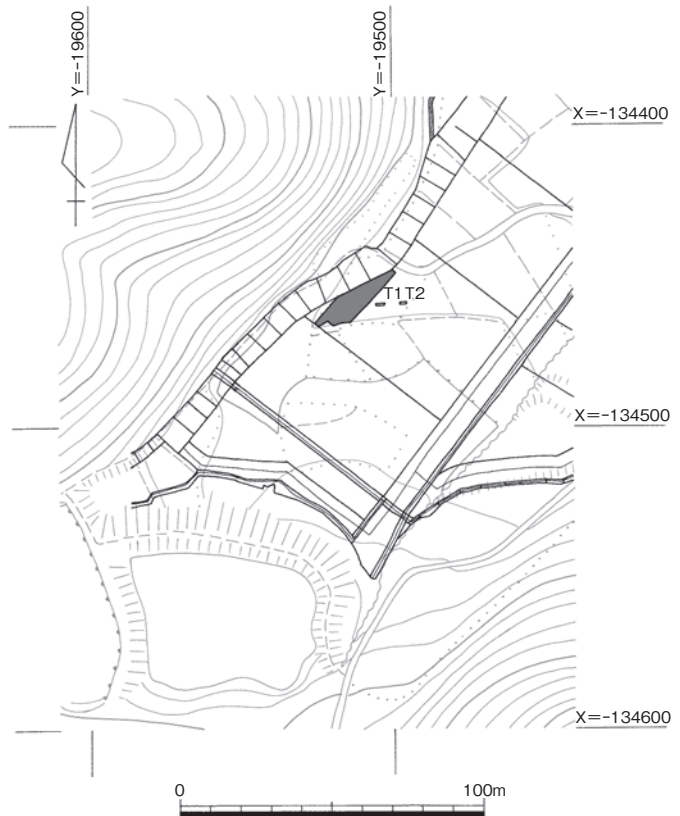
第6図 遺跡分布図 (1/40,000)

# 第3章 辺谷製鉄遺跡

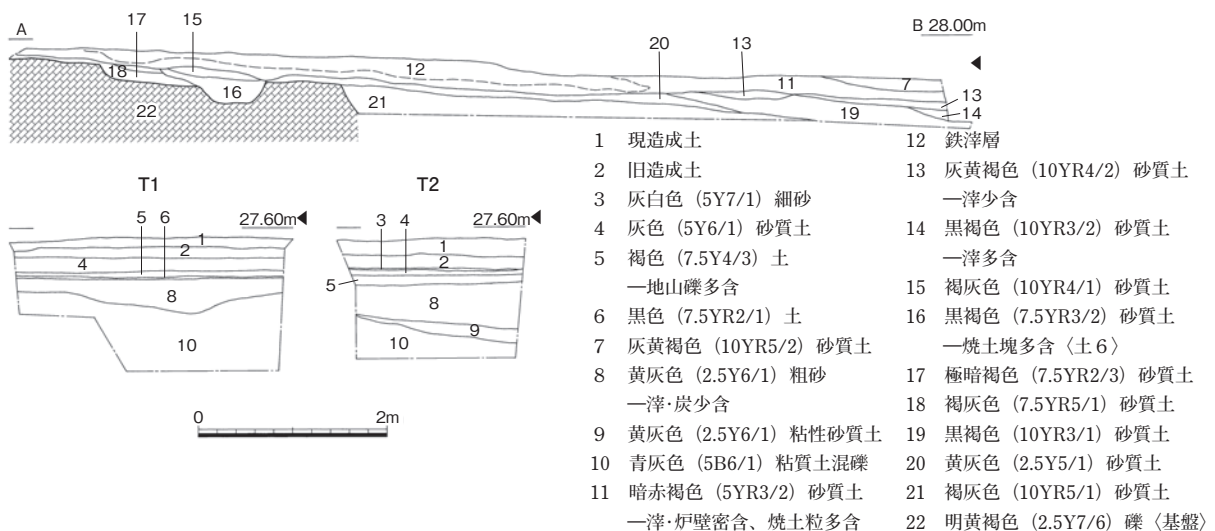
## 第1節 調査の概要

本遺跡は、奥吉原集落の南西谷奥に位置し、丘陵の東斜面裾に立地する。当初は、工事掘削部分とその西側道路部分が調査対象だったが、道路部分については、赤磐市教育委員会により道路側溝の掘削工事に際して立会調査が実施された。しかし、製鉄関連遺構等は確認されなかったため、本発掘調査は工事掘削部分のみを対象に実施した。

表土除去後に調査区内にトレンチを設定し、鉄滓の堆積状況や基盤層（第8図第21・22層）の確認を行った。その結果、北東に向かって緩やかに下がる基盤を掘り込んで土坑6（同第16層）が存在し、その上面に排滓層（同第11・12層）を確認した。排滓層は表土直下に存在し、近世以降の斜面堆積（同第7層）も削平を受けていることから、近代以降の地形改変が顕著であること



第7図 基盤整備計画と調査区配置図 (1/2,500)



第8図 T1・3・4北壁 (1/80) ←は工事高を示す。

が明らかとなった。また、東への基盤層の傾斜が緩やかだったので、東側の水田にT1・2を設定し土層堆積と遺構の確認を行ったところ、床土から約50cm下で鉄滓や中世土器を含む砂礫層（同第8～10層）の堆積を確認したのみで遺構は存在しなかった。

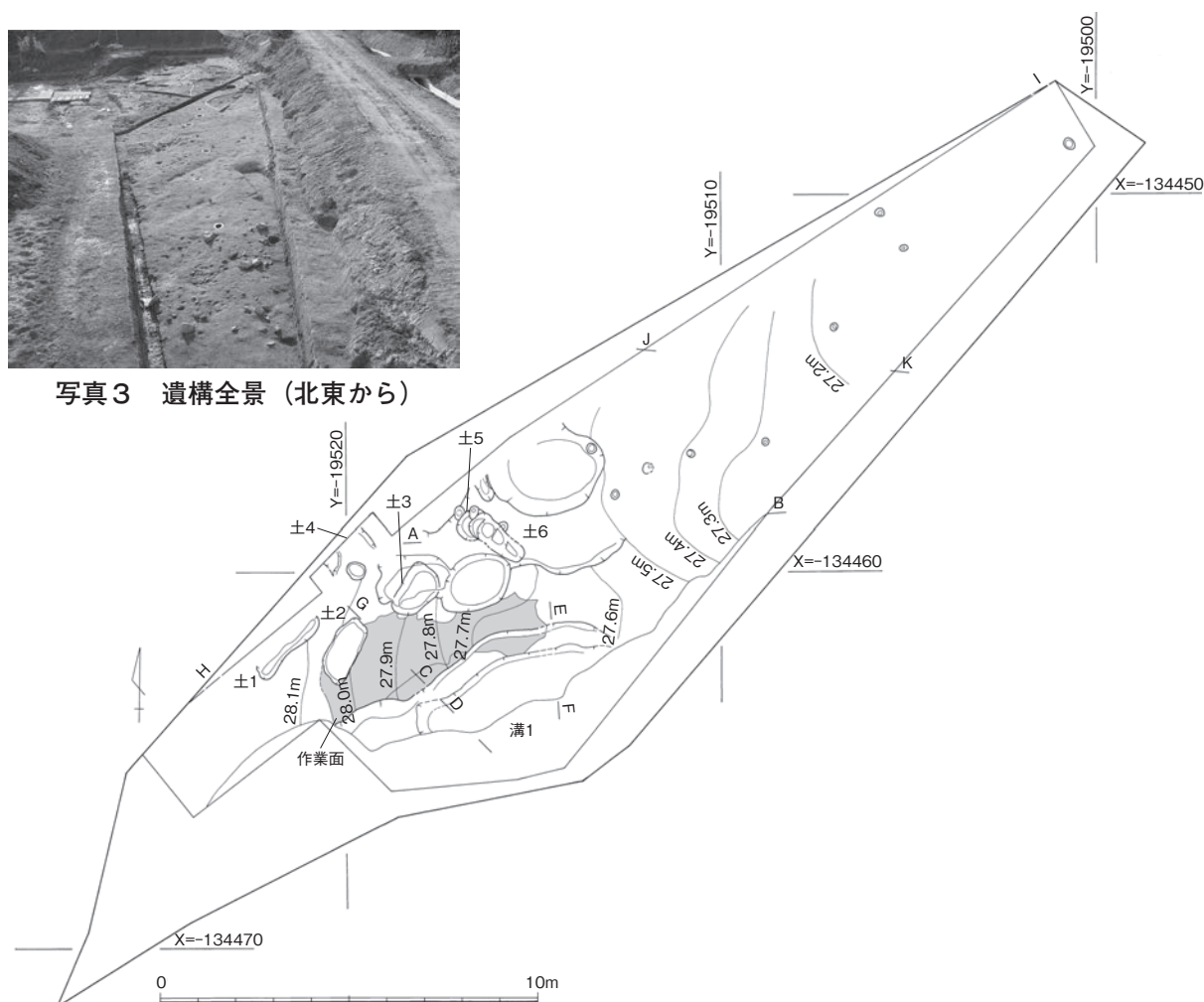
このことから、東側水田部分は中世以降の土石流によって削り取られたと判断し、全面調査は高い水田部分のみ対象として実施した。（杉山）

## 第2節 遺構・遺物

調査区内には広く炉壁と鉄滓等分布していたので、数回に分けて排滓層（第8図第11・12層）を除去しながら遺構検出を行った。その結果、調査区西端では標高28.1mで基盤面が確認され、土坑2から東は斜面の二次堆積層を基盤として遺構が存在した。遺構は調査区西部に集中して、土坑6基、溝1条、作業面1か所とたわみを確認し、調査区全体が排滓場であると理解した。北西部では、配列に規則性のない柱穴が数基確認されたのみで、北端では標高27.8mで柱穴が存在した。出土遺物は排滓層中からの鉄滓・炉壁が圧倒的に多く、時期を示す土器は少量であった。掘り下げ時に鉄鉞石を確認したので、磁石を使用して採取に努めた。また、掘り下げ中に弥生土器と縄文土器の可能性のある細片が出土しており、調査地南西斜面付近に該期の遺構があったことが推察される。（杉山）



写真3 遺構全景（北東から）



第9図 全遺構配置図 (1/200)



# 1 土坑

## 土坑1 (第9・10図、図版4)

調査区北西端に位置し、等高線に直交した溝状の土坑である。北側はトレンチで削平しているが、復元幅約40~50cmで断面台形を呈し、深さは約5cmが残るのみであった。底面は凸凹で、長軸方向の高低差はほとんどなく、被熱も認められなかった。埋土は礫を含む単層で、埋土中からは炉壁片と鉄滓約280g、鉄鉱石S1が出土した。溝の残りの可能性もあるが性格は不明で、埋土の状況から製鉄作業時に近い古墳時代後期に機能していたと考えられる。

## 土坑2 (第9・11図)

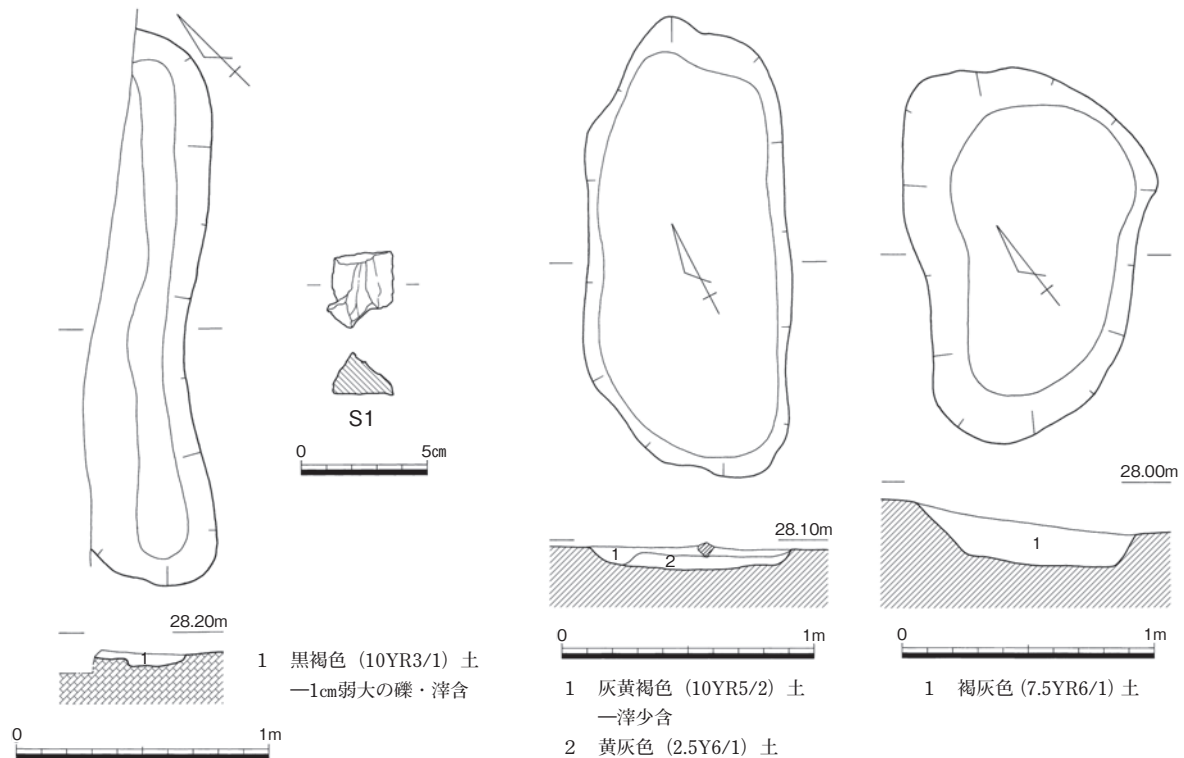
調査区北西に位置し、等高線に平行した楕円形の土坑である。埋土は2層に分層できるが、第2層は基盤層との区別が難しく地山礫の含有状況で底面と判断した。遺物は第1層中から鉄滓約890gが出土した。被熱痕跡もなく性格・時期ともに明確ではないが、古墳時代後期に機能していたと考えられる。

## 土坑3 (第9・12図)

調査区西中央に位置し、約20cm堆積した鉄滓を除去後、溝状に窪んだ基盤面で検出した。窪みの底面には同規模の窪みがあるが、本遺構だけが断面台形で明瞭な掘り込みをもっていたので土坑として扱った。被熱痕はなく埋土中からの出土遺物もないが、鉄滓の堆積状況から製鉄作業が行われた時期でも古い時期に機能していたと考えられる。(杉山)

## 土坑4 (第9・13図、図版3)

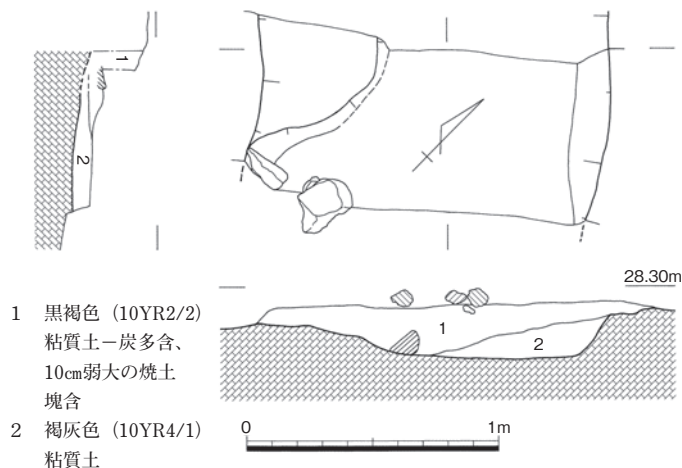
調査区西壁沿い中央に位置する。西側は調査区外に延び、東側も側溝により削平され、本来の形状は不明である。検出面からの深さは22cmと浅いが、上層は炭を多く含み、焼土も混入していた。また



第10図 土坑1 (1/30)・出土遺物 (1/3)

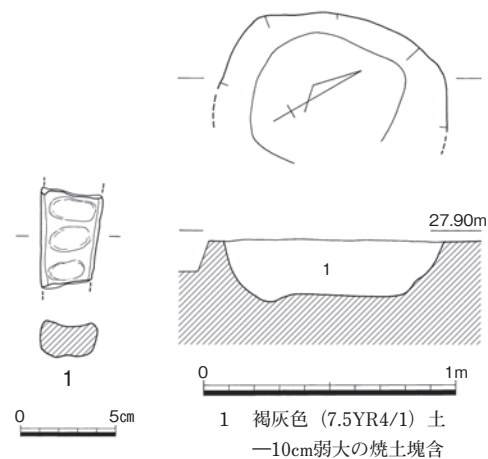
第11図 土坑2 (1/30)

第12図 土坑3 (1/30)



- 1 黒褐色 (10YR2/2) 粘質土—炭多含、10cm弱大の焼土塊含
- 2 褐灰色 (10YR4/1) 粘質土

第13図 土坑4 (1/30)・出土遺物 (1/4)



- 1 褐灰色 (7.5YR4/1) 土—10cm弱大の焼土塊含

第14図 土坑5 (1/30)

上面で2.7kgを超える多くの鉄滓が出土したことから、製鉄に伴う遺構と考えられる。滓には流出孔滓も含まれる。ただし、壁面や底面に被熱痕跡は認められなかった。

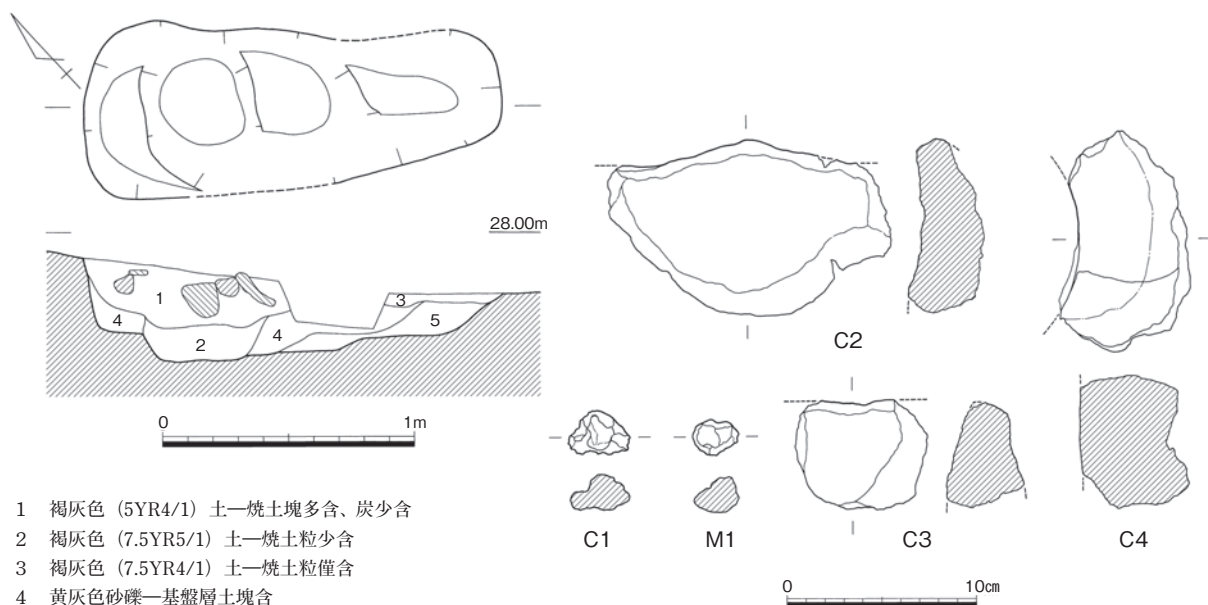
把手もしくは脚の一部と思われる方柱状の1が出土したが、時期は不明である。(渡邊)

土坑5 (第9・14図)

調査区北中央で土坑6に切られただ円形の土坑である。被熱はみられないが、製鉄作業と関連する遺構の可能性もある。遺物はなく性格・時期共には不明であるが、製鉄作業時でも古い段階に機能していたと判断される。

土坑6 (第9・15図、図版3・4)

調査区北中央で土坑5が埋没後に掘削された土坑で、等高線に平行し、溝状の窪みの中にある。上面には鉄滓・炉壁が約20cm堆積していたが、土坑周辺には被熱痕はみられない。平面長楕円形で埋土の状況から第4・5層が埋まったか埋めた後第2層堆積部分を掘り返し、何らかの作業に用いたと考えられる。第1・2層土はすべて水洗選別を行ったが、焼土塊と炭粒が入っているだけで、鍛冶など



- 1 褐灰色 (5YR4/1) 土—焼土塊多含、炭少含
- 2 褐灰色 (7.5YR5/1) 土—焼土粒少含
- 3 褐灰色 (7.5YR4/1) 土—焼土粒僅含
- 4 黄灰色砂礫—基盤層土塊含

第15図 土坑6 (1/30)・出土遺物 (1/4)

の作業を示す遺物はなかった。図示したC2・3は高熱で溶融したためなのか表面が剥落しているが、上端部が残っている。C4は弧を描く面が残り被熱も同心円状に認められることから、炉壁と推察される。C1・M1は分析試料で、両者共磁鉄鉱石由来の製錬炉の炉壁と製錬滓である。分析の詳細は第8章に掲載している。

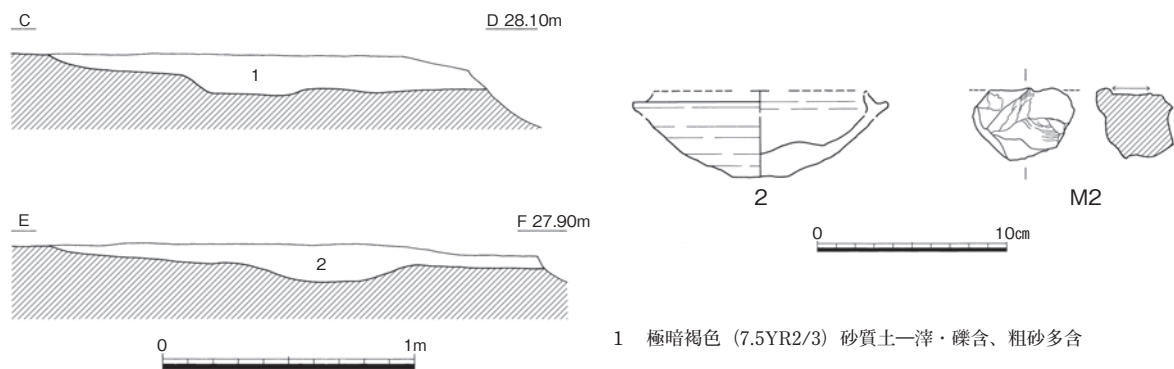
時期は、他の土坑と同時期と判断されるが、機能については明らかでない。(杉山)

## 2 溝

### 溝1 (第9・16図、図版2)

調査区南西部に位置し、等高線に直交するように検出された。底面は比較的平らだが、中央に浅い窪みがあることから溝と判断した。埋土は粗砂混じりの土で鉄滓約3.2kgと焼土塊を含んでいる。須恵器杯身2は底面直上で出土した小片である。口縁部と体部の接点はないが、焼成状況から同一個体と判断される。立ち上がりは短く内傾し、復元口径も約11cmと小さい。M2は炉内流動滓で分析資料である。

時期は、出土遺物から6C末～7C初め頃と考えられるが、機能については明確ではない。(杉山)

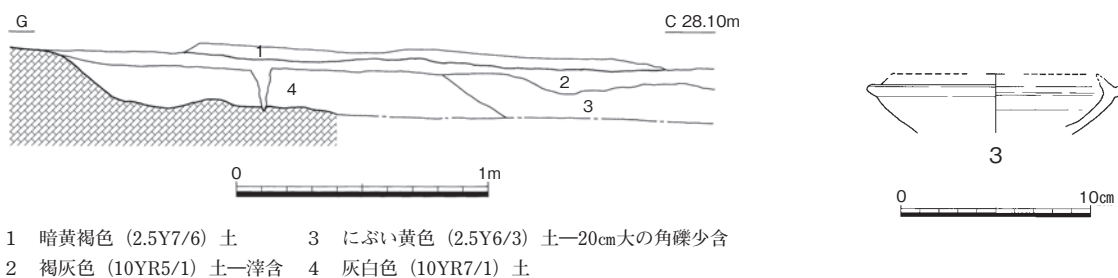


第16図 溝1 (1/30)・出土遺物 (1/4)

## 3 作業面

### 作業面1 (第9・17図)

調査区西部中央で検出した黄色土の範囲である。被熱による赤化等はみられないが、自然堆積層と考えるには第2層土以下の斜面堆積土よりも土砂の粒度が細かく、均質で強く締まっていることから、人為的な整地層と判断した。本範囲の北側には溝状の窪みや土坑2・3など製鉄に関連する可能性のある遺構があり、これら遺構は整地層の第1層土を切っている。また、東側は一部溝1の底面に残るものの多くは溝1によって削り取られている。遺物は、第1層土から鉄滓と須恵器杯身3の小片があ



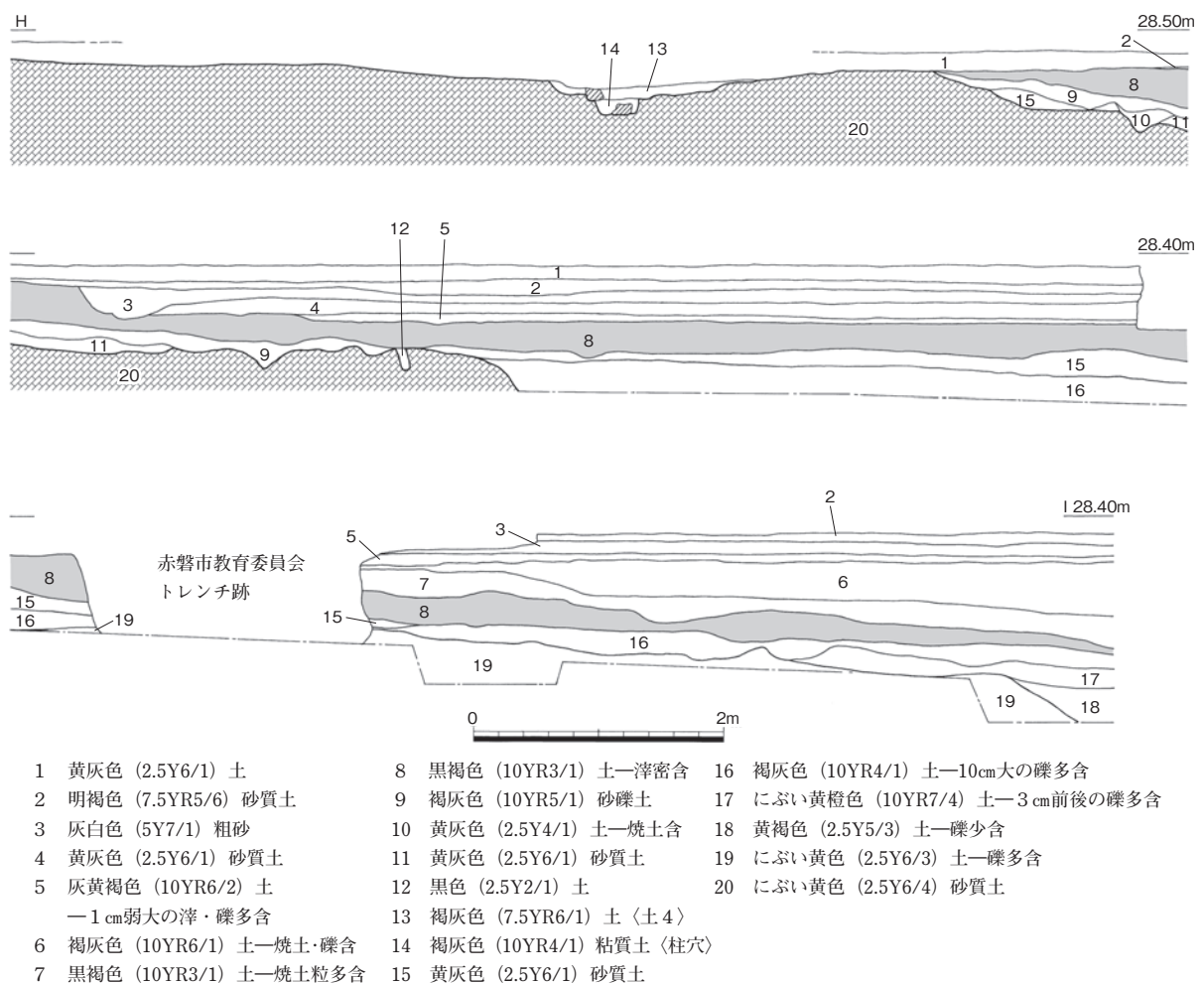
第17図 作業面 (1/30)・出土遺物 (1/4)

る。また、第2層土にも鉄滓が含まれていることから、製鉄作業の操業時以降に整地されたと判断される。時期は、須恵器の年代から溝1とほぼ同時期と判断される。(杉山)

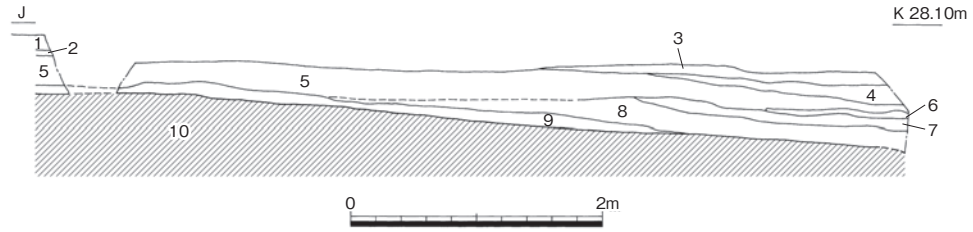
#### 4 排滓場

##### 排滓場 (第9・18~22図、図版2~4)

調査区のほぼ全面で鉄滓の散布を確認したので排滓場として報告する。調査区北壁沿いに設定したトレンチの土層断面を第18図に示した。北西部は地形が高いこともあって、後世の削平が基盤層まで達している。第6層に17C前半の肥前陶器が含まれていることから、近世以降に地形改変が行われたと判断される。第8層が鉄滓・炉壁を密に含んだ堆積層で、鉄滓等の含有状況から第15層までを排滓層と判断した。第16~19層土は製鉄作業以前の斜面堆積土であり、創業時は地形が北東に向かって緩やかに下がっていたことが分かる。また、斜面にほぼ直行するトレンチを設定して、土層観察を行った。第8図A B断面で排滓層下に土坑5・6を確認したことから、2回以上の製鉄作業が想定された。第19図J K断面では第1~4が近世以前の堆積層である。第5・8層が鉄滓等を密に含むのに対して中間層第7層はほとんど含まず、この上に第6層炭層が薄く堆積している。第9層は基盤層上面の自然流土だが、僅かに鉄滓を含んでいることから、創業時に近い堆積層と考えられる。これらの堆積状況から調査区中央から東部の排滓層をI層(A B断面第11~13層、J K断面第5層)、II層(A B第

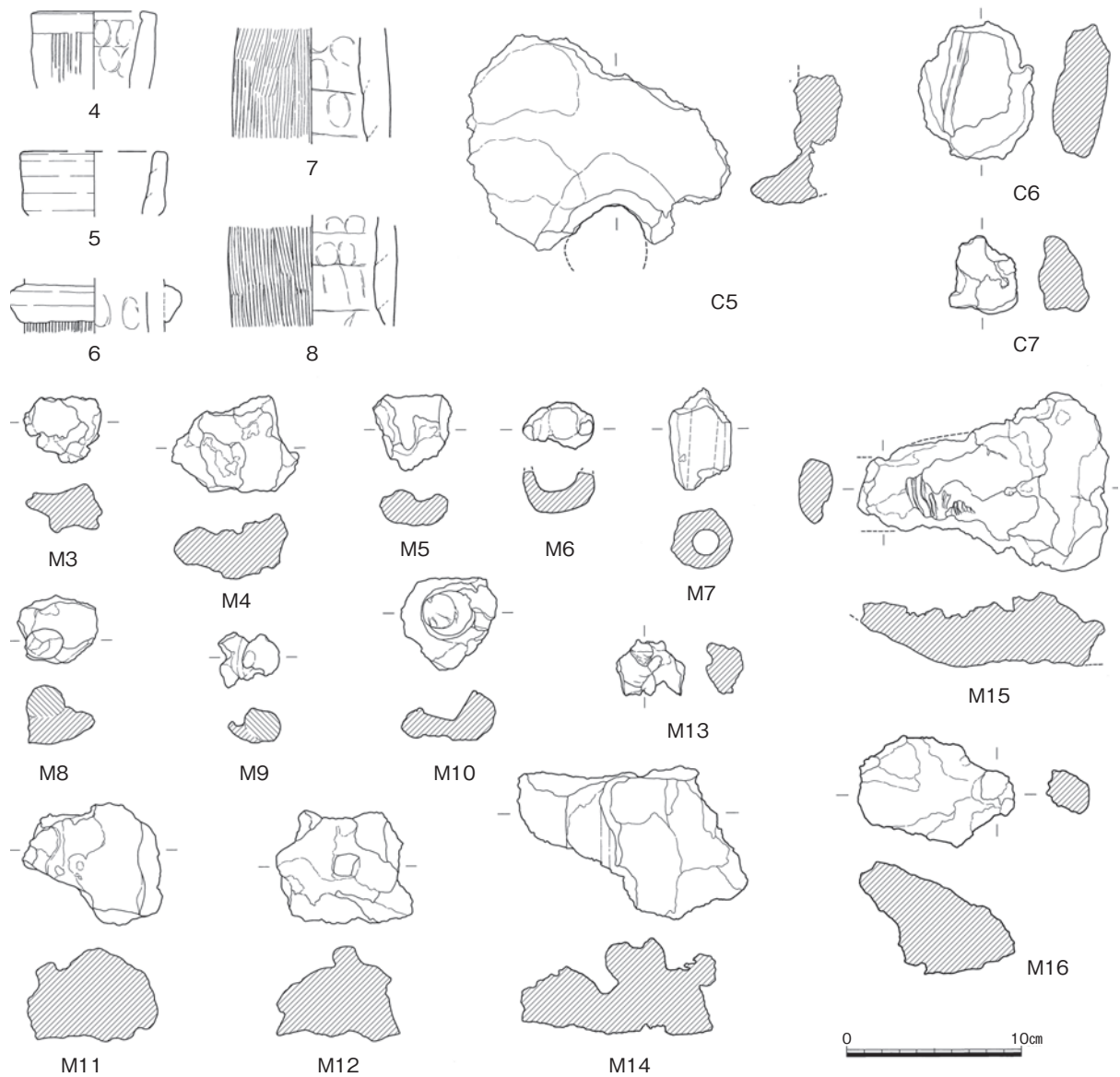


第18図 排滓場① (1/60)



- |                             |                         |
|-----------------------------|-------------------------|
| 1 黄灰色 (2.5Y6/1) 砂質土         | 6 炭層                    |
| 2 灰黄褐色 (10YR6/2) 土          | 7 灰黄褐色 (10YR6/2) 土      |
| 3 黄灰色 (2.5Y6/1) 砂礫土—滓少含     | 8 黒褐色 (7.5YR3/1) 土—炉壁多含 |
| 4 黄褐色 (2.5Y5/3) 砂質土—滓少含     | 9 褐灰色 (10YR5/1) 砂礫土     |
| 5 黒褐色 (10YR3/1) 土—滓多含、炭・焼土含 | 10 にぶい黄色 (2.5Y6/4) 砂質土  |

第19図 排滓場② (1/60)

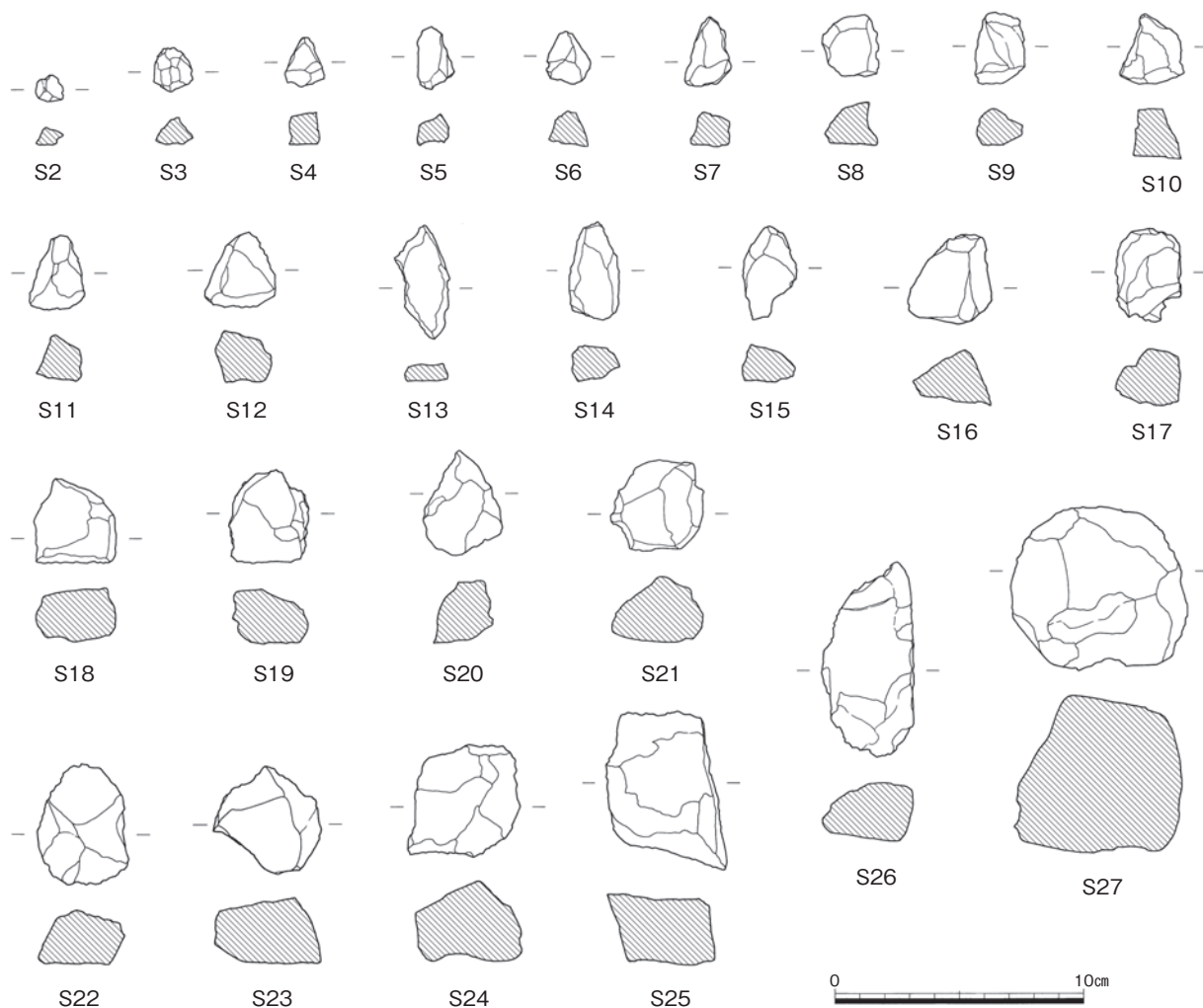


第20図 排滓場出土遺物① (1/4)

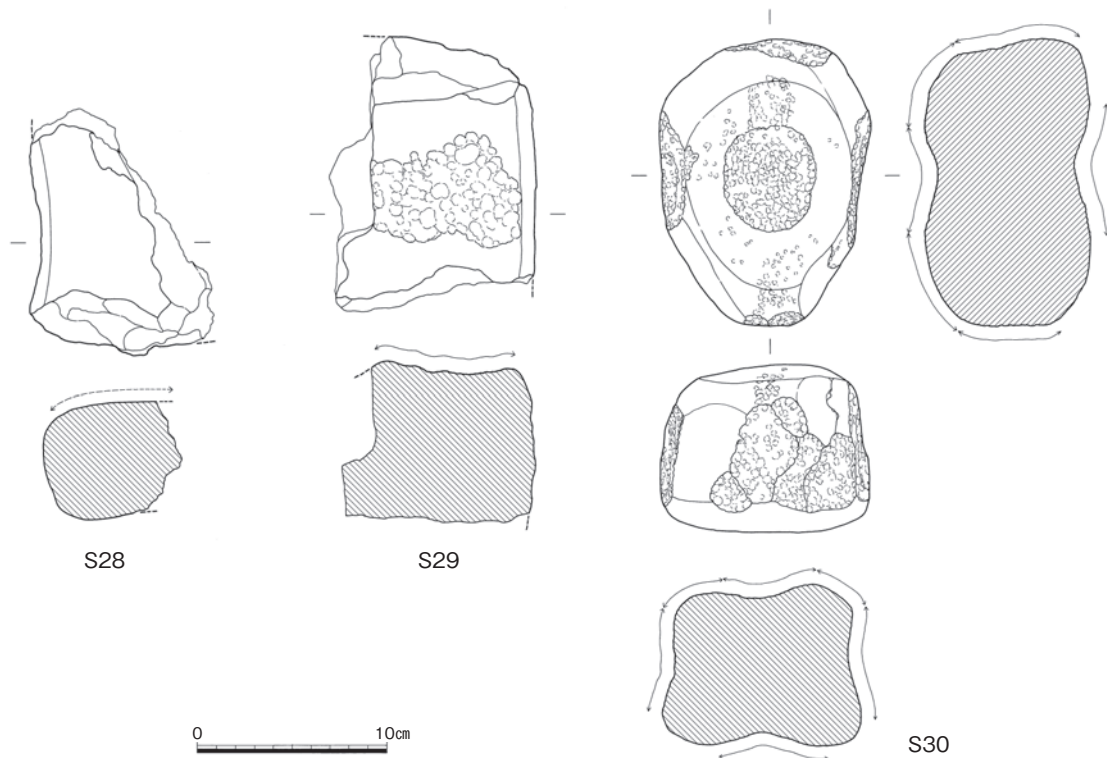
13層、JK第7層)、Ⅲ層(AB第14層、JK第8層)、Ⅳ層(AB第20層、JK第9層)の4層に可能な限り分層して遺物採集と遺構検出を行った。しかし、遺構は基盤層上面でのみ検出でき、第Ⅰ層に拳大以上の炉壁が目立つ以外遺物の様相に大きな変化はなかった。排滓層を全て掘り上げた後に土坑6周辺で10cm前後の深さを持つ不定型のたわみを検出した。鉄滓を若干含むもの的人為的な掘り方とは断定できなかったため、第9図に平面形のみ示している。

出土遺物は、鉄滓・炉壁がほとんどで、全てを持ち帰ることは不可能であったので、コンテナ約100箱分のみ持ち帰った。

4～8は土師質の土器で、4・6は第Ⅳ層上面で出土した。4・5は口と判断した。体部は10～15mmと厚手で6にはハケメの後に突帯が付く。調整・胎土から同一器形と考えられるが、被熱痕はなく詳細な器形は不明である。C5～7は炉壁片で、C5には孔径47mmの送風口が確認できる。M3～16は鉄滓で、M6・7はそれぞれ径26mmと16mmの木舞径が推定できる滓である。M14は径26～30mmの木舞痕の残る滓で、裏面にはスサ痕が顕著な壁土が付着する。M16は流出孔手前の滓で、表面の砂粒の付着状況から細い部分が流出孔から出た部分で孔径は約58mmを測る。S2～27は非常に磁性の強い鉄鉱石である。調査現場で磁石を用いた採取が十分行えていないため約11mm～70mm程度のものみだが、本来はさらに細片の鉱石もあったはずである。鉱石には明確な敲打や被熱の痕跡は看取で



第21図 排滓場出土遺物② (1/3)

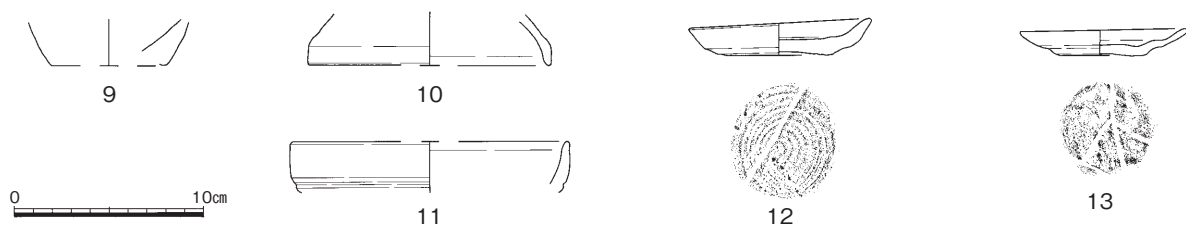


第22図 排滓場出土遺物③ (1/4)

きない。S28は表面が被熱により荒れているが、砥石であろう。S29は平らな面に円形の敲打痕が残る敲き石である。S30は全面に細かな敲打痕の残る敲き石である。いずれも、第I層相当の土層から出土している。C6・7とM3～5・7～13・15、S23は分析試料で、詳細は第8章に記載している。(杉山)

### 5 その他の遺構・遺物 (第9・23図)

その他の遺構としては、第18図第16層上面で検出した柱穴がある。等高線に直行するような状況で確認したが性格は不明である。これらの中には鉄滓が入っているものもあり、製鉄作業が行われていた時期と同時かそれよりも新しい時期のものかと判断される。しかし、調査区北東端の第17層下面で検出した柱穴は、他と埋土の色調が異なることから、弥生時代以前の遺構である可能性がある。図示した遺物のうち9～11は排滓層掘り下げ中に出土した。9は弥生時代後期頃の甕、10は6C後半の須恵器杯蓋、11も同時期の高杯である。土師器小皿12・13は第18図第6層土から重なって出土した。関連する遺構の存在を推測したが掘り方などは確認できなかった。同一層内から17C前半頃の肥前陶磁器があることから、同時期のものと考えられる。(杉山)



第23図 その他の出土遺物 (1/4)

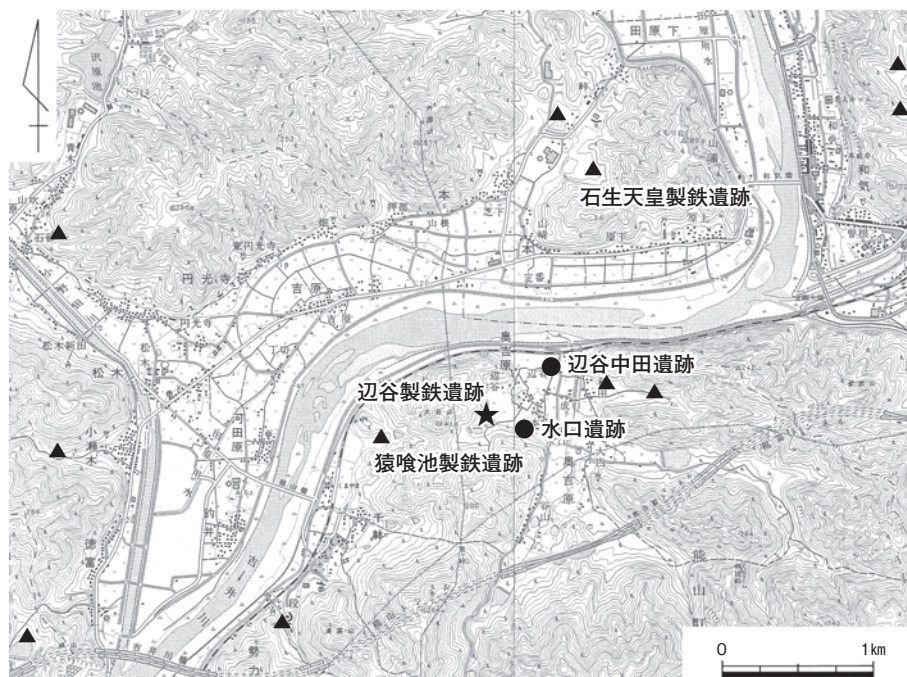
## 第3節 小結

辺谷製鉄遺跡は、氾濫平原の南西奥で、丘陵の東裾に位置している。製鉄に関わる遺構としては、性格不明の土坑と作業面、排滓場を確認したが、製鉄炉本体は確認できなかった。西側の丘陵を踏査したり、墓地造成や道路側溝の崖面の土層観察を行ったりしたが、作業場となりそうな加工段や鉄滓などの遺物散布、被熱痕跡などは確認できなかった。したがって、製鉄炉本体は調査区北を走る道路の下に存在すると推測される。

本遺跡周辺で周知されている製鉄遺跡と鉄滓散布地の分布を第24図に示す。平野を挟んで東側には、時期は不明だが和田たたら跡や和田奥たたら跡が確認されている。また、峠を越えて本遺跡の西約500mにあたる場所には猿喰池製鉄遺跡がある。磁鉄鉱を原料とする製鉄炉が調査され、出土遺物や理化学的な年代測定から6C後半～7C前半頃に操業していたことが明らかとなっている。本遺跡とはほぼ同時期に操業していたことになり、炉壁に木舞を組んでいること、脈石が残る鉄鉱石を使用することなど共通点がみられる。また、時期は下るが吉井川対岸約2kmの丘陵斜面には石生天皇遺跡があり、8C末葉～9Cに砂鉄を原料とする製鉄炉が調査されている。

これら遺跡の分布状況から、奥吉原周辺の吉井川に近い丘陵斜面部において6C後半～古代にかけて継続的に製鉄が行われていたことが明らかとなり、辺谷製鉄遺跡はその中でも早い時期の遺跡であると言える。原料となる鉄鉱石については、本遺跡周辺で採集可能かどうかは不明である。しかし、吉井川上流地域には近代まで操業していた柵原鉱山があることから上流域では採集可能と推察され、原料を奥吉原まで運搬していた可能性はあるであろう。このことは、川岸の集落である辺谷中田遺跡において6C後半の住居が調査され、河道からは鉄鉱石が出土していることから推測できる。また、ここでは製鉄に関連する被熱土坑や住居から鞆の羽口と鉄塊系遺物などが出土しており、原料の搬入だけでなく鍛冶作業を行っていたことが分かっている。

したがって、奥吉原周辺地域では、丘陵斜面で製鉄、平野部の集落では鍛冶を行うといった一連の鉄生産に関係した作業が想起される。また、周辺の丘陵には該期の古墳群が展開しており、集落が拡大していった様子が窺える。(杉山)



第24図 奥吉原周辺の製鉄関連遺跡 (1/50,000)



## 第4章 辺谷中田遺跡

### 第1節 調査の概要

奥吉原地区を南北に貫流する和田川が吉井川に注ぐ河口近くに位置し、氾濫平野の北端にあたる。赤磐市教育委員会による確認調査の結果、T3・36を含む一帯に大きく弥生時代の集落が広がると想定され、工事掘削高からT36とその東側の水田、T3北側及び東側の水田の一部が本発掘調査対象地となった。調査地は県道により東西に2分されており、県道より西側を1区、東側を2区とした。東側は西側より標高が70cm近く高い。1区調査途上で遺跡範囲が当初の想定より西へ延びることが判明したため、1区と標高に差がない水田2面を新たに調査対象に加え、3区として調査を進めた。



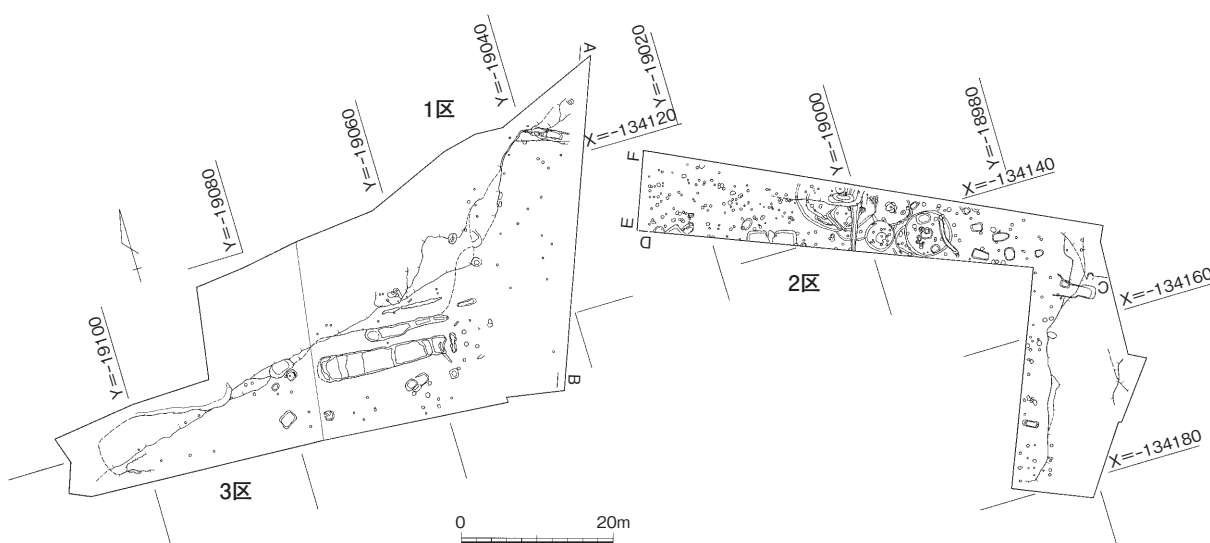
第25図 基盤整備計画と調査区配置図 (1/2,500)

調査地内の水田には段差があったが、それぞれ現耕作土直下で遺構面に達する。遺構面の標高は1区中央で約18m、2区西半で18.5m、3区東半で17.8mを測り、2区が最も高所となる。1区は東西2面の水田からなるが、2区に近い東側の標高が西側より低いことから、地下げにより著しく削平された可能性が高い。1・3区北半は旧河道域で、微高地側方（前面）は浸食されていた。この旧河道は2区で確認されていないが、2区の基盤も北に緩やかに下がり、その上面を1・3区の旧河道上部に堆積していた砂層（第27図A B第4層）と同一と思われる砂層が覆っていた（第27図E F第2層）。この層からは中～近世の遺物が出土しており、おそらく中世以降には河道の氾濫原となっていたと考えられる。なお、1・3区北側の水田は1m近く低く、法面には石垣が築かれていたことから、1・3区北側に集落範囲は広がらないと考えている。また2区東端にはこの旧河道に直行する南北方向の旧河道があり、河道に囲まれた南西から北東に舌状に張り出す形状の微高地を想定することができる。弥生～古墳時代の遺構はこの微高地の鞍部に集中する。

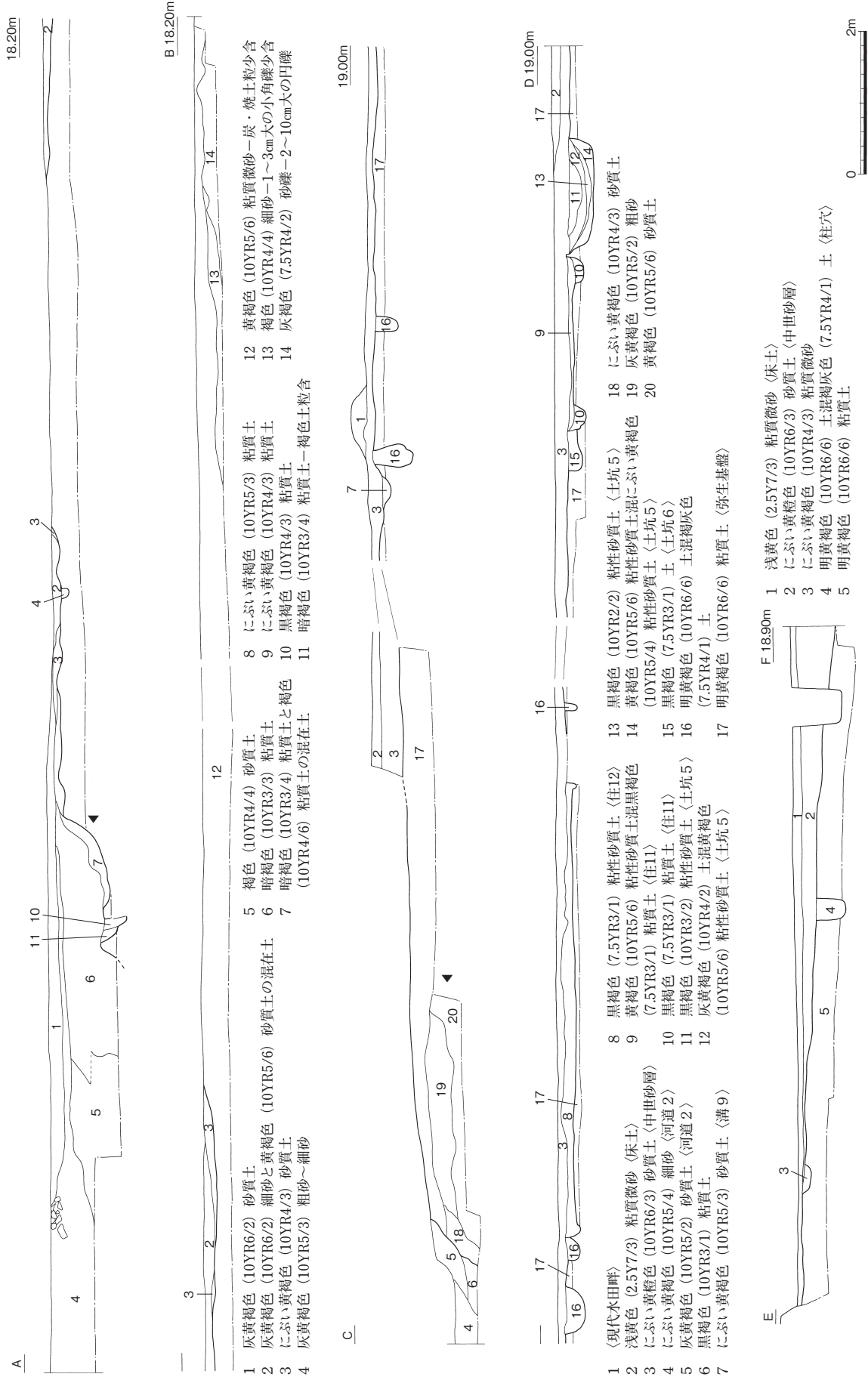
遺跡の基本層序を第27図に示す。A B第12層、C D第17層、E F第5層が基盤、A B第4～7層、C D第4～6層が河道内堆積層に対応する。A B第6層、C D第6層は弥生～古墳時代の土器を多く包含していた。基盤は県南部平野によく見られる黄色色のシルトであるが、僅かに炭・焼土を含んでいた。基盤掘り下げ中や遺構掘削時に縄文土器が出土しており、微高地の形成が縄文時代に進行していたことを示唆している。1区南東端ではシルト下部で礫層（A B第13・14層）を確認したが、ここからは何も出土していない。なお、工事掘削標高は1区で17.5m、3区で17.2m、2区西半で18.0m、2区東半で18.2mが予定されており、調査による掘削は保護層を考慮して1区は17.2m、3区は16.9m、2区は17.7mを目安に終えており、河道底には達していない。

検出した主な遺構は弥生～古墳時代の竪穴住居12軒、木棺墓1基、土坑22基、中世墓1基、近世の土坑3基などである。微高地鞍部にあたる2区中央は遺構密度が高い。時期的には弥生時代中期後葉～後期中葉の遺構が多く、古墳時代前期及び古墳時代後期は散見される程度である。古代～近世はさらに希薄であるが、河道内から遺物が一定量出土していることから、周辺に当該期の集落が営まれていた可能性も考えられる。

（渡邊）



第26図 全遺構配置図 (1/1,000)

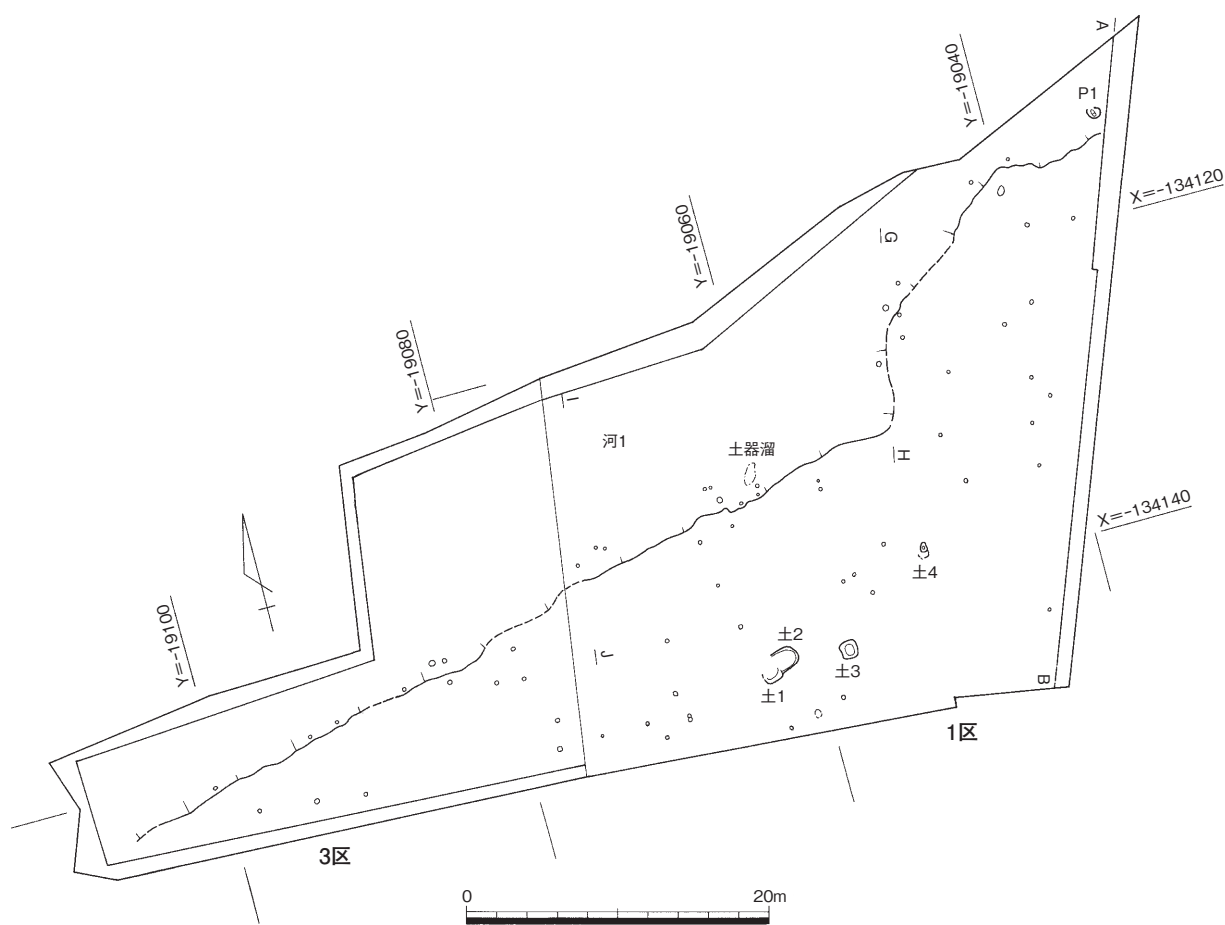


第27図 調査区土層断面 (1/80) ←▲は工事高を示す。

## 第2節 弥生時代以前の遺構・遺物

1区は現代の耕作土直下で遺構面に達する。1区の遺構面は標高17.9～18.0mでほぼ平らである。2区北側及び3区西側は緩やかに下がり、河道の堆積の一つと見られる土砂が遺構面上面を覆っていた。遺構面の標高は3区北東端で17.8m、2区西壁南端で18.5m、西壁北端で18.0m、北壁東端で18.3mを測る。弥生時代以前の主な遺構は弥生時代中期中葉～後期後葉の竪穴住居8軒、木棺墓1基、土坑15基、溝3条、河道2条である。このうち、土坑4基と河道1条が1区で検出された以外は全て2区に位置する。特に2区中央には竪穴住居7軒以上が建て替えられながら同一箇所構築されている。地形的にも微高地の最も安定した高所にあたり、集落の中心域であったと想定される。この住居群東側から河道にかけては方形の土坑が7基まとまって検出された。木棺墓は2区南端の河道肩口近くで検出されている。墓壙内から石鏃17点が出土しており、特筆される。なお出土遺物から弥生時代と特定できた柱穴は少なく、土色から弥生時代に比定した柱穴も多い。2区西端には縄文時代晩期の土器を含む柱穴も散見される。

一方、住居群より西は次第に希薄となり、1区では土坑が4基検出されたにすぎず、3区は柱穴が散在するのみであった。出土遺物も僅少であることから集落の縁辺にあたと想定される。（渡邊）



第28図 1・3区弥生時代以前の遺構配置図 (1/500)



写真4 2区空撮 (南東から)

第29図 2区弥生時代以前の遺構配置図 (1/300)

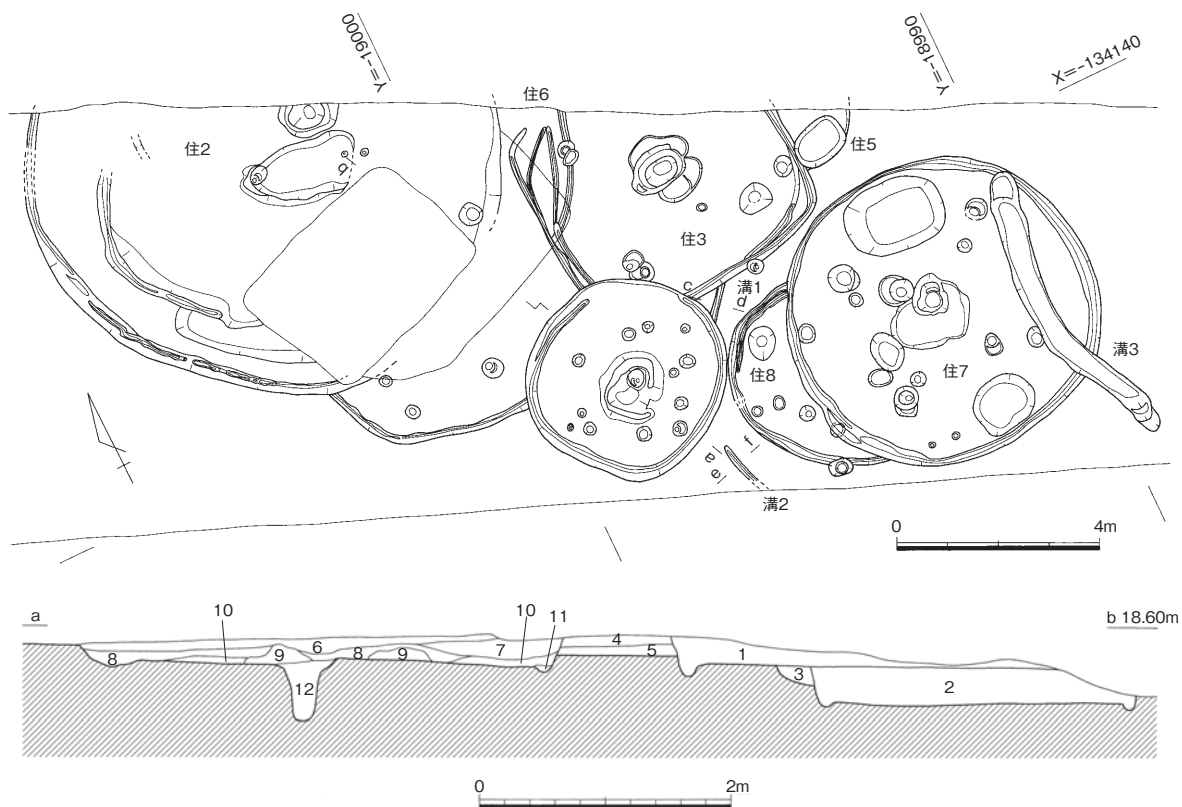
## 1 竪穴住居

### 竪穴住居 1 (第29~32図、図版6~8・15・19)

2区中央部住居群の中央に位置する。炭化した垂木の一部や焼土が遺存していたことから焼失住居と考えられる。平面規模は直径約4mの円形で、検出面からの深さは15~30cm、床面の標高は18.3m前後である。支柱穴は6本で、いずれも径30cm未満と小さく、深さも10cm未満の浅い皿状を呈する。住居中央には柱穴状の土坑(中央穴)と浅い楕円形の土坑(中央土坑)からなる、いわゆる1〇土坑が設けられていた。中央土坑は不整形の浅いくぼみ状で、くぼみ内には薄く炭が広がっていた。またこの1〇土坑を取り巻くように幅10~15cm、高さ3cmの土堤が築かれていた。土堤は基盤と同じ黄色土で構築されており、床面との境は視認できなかった。火処らしき焼土面は土堤の外縁に2面みられる。壁体溝は一巡すると思われるが、竪穴住居3と重複する部分は不明瞭で、検出できなかった。貼り床や整地層もなく、建て替えは認め難い。

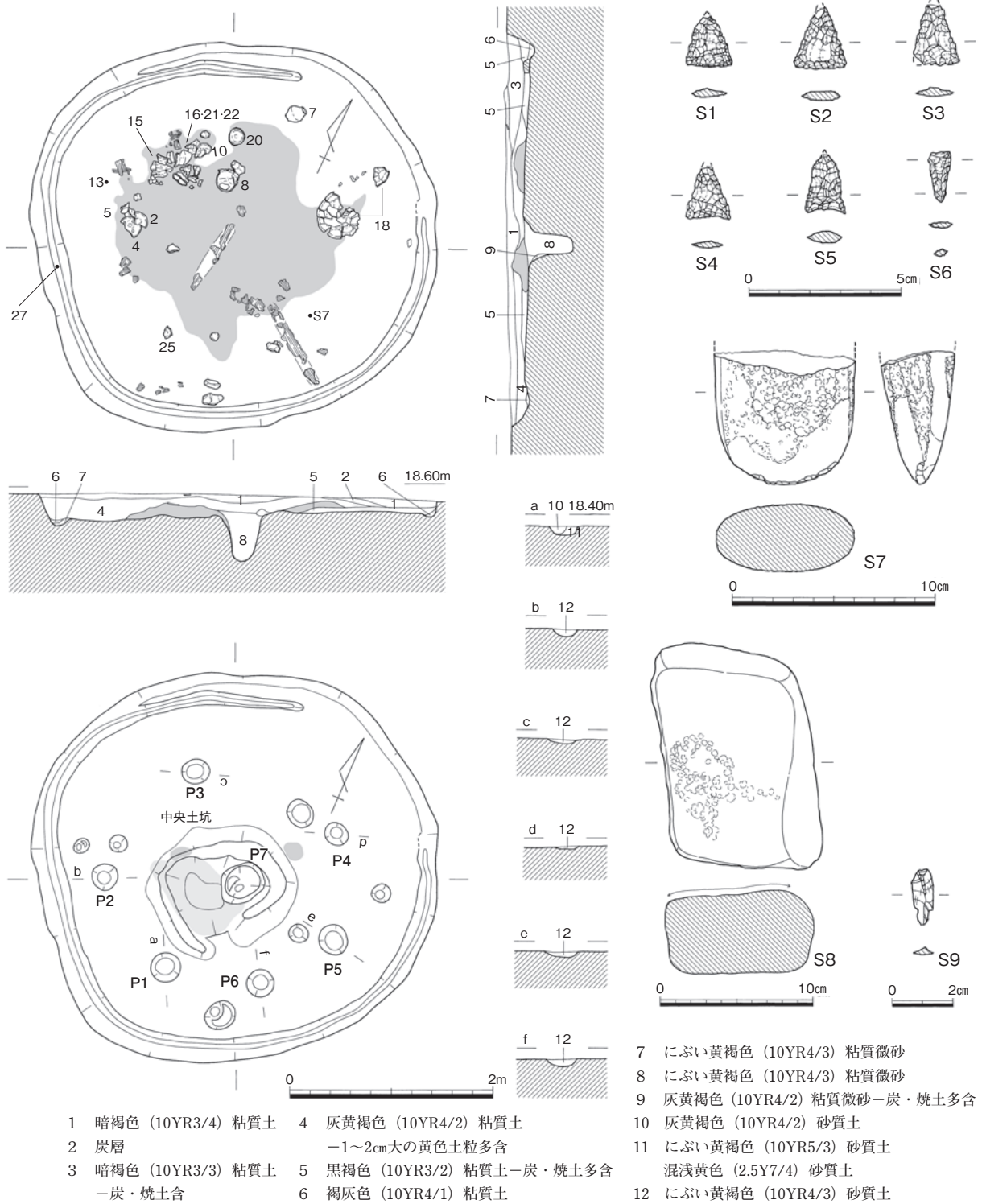
出土遺物は比較的多く、2・4・7・16~18など完形に近い土器が焼土上部で出土した状況から、焼失後、意図的に土器の投棄が行われたと考えられる。石斧S7も焼土上面で出土した。黒曜石の破片S9は、住居北東部掘り下げ中に出土した。姫島産との教示を得ている。

他時期の遺物の混在も認められるが、弥生時代後期中葉には廃絶したと考えられる。(渡邊)



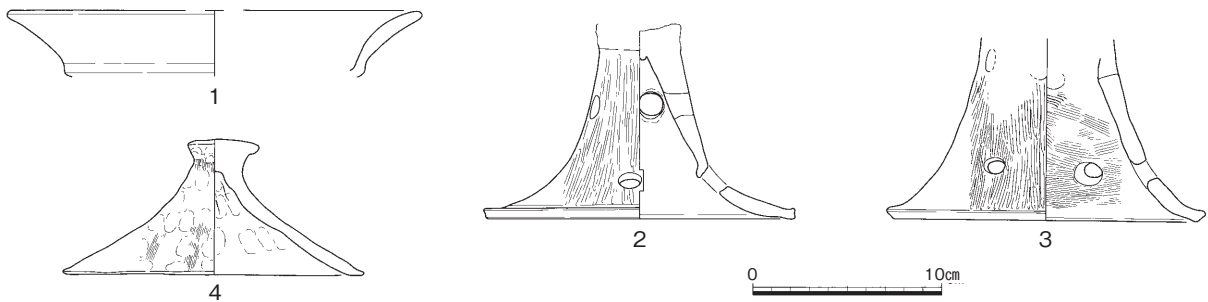
- |  |                              |                               |
|--|------------------------------|-------------------------------|
| 1 黒褐色 (10YR2/2) 粘質土 (住13)                    | 4 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質微砂 (住4) | 9 赤褐色 (5YR4/6) 粘質土-焼土 (住1)    |
| 2 黒褐色 (10YR2/3) 粘質土 (住14)<br>-1cm未満の黄色土粒やや多混 | 5 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土 (住4)    | 10 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土 (住1)     |
| 3 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土<br>-黄色土粒少混            | 6 暗褐色 (10YR3/4) 粘質土 (住1)     | 11 褐灰色 (10YR4/1) 粘質土 (住1)     |
|  | 7 暗褐色 (10YR3/3) 粘質土 (住1)     | 12 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質微砂 (住1) |
|  | 8 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土 (住1)    |                               |

第30図 竪穴住居 1~8 (1/150・1/60)

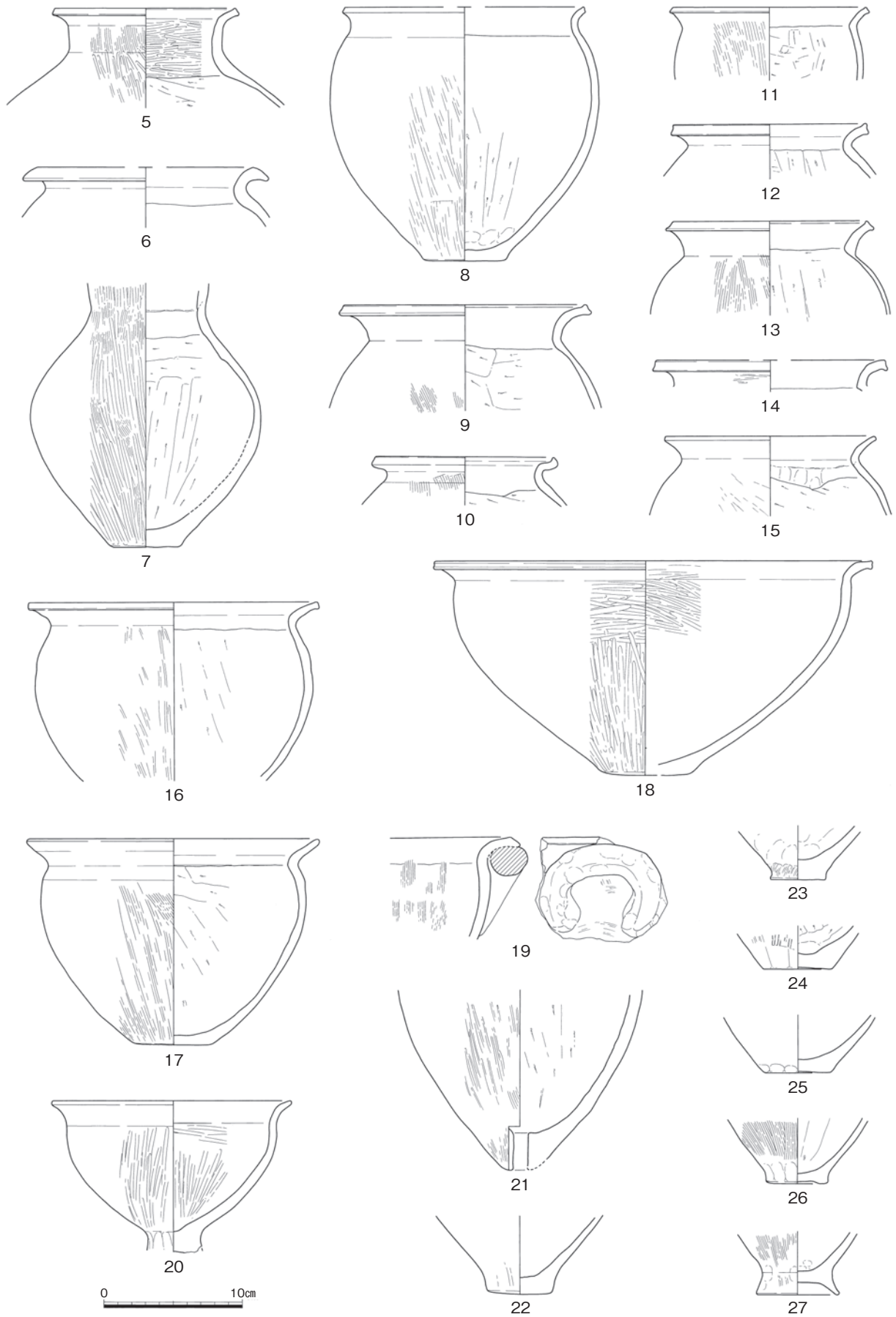


- 1 暗褐色 (10YR3/4) 粘質土
- 2 炭層
- 3 暗褐色 (10YR3/3) 粘質土  
-炭・焼土含
- 4 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土  
-1~2cm大の黄色土粒多含
- 5 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土-炭・焼土多含
- 6 褐灰色 (10YR4/1) 粘質土

- 7 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質微砂
- 8 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質微砂
- 9 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質微砂-炭・焼土多含
- 10 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土
- 11 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 砂質土  
混浅黄色 (2.5Y7/4) 砂質土
- 12 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土



第31図 竪穴住居1 (1/60)・出土遺物① (1/2・1/3・1/4)

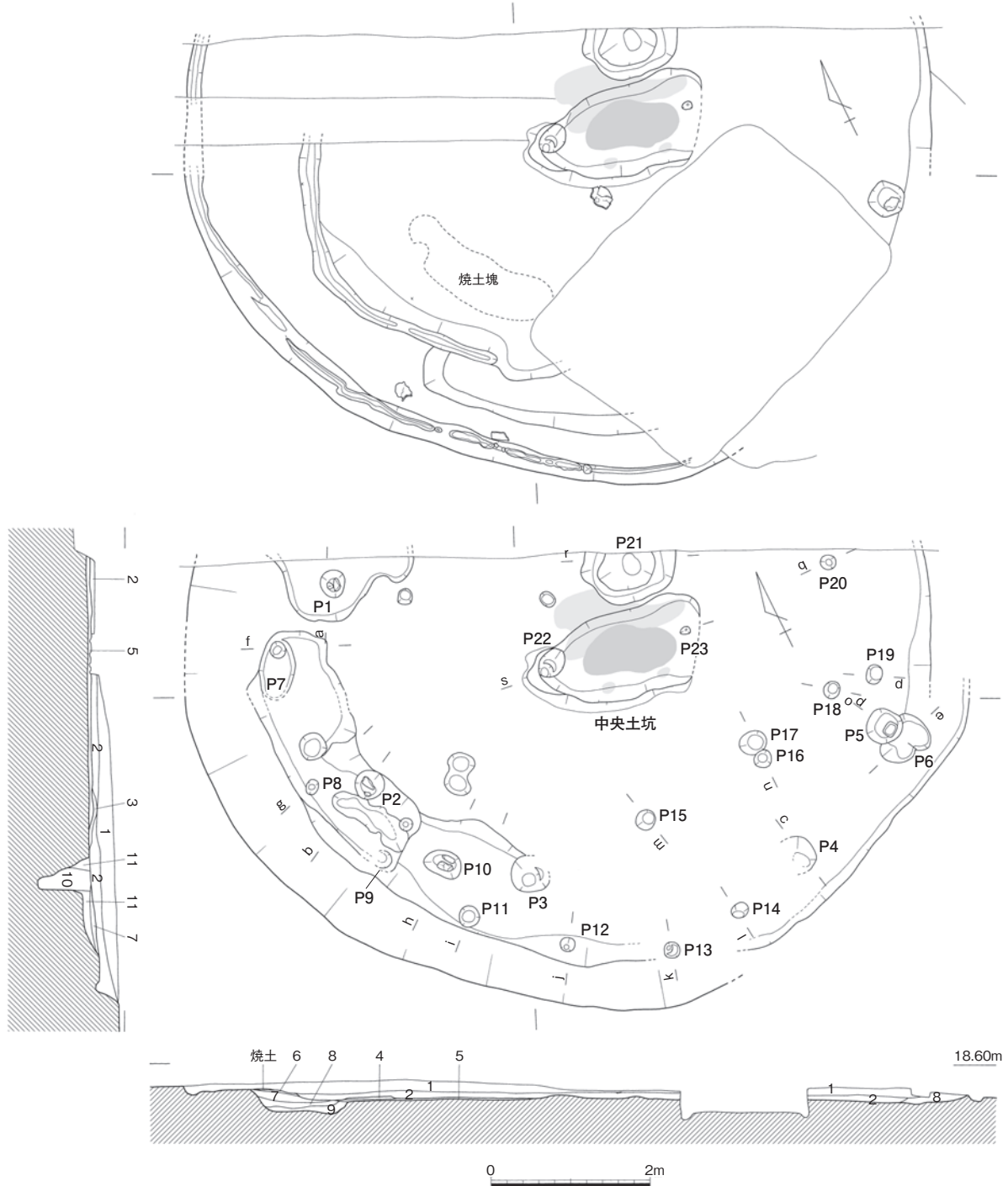


第32図 豎穴住居1 出土遺物② (1/4)



竪穴住居2（第29・30・33～35図、図版6～8・15・18）

竪穴住居1の北西に位置する。北1/3は調査区外で削平も著しく、床面が遺存していたのは南西部約1/4程度であった。残存部から径9.3mをこえる円形と想定される。柱穴との位置関係から、当住居はさらに東に延びる可能性もある。第33図第2層下面が床面で、上段に床面の状況を示す。壁沿いに

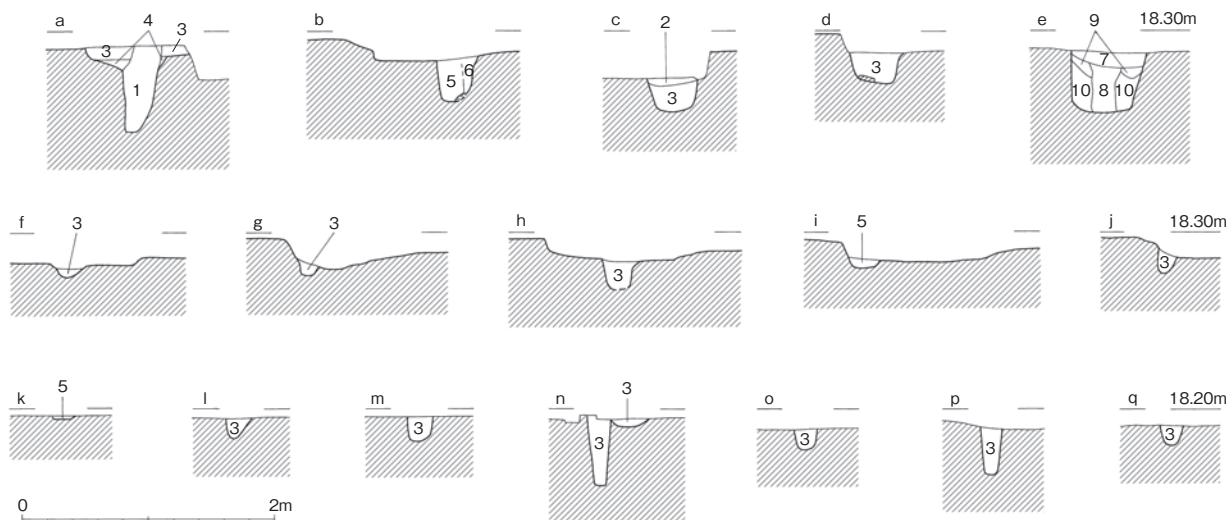


- |                                  |                        |                         |
|----------------------------------|------------------------|-------------------------|
| 1 暗褐色 (10YR3/4) 粘質微砂—炭・焼土・黄色土粒少含 | 5 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 粘質土 | 9 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土と |
| 2 暗褐色 (10YR3/3) 粘質微砂—1cm大の黄色土粒多含 | —黄色土粒と灰色土粒の混在土 (貼床)    | 黄褐色 (10YR5/6) 砂質土の混在土   |
| 3 にぶい赤褐色 (10YR4/3) 粘質微砂          | 6 明黄褐色 (10YR6/6) 粘質土   | 10 褐灰色 (10YR4/1) 粘質土    |
| —焼土堆積、下部被熱                       | 7 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土   | —炭・焼土やや多含               |
| 4 暗灰黄色 (10YR4/2) 粘質土             | 8 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土 | 11 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 粘質土 |

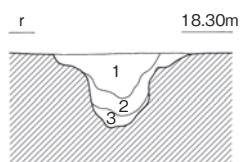
第33図 竪穴住居2 (1/80)

第4章 辺谷中田遺跡

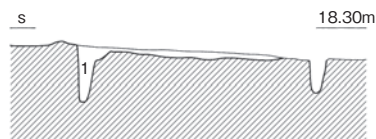
最大幅1.2mの高床部が巡る。高床部は標高18.3m、中央低床部の標高は18.18mを測る。第6層が高床部、第5層が中央低床部の貼り床にあたる。高床部と低床部の境には幅20cmの溝が掘削されているが、



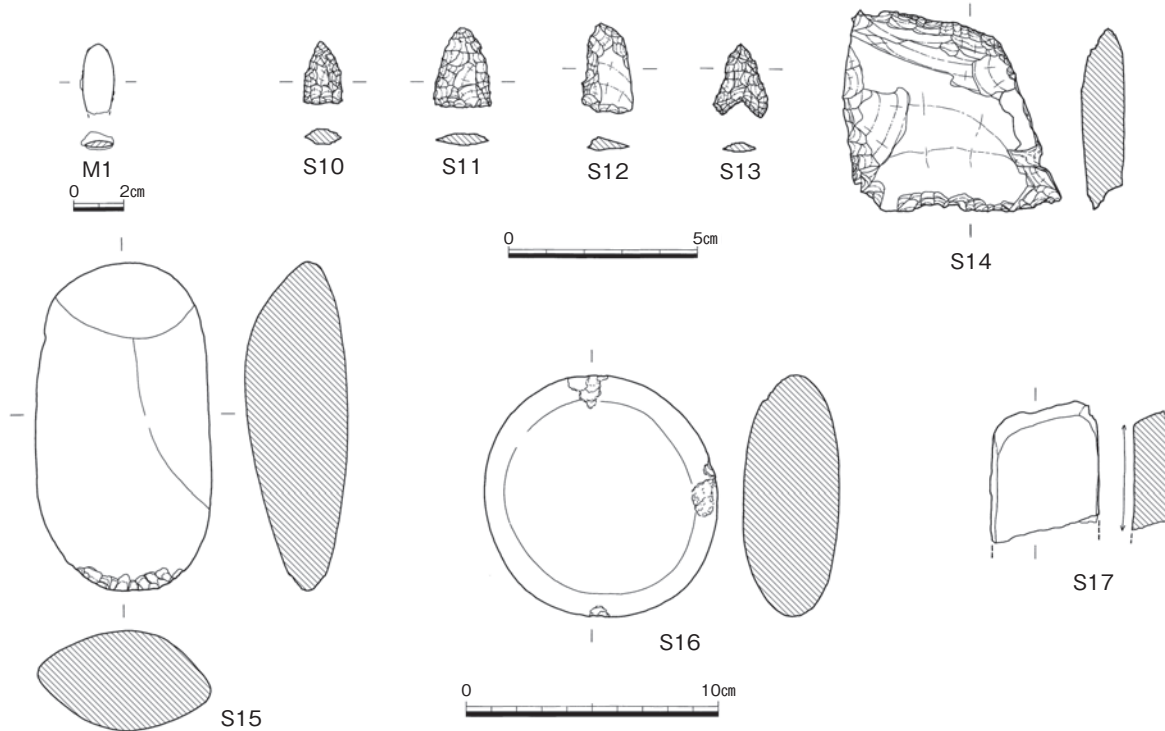
- |   |  |
|---|--|
| 1 黒褐色 (10YR3/2) 粘性砂質土                     | 6 灰褐色 (7.5YR4/2) 粘質土                         |
| 2 暗褐色 (7.5YR3/4) 粘質土-炭多含                  | 7 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘性砂質土-炭少含                 |
| 3 にぶい黄橙色 (10YR6/4) 砂質土混褐灰色 (7.5YR4/1) 粘質土 | 8 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性砂質土-明黄褐色 (10YR7/6) 土塊多含   |
| 4 褐灰色 (7.5YR4/1) 粘質土混にぶい黄橙色 (10YR6/4) 砂質土 | 9 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘性砂質土-明黄褐色 (10YR7/6) 土塊多含 |
| 5 褐灰色 (7.5YR4/1) 粘質土                      | 10 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘性砂質土                    |



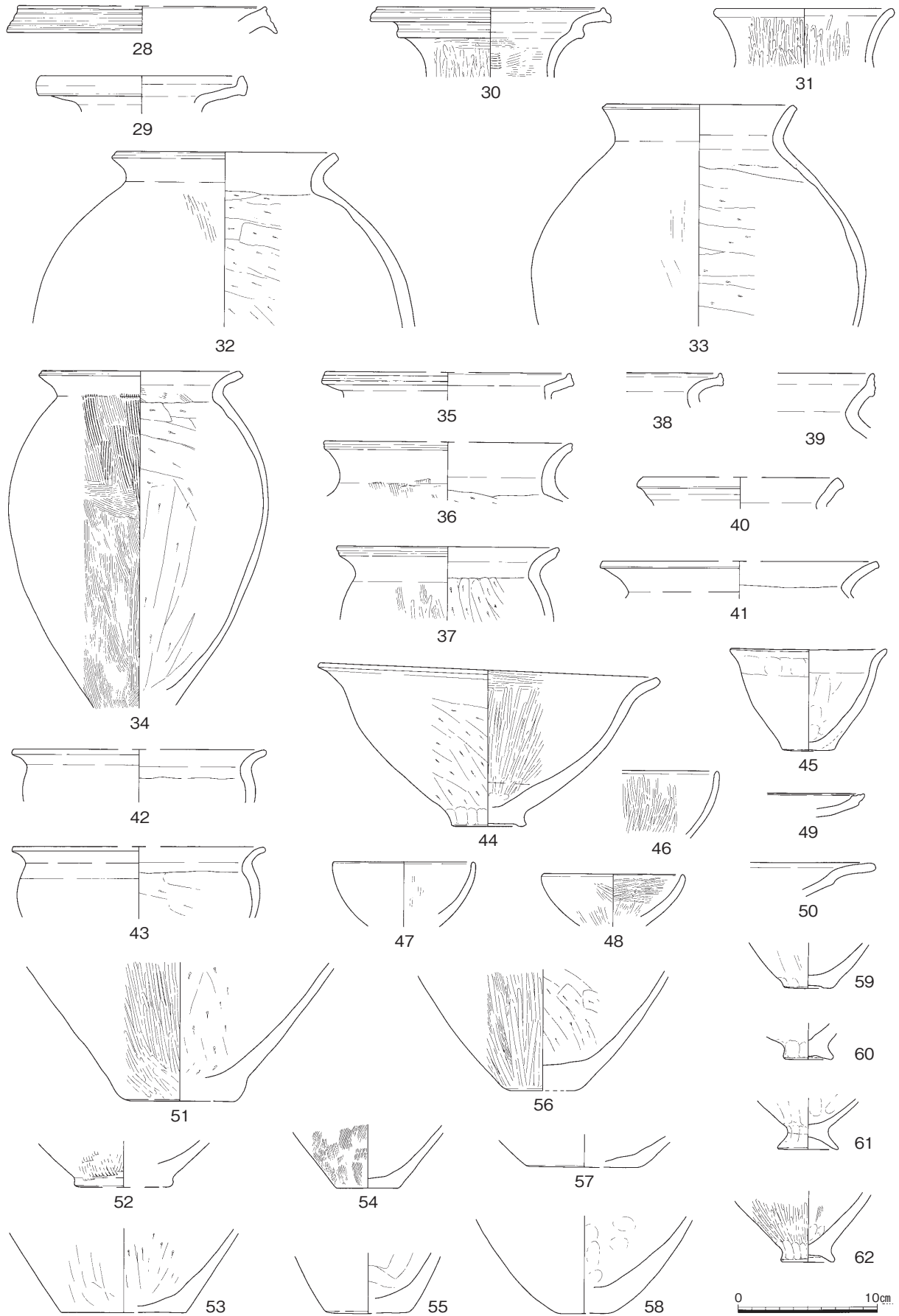
- |   |
|---|
| 1 黒褐色 (10YR3/2) 粘性砂質土-焼土僅含                    |
| 2 黒褐色 (10YR3/2) 粘性砂質土-炭・焼土多含                  |
| 3 淡黄色 (2.5Y8/4) 粘性砂質土混<br>黒褐色 (10YR2/2) 粘性砂質土 |



- |                              |
|------------------------------|
| 1 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 粘性砂質土-炭僅含 |
|------------------------------|



第34図 竪穴住居2内柱穴・中央土坑断面 (1/60)・出土遺物① (1/2・1/3)



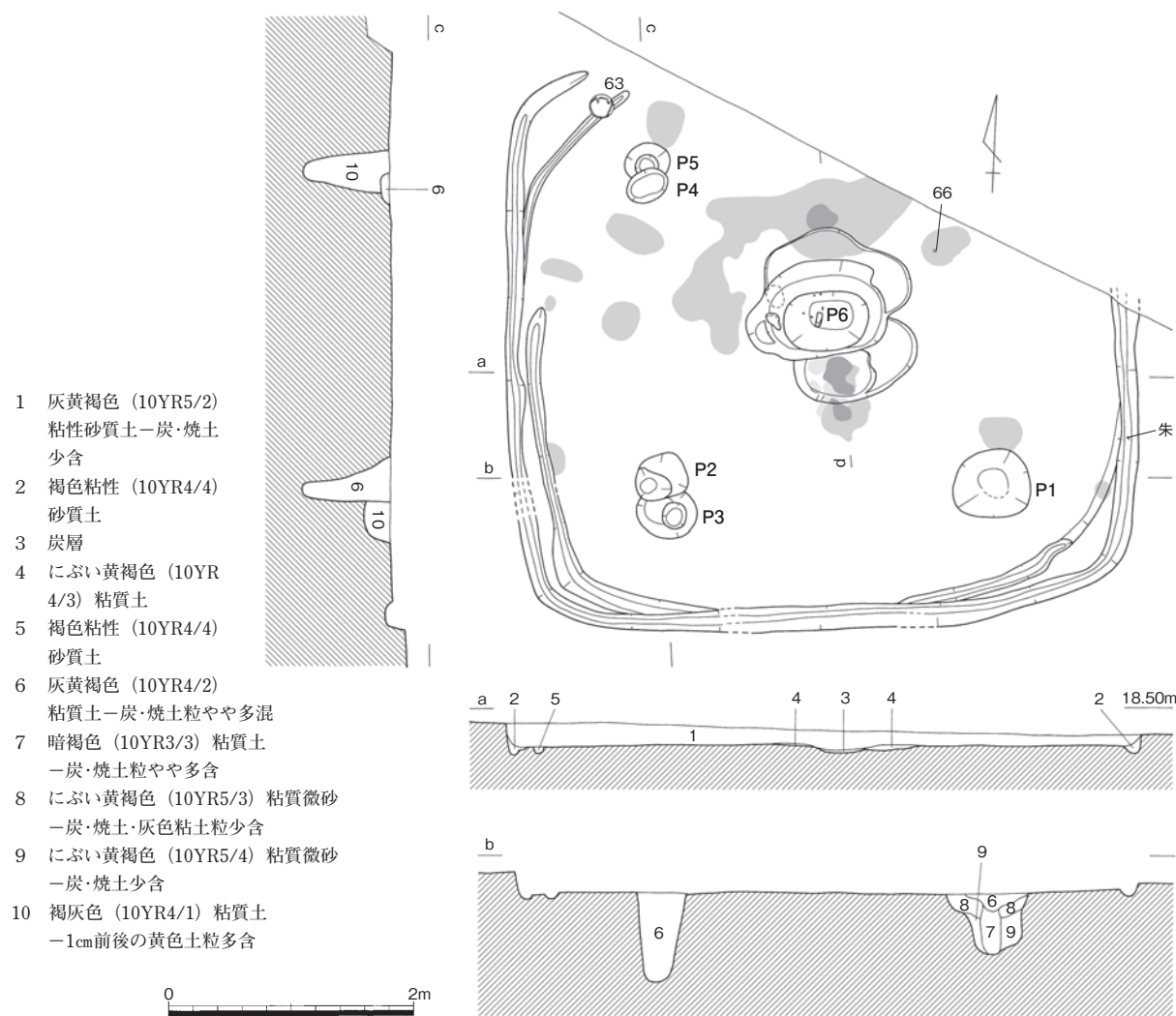
第35図 豎穴住居2出土遺物② (1/4)

南側中央部で途切れ、中央低床部もここで張り出して階段状に高床部に至る。また、壁体溝内にもこの範囲だけ杭状の小穴が複数あることから、ここに入出口を想定している。住居中央には1〇土坑を有し、中央穴P21は内部に炭・焼土を多く含む。中央土坑は楕円形の浅いくぼみ状を呈し、周囲に低い土堤を有す。底面は被熱し、地床炉とみられる。周辺に炭も散布していた。土坑内東西両側では小柱穴P22・23を検出した。伴うかどうか確証はないが、松菊里型となる可能性がある。貼り床除去後の状況を第33図下段に示す。高床部の真下に幅約1m、深さ15cmの溝状の掘り込みを検出した。土層断面から、柱を据えながらこれを埋め、その後に高床部を構築した状況が看取される。柱穴のうち、径25~45cmの比較的大きなP1~6を主柱穴とした。また、壁体沿い及び主柱穴内側に径15~25cmの小柱穴が環状に配置されており、主柱穴と共に上屋を支える構造であったと想定される。

出土遺物には土器・石器のほか鉄鏝M1がある。33・34・44・S16は貼り床上、32・56・57は中央穴から、30・45・59は竪穴住居13に混入していた。竪穴住居3と接合した資料もある。土器には時期幅があり、他遺構からの混入もあるが、弥生時代後期後葉~末葉に埋没したと考えられる。

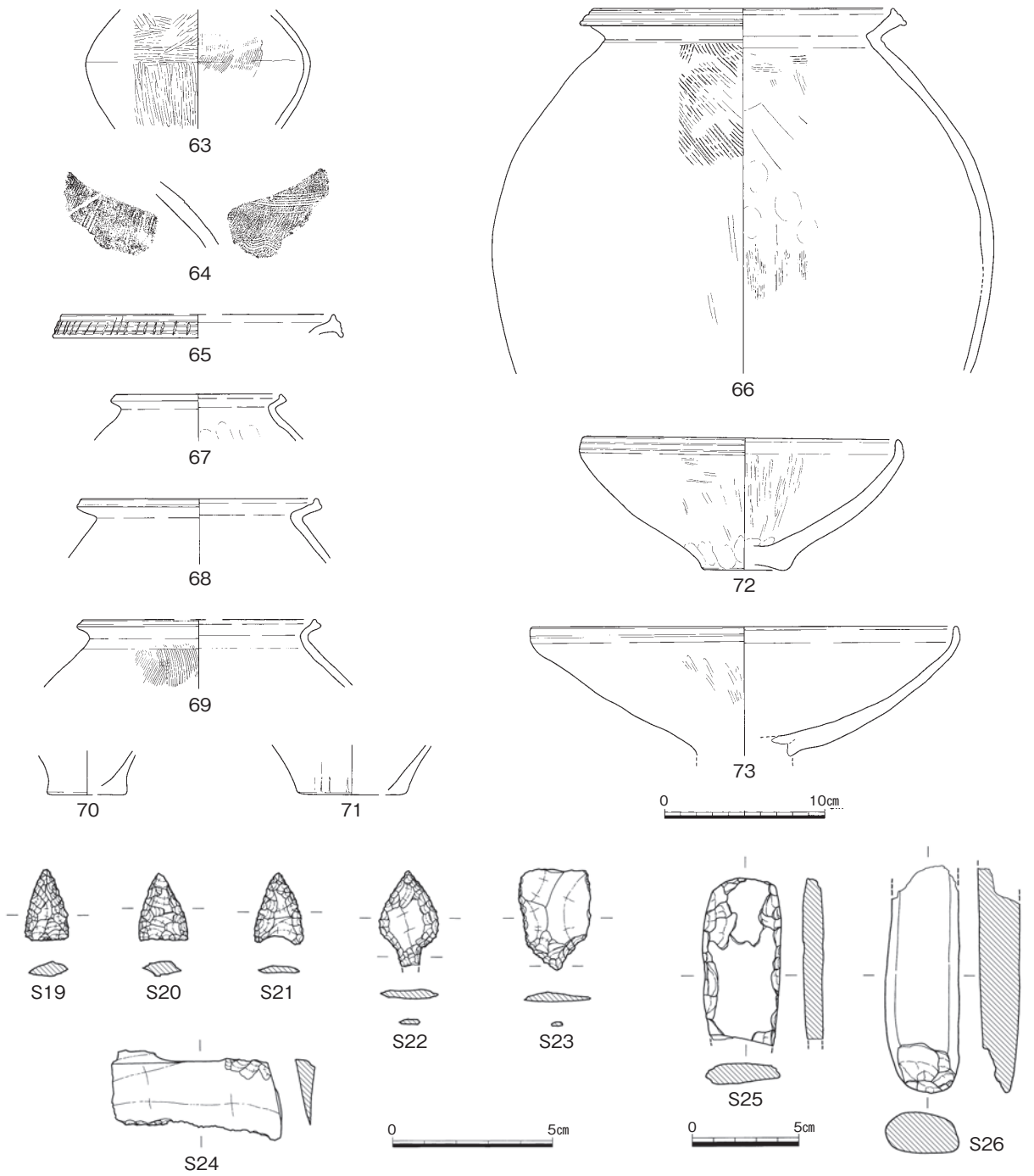
竪穴住居3 (第29・30・36・37図、図版6・7・9・16・19)

竪穴住居2の東に位置する。南西角は竪穴住居1と重複し、北東角は調査区外となる。東西約5.2



第36図 竪穴住居3 (1/60)

m、南北約4.6mの隅丸方形を呈し、床面の標高は18.2mである。主柱穴は4本で、西側が2本ずつ重複していること、壁体溝が2重であることから建て替えを想定できるが、床面は1面しか確認できなかった。中央穴P6は楕円形で、炭・焼土が多く混入していた。上部からはS24・25ほかサヌカイトの剥片が多量に出土した。P6南側は浅く皿状にくぼみ、その底面は特に強く被熱し、炭も散布していた。被



第37図 竪穴住居3 P6断面 (1/60)・出土遺物 (1/2・1/3・1/4)

熱面は床面の至る所に多く認められたが、特にP6周辺が強く被熱していた。床面にはサヌカイトの  
 碎片・剥片が多く散っており、P6周辺で石器の製作が行われたとみられる。なお床直上とP6埋土  
 を採取し水洗したところ、床面直上で約230g、P6からは約110gの碎片・剥片が出土した。

出土遺物は図示した土器・石器のほか、東側壁体溝から赤色土の小塊が出土している。分析の結果、  
 ベンガラとの報告を受けている。姫島産の黒曜石片S18も出土するなど希少な遺物もみられ、床面の  
 被熱痕の多さからも単なる居住用ではなく、特殊な性格を有していた可能性がある。出土土器には若  
 干の時期幅が見られるが、弥生時代中期中葉の新しい段階には埋没していたとみられる。

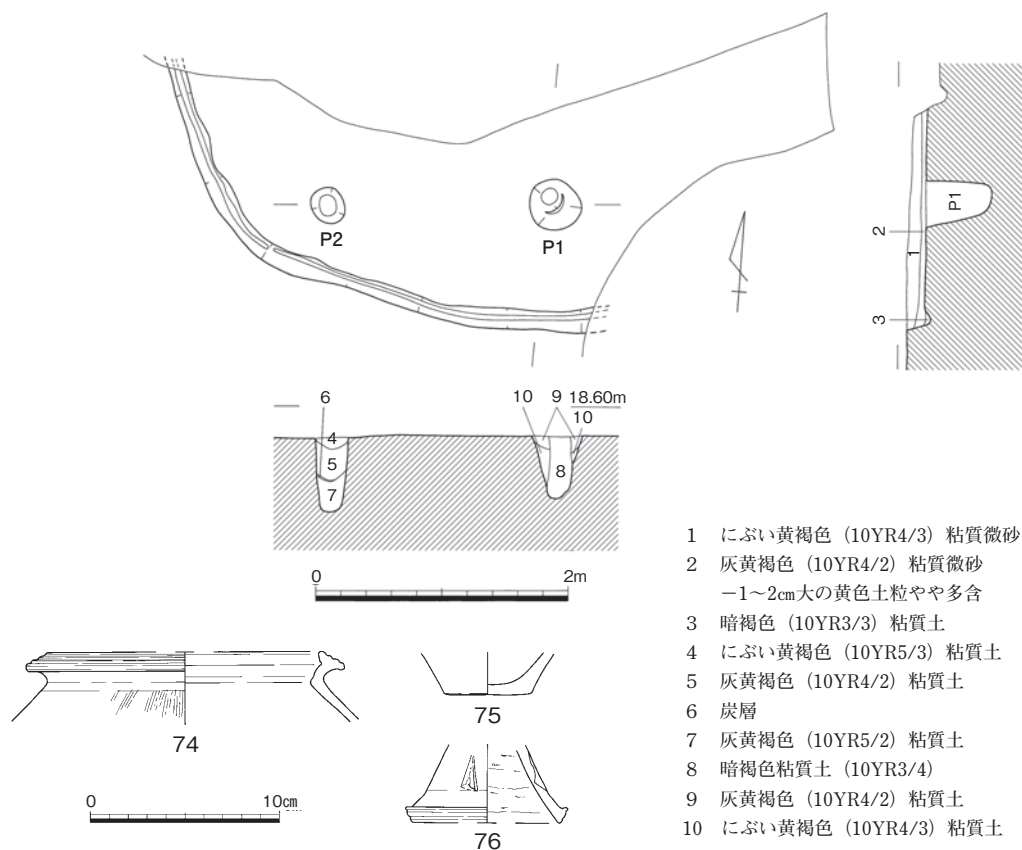
**竪穴住居4**（第29・30・38図、図版6・7）

竪穴住居1・2及び古墳時代の竪穴住居13・14に削平され、南西の一部のみ残存していた。東端は  
 上部が削平され、不明である。床面の標高は18.35mである。床面は1面のみで、貼り床や整地層は認  
 められなかった。支柱穴と思われる柱穴を2本検出している。径30~40cmの円形で、深さ約50~60cm  
 と深い。壁体溝は幅15cm、深さ5cmを測る。被熱面や中央穴は検出できていない。

僅かだが土器が出土し、弥生時代中期後葉に位置付けられる。竪穴住居3より新しい。

**竪穴住居5**（第29・30・39図、図版6・7・20）

竪穴住居3の東に位置する。検出できた範囲は僅かで、土坑8にも切られており、遺存状態は非常  
 に悪い。床面も僅かしか遺存していない。床面の標高は18.19mである。床面で検出したP1を図示し  
 ているが、壁体に近すぎる位置関係から、支柱穴と見なし難い。S27はP1から出土した。調査当初は  
 土坑8を当住居の屋内土坑と考えていたが、出土遺物を比較した結果、竪穴住居3との切り合いに矛盾  
 が生じるため、土坑8を当住居埋没後に掘削された別遺構として考えるに至った。



- 1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質微砂
- 2 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質微砂  
-1~2cm大の黄色土粒やや多含
- 3 暗褐色 (10YR3/3) 粘質土
- 4 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 粘質土
- 5 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土
- 6 炭層
- 7 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質土
- 8 暗褐色粘質土 (10YR3/4)
- 9 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土
- 10 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土

第38図 竪穴住居4 (1/60)・出土遺物 (1/4)

時期を特定できる土器の出土はないが、切り合いから竪穴住居3よりは古く位置付けられる。竪穴住居3には中期中葉の様相を示す土器も含まれており、当竪穴住居が中期中葉以前に遡る可能性も考えられる。

**竪穴住居6** (第29・30・40図、図版6・7)

竪穴住居3北西部に位置する。竪穴住居3床面で検出した。幅10~15cm、深さ5~8cmの細かい溝で、やや西に弧を描くように湾曲する。その形状から竪穴

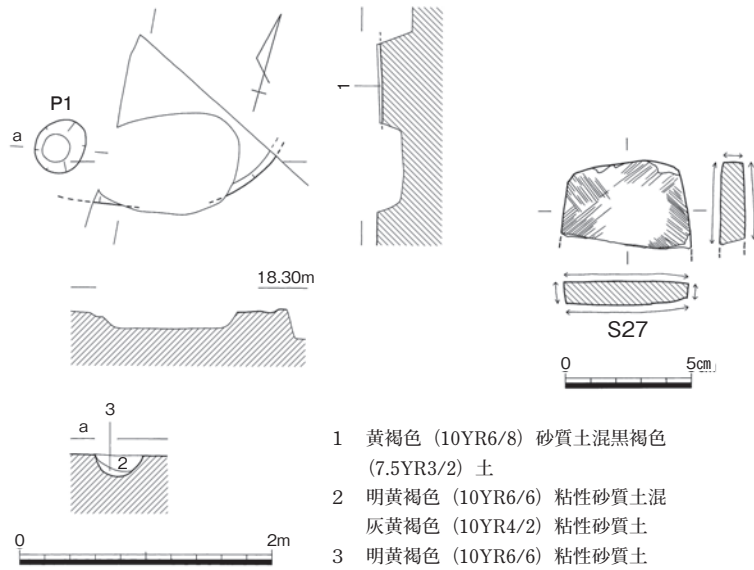
住居の壁体溝の一部と考えた。底面の標高は18.14mを測る。位置的には竪穴住居2の東側壁体溝にも見えるが、切り合いから竪穴住居3より古く位置付けられ、その可能性は低いと考えている。

77が西側の溝内から、78が東側の溝内から出土しているが、先述した切り合いから、弥生時代中期中葉~後葉の範疇で捉えられる。

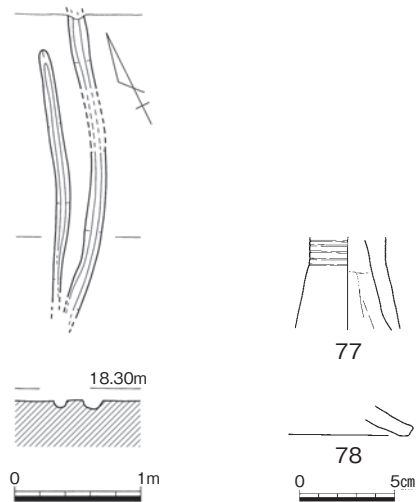
**竪穴住居7** (第29・30・41~44図、図版6・7・9・18・19・20)

竪穴住居1の東で、住居群中最も東に位置する。東側の一部を溝3に切られる。径約6.2mの円形で、床面の標高は約18.35mである。検出面からの深さは5~10cmと遺存状況は良くないが、焼土や炭化材が多く、焼失住居とみられる。炭・焼土は床面直上にのり、一部壁体溝上面も覆っていた。主柱穴はP1~4の4本を想定している。径40~50cmで、深さはP3を除いて60cmをこえる。その内側に径30cm前後と一回り小さい柱穴P6~10を検出した。床面が一面しかなく、壁体溝にも重複がみられないことから、建て替えではなく、主柱穴の補助的な柱と考えておきたい。P11・12は杭状の小柱穴で、出入口に伴う可能性を考えている。中央穴P5南側には浅いくぼみ状の中央土坑があり、1〇土坑に準じるとみなされる。P5は不整形で、深さ37cmを測り、上層に炭・焼土を多く含む。第14・15層は基盤由来の黄色土粒が多く混在し、80・85・86・88など土器が多く出土した。中央土坑は不整形で深さ6cm程度と浅く、壁体の立ち上がりも明瞭ではない。土堤は判然としないが、周縁が僅かに盛り上がっていた。被熱面や炭の堆積は認められなかった。主柱穴と壁体溝の間で、南北に対称的な位置関係で土坑が2基検出された。検出状況から住居に伴う屋内土坑と考えている。北側の屋内土坑1は2×1.38mの隅丸長方形で、深さ45cm、底面の標高17.84mを測る。上部側面に被熱痕があるが、使用時

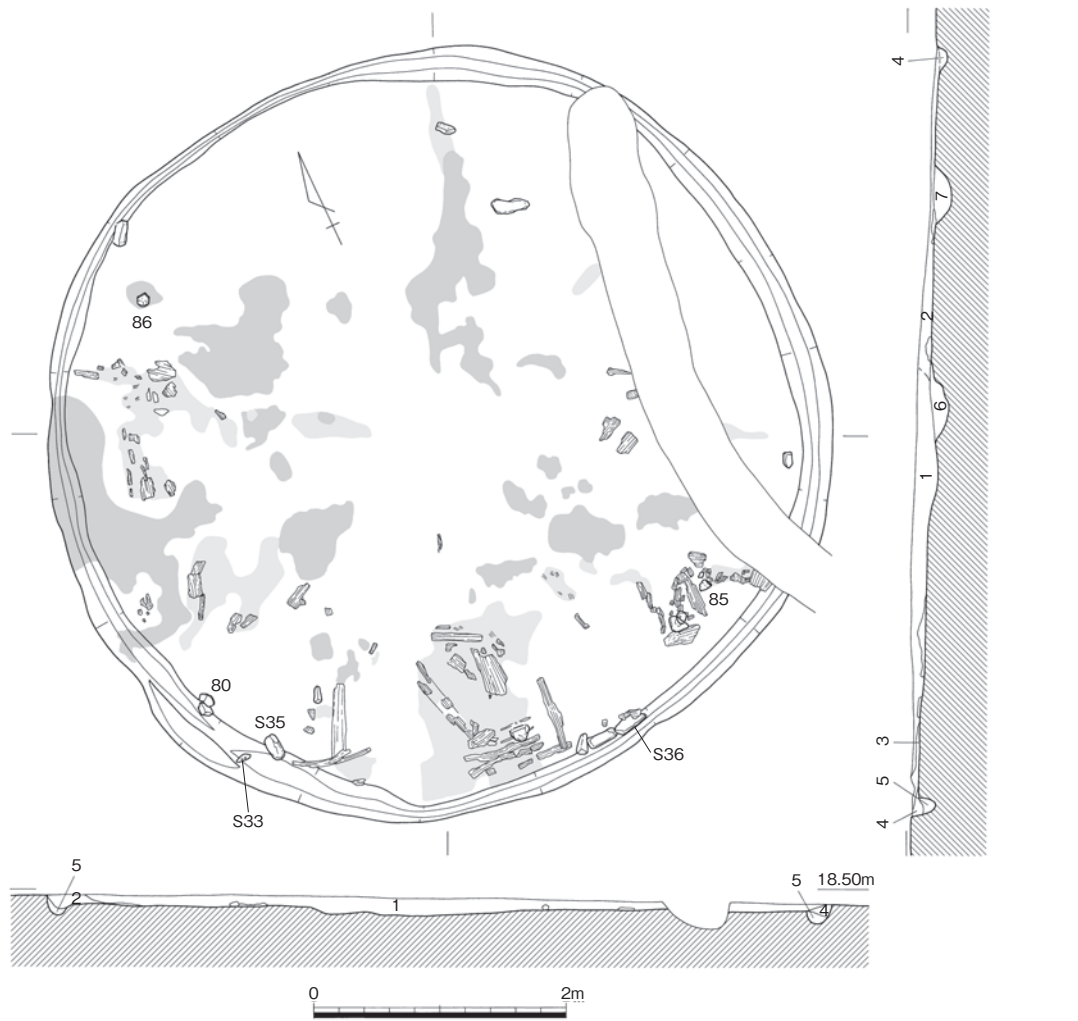
時期を特定できる土器の出土はないが、切り合いから竪穴住居3よりは古く位置付けられる。竪穴住居3には中期中葉の様相を示す土器も含まれており、当竪穴住居が中期中葉以前に遡る可能性も考えられる。



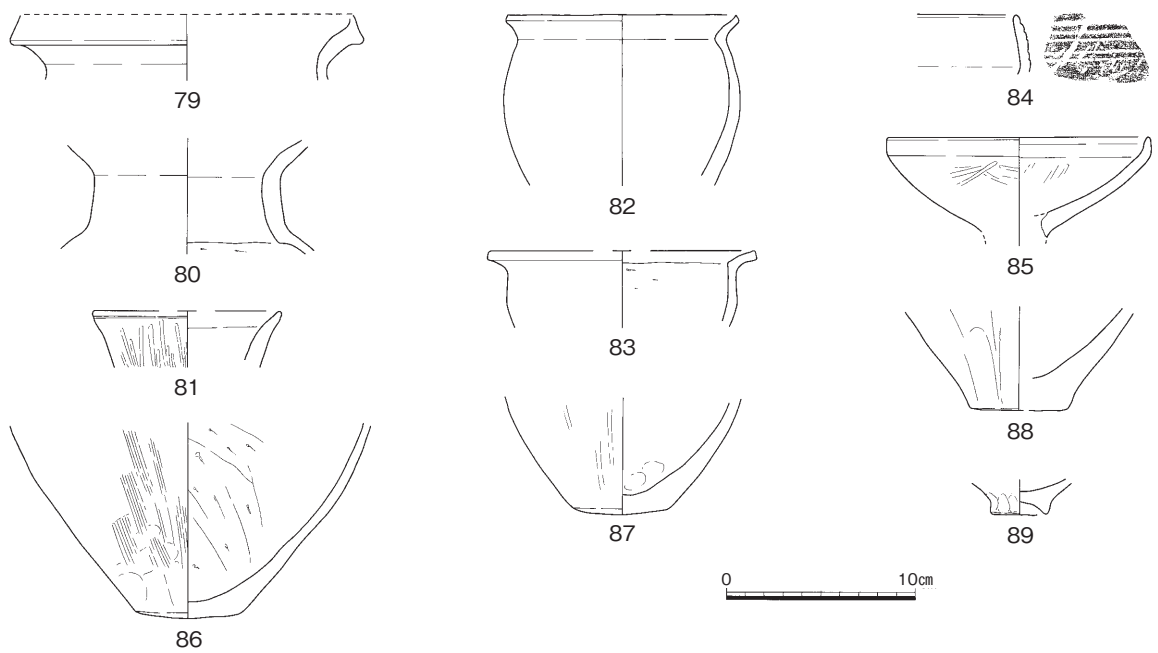
第39図 竪穴住居5 (1/60)・出土遺物 (1/3)



第40図 竪穴住居6 (1/60)・出土遺物 (1/4)

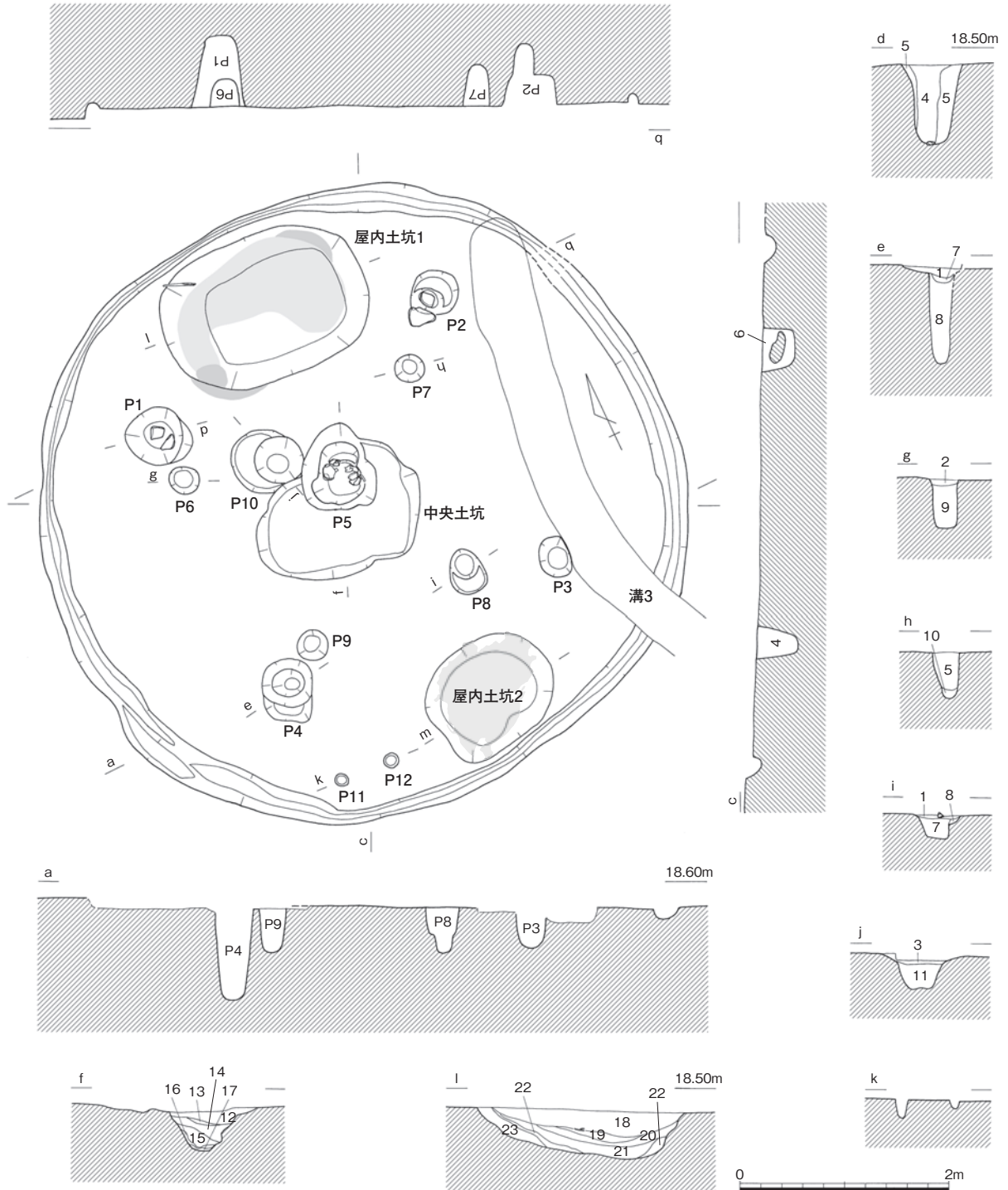


- 1 暗褐色粘質土 (10YR3/3) 2 赤褐色 (5YR4/6) 粘質土 4 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土 6 暗褐色 (7.5YR3/3) 粘質土  
 一炭・焼土多含 3 炭層 5 暗褐色 (10YR3/4) 粘質土 7 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土



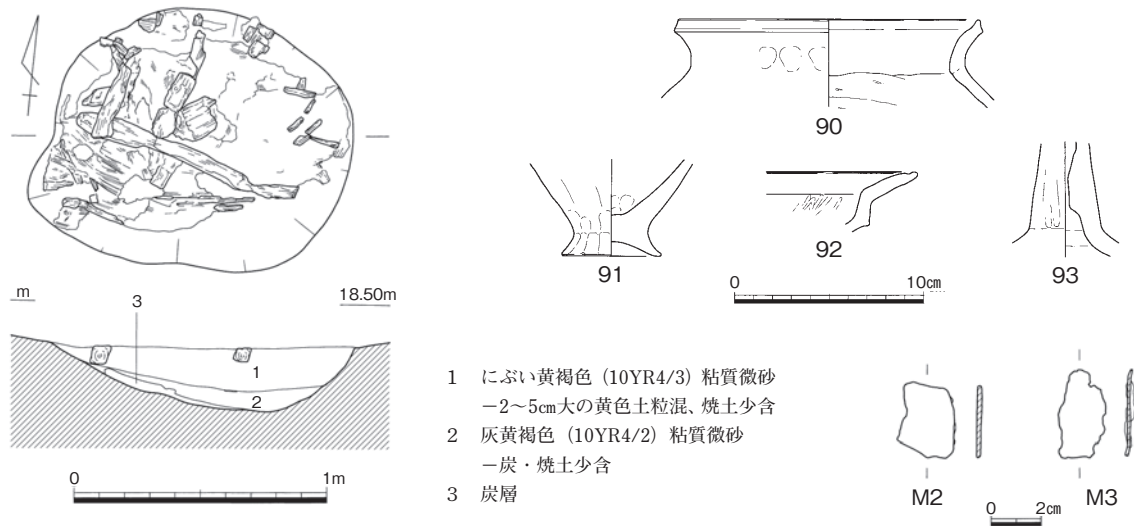
第41図 豎穴住居7① (1/60)・出土遺物① (1/4)



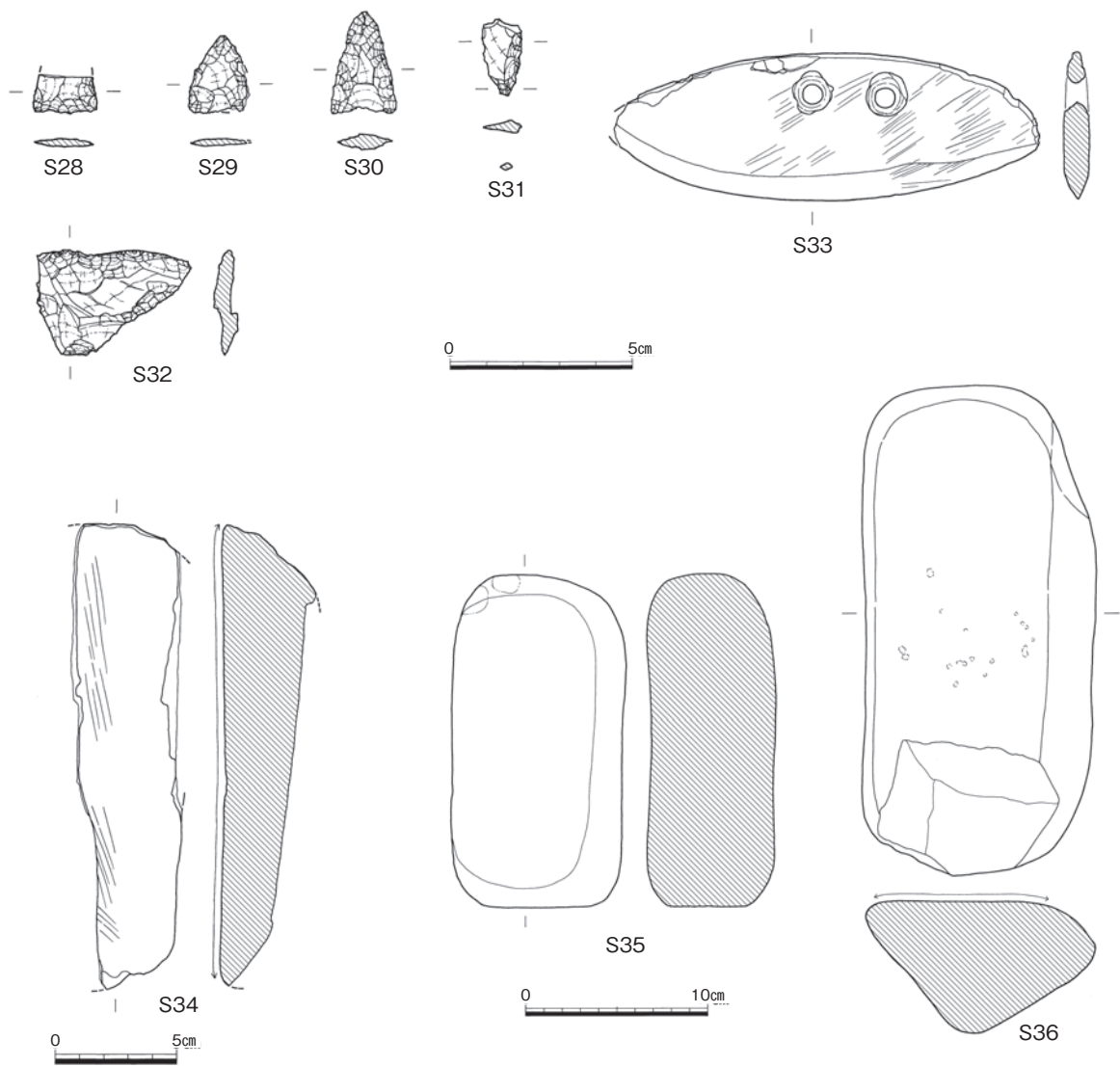


- |  |   |                                   |
|--|---|-----------------------------------|
| 1 暗赤褐色 (5YR3/2) 粘質微砂-炭・焼土多含                      | 9 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 土                      | 18 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土             |
| 2 黒褐色 (10YR3/1) 砂質土-炭多含                          | 10 褐灰色 (10YR4/1) 粘質土                      | 19 黒褐色 (10YR3/2) 粘質微砂<br>- 縞状に炭堆積 |
| 3 灰褐色 (7.5YR4/2) 土<br>混明黄褐色 (2.5Y7/6) 土-炭少含      | 11 暗褐色 (10YR3/3) 土-炭・明黄褐色土粒僅含             | 20 褐灰色 (10YR4/1) 粘質微砂             |
| 4 暗褐色 (7.5YR3/3) 粘質土-炭・焼土多含                      | 12 暗褐色 (7.5YR3/3) 粘質土                     | 21 暗褐色 (10YR3/3) 粘質微砂<br>- 黄色土塊多混 |
| 5 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土と<br>明黄褐色 (10YR6/6) 粘質微砂の混在土 | 13 黒褐色 (7.5YR3/1) 粘質土                     | 22 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質微砂<br>- 焼土多混  |
| 6 暗褐色 (10YR3/3) 粘質土                              | 14 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土<br>- 0.5~1cm大の黄色土粒多混 | 23 黒褐色 (10YR3/2) 粘質微砂             |
| 7 暗褐色 (10YR3/3) 粘質微砂                             | 15 にぶい黄褐色 (10YR6/4) 粘質土                   |                                   |
| 8 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質微砂                          | 16 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土                      |                                   |
|  | 17 褐灰色 (10YR4/1) 粘質土                      |                                   |

第42図 竪穴住居7② (1/60)



第43図 竪穴住居7屋内土坑2 (1/30)・屋内土坑1・2出土遺物 (1/3・1/4)



第44図 竪穴住居7出土遺物② (1/2・1/3・1/4)

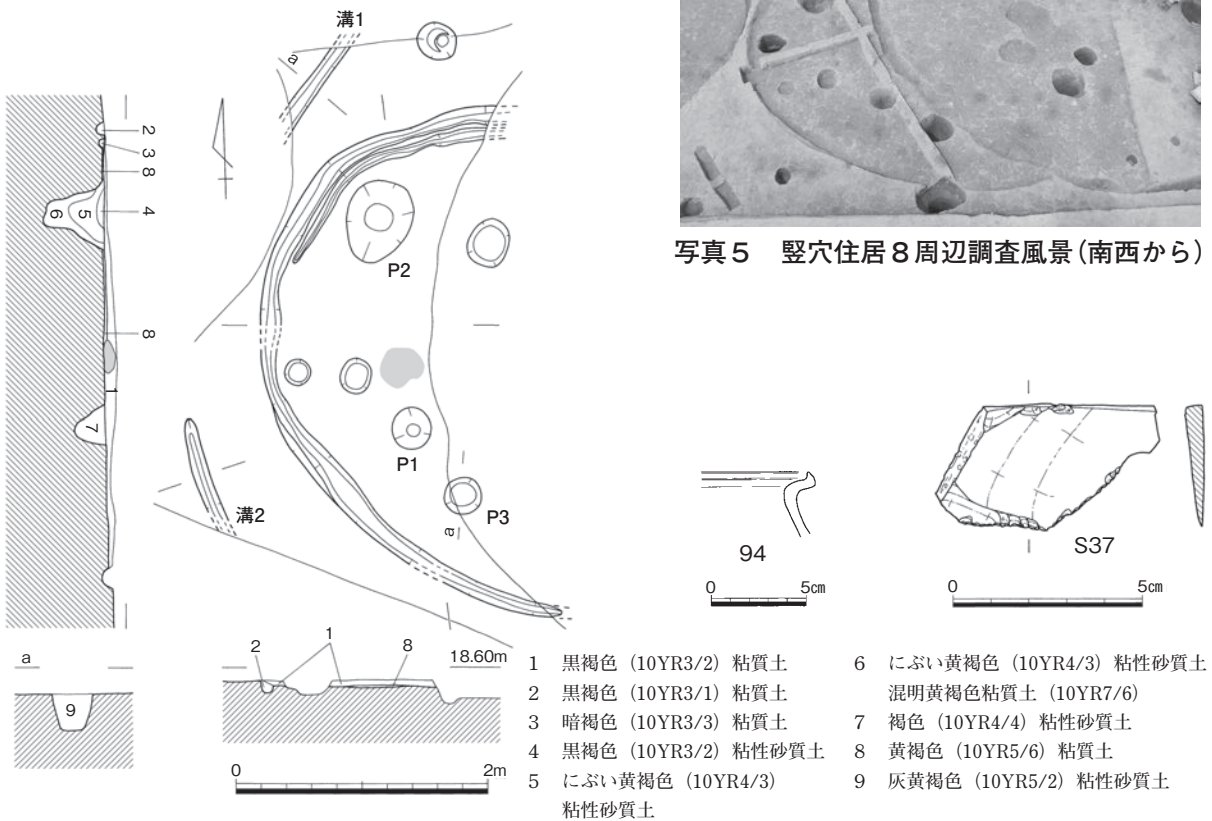
の痕跡か焼失時の影響か特定できなかつた。埋土に炭・焼土が多く、底には炭面が広がっていた。第21層には基盤由来の黄色土粒を多く含む。南側の屋内土坑2は1.2×1 mの不整形で、深さ25cm、底面の標高18.06 mを測る。被熱痕はない。炭・焼土を多く含み、炭化材が多く遺存していた。また、炭化材下部の第3層には繊維状の有機質が遺存していた。編んだ状況は明瞭ではなかつたが、蓆状のものと考えている。炭化材は焼失時に落ち込んだものと見られ、蓆状のものが土坑底に敷かれていた、蓋代わりに被せてあった、壁材が倒れ込んだなどの可能性が考えられる。90・M2～3は屋内土坑2、91～93は屋内土坑1から出土した。屋内土坑1出土土器は後期中葉に比定され、P5より古い様相を示す。2基の屋内土坑が併存していたのではなく、住居廃絶時には屋内土坑2のみ機能していた可能性がある。後期後葉に埋没したと考えられる。

**竪穴住居8** (第29・30・45図、図版6・7・9)

竪穴住居7の西に位置し、東半を竪穴住居7に削平されている。検出面からの深さも6 cm弱と遺存状況は悪い。第45図第8層は整地層で、壁体溝も北側に2重に検出されたことから建て替えが行われたと考えられる。整地層の上下2面が床面に対応する。整地層上面の標高は18.46 m、下面の標高は18.42 mである。新段階の床面に対応する第8層上面で焼土塊を検出したが、被熱痕は無かつた。整地層下面で柱穴を6基検出したが、支柱穴は確定できなかつた。可能性の高いものをP1～3として図示している。土器細片やサヌカイトが僅かに出土し、弥生時代中期後半に比定される。(渡邊)



写真5 竪穴住居8周辺調査風景(南西から)

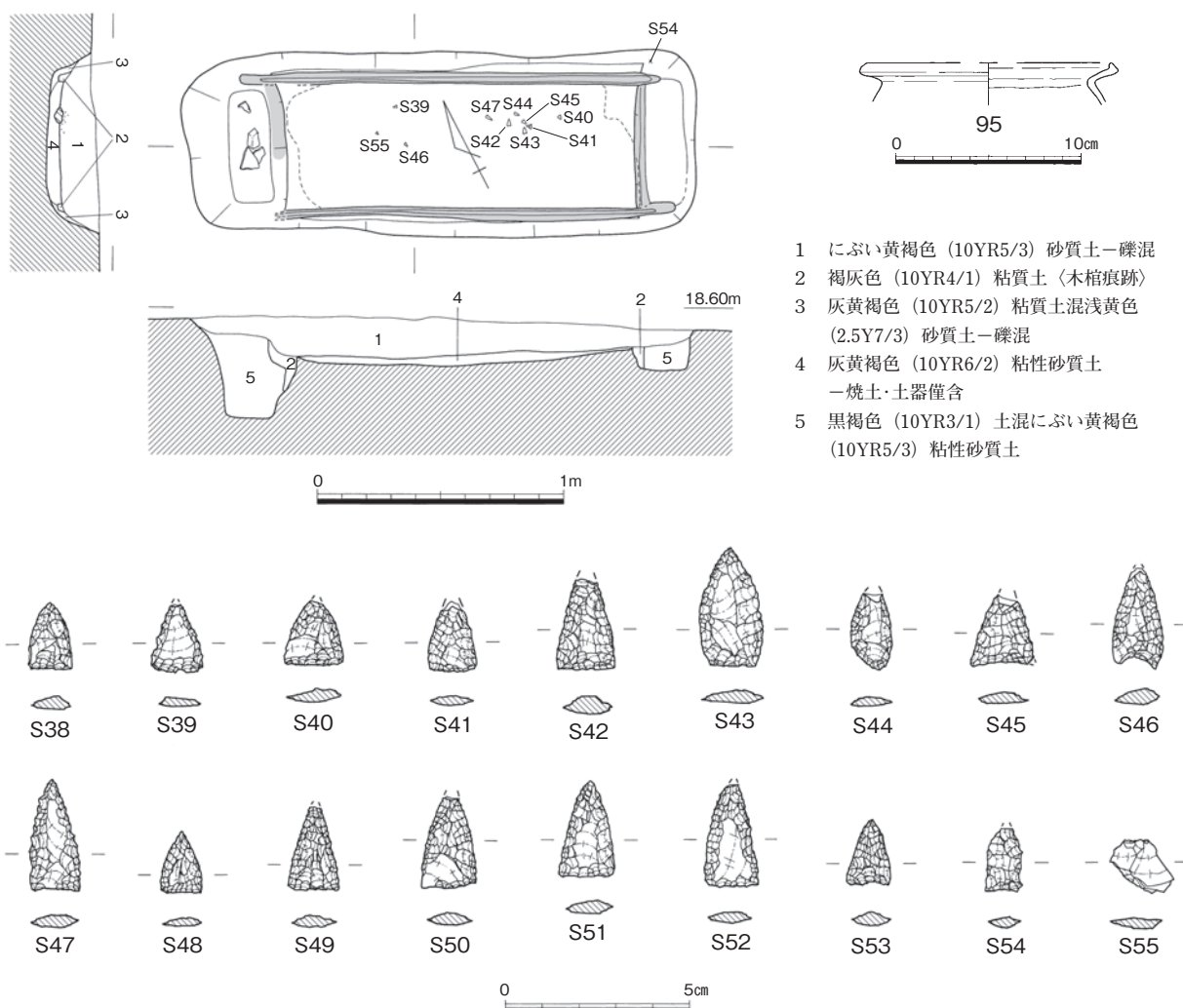


第45図 竪穴住居8 (1/60)・出土遺物 (1/2・1/4)

## 2 墓

### 墓1 (第29・46図、図版11・19・20)

2区南東部に位置する、東西方向を主軸とした長方形の土坑である。西小口部分南半を掘り下げ中に木材痕跡が確認されたことから墓と判断した。208×75cmの掘り方の中に厚さ3cm程の板を組み、内法100×50cmの木棺を造っている。土層観察から第1層は木棺が腐朽したのちの流入土で、木棺痕跡は掘り方底面近くでのみで確認できる。側板を据えた後第3層土で裏込めし、両小口の穴に板を立て、第5層土で埋め戻して板を固定している。その後内側に第4層土を敷いて底を平らにしているが、底板の痕跡は確認できなかった。遺物は、西小口から甕片数点と第1層中から甕95が出土した他は、サヌカイト製石鏃17点、碎片16点が木棺底面を中心に出土した。石鏃はS54が棺外の北東で出土した以外はすべて棺内出土である。石器は棺の北半中央東寄りに集中し、南半西側で3点(S48・49・52)と碎片8点が出土した。元位置を確認した石鏃は第4層直上のものもあるが、3～5mm浮いたもの(S42・44・47)と8～10mm浮いたもの(S39・40)もある。先端部が欠損したものが11点あるが、埋土を水洗していないため、欠損部が棺内にあったかどうか確認できていない。また、南西部から炭化したイチイガシの子葉約10点が出土している。墓の時期は弥生時代中期後葉頃と判断される。(杉山)

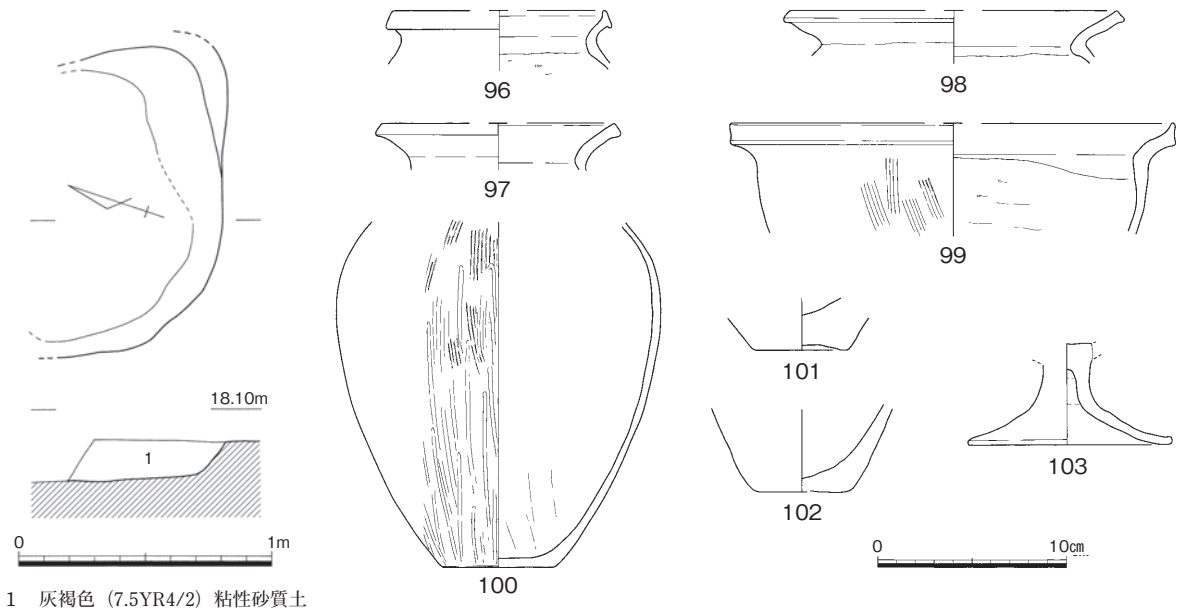


第46図 墓1 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/4)

## 3 土坑

## 土坑1 (第28・47図)

1区中央南部に位置する不整形の土坑である。土坑20によって北側を大きく切られており、土坑2との切り合い関係は不明である。埋土は土器小片を含む単層で、底面は平らである。図示した弥生土器は97以外土坑20の埋土中出土のものもだが、本来この土坑に帰属すると判断した。鉢99、高杯103以外は甕である。時期は、出土土器から弥生時代後期後葉と判断される。



1 灰褐色 (7.5YR4/2) 粘性砂質土

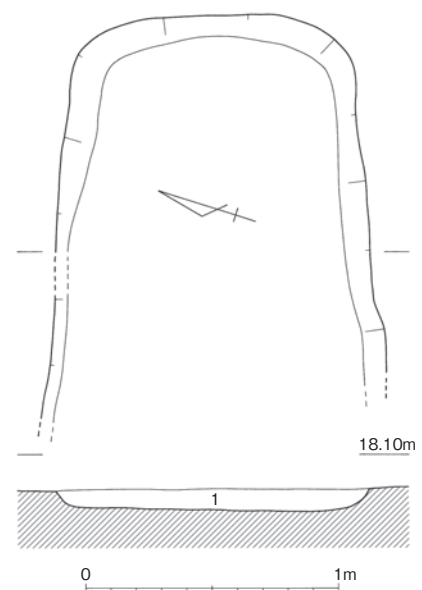
第47図 土坑1 (1/30)・出土遺物 (1/4)

## 土坑2 (第28・48図)

1区中央南部に位置する土坑である。西側部分を土坑20によって削られているため全形は不明である。幅136cm、長さ155cm以上の隅丸長方形を呈し、底面は平らである。埋土は9cmと浅く、遺物をまったく含まないため性格や時期は不明だが、埋土の状況から弥生時代頃と判断される。

## 土坑3 (第28・49図)

1区中央東部で、土坑2の東に位置する。平面形は一辺約1mの不整形で、深さ41cmと周辺にある他の土坑よりも深い。埋土は基盤層土の塊第2層を含む単層で、炭や土器などをまったく含まない。底面は平らで壁も急に立ち上がるが性格は不明である。時期は遺物がないため明確でないが、埋土や周辺の状況から弥生時代後期頃と推察される。ただし、これより西側に古墳時代の土坑があり、平面形や規模が似ており、古墳時代まで下る可能性は否定できない。

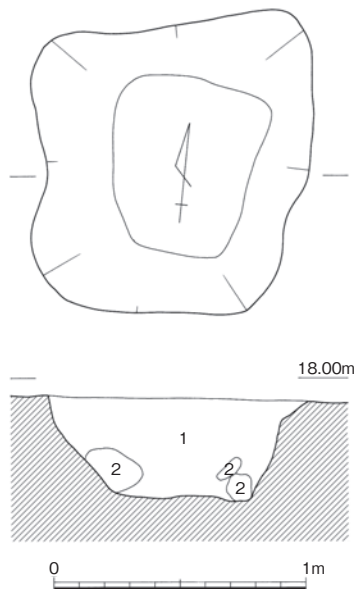


1 灰褐色 (7.5YR4/2) 粘性砂質土-炭僅含

第48図 土坑2 (1/30)

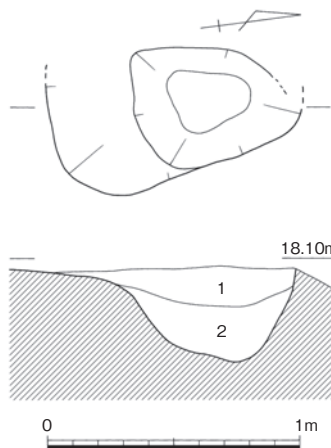
土坑4 (第28・50図)

1区中央で、現代の水田畔部分に残されていた。南北100cm、東西60cm以上の隅丸長方形を呈する土坑である。埋土は2層に分層され、第1層中には数cm大の基盤層土塊が密に含まれているが、第2層中には少量含まれるだけであった。この状況から人為的に埋められたと考えられる。底面は特に北端で若干円形に窪んでおり、柱穴である可能性もあるが、明瞭な柱痕跡は確認できなかった。遺物は、弥生土器の直口壺104の口縁部小片が出土した。外面には縦方向、内面には横方向のミガキがみられる。時期は、弥生時代後期後葉と判断される。



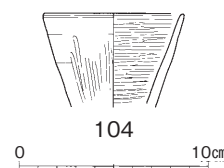
- 1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘性砂質土  
- にぶい黄橙色土塊少含
- 2 にぶい黄褐色 (10YR6/4) 粘性砂質土

第49図 土坑3 (1/30)



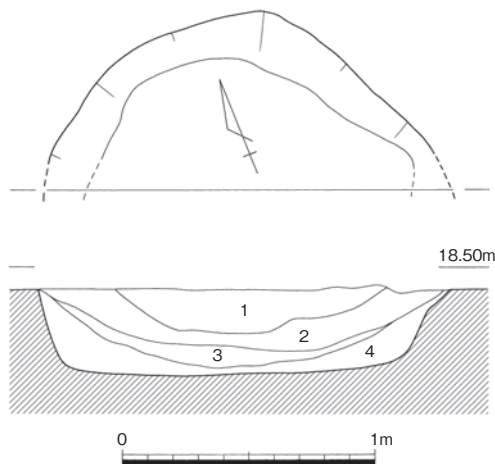
- 1 褐色土 (10YR4/4) 混  
明黄褐色 (10YR6/6) 土  
- 炭・焼土粒多含
- 2 明黄褐色 (10YR6/6) 土混  
灰黄褐色 (10YR4/2) 土

第50図 土坑4 (1/30)・出土遺物 (1/4)



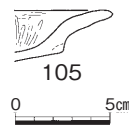
土坑5 (第29・51図)

2区西端で調査区南壁にかかって検出した不整形形の土坑である。底面の状況より北と東の角部分がかろうじて確認できることから、掘り方上面の東辺は約130cmを測ると推察される。平らな底から壁はほぼ垂直に立ち上がる。深さ34cmの埋土は4層に分かれ、堆積状況から自然流入土によって埋没したと判断される。第3層には炭と焼土が多く含まれ、第2層中には基盤層土塊が比較的多く含まれるが人為的な埋め戻しとは断定できない。出土遺物は少なく、弥生土器の高杯口縁部105とサヌカイト製石鏃S56のみが出土した。105は厚手の作りで口縁は大きく外反する。内面には縦方向のミガキが見られる。性格は明らかではないが、時期は、弥生時代後期中葉と判断される。



- 1 黒褐色 (10YR3/2) 粘性砂質土
- 2 灰黄褐色 (10YR4/2) 土混  
黄褐色 (10YR5/6) 粘性砂質土
- 3 黒褐色 (10YR2/2) 粘性砂質土  
- 炭・焼土僅含
- 4 黄褐色 (10YR5/6) 粘性砂質土  
混にぶい黄褐色 (10YR5/4)  
粘性砂質土

第51図 土坑5 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/4)

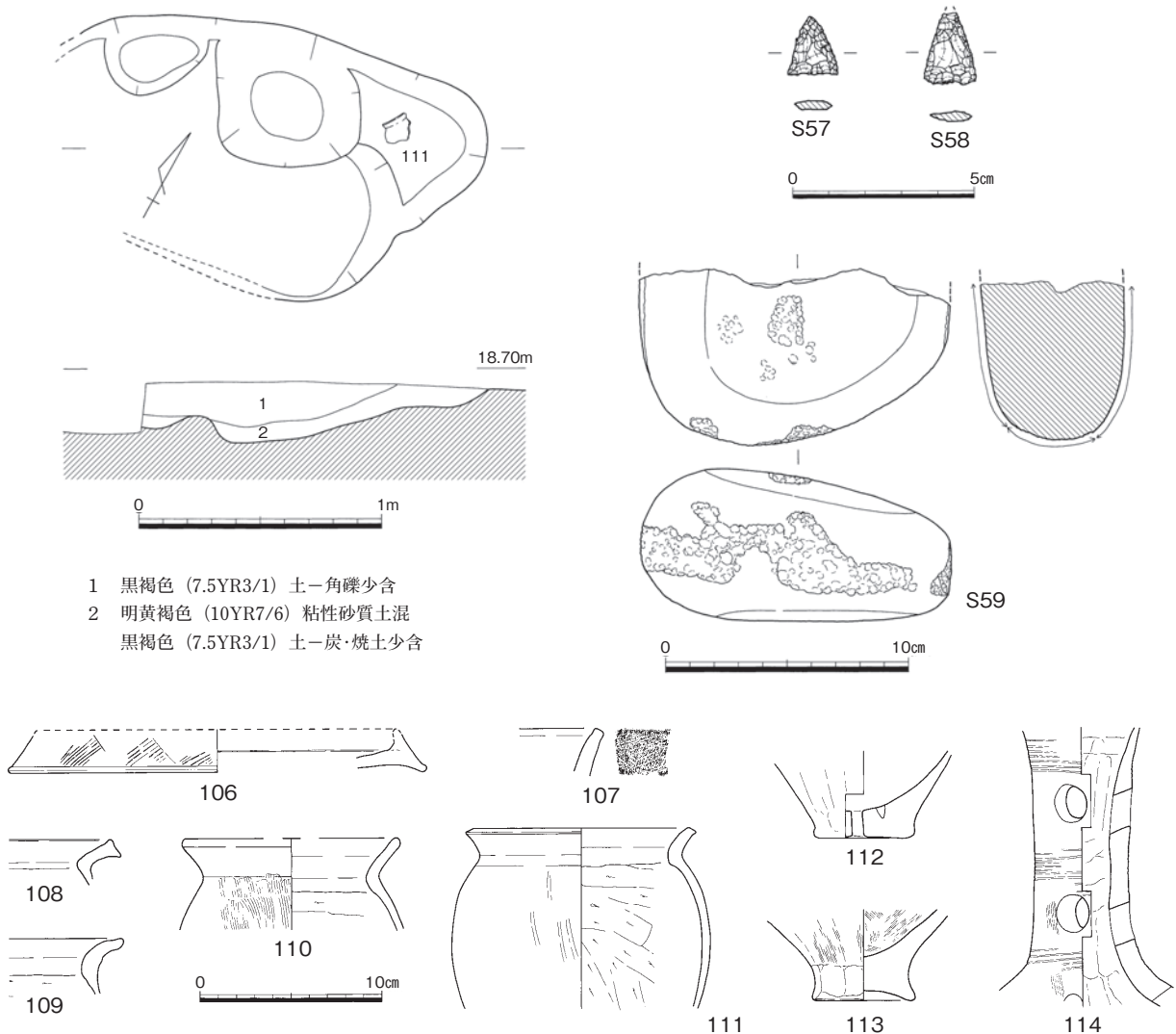


土坑6 (第29・52図、図版16・20)

2区西端で調査区南壁にかかって検出した不整形の土坑である。埋土は2層に分かれ、第2層中には炭・焼土が少量含まれる。底面は凹凸が著しく、北辺には底から10~20cm深い第2層土で埋まった穴がある。北東隅は底面から10cm高くなっており、底に貼り付くように甕111が出土した。遺物は弥生土器片が多く、壺106・107、甕108~111、壺の底を穿孔した112、台付鉢113、器台114がある。106・107の口縁拡張部には線鋸歯文がある。他にはサヌカイト製の石鏃S57・58、側面を中心として全面に鱗状の敲打痕のある敲き石S59がある。性格は不明で、時期は弥生時代後期中葉と判断される。

土坑7 (第29・53図、図版10)

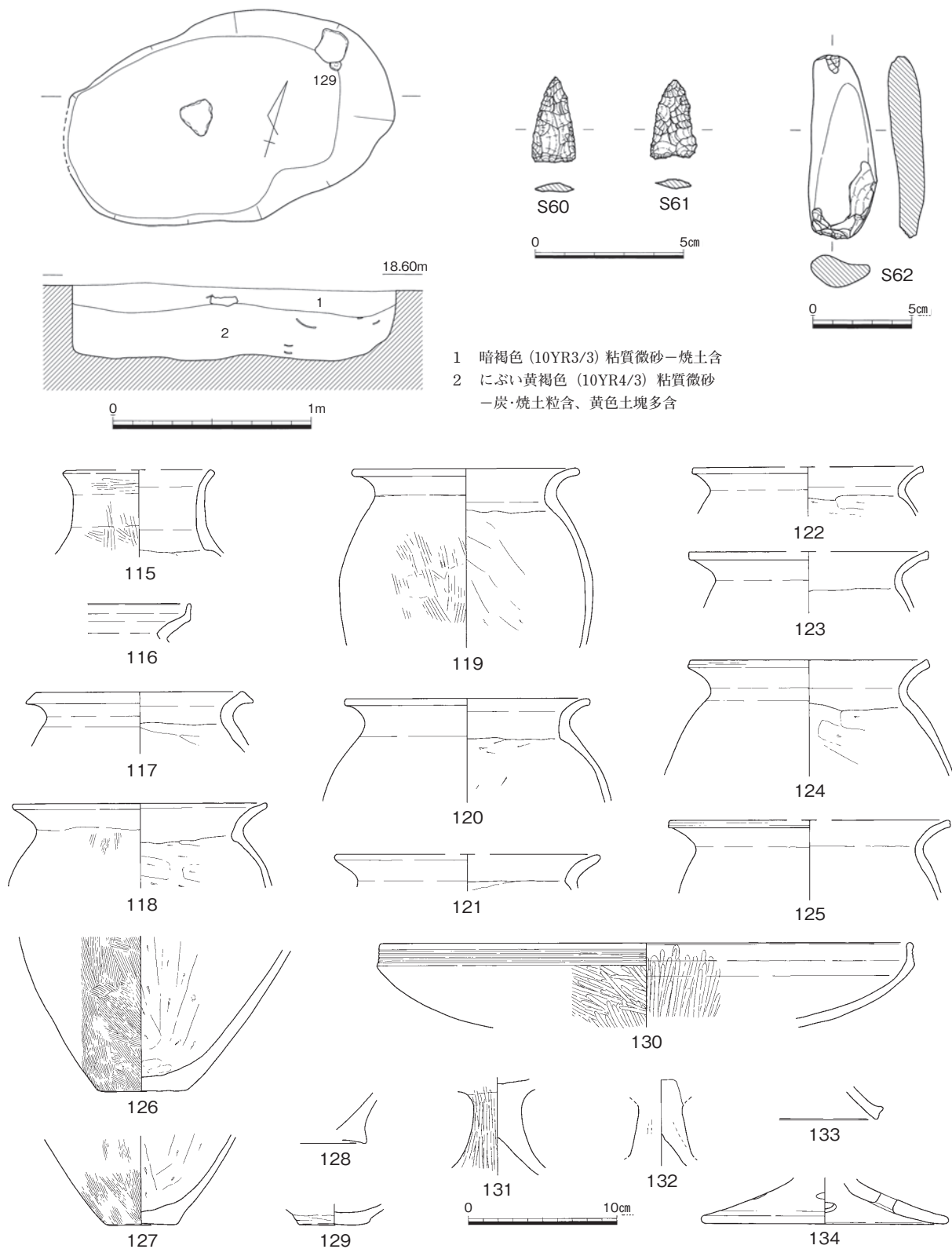
2区西部で東西を長軸とする楕円形を呈する土坑である。長さ167cm、幅106cmを測り、壁はほぼ垂直に下がって若干凹凸のある底部に至る。埋土は2層に分かれ、第2層中で特に南半分に集中して拳~人頭大の円礫~角礫が多く含まれていた。岩石はいずれも比熱などの使用痕のあるものはなく、底から10cm以上浮いていた。周辺から流れ込む環境にはないので、意図的に遺棄されたと推察される。これらに混じって土器片や石器が出土したが、いずれも岩同様底から浮いていた。遺物は、弥生土器



- 1 黒褐色 (7.5YR3/1) 土-角礫少含
- 2 明黄褐色 (10YR7/6) 粘性砂質土混  
黒褐色 (7.5YR3/1) 土-炭・焼土少含

第52図 土坑6 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/3・1/4)

の壺115、甕116~129、高杯130~134がある。このほかにサヌカイト製石鏃S60・61と粘板岩製の石器S62がある。S62は扁平な円礫を利用して幅広の小口を両面から粗く加工して刃部を作成し、もう一端には片面にのみ小さな剥離が見られることから斧と考えられる。古い様相を示す土器もあるが弥生時代後期前葉~中葉を主体とした時期と判断される。



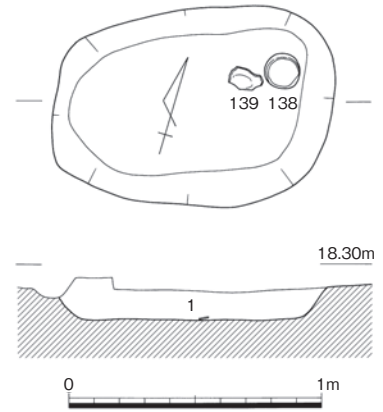
第53図 土坑7 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/3・1/4)



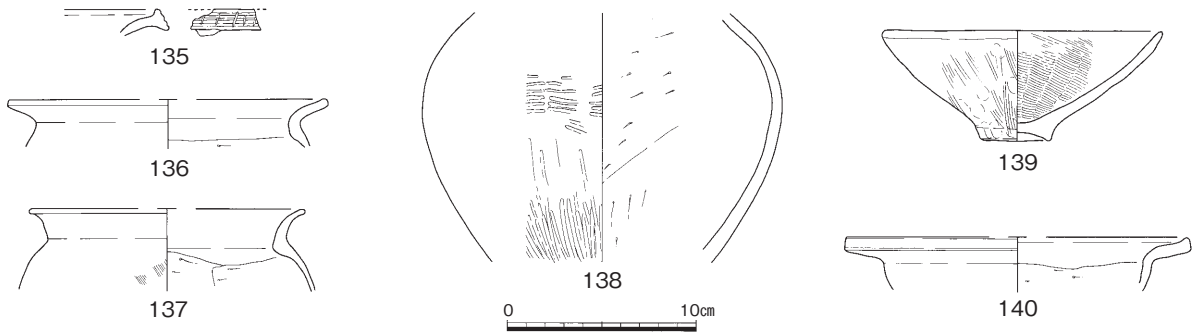
土坑8 (第29・54図)

2区北端中央に位置する隅丸長方形の土坑である。底面は平らで、北東隅に甕138と鉢139が置かれていた。出土遺物は弥生土器の壺135、甕136~138、鉢139・140がある。135の口縁端部には棒状浮文が残る138の体部外面には平行のタタキと下半部に縦方向のヘラミガキがみられる。

性格は不明だが、竪穴住居3との切り合い関係と出土土器から弥生時代後期中葉頃と判断される。



1 黄褐色 (10YR6/8) 砂質土混  
黒褐色 (7.5YR3/1) 土



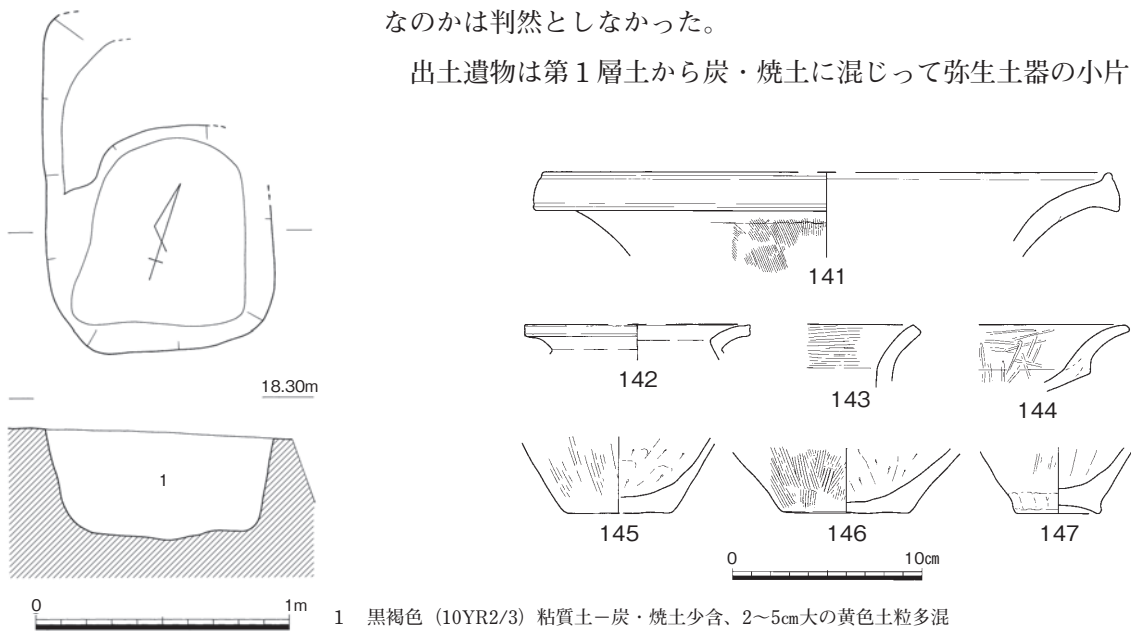
第54図 土坑8 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土坑9 (第29・55図、図版10)

2区北東部で北側は削平を受けている。南北を主軸に持つ隅丸長方形を呈し、壁は底からほぼ垂直に立ち上がる。埋土は単層で、第1層土を除去後北半の15cm高い底面のみが浅黄色に変色していた。浅黄色土は厚さ約8cmあり、それを掘り下げた下面では深さ約7cmの溝状や穴状の変色がみられた。

しかしながら、この土が基盤層が変質したものなのか人為的な埋土なのかは判然としなかった。

出土遺物は第1層土から炭・焼土に混じって弥生土器の小片が出



1 黒褐色 (10YR2/3) 粘質土-炭・焼土少含、2~5cm大の黄色土粒多混

第55図 土坑9 (1/30)・出土遺物 (1/4)

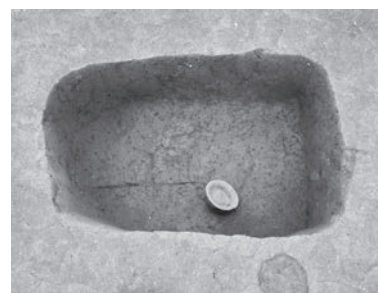
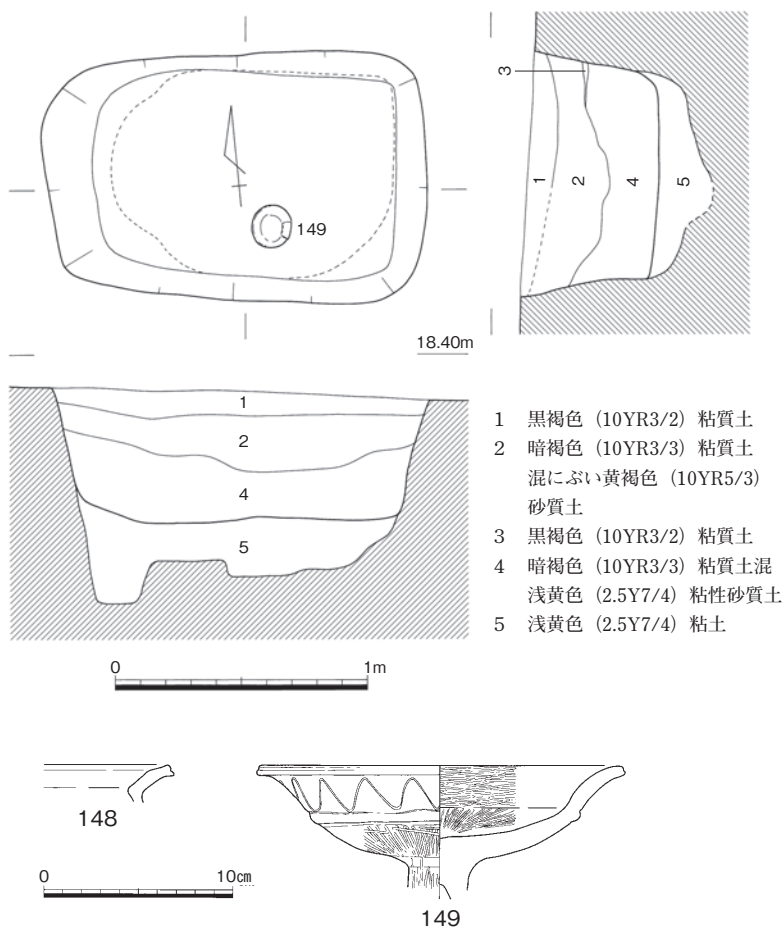
土した。壺141、甕142・143・145～147、高杯144があり、これらから弥生時代後期中葉頃と判断される。

**土坑10**（第29・56図、写真6、図版10・16）

2区北東部で、土坑9の南に位置する。主軸を南北に持つ隅丸長方形を呈し、壁は底からほぼ垂直に立ち上がる。埋土は第1～4層と第5層に分けられ、第4層下面は平らである。当初、墓の可能性を考慮して土層観察を行ったが、蓋や木棺痕跡などは確認できなかった。第4層までを除去後、底面と壁の一部が浅黄色であったため、トレンチを入れたところ土質は大差ないが、色調は明瞭に基盤土と分別できたので、第5層土として除去した。底面は凹凸が顕著で規則性はなく、遺物も皆無であっ

たため、第5層土で掘り方を埋めて使用のために上面を平らにした可能性を考えたが、周辺の土坑の状況から断定までには至らず、埋まる過程での自然変化の可能性は否定できなかった。

遺物は、第4層までに弥生土器の小片があり、高杯149は南壁近くの第5層上面に口縁部を上にして出土した。口縁部が完形で立ち上がり部外面に波状の沈線文がみられる。脚部は意図的に割られたのか残っていない



第56図 土坑10 (1/30)・出土遺物 (1/4)

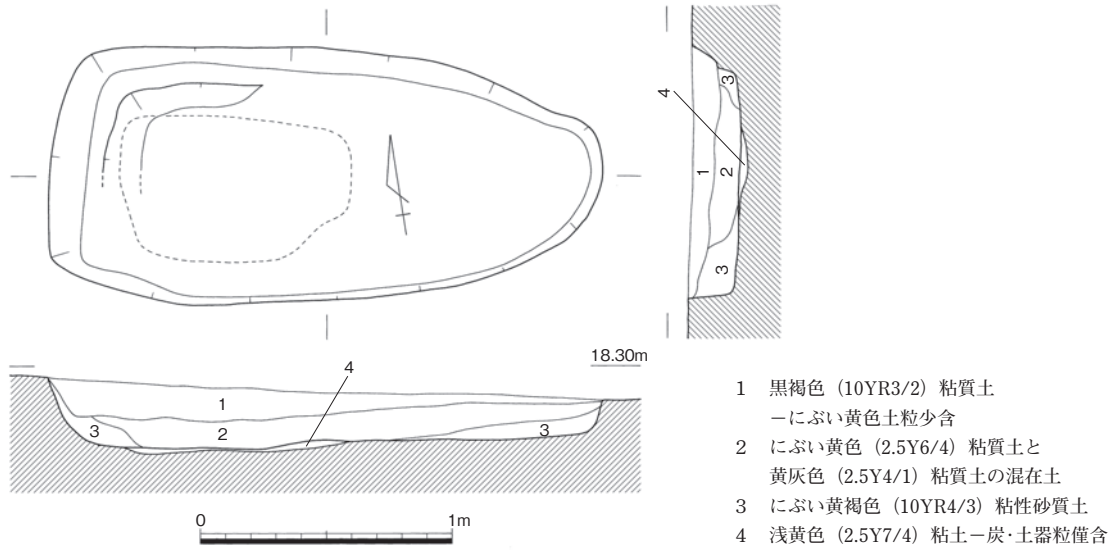
写真6 土坑10土器出土状況 (南から)

い。時期は、土器から弥生時代後期中葉と判断される。

**土坑11**（第29・57図、図版10）

2区北東部で土坑10の南東に位置する東西方向を主軸とした土坑である。西側は隅丸長方形で、東側は楕円形を呈する不整楕円形の土坑である。壁はほぼ垂直に下がり、平らな第3層底面に至る。周囲の土坑と比較して深さが25cmと浅く、また、底面の浅黄色土（第4層）の範囲も西側の局所的（平面図点線範囲）に止まっているため、周辺の土坑とは異なった性格を有しているのかもしれない。

出土遺物がないため時期は明確にできないが、周辺の状況から土坑10と同時期で弥生時代後期中葉頃と推察される。

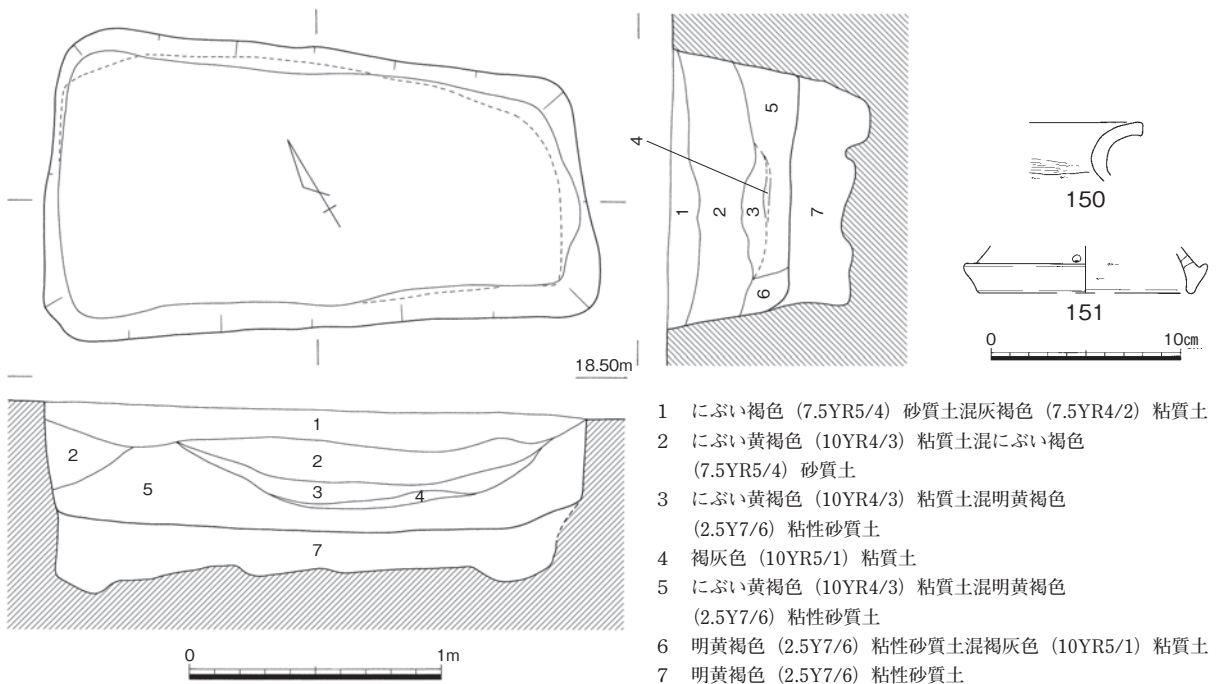


- 1 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土  
—にぶい黄色土粒少含
- 2 にぶい黄色 (2.5Y6/4) 粘質土と  
黄灰色 (2.5Y4/1) 粘質土の混在土
- 3 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘性砂質土
- 4 浅黄色 (2.5Y7/4) 粘土—炭・土器粒僅含

第57図 土坑11 (1/30)

土坑12 (第29・58図、図版10)

2区北東部で南端に位置する。主軸を東西にもつ隅丸長方形を呈する土坑で、壁は底から垂直に立ち上がり、埋土は第1～6層と第7層に分けられる。第5層土は5cm前後の基盤層土塊を密に含んでおり、第2・3層にも数cm大の塊を多く含む。第7層は15～30cmの厚さで確認でき、除去後の底面は凹凸が顕著であった。土坑10などと同様に人為的な埋土と考えたが、底面近くの東壁部分は基盤層との境界が不明瞭になっていくため、埋まった過程での自然変化の可能性は否定できない。遺物は第1層を主体に弥生土器の小片が出土している。150は甕、151は高杯の脚である。出土遺物は土坑10よりも古い様相を示しているが、埋土や周辺の状況から土坑10と大差ない時期に機能していたと判断される。



- 1 にぶい褐色 (7.5YR5/4) 砂質土混灰褐色 (7.5YR4/2) 粘質土
- 2 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土混にぶい褐色 (7.5YR5/4) 砂質土
- 3 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土混明黄褐色 (2.5Y7/6) 粘性砂質土
- 4 褐灰色 (10YR5/1) 粘質土
- 5 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土混明黄褐色 (2.5Y7/6) 粘性砂質土
- 6 明黄褐色 (2.5Y7/6) 粘性砂質土混褐灰色 (10YR5/1) 粘質土
- 7 明黄褐色 (2.5Y7/6) 粘性砂質土

第58図 土坑12 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土坑13 (第29・59図、図版10)

2区北東で土坑12と14の間に位置し、主軸を南北にもつ隅丸長方形の土坑である。壁は底から垂直に立ち上がり、埋土は第1～3層と第4層に大きく分かれる。第3層には基盤層土塊が多く含まれており、人為的な埋め戻しの可能性がある。第3層除去後の底面は平らで、底から壁の一部に浅黄色土が確認できた。浅黄色の第4層は土坑10・12同様明らかに基盤層とは異なった色調で、分層可能であったため土層観察を行いつつ掘り下げた。その結果、底全体に10cm程度の厚みがあり中央部分のみ70×50 cmでさらに20cmの深さまで円形に浅黄色土が堆積していた。しかし、ここでも基盤層の変質なのか、人為的な整地土なのかは明確にできなかった。出土遺物がないため性格や時期は特定できないが、他の土坑同様に弥生時代後期中葉頃と推察される。

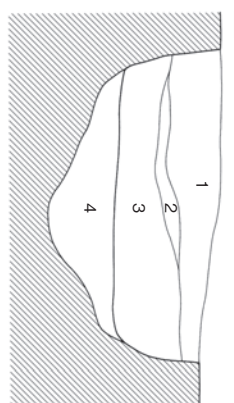
土坑14 (第29・60図、図版10)

2区北東で、土坑13からやや離れて東に位置する。東西方向を主軸に持つ隅丸長方形を呈する。周辺の土坑に比べて13cmと浅く基盤層土塊を多く含む第1層で埋まっていた。底面はほぼ平らで、浅黄色の変色は見られない。深さが浅いことと規模も小さいことから他の土坑とは異なった性格を有するのかもしれない。出土遺物はないが、埋土の状況から周辺の土坑と同時期と推察される。

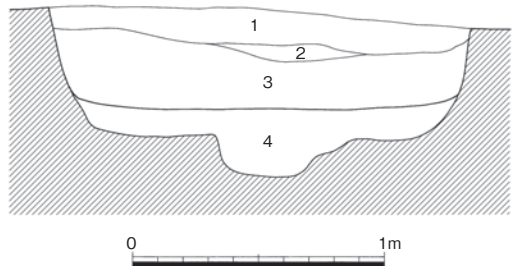
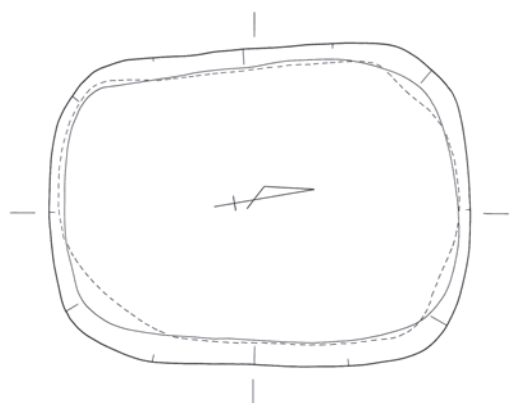
土坑15 (第29・61図、図版10)

2区北東部で土坑群では東端に当たり、河道2の斜面部に位置する。北西から南東を主軸にもつ長方形を呈し、壁は底からほぼ垂直に立ち上がる。埋土は2層に分層され、第2層土中には5cm前後の基盤層土塊が多く含まれる。第2層除去後の床面は平らで壁面近くの一部だけがしみ込み状に浅黄色に変色していたが、土坑13などのように基盤層との明瞭な境はなく堆積中の変質と推察される。

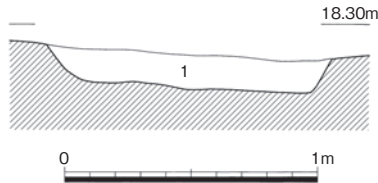
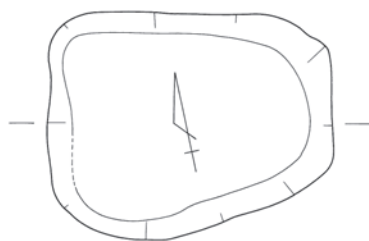
遺物は第2層中から弥生土器の甕152、鉢153の小片が出土した。時期は周辺の土坑と同様弥生時代後期中葉頃と考えられる。 (杉山)



- 1 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土
- 2 黒褐色 (10YR3/1) 粘質土
- 3 にぶい黄色 (2.5Y6/4) 粘質土と黄灰色 (2.5Y4/1) 粘質土の混在土
- 4 浅黄色 (2.5Y7/4) 粘土



第59図 土坑13 (1/30)



- 1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土混 にぶい褐色 (7.5YR5/4) 砂質土

第60図 土坑14 (1/30)

4 溝

溝 1 (第29・30・62図)

竪穴住居1と竪穴住居3の間に位置する南北に直線的な溝である。長さ85cmのみ残存していた。幅11cm、深さ9cmを測り、断面はU字型を呈する。底面の標高は18.4m。形状から竪穴住居壁体溝の可能性はある。出土遺物はなく、埋土から弥生時代の遺構と判断した。

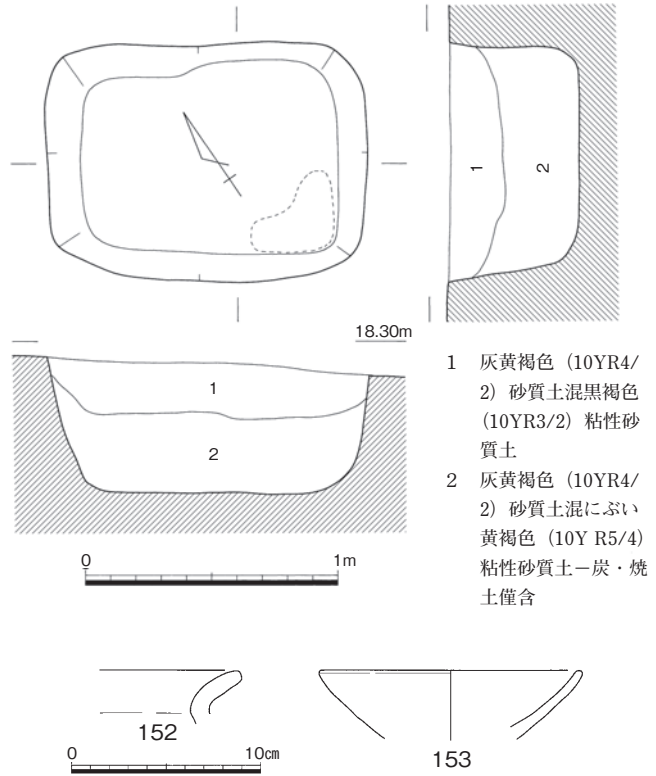
溝 2 (第29・30・63図)

溝1の南側で、竪穴住居1と竪穴住居8の間に位置する。南北方向のやや東に弧を描く曲線的な溝である。幅14cm、深さ4cmを測り、断面は皿状を呈する。底面の標高18.43mである。形状から竪穴住居壁体溝の可能性はある。溝1同様出土遺物はないが、埋土から弥生時代と判断した。

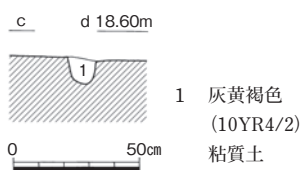
溝 3 (第29・64図、図版7・10・11)

南北方向の緩やかに東に弧を描く溝で、全長約6m、幅55cm、深さ13cmを測る。立ち上がりは比較的急で、断面は逆台形を呈す。底面の標高は北で約18.2m、南で18.3mと若干高低差がある。南北両端は共に緩やかに上方に上がり、先に伸びていかない。埋土は竪穴住居や土坑と同様で、基盤由来の黄色土粒が多く混在していた。その形状や埋土から水路とは考え難い。一方、この溝を境として西側に竪穴住居が密集し、東側に貯蔵穴と思われる方形土壇が群在することから、集落内を区画する溝として掘削された蓋然性は高い。ただし、防御的な側面は見出せない。

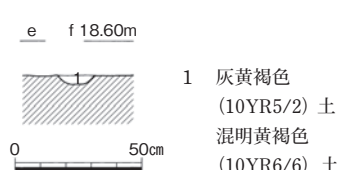
後期の土器細片が出土しているが、厳密な時期の特定はできなかった。切り合いから竪穴住居7よりは新しく、弥生時代後期後葉に位置付けられよう。(渡邊)



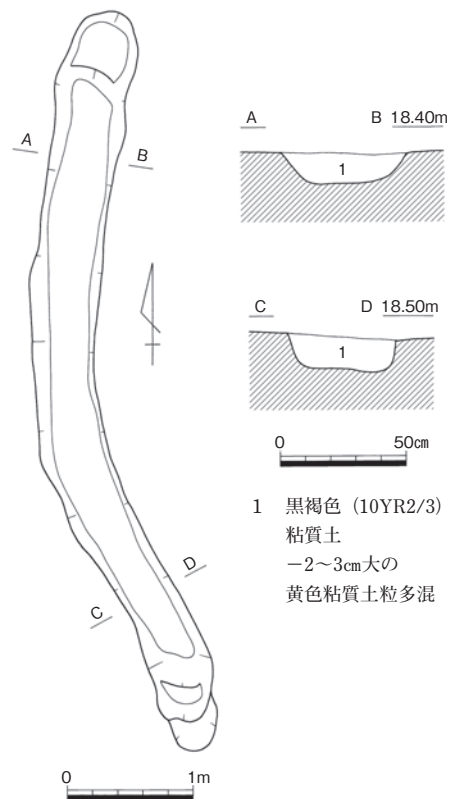
第61図 土坑15 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第62図 溝 1 (1/30)



第63図 溝 2 (1/30)



第64図 溝 3 (1/30・1/60)

## 5 河道

### 河道1 (第27・28・65～67図、写真7・16・20)

1・3区の北側を東西に流れる河道である。第28図に古墳時代の堆積物除去後の肩を示している。第27図A B断面の古墳時代に当たる第6層を除去して柱穴1 (第10・11層) が検出できる。また、第65図G H第5層を除去すると第28図に示した弥生時代後期の土器溜まりが形成されている。柱穴と土器溜まりは該期の遺構検出面から約80～100cm低い位置にあることから、集落が展開していた時期においては低位部であり、弥生時代の流路はさらに北側にあると推察される。第27図A B断面第12層、第65図G H第7層、I J第16～18層は弥生時代の基盤層である。

河道出土の遺物を第66・67図に示した。土器のうち176・184・189・193・194は1区の土器溜まりから、156・167・168・171は3区中央で堆積土中からまとまって出土した。154～161・178は壺、162～176・181～183は甕、180・184～188は鉢、189～195は高杯である。160は頸部貼付突帯上面と肩部に半裁竹管文を施す。162～165・183の外面には平行のタタキがみられる。187は精良な胎土を用い、外面にミガキと内面にハケメが看取される。土器は総じて表面の残りがよく調整や文様が観察できる。S63はデイサイト製の円礫を半割した石器である。側辺は破面側にのみ周縁から二次加工を施し、広端部は両面から加工し刃部を作出していることから、打製石斧と考えられる。S64は泥岩製で、表裏全面に二次加工を施し整形している。整形が比較的丁寧なことから縄文時代の打製石斧(石鋏)の基部と推察される。S65は圧砕花崗岩製の扁平片刃石斧である。図示した弥生時代の遺物は土器小片が多いが、形を復元できるものも一定量ある。また、表面の摩滅がほとんどみられないことから集落からの転落又は遺棄品と考えられる。

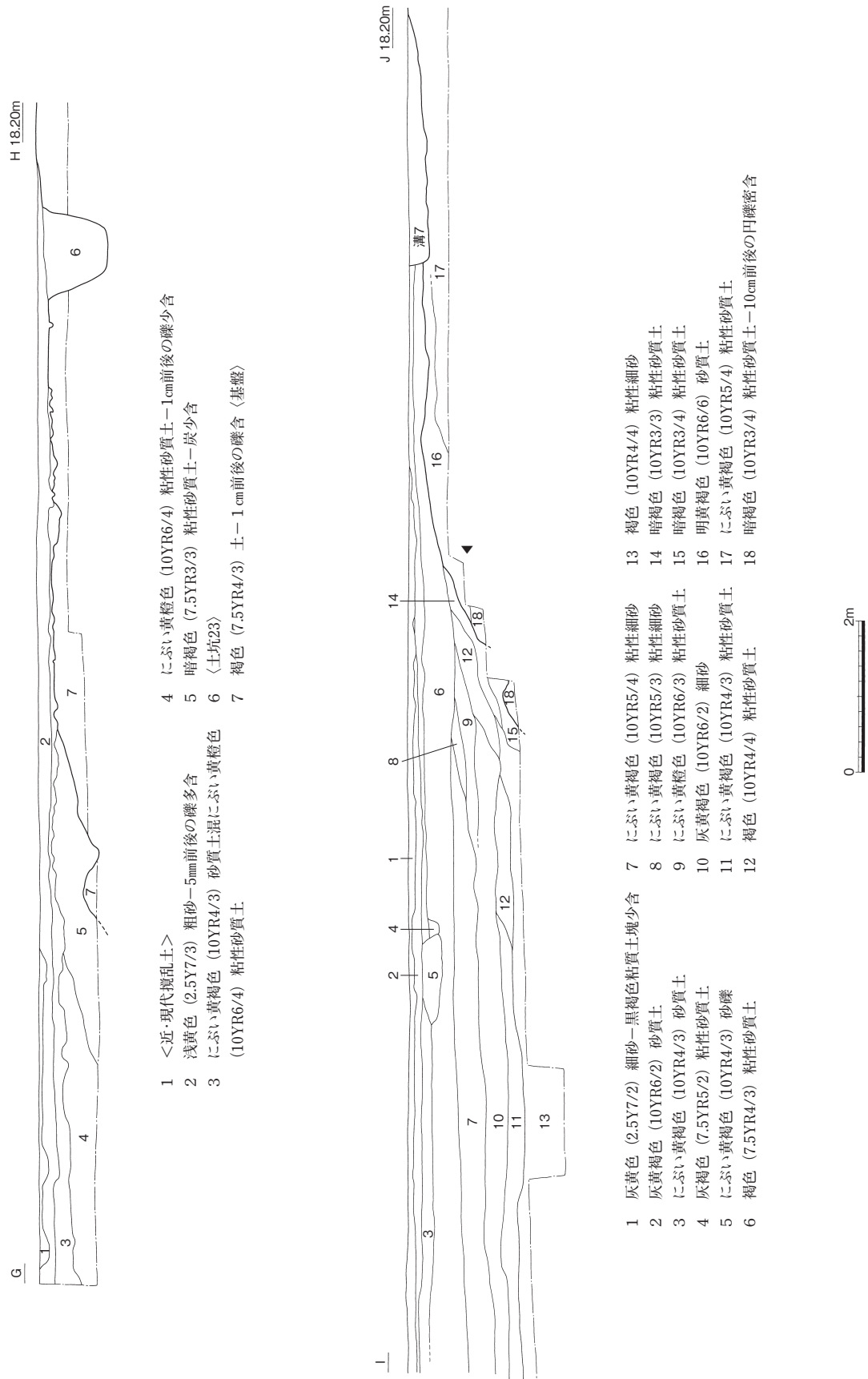
### 河道2 (第29・68～69図、写真11、図版6・13・19・20)

2区東部を南北に流れる河道である。第29図に示した河道肩は古代以降の流路を示している。第68図K～Pの土層断面で、弥生時代の堆積物はK L第5層とM N第6層と考えられる。しかし、これらの土層は部分的に残されているのみで、堆積土を底面まで完掘していないこともあって弥生時代の流走方向は不明である。K L第6層とM N第7層及びO P第9層は弥生時代の基盤層である。

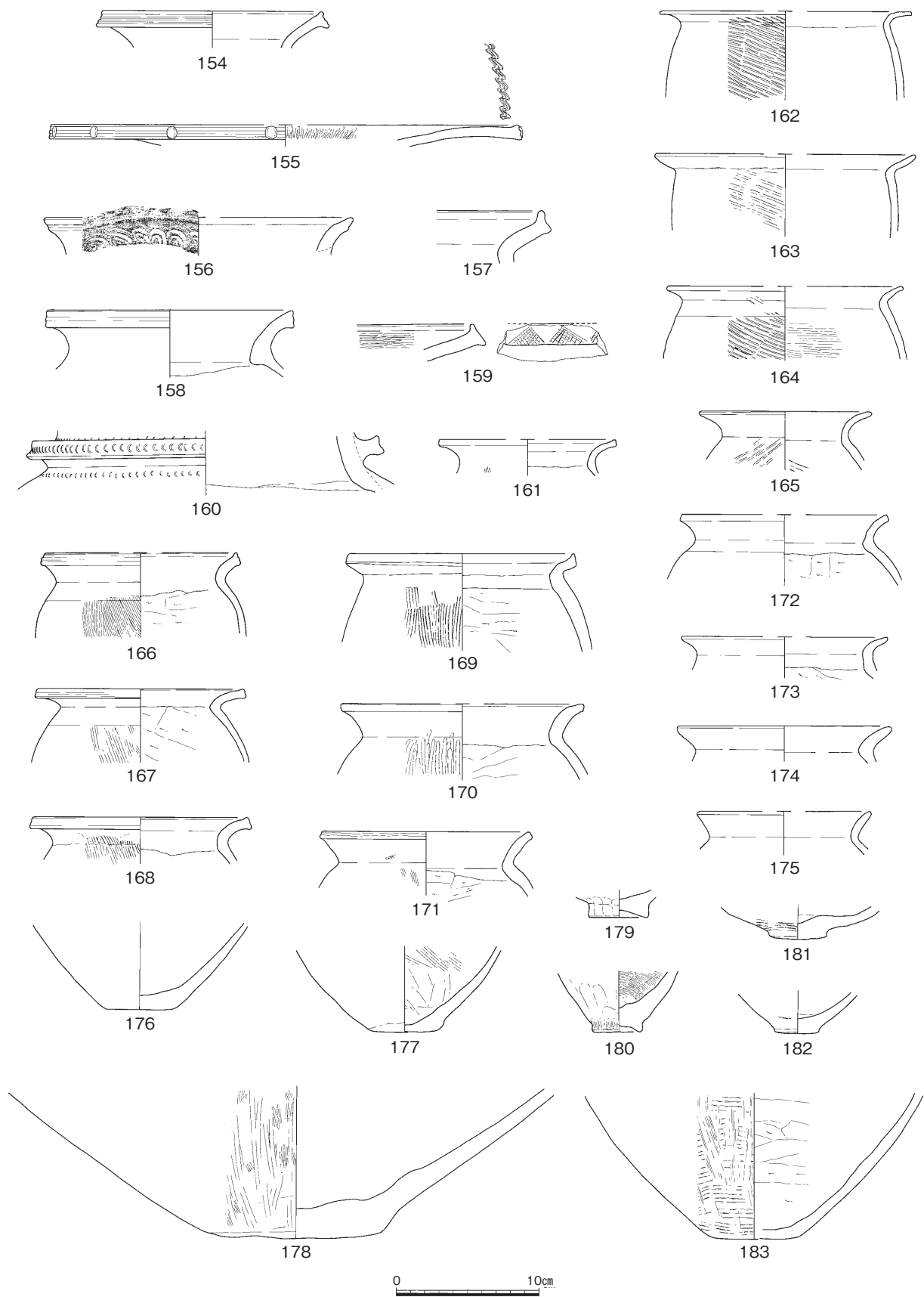
該期の遺物は、古墳時代以降の堆積物から出土している。M N断面第6層から出土した弥生土器の甕196は、外面頸部に平行のタタキがみられる。S66～71はサヌカイト製品で、S66は鋏、S67は錐である。スクレイパーS68・69はS68が背面に、S69は刃部に自然面を残す。残核S70・71は上面に打点が見られる。S72は板状の円礫の裏面を粗く敲打し厚みを減じた後、周縁に押圧剥離を施して刃部を作出している。S73も板状をした円礫に加工を加えて刃部を作っていることからS72・73は鋏と考えられる。S74は先端部の剥離痕から敲き石であろう。S75・76は結晶片岩製品である。敲き石S75は、先端部の剥離痕と図の上部側面と下部に線状の使用痕が残る。S76は全面平滑で加工や研



写真7 3区河道1調査風景(北東から)

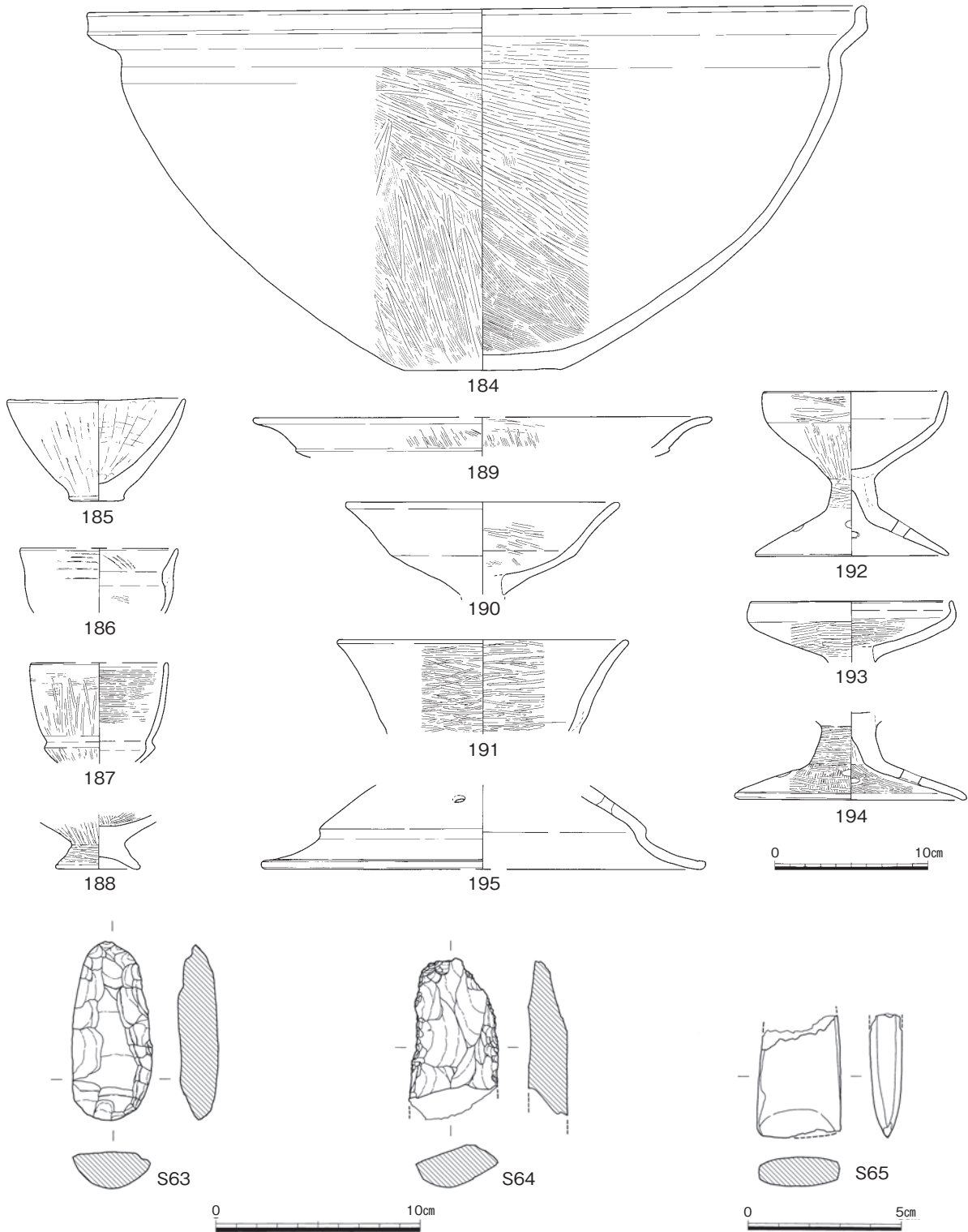


第65図 河道 1 (1/80) — ◀は工事高を示す。



第66図 河道1出土遺物① (1/4)

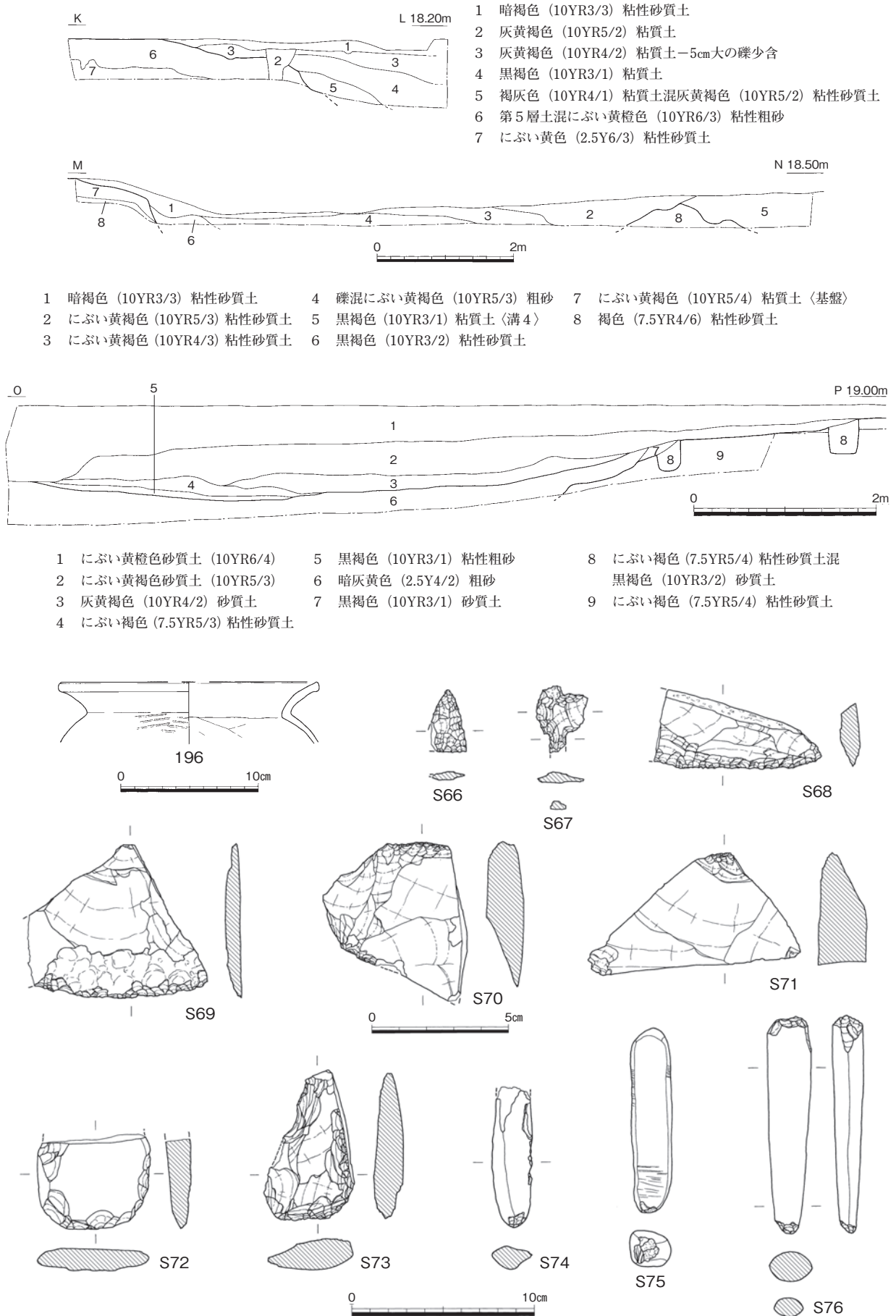




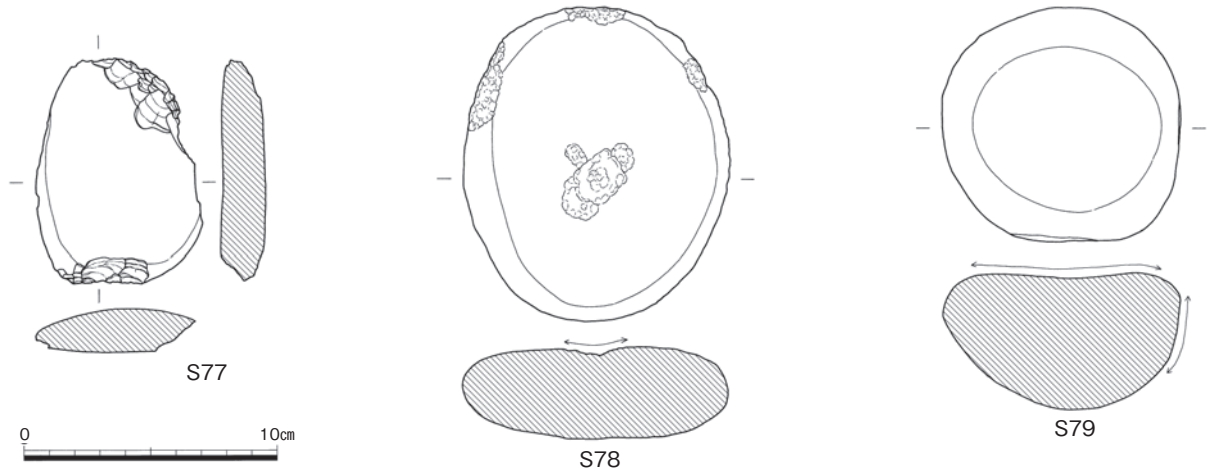
第67図 河道1出土遺物② (1/2・1/3・1/4)

磨痕は看取できないが、材質と形状から縄文時代の石棒と考えられる。両端部の剥離痕から敲き石に転用された可能性がある。S77は扁平な円礫の両端を打ち欠いた錘である。S78は凹み石、S79は磨り石、S80は全面に使用痕の残る敲き石である。石器の大半は弥生時代に帰属するが、石棒S76やS78・79のような縄文時代と推察される礫石器の存在は、包含層中から出土した縄文土器と併せて奥吉原地区での定住を示唆する重要な資料である。(杉山)

第4章 辺谷中田遺跡



第68図 河道2 (1/60・1/80)・出土遺物① (1/2・1/3・1/4)

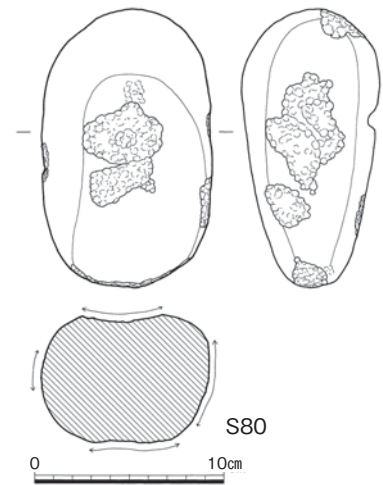


## 6 その他の遺構・遺物

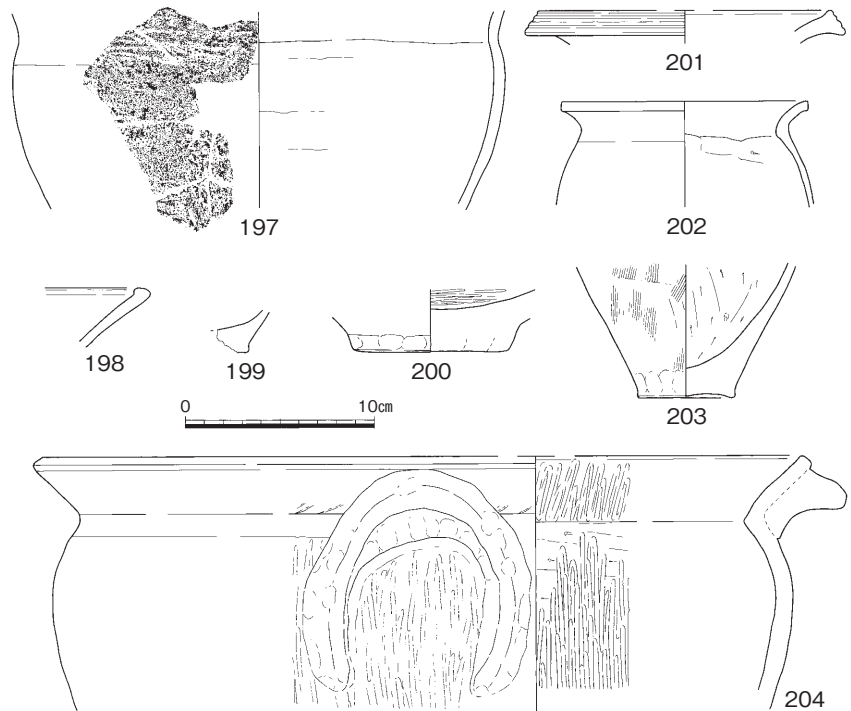
(第28・29・70・71図、図版14・16・19・20)

第70図に柱穴から出土した土器を、第71図に遺構に伴わない、もしくは後世の遺構に混入していた弥生時代以前の土器・石器を示す。図化する弥生土器を伴う柱穴はP1のみで、多くは時期の特定できない細片であった。203・204・215・216が出土した。P1は1区東壁沿いの河道肩口にあり、上部は弥生～古墳時代の流路が堆積していた。P1周辺からは鉄滓も多く出土している。P2～6は縄文時代晩期中葉に比定される。周辺掘り下げ中にも縄文土器が比較的多く出土しており、当該期には集落の形成が始まっていた可能性が示唆される。

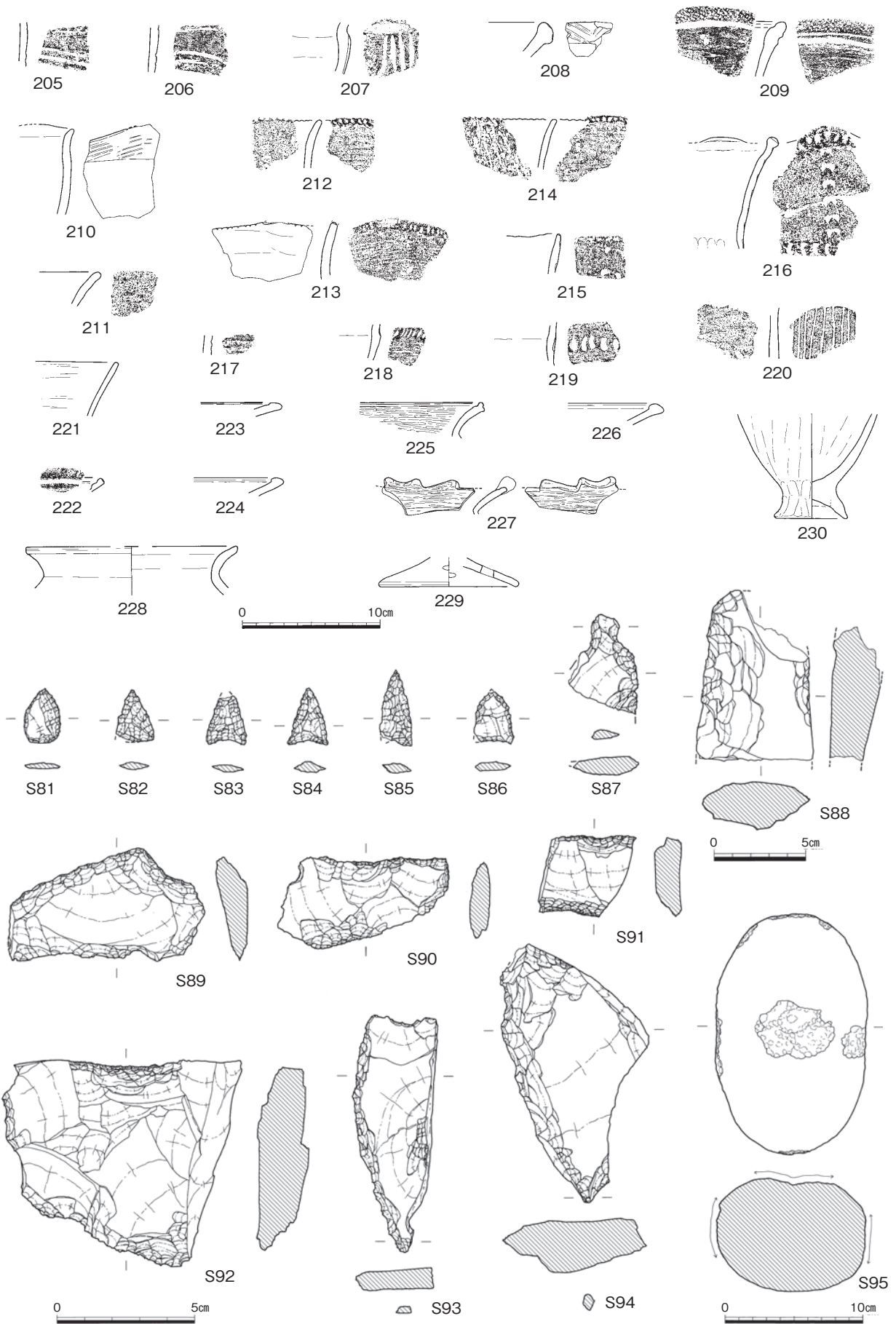
遺構に伴わない縄文土器には後～晩期の時期幅があるが、2条突帯片は出土していない。多くが他遺構に混入していたが、207は2区の基盤層から出土しており、微高地の形成を考える上で貴重な手がかりとなる。205・209・222は河道1から、217・220は土坑3から出土した。当遺跡より南の、谷部斜面に営まれた集落から流入したのであろう。(渡邊)



第69図 河道2出土遺物②  
(1/3・1/4)



第70図 柱穴1～7出土遺物 (1/4)

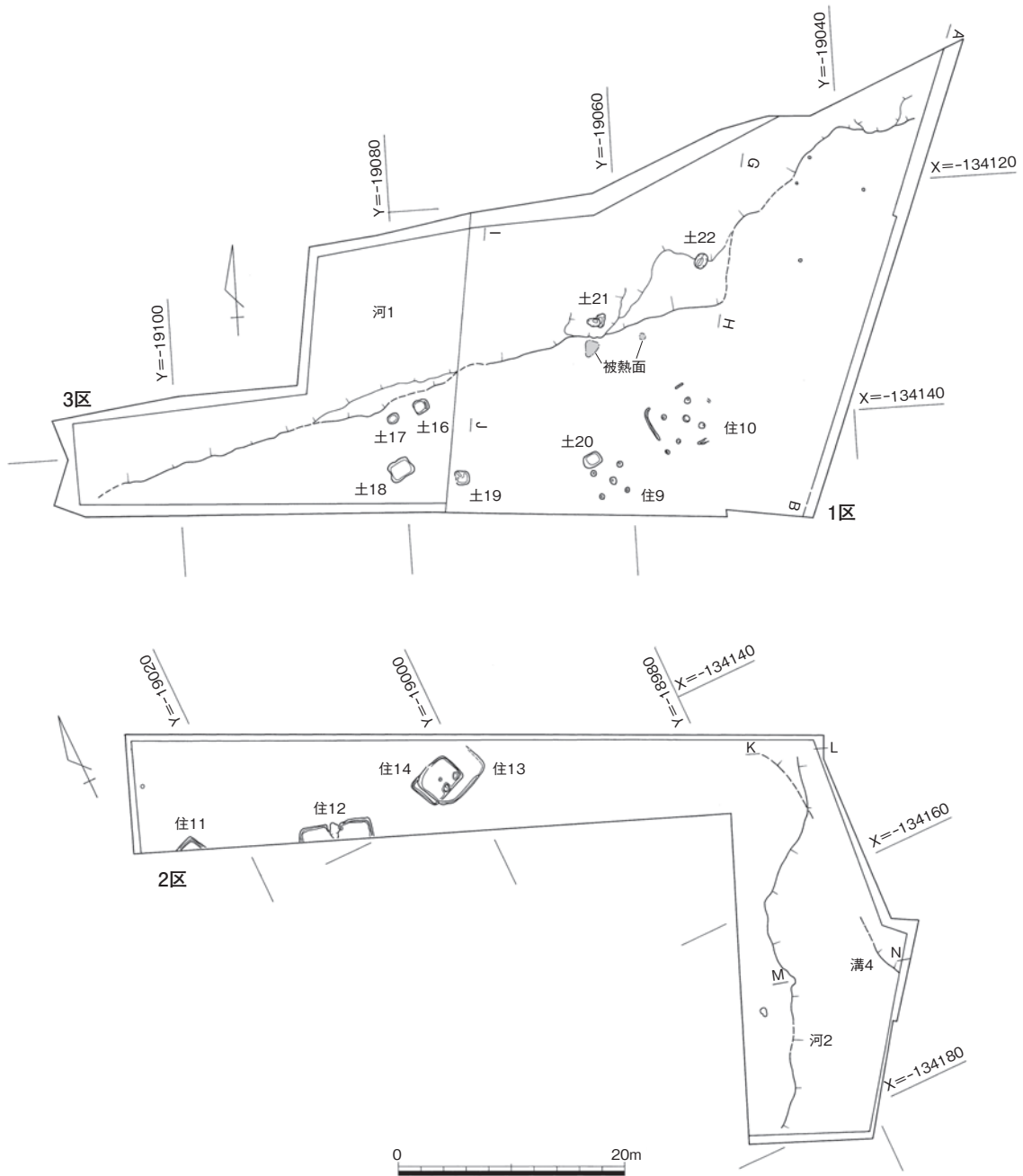


第71図 その他の出土遺物 (1/2・1/3・1/4)

### 第3節 古墳時代の遺構・遺物

古墳時代の主な遺構は竪穴住居6軒、土坑7基と少なく、柱穴もほとんど見られない。ただし竪穴住居が1区にも見られることから、弥生時代より居住域が拡大した状況が看取される。

遺構の時期は古墳時代初頭と後期に分かれ、後期には2区の造り付けカマドを有する竪穴住居から轆羽口が出土し、3区では方形の被熱土坑が検出されている。また溝・包含層などからも鉄滓や羽口が出土するなど、製鉄と関連する遺構・遺物が散見される。(渡邊)



第72図 古墳時代の遺構配置図 (1/600)

## 1 竪穴住居

### 竪穴住居9 (第72・73図、写真8、図版11)

1区西半で調査区南端に位置し、竪穴住居10と約3m離れている。耕作土直下の標高約18.0mで柱穴と焼土・炭の散布を確認した。壁体溝は残っておらず、当初新しい時期のものと考えたが、P5の第1層中にも炭・焼土を多く含んでいることと、これらの散布範囲がP1～4に囲まれた空間に止まることから住居に伴う遺構と判断するに至った。これにより、検出面が床面にほぼ近い高さであると推察される。

主柱穴P1～4には、直径20cm前後の柱痕跡が明瞭に確認できた。基盤層に円礫を密に含んでいるため、柱穴の深さは30～50cmとばらつきがある。P5は第1層土中に炭が多く含まれたが、穴の壁面

などに明瞭な被熱痕跡は認められなかった。被熱面には掘り方ではなく基盤が赤化しているだけで、炭の散布についても同様に掘り方は認められなかった。住居北辺に土坑20が近接しているが、P1との直接的な切り合い関係はなく、住居と前後関係があるのか、もしくは住居に土坑が伴うのかは判然としない。

遺物はなく、時期は明確ではないが、竪穴住居10と同じ柱構造を持ち、主軸方向も近似することから古墳時代前期前半頃と考えられる。

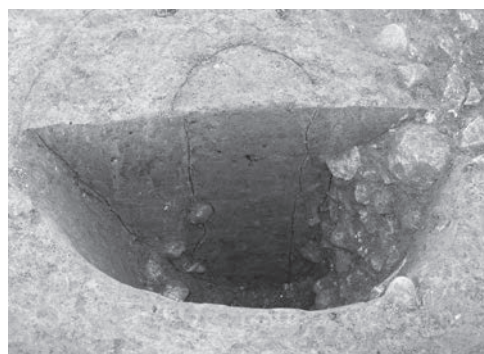
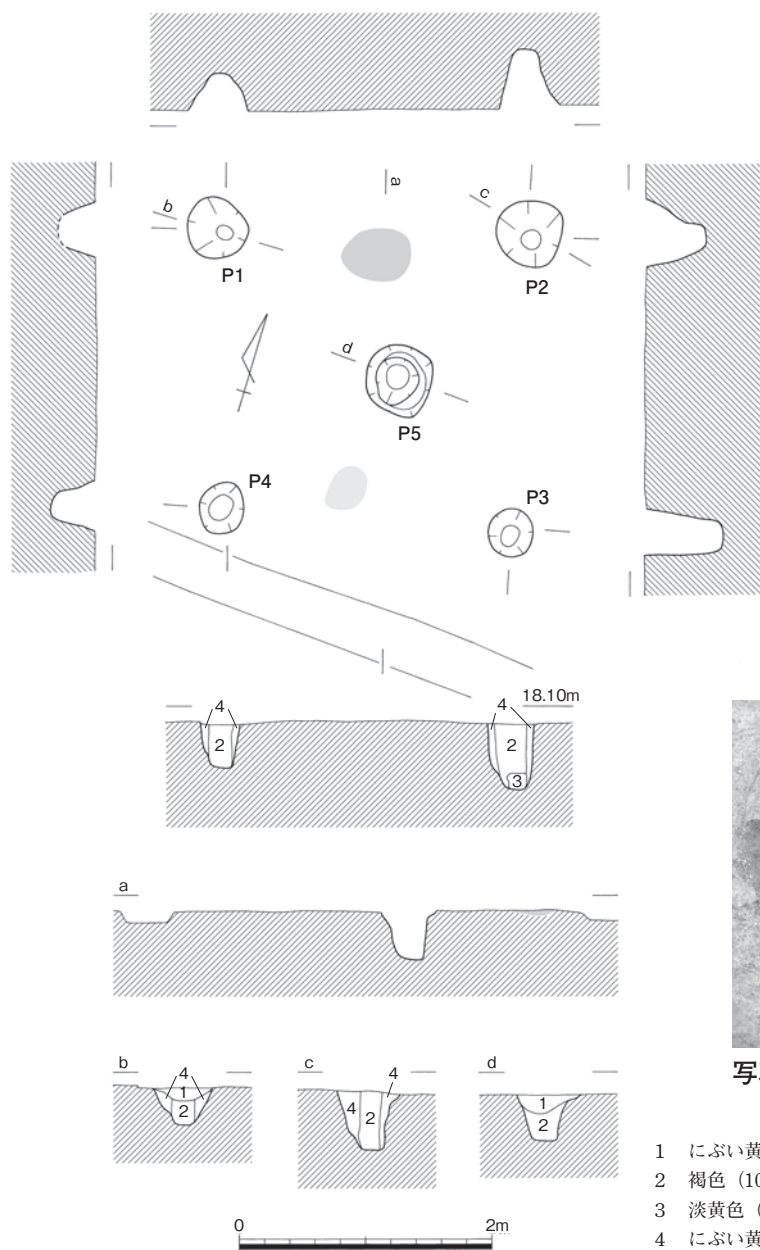


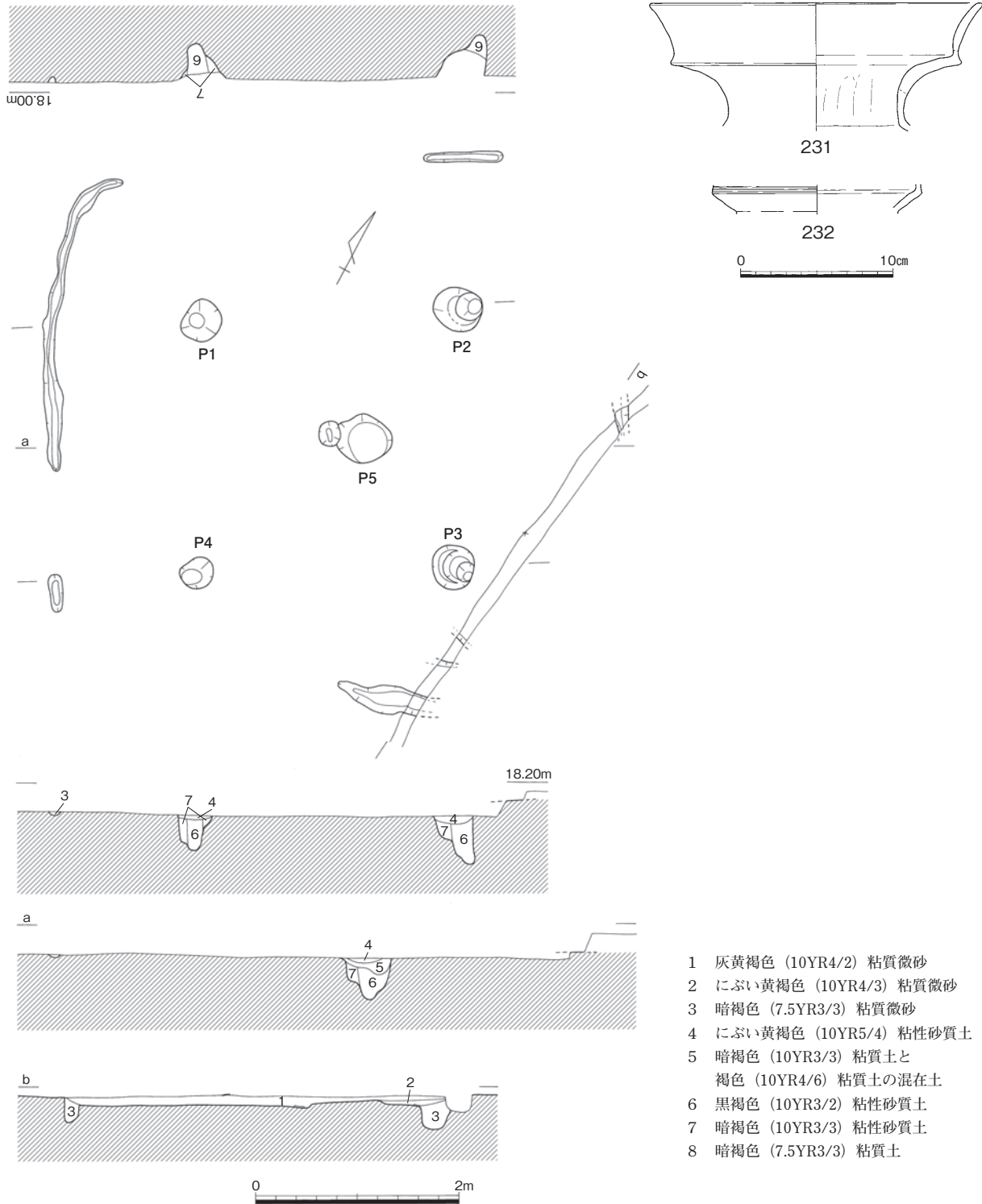
写真8 竪穴住居9P2土層断面(南から)

- 1 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘性砂質土—焼土多含、炭少含
- 2 褐色 (10YR4/4) 粘性砂質土—炭少含
- 3 淡黄色 (2.5Y8/4) 粘土—灰白色粘土塊僅含
- 4 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 粘性砂質土

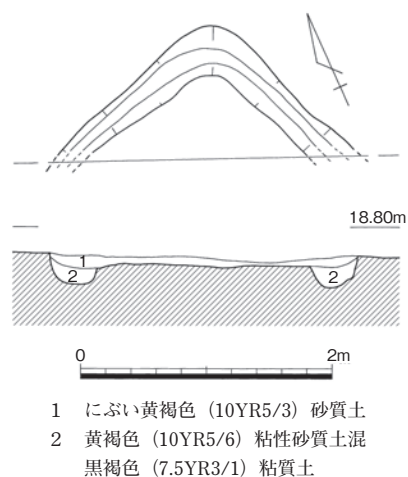
第73図 竪穴住居9 (1/60)

竪穴住居10 (第72・74図、図版11・16)

1区西半南部に位置し、標高約17.9mで柱穴と、断片的ではあるが方形に巡る壁帯溝を検出した。溝の規模から、東西長約580cm、南北長約560cmで方形を呈していると判断できる。住居東側の水田畦畔部分で土層観察を行った結果、床面は標高17.92m付近、南東部に性格は不明だが床から8cm程度の帯状の高まりがあったことが分かった。支柱穴はP1～4の4本で、直径15～20cmの柱痕跡が認



第74図 竪穴住居10 (1/60)・出土遺物 (1/4)



第75図 竪穴住居11 (1/60)

められる。底面は柱部分が住居内側に傾くように掘り方外寄りが深くなっており、P 2・3では特に顕著に内側に向かって斜めに痕跡が看取できる。中央のP 5内には炭・焼土がわずかに含まれる程度で、壁や周辺に被熱痕はみられなかった。

遺物は、畦畔部分の床面に二重口縁の土師器壺231とP 3内から甕232が出土した。232は所謂吉備型の甕で口縁部に櫛描き沈線が残る。

これらの土器から、時期は古墳時代前期前半と判断される。

竪穴住居11 (第72・75図)

2区西端に位置し、調査区南壁にかかって方形の隅だけを検出した。約10cm残っていた埋土を除去すると平らな床

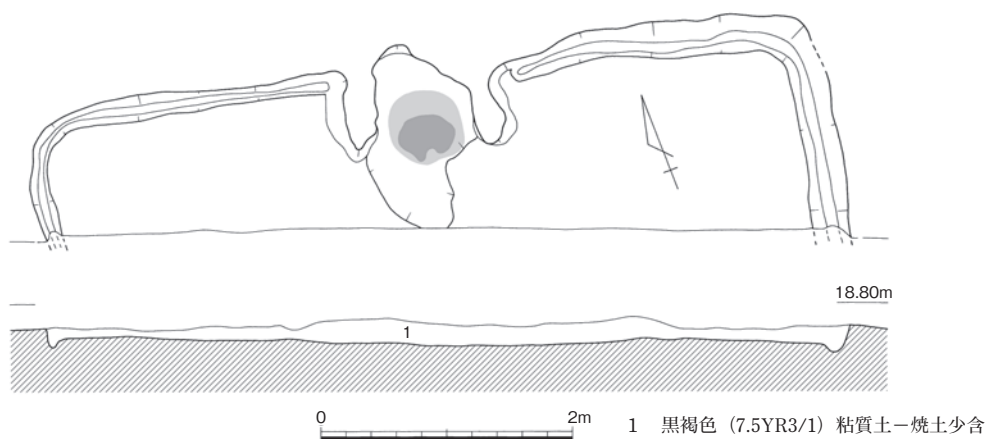
と壁際に幅約25cm、床面からの深さ約10cmの溝が巡ることから住居と判断した。出土遺物はなく時期は明確でない。近接して竪穴住居12があることから古墳時代後期頃と推察される。

竪穴住居12 (第72・76・77図、巻頭図版2、図版12・16・18)

2区西部に位置し、調査区南壁にかかって、住居北辺のみを検出した。北辺長約630cmの中央に造り付けカマドがあり、床面の壁際には幅15cmの壁帯溝が巡る。カマドは袖の内幅約100cmを測り、その中央にある焚き口は住居の壁よりも内側に止まる。袖は地山削り出しか粘土による造作によるものかは不明である。カマド下には土坑などの構造はなく、煙道も確認できなかった。焚き口中央には厚さ5cmの焼土が貼り付いており、それを中心に基盤土も被熱により赤化していた。

この焼土の直上からは、半分に割れた轆の羽口C 1と須恵器の甕又は壺の体部片が出土した。羽口は支脚に転用されたとも考えられたが、焚き口に据え付け痕が見られないこと、両端部や外面に被熱による表面の荒れや赤化が看取できないことから、カマド廃絶に伴う何らかの行為として遺棄されたと推察される。また、南側の掻き出し部には土師器甕234の破片が床に散在していた。カマド埋土と周辺の土は精密水洗し、磁石と肉眼で選別を行ったが、約2cm大の鉄塊系遺物M 4と鍛冶滓が1点ずつあったのみで製鉄や鍛冶に関連する遺物は他にはなかった。

出土土器には、須恵器杯身233と土師器甕234・235などがある。ラップ形の土師質のC 1は長さ約



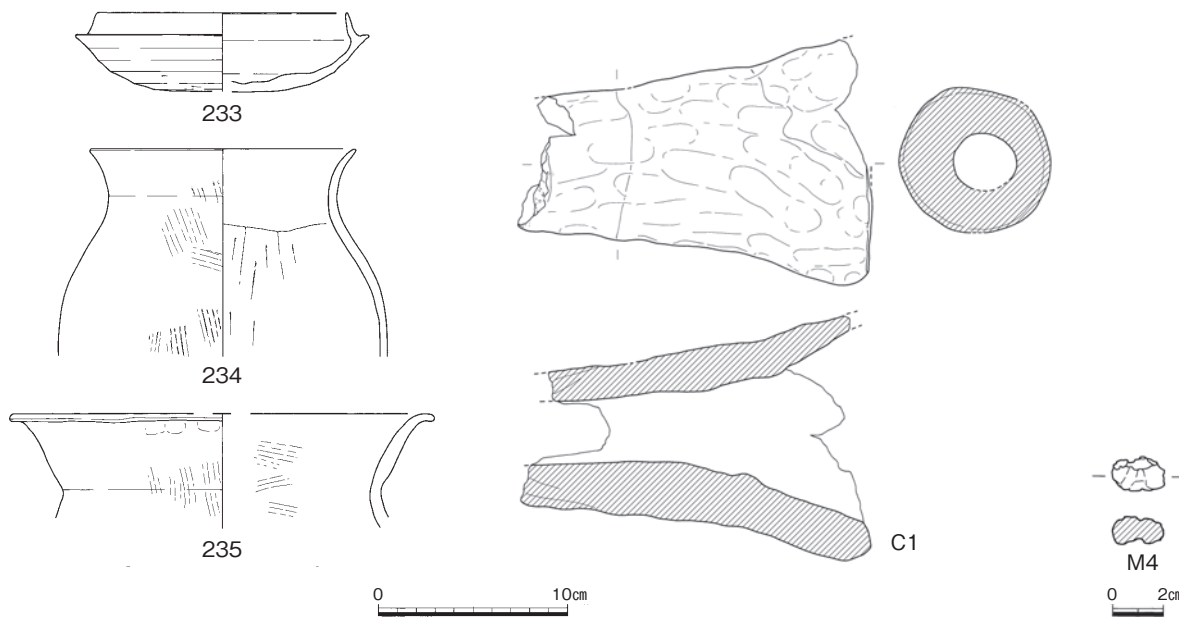
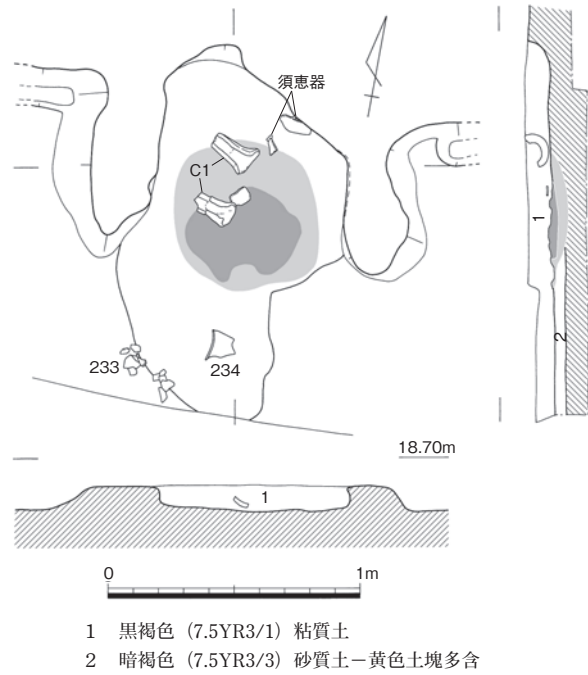
第76図 竪穴住居12 (1/60)



18cmあり、出土した時には半裁していたが割れ目に被熱痕跡はなく容易に接合した。胎土中にはスサなどの繊維痕跡はない。小口部分の先端に熱によるガラス質化がみられることから、高温作業に使用していたことは間違いなく、折損又は使用中の裁断後も羽口として使用していたようだ。

M4は金属学的調査を行った結果、磁鉄鉱石由来で、鍛冶用原料鉄の可能性が指摘されている。

時期は、出土須恵器から6C後半と判断される。(杉山)

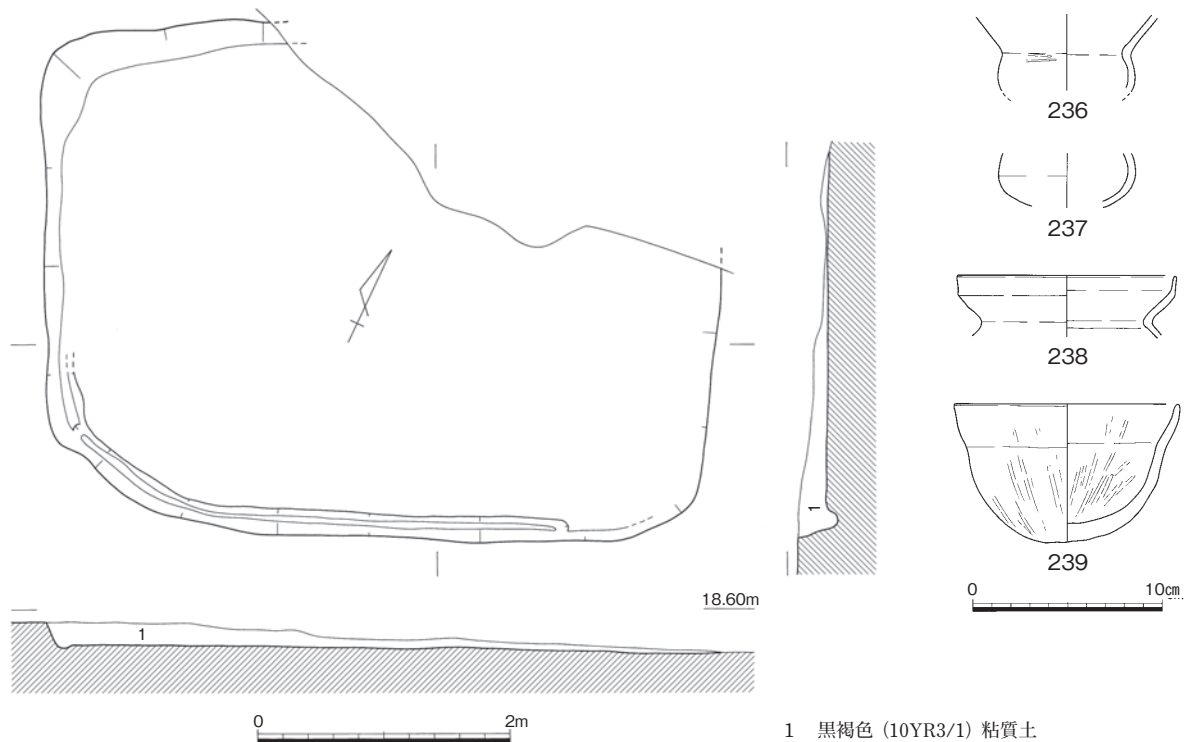


第77図 竪穴住居12内カマド (1/30)・出土遺物 (1/3・1/4)

竪穴住居13 (第72・78図、図版17)

2区中央部に位置する。遺構の重複が激しく、また後世の削平も著しかったため、全容を上手く捉えることができなかった。北東角は中世の溝9で削平されている。東西5.27m、南北4.05mの長方形と想定している。第78図第1層が覆土に対応する。床面の標高は18.30mでほぼ平坦で、整地層・貼り床は認められない。壁体溝は南西角から南辺にかけてのみ検出できた。支柱穴も確認できていない。

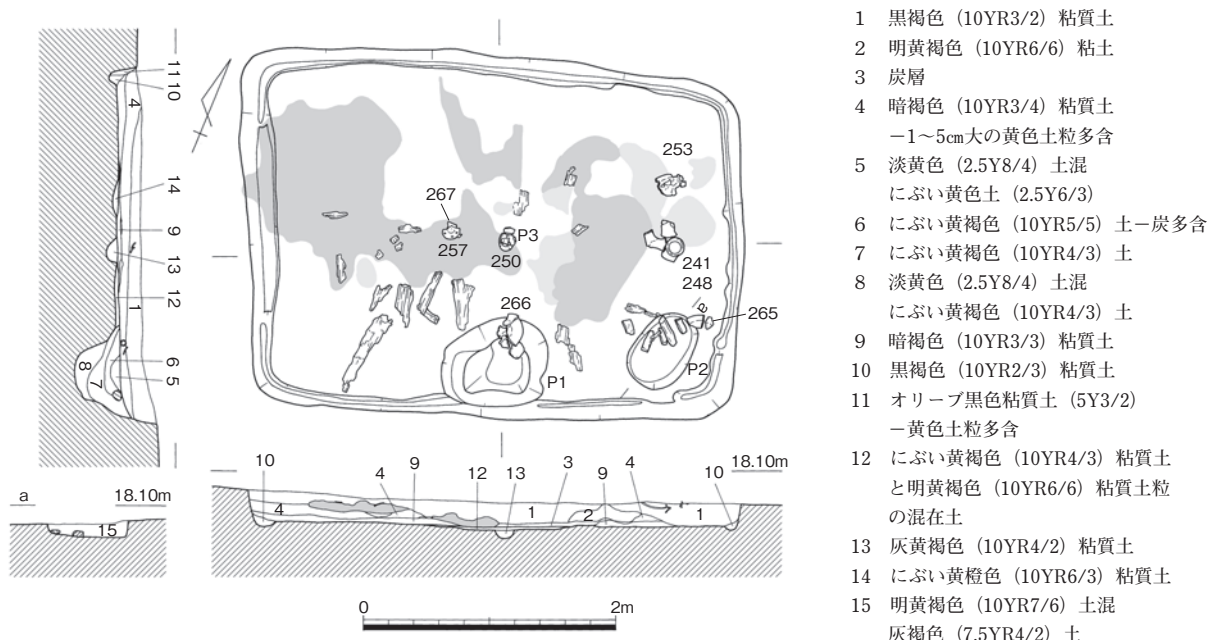
出土土器のほとんどが弥生時代後期のもので、住居南東角では弥生土器が数点まとまって出土した。竪穴住居2の甕34も含まれ、下部の遺構の混在も多いが、最も新しい様相から、古墳時代前期で、竪穴住居14より新しく位置付けられる。



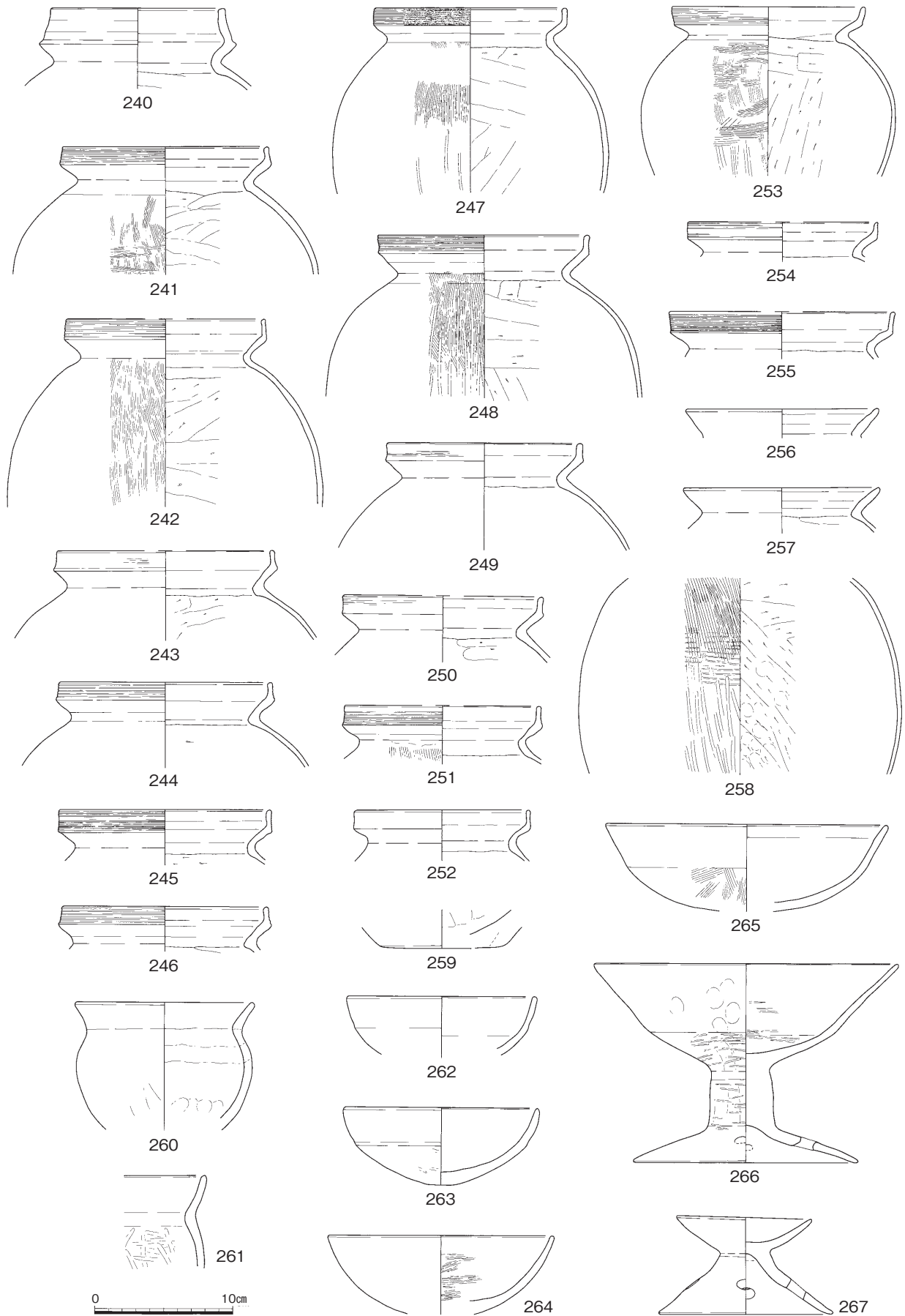
第78図 竪穴住居13 (1/60)・出土遺物 (1/4)

竪穴住居14 (第30・72・79~81図、図版7・12・17)

竪穴住居13や竪穴住居2と重複しており、上面でプランは視認できず、竪穴住居2の床面で検出するに至った。第30図第2層が当住居に対応する。東西3.92m、南北2.87mの小型の長方形で、検出面からの深さ20cm、床面の標高は17.95~18mである。中央に部分的に整地層が認められたが、床面は1面のみである。第9層下面が床面に、第12層が整地層にあたる。住居内に炭・焼土が多く遺存し、焼失住居とみられる。焼土上面では241・248・250・253・257・265~267など完形品を含んだ土器



第79図 竪穴住居14 (1/60)



第80図 豎穴住居14出土遺物① (1/4)



第81図  
竪穴住居14  
出土遺物②  
(1/3)

が多く出土しており、焼失後に意図的に投棄されたと考えられる。しかし、焼土より下で出土した251・255・262と大きな時期差は認め難い。

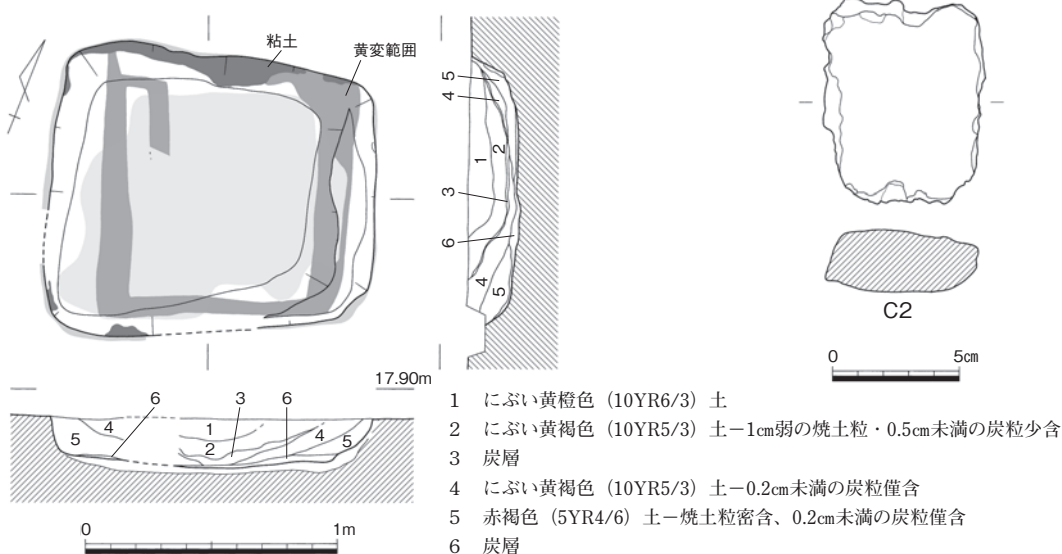
南壁中央にはいわゆるポケットと呼ばれる方形土坑P1がある。壁体溝はここで途切れていた。P1上部は83×70cmの不整形だが、下部はやや方形を呈しする。底面は平らで、深さ37cmを測る。側面は急に立ち上がり、断面逆台形を呈す。南東角には63×45cmの楕円形の土坑P2がある。深さ10cm前後で、底に方柱状の角礫が数本置かれていたが、用途は不明である。P3は径15cm、深さ8cmの柱穴で、規模は小さいが住居中央に位置しており、当住居に伴う柱穴としてここに挙げておいた。ほかに柱穴は検出できなかった。

出土土器には弥生時代中期後半～後期の遺物も混入していた。逆に竪穴住居2から出土した古墳時代前期の土器は当住居に帰属する可能性があり、ここに示した。古墳時代初頭に比定される。(渡邊)

## 2 土坑

### 土坑16 (第72・82図、巻頭図版2)

3区北東部で河道1の肩部に位置する。平面方形で、東西130cm、南北120～90cmを測り、東がやや狭い掘り方を持つ。壁には最大で12cmの厚さの粘土が貼ってあり、床面には炭層の第6層が4cm前後堆積している。このため、掘り方周辺と底面の基盤層はあまり熱影響を受けておらず、僅かな赤化が見て取れるだけであった。第6層を除去した底面には、最大幅約12cmの黄変が矩形に看取できた。黄変は北辺にはなく、内法で南北約80cm、東西は西側に2条みられ60～75cmを測る。第6層は壁の粘土幅分を除いてほぼ底全面に残っていたが、第3層はこの黄変の内側にのみ堆積している。埋土の堆積状況からは壁状の構造物の存在を読み取れなかったが、何らかの構造物を伴って使用されたと考えるべきであろう。埋土は全て水洗を行い肉眼と磁石で遺物採集を行ったが、須恵器の細片があったのみで鉄滓や鉄鉱石といった製鉄関連遺物は全くなかった。焼土塊C2は分析の結果1,160℃の耐火度を持つことが分かった。また、第6層から採取した炭化材の樹種と年代測定を行ったところ、クリ材でBP1,370±30の測定結果を得たが、周辺の状況から古墳時代後期頃と考えられる。

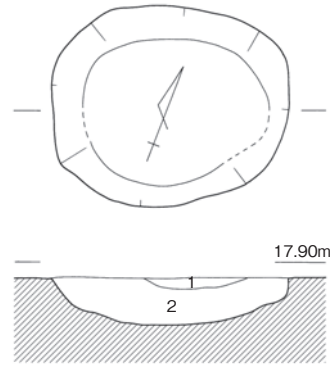


- 1 にぶい黄橙色 (10YR6/3) 土
- 2 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 土-1cm弱の焼土粒・0.5cm未満の炭粒少含
- 3 炭層
- 4 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 土-0.2cm未満の炭粒僅含
- 5 赤褐色 (5YR4/6) 土-焼土粒密含、0.2cm未満の炭粒僅含
- 6 炭層

第82図 土坑16 (1/30)・出土遺物 (1/3)

土坑17 (第72・83図)

3区東端中央に位置し、土坑16に近接する。長軸で93cmを測る楕円形の土坑で、埋土は炭を多く含む第1層と全く含まない第2層に分層できる。坑の壁や周囲基盤層に明確な被熱痕は認められず、性格は不明である。遺物はないが、土坑16との関連から古墳時代後期頃と推察される。



- 1 褐灰色 (7.5YR5/1) 砂質土  
-0.5×2cm程度の繊維状の炭多含
- 2 灰褐色 (7.5YR4/2) 砂質土  
-炭・焼土粒僅含

第83図 土坑17 (1/30)

土坑18 (第72・84図)

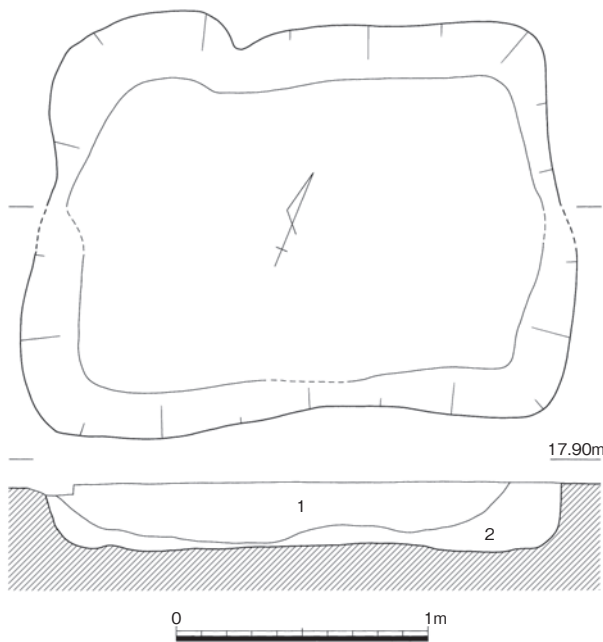
3区東端に位置する大型の土坑である。平面形は、埋土が基盤層よりも若干黄色みが強く粘性があり、炭と焼土を含むことから不整形形と判断した。底面も第2層土の堆積から判断したが、壁面や土坑周囲に比熱痕跡は認められなかった。性格は不明だが、炭・焼土粒が多くみられることから、土坑16と関連する可能性があり、時期も古墳時代後期と推察される。

土坑19 (第72・85図)

1区西端南部に位置する方形を呈する土坑である。埋土は基盤層とほとんど差がなく、かろうじて炭と焼土の混入状況から埋土を区別した。床面は北西隅が楕円形に窪む。焼土粒を多く含む第1層が堆積しているが第2層土との境界は不明瞭で、炭・焼土粒の埋没状況から分層した。床の窪みは底と壁面が比熱により僅かに赤化している。遺物は第1層上面でサヌカイト製の残核S92が出土したが混入品と判断した。その他の遺物は皆無であるため性格は不明で、周辺の状況から古墳時代と推測した。

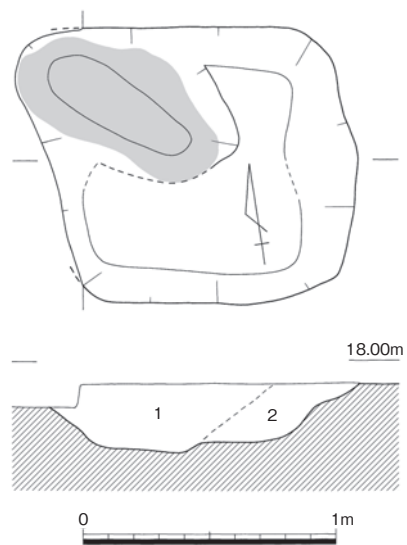
土坑20 (第72・86図)

1区西半南部に位置し、土坑1・2を切り縦穴住居9に近接する浅い土坑である。上面規模164×



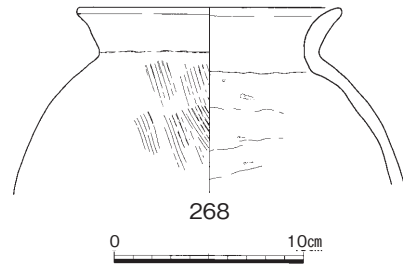
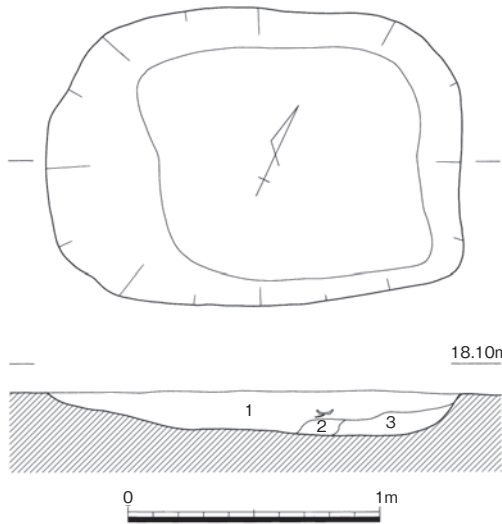
- 1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土-3cm前後の焼土塊少含
- 2 褐色 (10YR4/4) 砂質土-炭・焼土粒少含

第84図 土坑18 (1/30)



- 1 明褐色 (7.5YR5/6) 砂質土-焼土多含、炭少含
- 2 褐色 (10YR4/6) 砂質土-炭・焼土僅含

第85図 土坑19 (1/30)



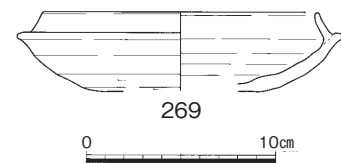
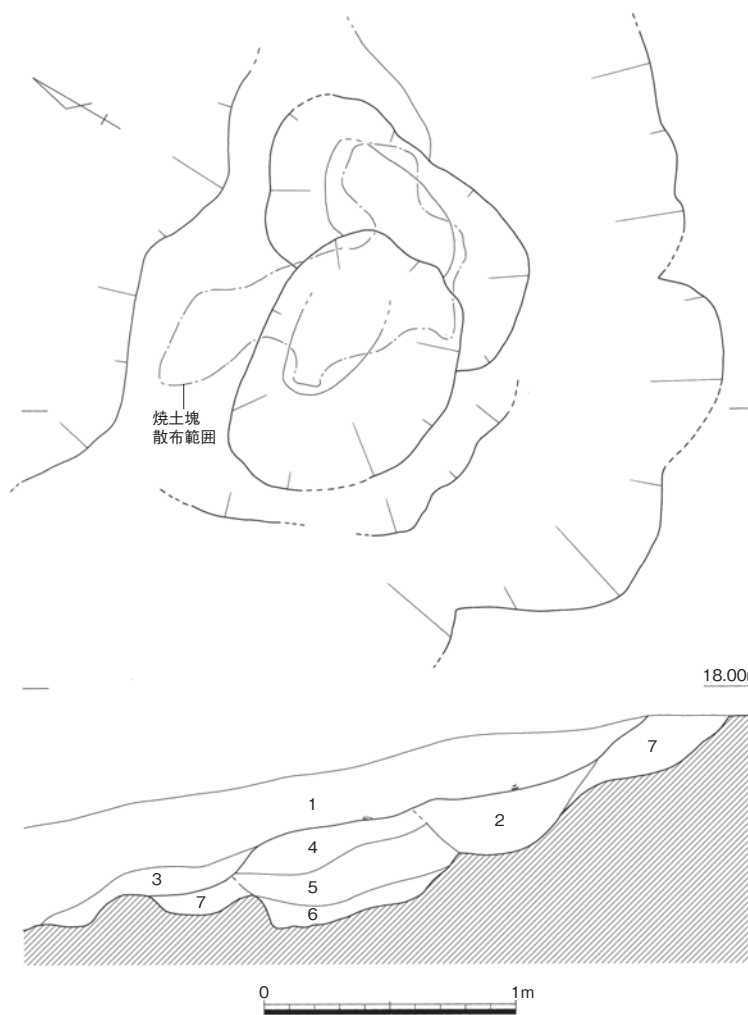
- 1 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 粘性砂質土-焼土少含
- 2 褐色 (10YR4/4) 砂質土
- 3 暗褐色 (7.5YR3/4) 粘性砂質土

第86図 土坑20 (1/30)・出土遺物 (1/4)

117cmの隅丸長方形を呈し、埋土は3層に分層される。第1層土中には炭と焼土に混じって弥生土器が多く含まれていたが、これらは本来土坑1・2に帰属するものと考えられ、土師器甕268から古墳

時時代後期と判断した。住居の付属施設とも考えられるが、竪穴住居9のP1に接しており、位置関係もやや西に寄っていることから別遺構と判断した。

土坑21 (第72・87図、図版12)  
1区西半中央で、河道1内



- 1 暗褐色 (10YR3/3) 粘質微砂  
-1cm前後の基盤土粒斑状に含
- 2 黒褐色 (10YR3/2) 粘質微砂  
-炭・焼土少含
- 3 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質微砂  
-焼土多含
- 4 暗褐色 (10YR3/4) 粘質微砂  
-炭・焼土僅含
- 5 黒褐色 (7.5YR3/2) 粘質微砂  
-炭・焼土僅含
- 6 暗褐色 (7.5YR3/3) 粘質微砂  
-焼土塊多含
- 7 褐色 (10YR4/4) 粘質微砂  
-3~5cm大の基盤土塊多混

第87図 土坑21 (1/30)・出土遺物 (1/4)

に位置する。土層観察から、第1～3層は古代以降の河道堆積物で第7層が河道1の堆積層と判断でき、弥生～古墳時代の河道1の南岸斜面を加工して土坑を造っている。河道上面から土坑底面までは約90cmの高さがある。土坑は2基重複しており、埋土中には人頭大の橙色の焼土塊が落ち込むように充填していた。焼土塊の胎土中にはスサなどの繊維痕は見られないが、高熱作業に伴う壁土であることは間違いない。壁面や床には比熱による赤化や硬質化などの痕跡は認められないが、南側の河道上面の基盤面に比熱面が確認され、何らかの関連があるかもしれない。土坑埋土も含めて周辺からは鉄滓や炭は出土していないため性格は明確でないが、製鉄に伴う作業に関連した遺構である可能性は高い。

時期は、掘り下げ中に出土した須恵器杯身269から6C後半頃に機能していたと考えられる。

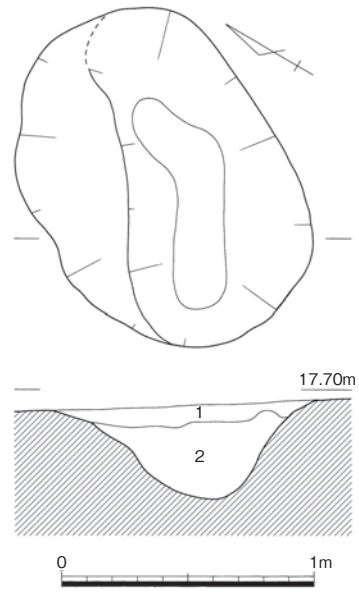
**土坑22 (第72・88図)**

1区中央北部で、河道1の肩部に位置する。上面楕円形だが、底面は溝状を呈する土坑である。埋土は2層に分層され、第1層中から須恵器杯蓋270が出土したほか、弥生土器の細片が少量ある。人為的な遺構かは不明だが、古墳時代後期頃に埋没したと考えられる。 (杉山)

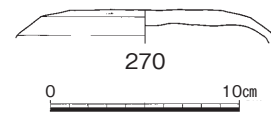
**3 溝**

**溝4 (第68・72・89図)**

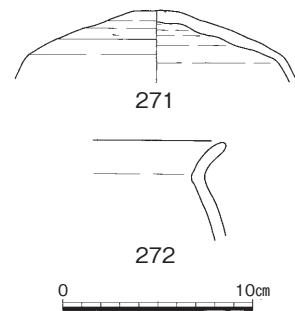
2区東端で、第68図MN第5層に対応する溝で、図示したように河道2に切られて西肩の一部を検出した。南北方向に流れており、河道2の前身となる流路と考えられる。埋土中からは須恵器杯蓋271、土師器甕272など土器小片に混じって製錬滓や鞆の羽口片C3・4が含まれている。これらには摩滅がみられないことから、近隣の和田製鉄遺跡からの流入品かもしれない。時期は、土器から古墳時代後期に流れていたと判断される。 (杉山)



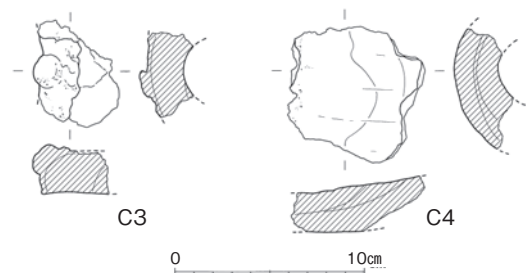
1 灰黄褐色 (10YR6/2) 砂質土  
2 黒褐色 (10YR3/1) 粘性砂質土



**第88図 土坑22 (1/30)・出土遺物 (1/4)**



**写真9 溝4埋土掘り下げ状況(北から)**

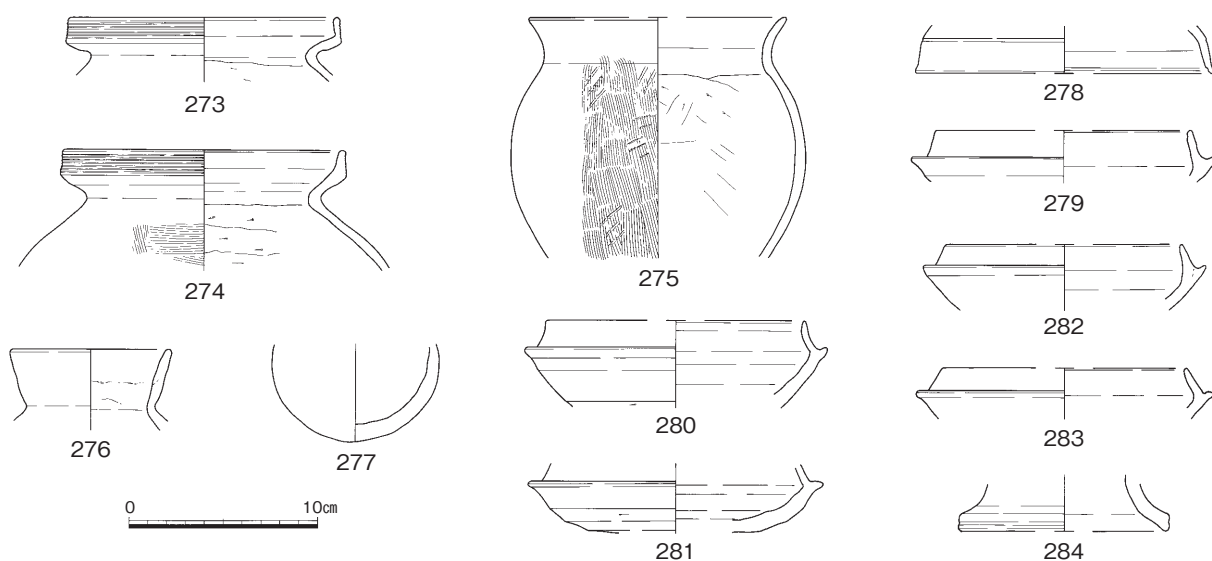
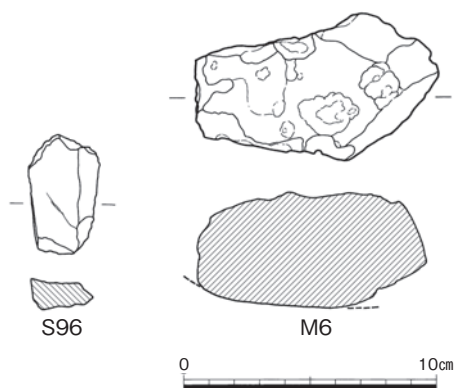


**第89図 溝4出土遺物 (1/4)**

## 4 河道

### 河道1・2 (第72・90図、図版13)

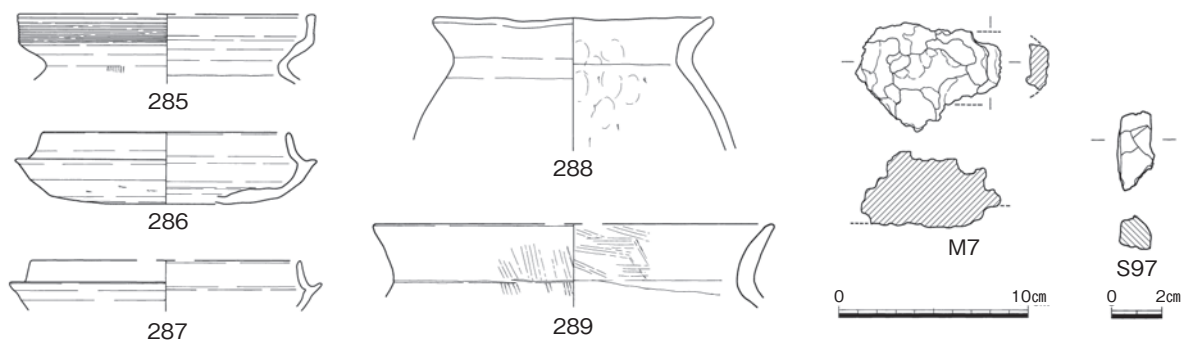
河道堆積層のうち、古墳時代の遺物のみ含む層はなく、弥生土器と混在した状況で出土している。図示した遺物は全て河道1のものであり、河道2からは細片が僅かに出土したのみである。河道1出土遺物は微高地上から転落した可能性が高く、鉄鉱石S96・炉底塊M6も河道1から出土した。6C後半～7C初頭に位置付けられる須恵器が出土しており、製鉄に関わる集団の存在が示唆される。



第90図 河道1出土遺物 (1/3・1/4)

## 5 その他の遺構・遺物 (第91図)

時期の異なる遺構に混入したり、掘り下げ途上で出土したりした土器をここに掲載する。柱穴は検出できていない。前期と後期の土器で、竪穴住居出土土器の様相と合致している。流出孔滓M7および鉄鉱石S97は1区と3区の境に設定されたトレンチから出土した。(渡邊)

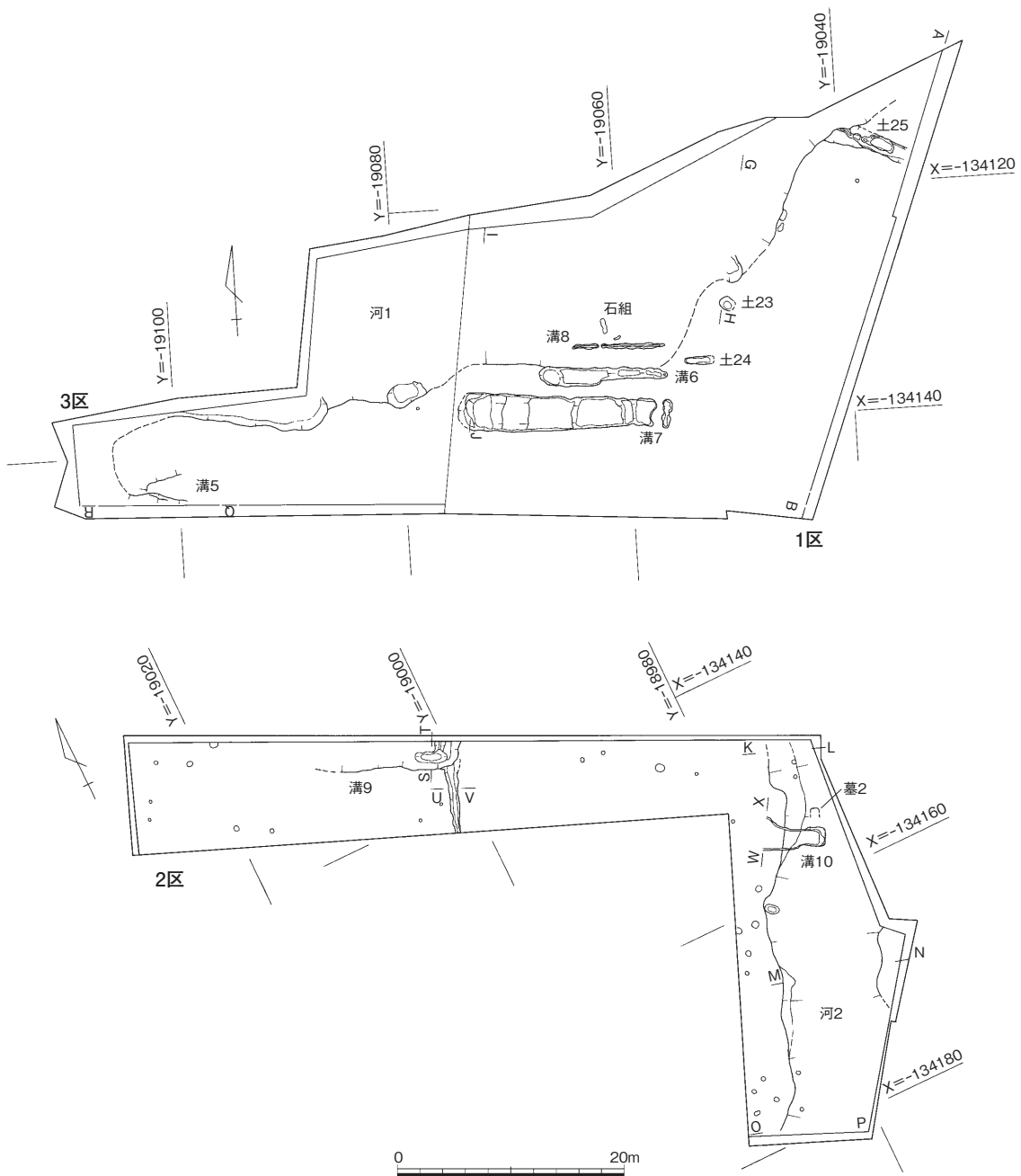


第91図 その他の出土遺物 (1/3・1/4)



### 第4節 古代以降の遺構・遺物

古代に比定される明確な遺構はない。しかし河道2からは比較的多くの土器が出土している。中世は希薄ではあるが2区を中心に土坑墓1基と溝、柱穴数基が検出されている。1・3区ではほとんどみられず、削平された可能性が高い。また、河道堆積状況から、中世段階に微高地は側方を大きく浸食され、後退したようである。一方、近世の遺構は2区にはなく、1区で土坑3基と溝を検出したにすぎない。より南方に集落が展開していたと想定される。(渡邊)



第92図 古代以降の遺構配置図 (1/600)

# 1 墓

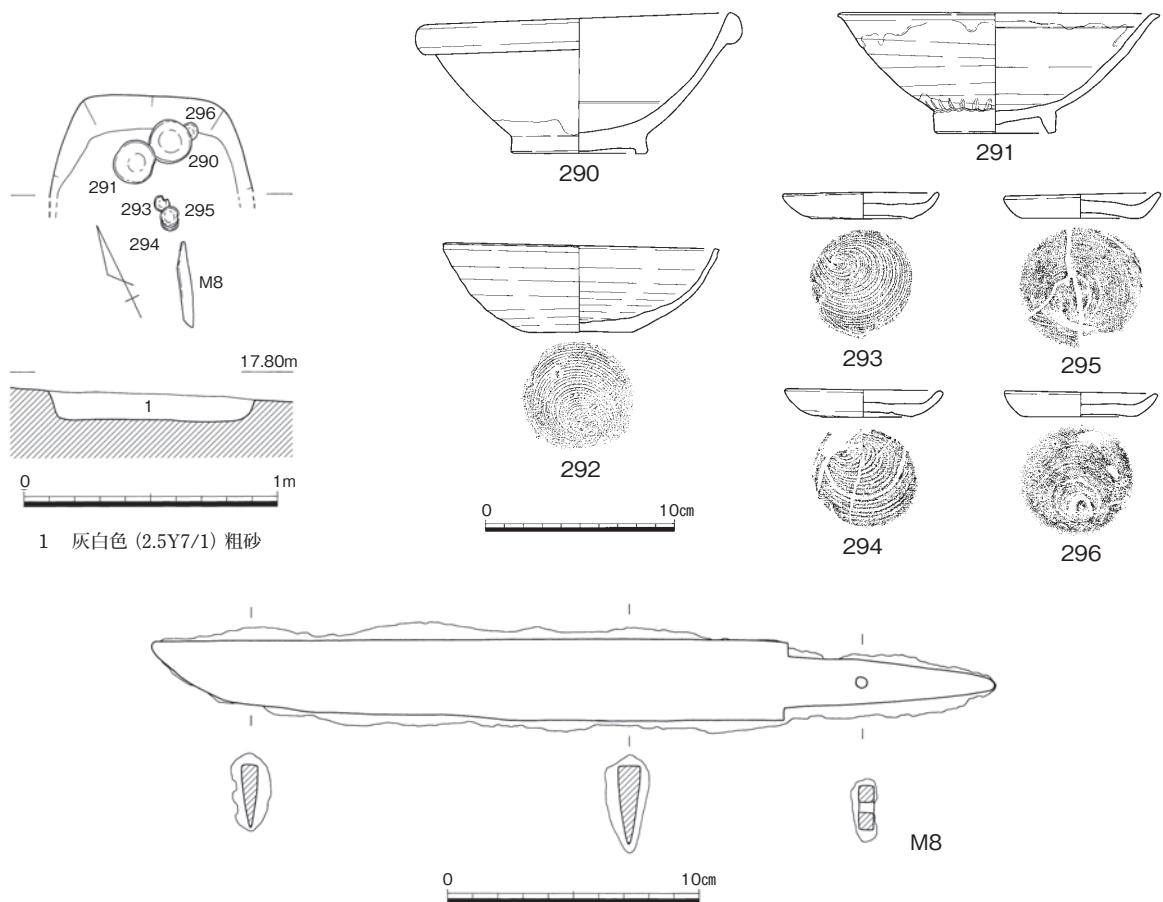
## 墓2 (第92・93図、写真10、図版13・17・18)

2区北東部で、河道2が埋没したのちに、肩部から100cm下がった低位部に築かれている。河道埋土掘削中に備前焼碗292が出土した。その後、鉄製の腰刀M8を検出したことから、周辺を精査したところ、輸入白磁碗290・291、土師器小皿293～296が出土した。河道埋土の砂中に掘削されていることから、掘り方の検出は困難であったが、土層の断面観察と土質の若干の差違から東西幅80cmの長方形と判断した。出土遺物は、北壁に沿って底に貼り付いた状態で白磁が並べられ、白磁の下に296が置かれていた。そのすぐ南中央に糸切り底の小皿293～295が重なって置かれ、さらに南中央に腰刀が置かれていた。備前焼碗は厳密な出土位置は不明だが、腰刀よりも南側で出土している。腰刀は墓坑長軸に合わせて南北に置かれ、柄を北に、刃を西にして出土した。木質は確認できなかったが、X線写真で目釘穴があることが判明した。

時期は、備前焼の碗から鎌倉時代の初め頃と考えられ、この頃には河道が東側に流路を変えたと考えられる。  
(杉山)



写真10 墓2遺物出土状況 (北西から)



第93図 墓2 (1/30)・出土遺物 (1/3・1/4)

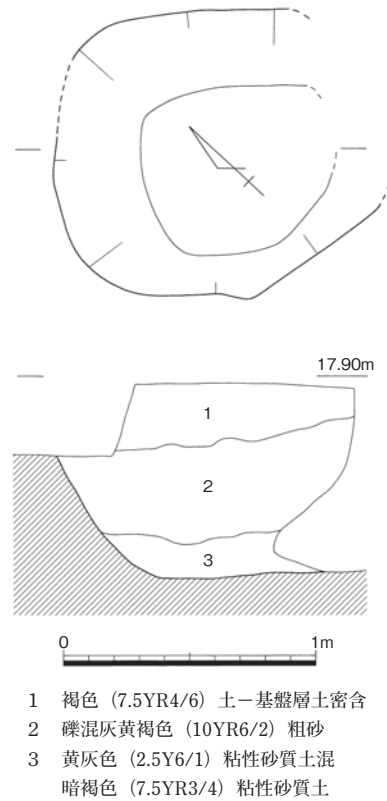
## 2 土坑

### 土坑23 (第92・94図)

1区中央に位置し、東辺を近世以降の石垣をもつ用水により削られている。深さ77cmと深く、底面は平らで埋土は3層に分層できる。第2層土は均一な粗砂であることから、使用時に開放していた坑が洪水によって一気に埋まったと考えられる。第1層土には基盤層土塊が密に含まれ、また比較的硬く締まっていることから、人為的埋め戻されたと判断できるが、機能については明確にできない。出土遺物はないが、埋土の状況と石垣を持つ用水との関係から江戸時代と推察される。

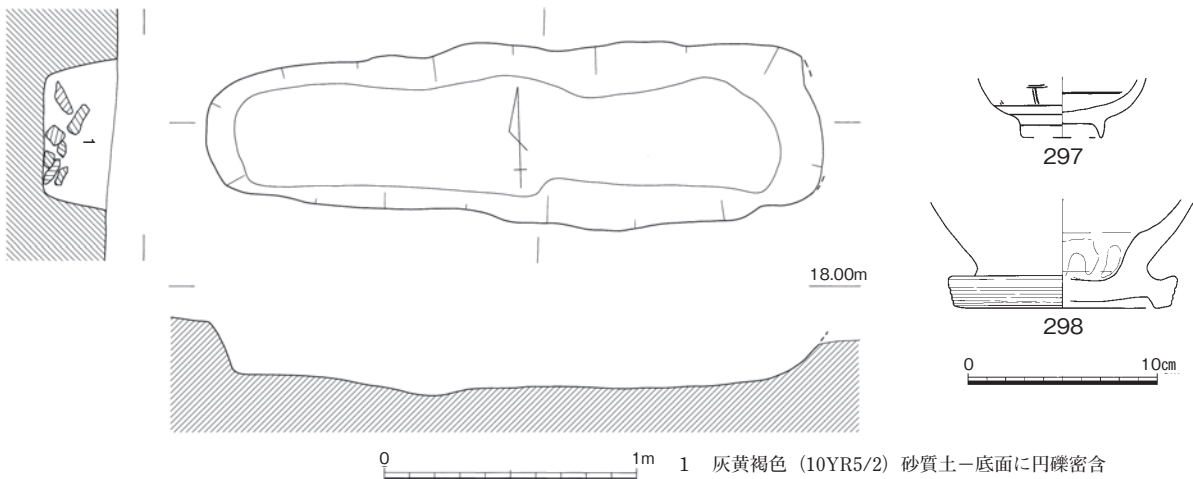
### 土坑24 (第92・94図、図版13)

1区中央で東西方向を主軸とした長楕円形の土坑である。壁は垂直に近い立ち上がりを持ち、底は若干凹凸はあるがほぼ平らである。東半分のみ拳～人頭大の円礫が充填され、礫に混じって平瓦片や染付磁器碗297、施釉陶器の植木鉢298の破片が出土した。埋土は砂質の強い土の単層で、人為的な埋め戻しか、流入土かの区別は難しい。出土陶磁器から19C前半頃と判断され、墓の可能性もあるが断定できない。



- 1 褐色 (7.5YR4/6) 土-基盤層土密含
- 2 礫混灰黄褐色 (10YR6/2) 粗砂
- 3 黄灰色 (2.5Y6/1) 粘性砂質土混  
暗褐色 (7.5YR3/4) 粘性砂質土

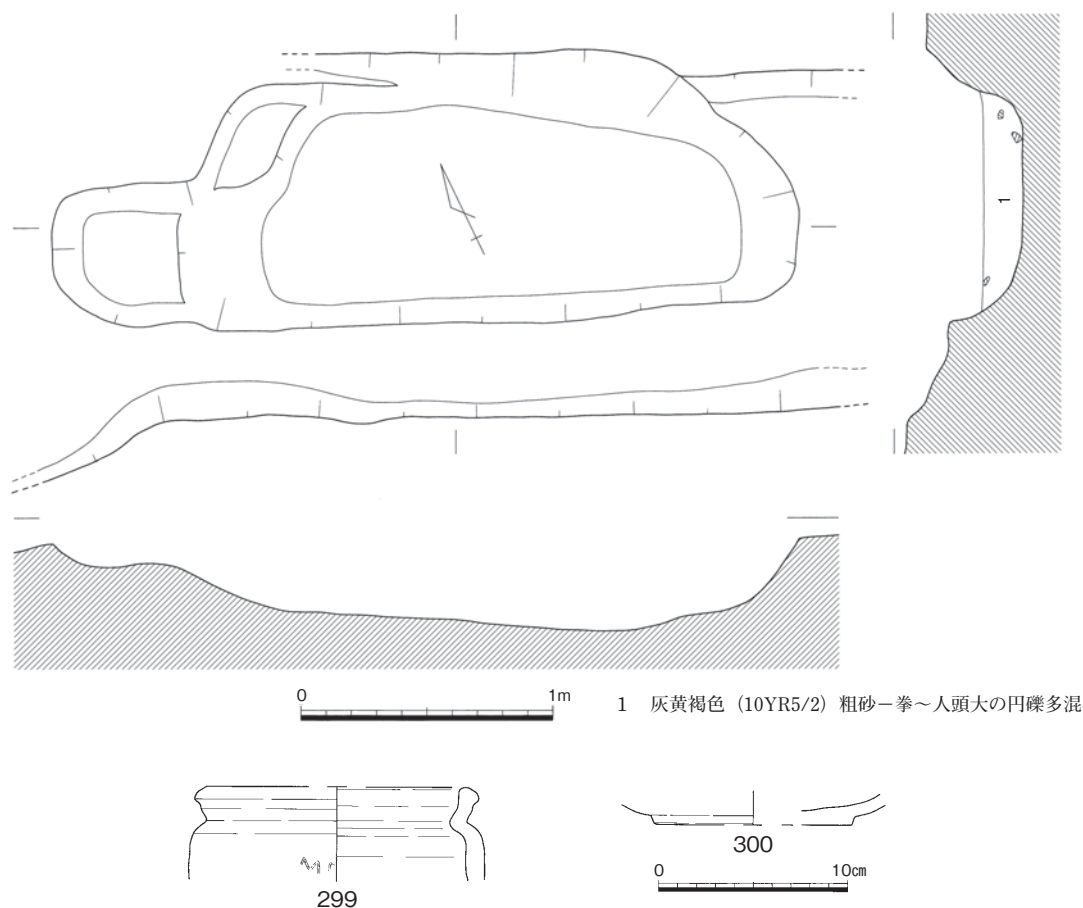
第94図 土坑23 (1/30)



第95図 土坑24 (1/30)・出土遺物 (1/4)

### 土坑25 (第92・96図)

1区東半の北端に位置し、東西方向を主軸とする長だ円形の土坑である。土坑は幅130cm、深さ15cmほどの浅い溝の中央に掘られており、埋土も同質であったことから、溝と共に機能していたと考えられる。溝の底の高さから土坑埋土中位まで拳～人頭大の垂円礫～垂角礫が見られたが、意図的に組まれた状況はなく、粗砂とともに流れ込んだものと考えられる。出土遺物には、備前焼の小型の甕299と大皿300があり、江戸時代後半に埋没したと判断される。(杉山)



第96図 土坑25 (1/30)・出土遺物 (1/4)

### 3 溝

#### 溝5 (第92・97図、図版18)

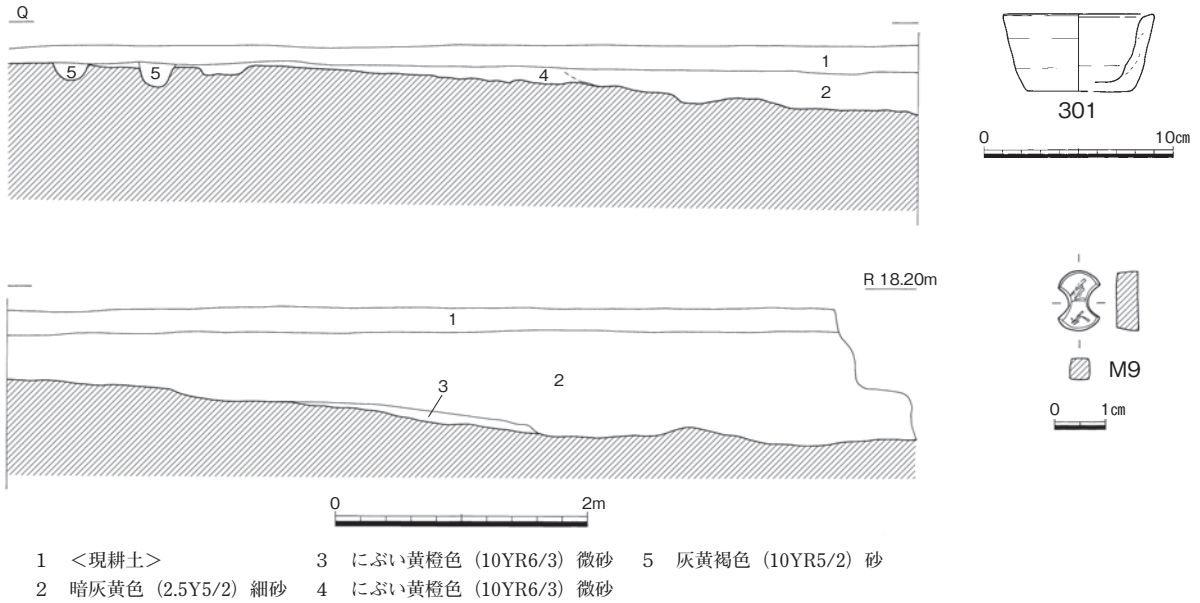
3区南西端に位置する。北側の肩口のみ検出した。東西方向の流路で、河道1に合流すると想定される。第97図第2層が流路内堆積層に対応する。微高地上面に広くオーバーフローしており、境界は判然としなかった。最も深い所で深さ90cm、底面の標高16.96mである。

備前焼鉢301、分銅M9などが出土している。分銅には片面に毛彫りが施されていた。

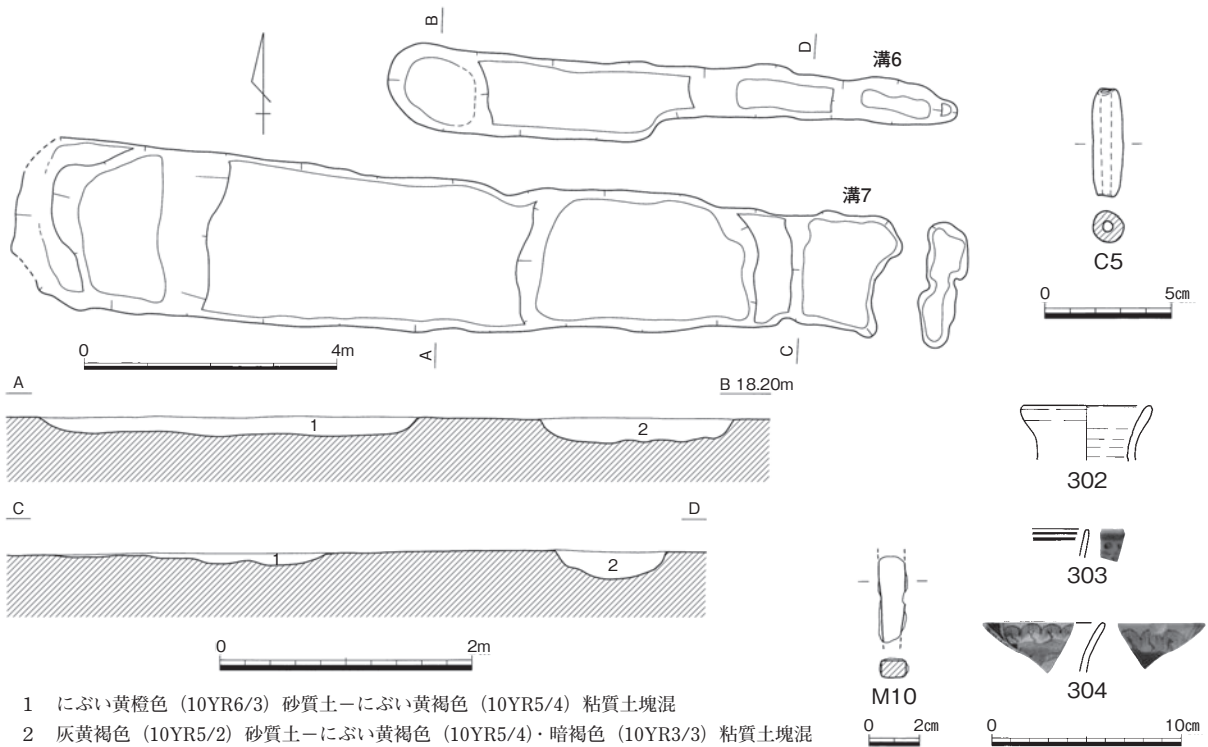
#### 溝6・7 (第92・98図、図版13)

1区西半の、河道肩口に沿って位置する東西方向の溝である。溝6は最大幅1.6m、深さ20cm、底面の標高17.7~17.8m、溝7は最大幅3.2m、深さ15cm、底面の標高17.7~17.9mを測る。底面には段がある。幅や埋土色調に差があるものの、両者とも白を基調とする砂質土に黄色と暗褐色の粘土塊が混在する土で埋没しており、両者はあまり時間を隔てずに機能していたと考えている。屋敷地の区画溝の可能性も想定し、1区より西に延びることから3区を新たに調査区に追加して検出に努めたが、方形に屈曲する部分も検出できず、確証は得られなかった。

図示した遺物は全て溝7であるが、溝6からも中国産磁器が出土している。303は景德鎮磁器碗で16C代に、304は肥前磁器の六角鉢で19C前半に比定される。このほかにも16C末~17Cの肥前磁器や18C代の関西系陶器などが出土している。近くに屋敷地の存在が示唆される。



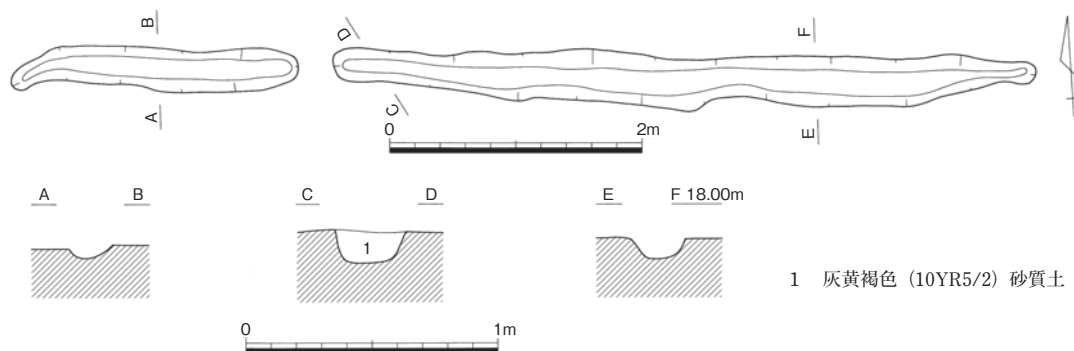
第97図 溝5 (1/60)・出土遺物 (2/3・1/4)



第98図 溝6・7 (1/150・1/60)・溝7出土遺物 (1/3・1/4)

溝8 (第92・99図)

溝6の北に位置し、溝6に並行する東西方向の溝である。幅40cm、深さ25cmを測る。壁体はやや急に立ち上がり、逆台形を呈す。縄文土器や弥生土器、須恵器、白磁など様々な時期の土器が出土し、時期は特定し難い。溝6・7と並行することから同時期の可能性もあるが、埋土はまったく異なる灰色系の少し粘性のある土で、中世に遡る可能性もある。



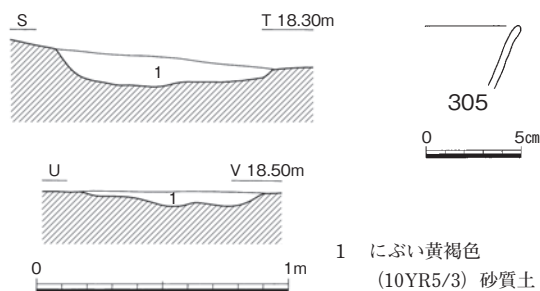
第99図 溝8 (1/30・1/60)

溝9 (第92・100図)

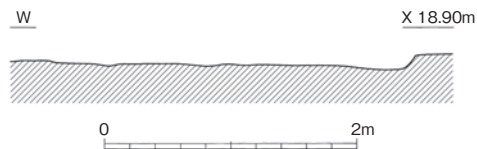
2区中央部に位置する。微高地上面の砂層除去後に検出した。西に矩形に曲がり、その角はやや深くたわんでいた。微高地斜面上面を覆う、中世以降に堆積したと思われる砂層で埋没していた。図示した青磁碗305のほか土師器鍋などが出土しており、中世に比定される。

溝10 (第92・101図)

2区東端北半に位置する東西方向の溝である。耕作土直下で検出した。幅2.9m、深さ12cmのたわみ状を呈している。近世以降の耕作土と同様の土で埋没しており、耕作に伴う溝と考えられる。17C後半～18C前半の肥前磁器、18C後半や19C代の関西系陶器、中国産磁器などが出土している。(渡邊)



第100図 溝9 (1/30)・出土遺物 (1/4)



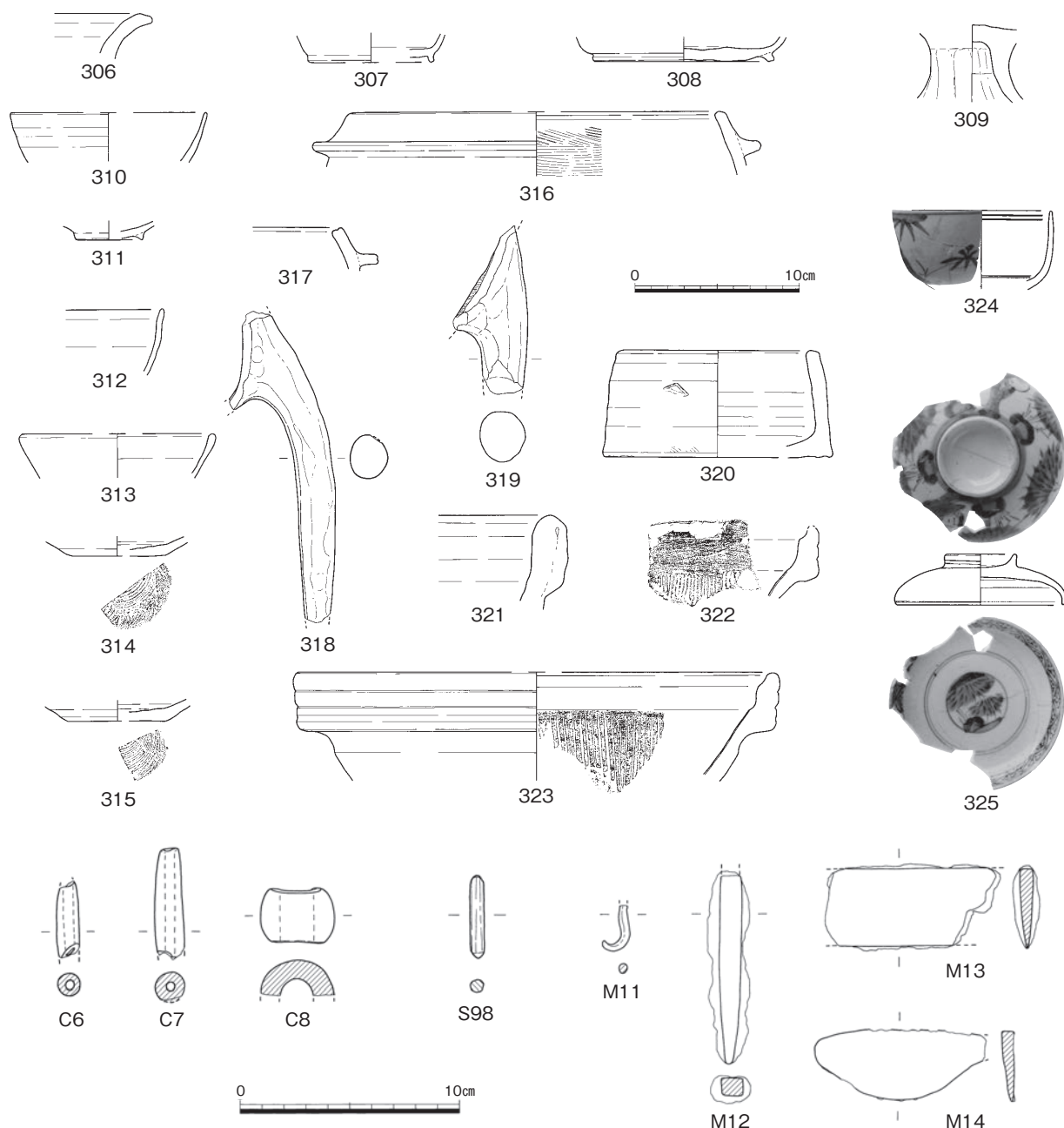
第101図 溝10 (1/60)

4 河道

河道1 (第27・65・92・102図図版20)

第27図A B第4層、第65図G H第4層、I J第7～11層が中世以降の堆積層と考えている。1区では弥生～古墳時代の流路より内側に堆積層端部が入り込んでいるが、I J第6層に看取されるように1区西端から3区にかけては外(微高地)側にオーバーフローし、流路を拡大している。

出土遺物は多様であるが、各時期の遺物が層順に従って出土したわけではない。奈良時代の土師器高杯309や中世の土師器碗310・311、備前焼碗312～315、近世の備前焼320～323、肥前磁器324・325、土錘、鉄器などがある。図示したほか、青磁や瓦質土器、瓦、鉄滓も出土している。325は18C末に比定される。古代の遺物は量も少なく、微高地上に遺構も見当たらないことから、遠方より流れ込んできたと想定される。



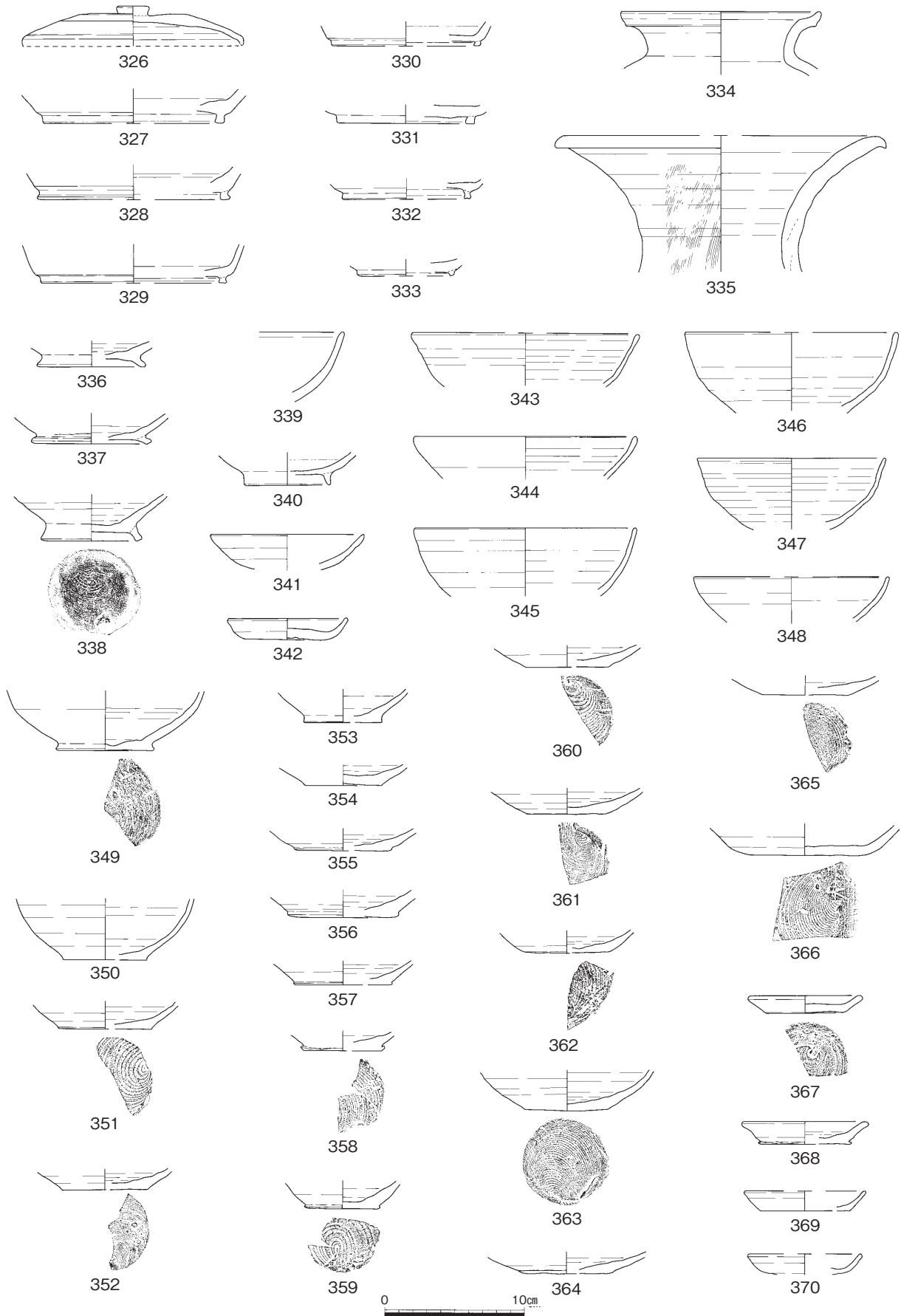
第102図 河道1出土遺物 (1/3・1/4)

河道2 (第27・68・92・103~105図、写真11、図版13・20)

第27図C D第4層、第68図K L第3層、MN第2~4層、O P第1~6層が古代以降の堆積層に相当する。特にO P断面では第4・5層を境界として、河道1や2区微高地上面を覆っていた中世以降の遺物を含む黄色砂に対応する第1~3層と暗灰色の粗砂からなる第6層に大きく分かれている。第4層自体は粘性の強いしまった土で、第6層と第1~3層では堆積の段階にある程度の隔たりがあったと推察される。一方、墓2の存在からは河

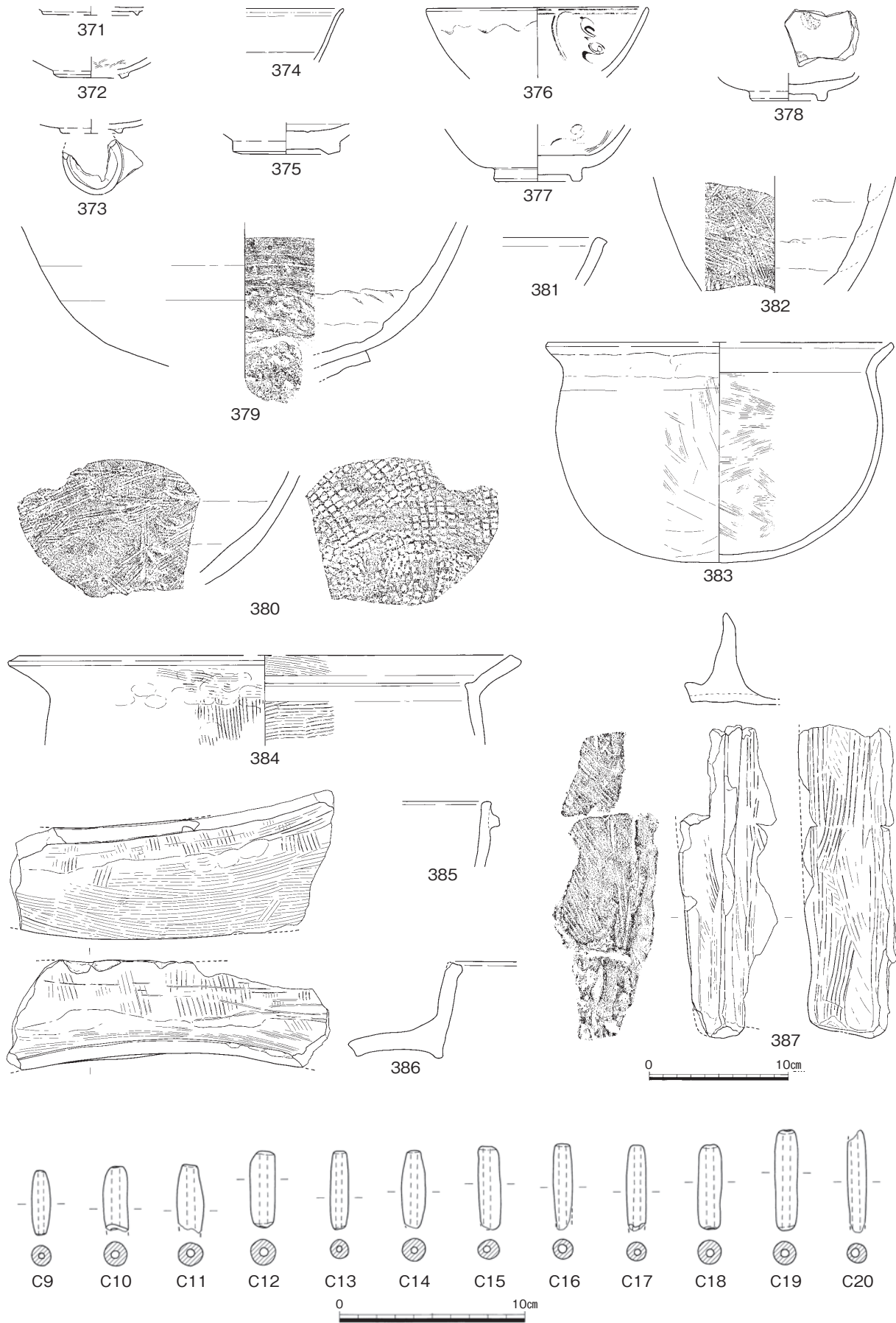


写真11 河道2土層断面 (北から)

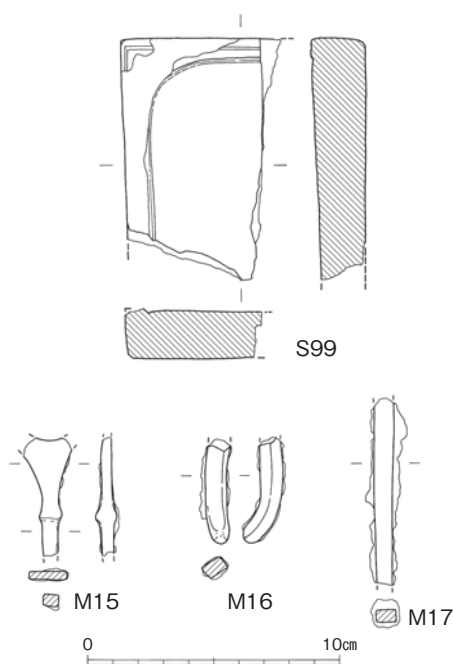


第103図 河道2出土遺物① (1/4)





第104図 河道2出土遺物② (1/3・1/4)



第105図 河道2出土遺物③ (1/3)

道内埋積の進行が一時停止していたこと示唆しており、第6層から比較的多くの古代の遺物が出土する状況を鑑みると、第6層が古代以前の堆積層に、第1～3層が中世以降の堆積層に対応するとみて大過ないであろう。河道1ではこの第6層に相当する堆積層は確認できていない。工事計画高から標高17.7mまで掘削を進めたが、底には達していない。

出土遺物には奈良～平安時代の須恵器杯・椀・壺、中世の土師器椀・皿・鍋、備前焼椀・皿、白磁碗、青磁碗、瓦質土器、近世の肥前陶器のほか土錘C9～20、硯S99、雁又鏃M15、鉄釘M16・17などがある。371・372は瓦器である。土師器鍋384、土製カマド386は河道下層から出土しており、平安時代に遡る可能性がある。平安時代の須恵器椀338も下層から出土した。河道1と比べて種類・量共豊富で、遺存状態も良いことから、当遺跡からさほど遠くない上部の集落から流入してきたものと考えられる。

## 5 その他の遺構・遺物 (第92・106図、写真12、図版18)

中世以降と位置付けた柱穴は河道内中世以降堆積層と同様の黄色い砂で埋没した柱穴で、ほとんどが2区に立地する。388はP9、389はP10、390・391はP11、392はP12、393はP13、394はP14、395はP15、396・397はP16、398はP17、C21はP8から出土した。いずれも中世に比定される土器細片で、河道2西肩口の緩斜面上に立地する傾向が看取される。おそらく微高地上の集落本体は削平を受けて消滅し、逆にやや低い緩斜面上の柱穴の幾つかが削平を免れ遺存していたと考えられる。

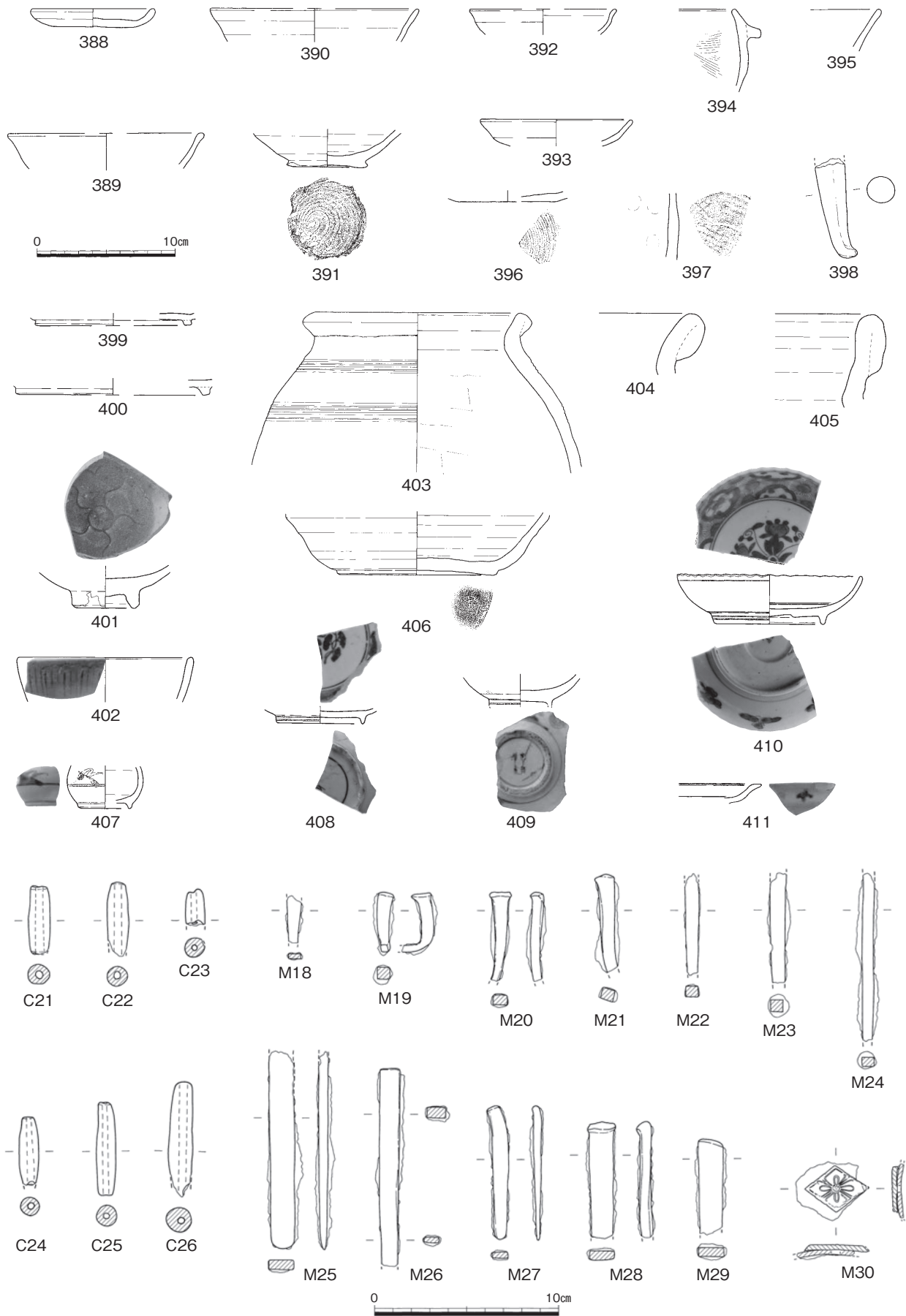
平安時代や江戸時代の遺物は他遺構に混入もしくは重機掘削中や側溝掘削中に出土しており、細片で量も僅かである。特に平安時代の遺物は河道出土品と比べると遺存状態も悪く、おそらく微高地上に当該期の集落は存在していなかったと推察される。近世陶磁器は少ないながらも彰州窯磁器や17C前半の肥前陶器なども出土しており、一般農村とは異なる性格を示唆している。

河道1の斜面では古墳時代とした土坑21上部に重複した位置で石組みを検出した(写真12)。人頭



写真12 石組調査風景 (北西から)

大以上の川原石及び角礫を用いて東西並行に並べ、上部にやや扁平な礫を天井のように架していた。斜面側(南)に奥壁はなく、河道側(北)は削平されて不明である。外寸幅36cm、残存長1.24m、側壁の高さは9cmである。底面に石敷きはなく、微高地側から河道側へ低く傾斜していた。構築時の掘り方は確認できず、出土遺物もなく時期や性格は不明である。土坑21との関係から古墳時代以降に位置付けられ、近世以降の可能性もある。(渡邊)



第106図 柱穴8~17・その他の出土遺物 (1/3・1/4)

## 第5節 小結

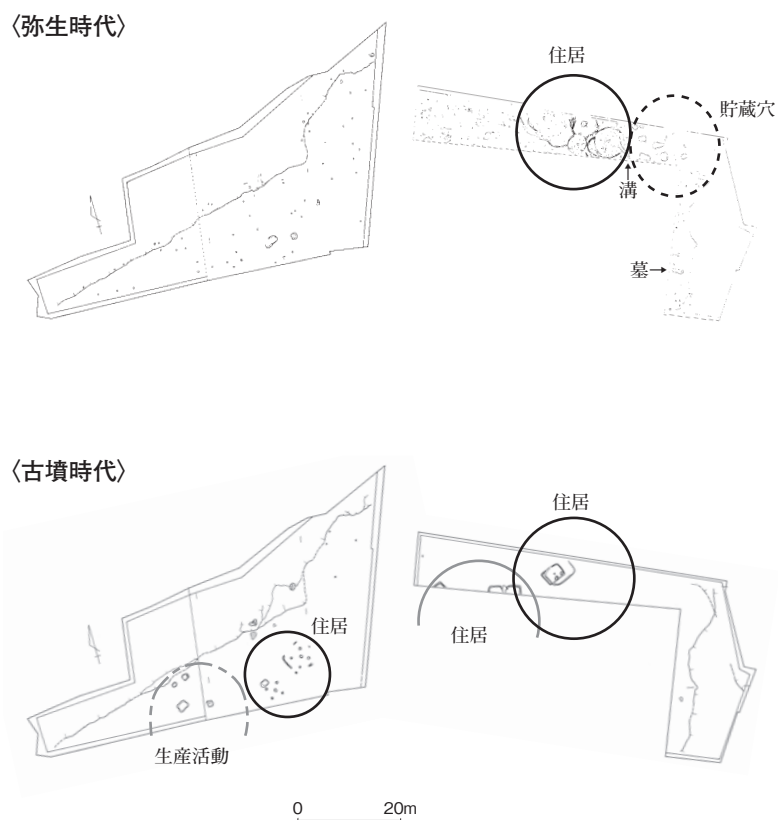
調査した主な遺構は弥生時代の竪穴住居8軒、木棺墓1基、土坑15基、古墳時代の竪穴住居6軒と土坑7基、中世の土坑墓1基、近世の土坑3基、河道2条である。主体となる時期は弥生時代中期～古墳時代後期であり、ここでは古墳時代以前の動向を概観して小結としたい。

出土土器のうち最も古く位置付けられるものは205・206で、3条の沈線帯による文様構成から福田KⅡ式に比定される。縄文土器の多くは河道や他遺構に混入しており、集落の初現を証左するものではないが、2区西端では晚期中葉の土器を含む柱穴が4基検出されており、遅くともこの頃には集落が扇状地内に営まれていたと想定される。続く弥生時代前期～中期前半の遺構は見られないが、土器は数点採取している。谷奥にあたる南方からの流入であろう。

弥生時代中期前半には2区の微高地中央部に竪穴住居が出現する。竪穴住居は古墳時代前期まで住域を踏襲して構築されており、同一集団による占地と考えて良いであろう。出土土器の様相や切り合いから5・8→3→4→1・7→2→14→13の順に構築されたと考えられる。「1〇土坑」を有するものが比較的多く、竪穴住居2では屋内周縁に高床部を設けるなど播磨地域の影響が看取される。竪穴住居の東側には方形の土坑が多く築かれており、形状から貯蔵穴群と考えている。出土遺物から時期の特定できるものは後期中葉の土坑10のみであるが、竪穴住居に伴って順次掘削された可能性があり、集落内の空間利用が図107のように想定できよう。また溝3は貯蔵穴群の区画溝もしくは住居と貯蔵穴群との境界と位置付けられよう。なお1区にも古墳時代前期に竪穴住居が構築されるが、住

居平面プランが異なっており、集団差を反映している可能性が考えられる。

古墳時代後期には集落が再開されるが、時間的な断絶が大きく、前段階と同一集団とはみなし難い。2区西半に竪穴住居11・12、3区東端に土坑16が構築される。両住居からは鉄滓が、竪穴住居12からは鞆羽口が出土しており、製鉄との強い関わりが推察される。谷西側の丘陵部では製鉄遺跡も散見され、鉄生産の開始が再び集落をこの地に営む契機となったことが示唆される。(渡邊)



第107図 主要遺構変遷図 (1/1,500)

## 第5章 成ル古屋遺跡

### 第1節 調査の概要

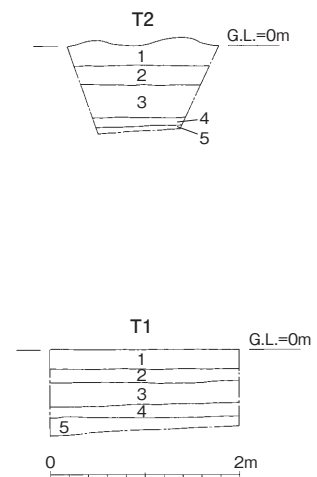
遺跡は、氾濫平野に立地し、熊山山塊の谷間から流れてくる和田川の西岸に位置する。赤磐市教育委員会の確認調査（T15）によって、古代～中世の遺構が確認されたので、これより北側の掘削部分を対象として調査区を設定した。

調査開始前に、確認トレンチT15より南の水田が一部掘削されることが分かり、T1・2を設定して土層堆積と遺構の確認を行った。その結果、現地表から深さ約90cmで確認調査時の遺構面と対応する第109図第5層上面を確認した。この遺構面までには遺物包含層はなく、遺構面も掘削予定深度よりも低いことから、本地点は調査対象から除外した。

表土掘削後、土層確認のために調査区南壁沿いにトレンチを設定したところ、確認調査では検出していなかった弥生時代の遺物包含層（第110図第8層）と、遺構面の可能性のある第16層を確認した。第8層は第11～14層で形成される砂礫帯の裾に堆積しており、調査区東半に堆積していた。西端で第12層を深掘りしたところ、人頭大の岩が密に入り、少量の弥生土器を含んだ第13層が厚く堆積していた。第16層も西側に下がることから、調査区西側が旧河道か土石流の流路であったと推定された。

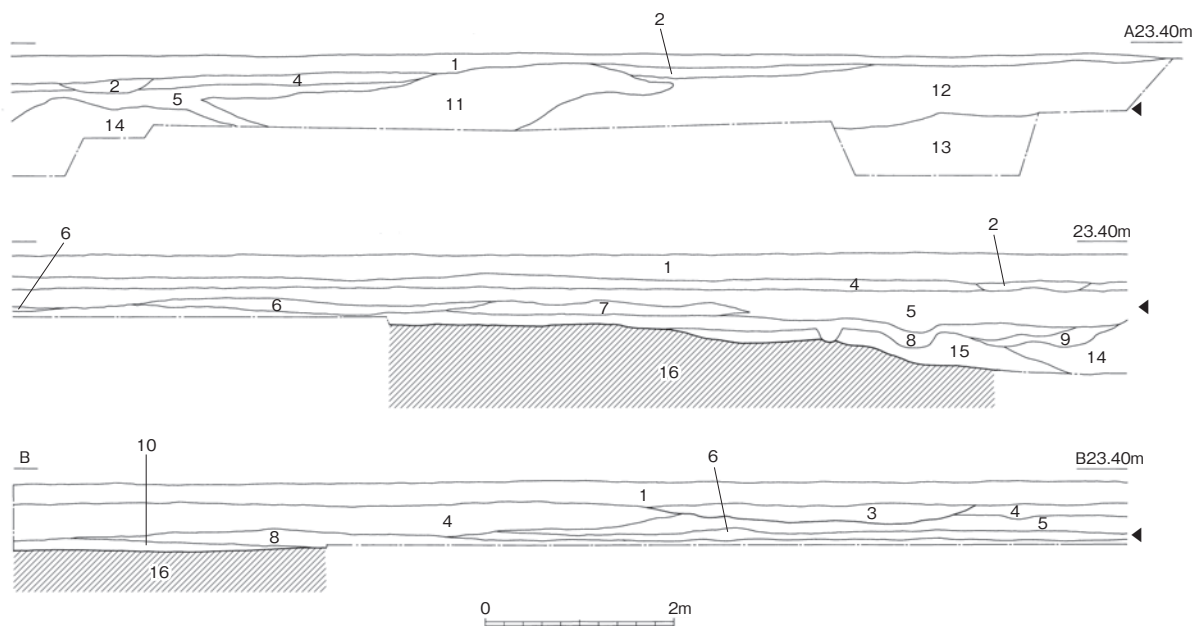


第108図 基盤整備計画と調査区配置図 (1/2,500)



- 1 現耕土
- 2 床土
- 3 褐灰色 (7.5YR4/2) 砂礫
- 4 灰黄褐色 (10YR4/2) 粗砂
- 5 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂  
一炭少含

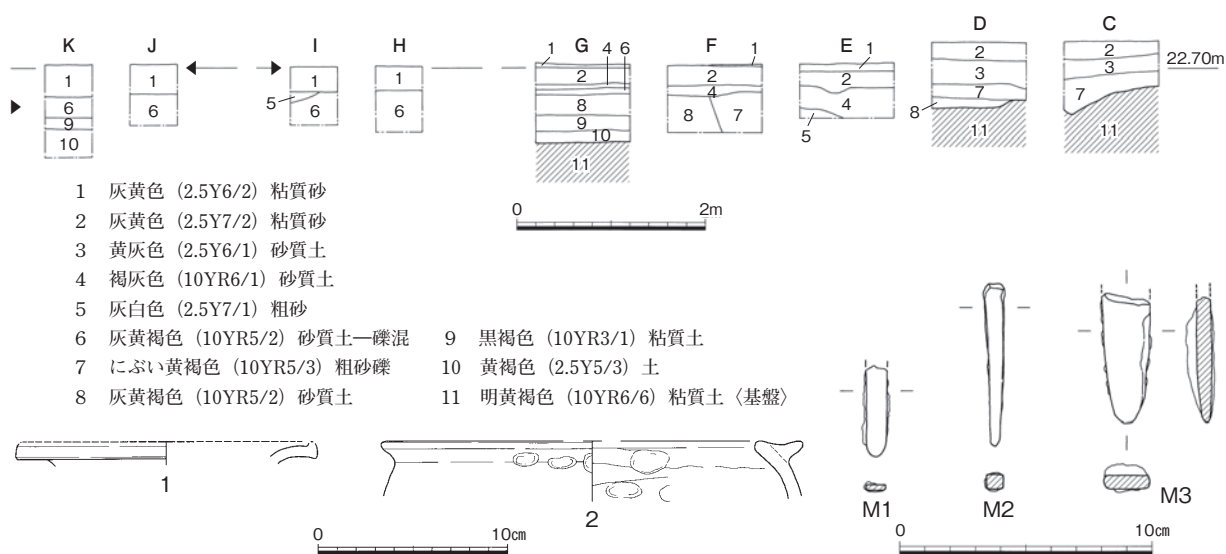
第109図 T1東壁・T2北壁 (1/80)



- |                          |                      |                         |                       |
|--------------------------|----------------------|-------------------------|-----------------------|
| 1 灰黄色 (2.5Y6/2) 粘質砂 (床土) | 5 灰黄褐色 (10YR5/2) 砂質土 | 10 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土 | 15 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土 |
| 2 黄灰色 (2.5Y6/1) 砂質土      | 6 暗褐色 (10YR3/3) 粘質微砂 | 11 褐灰色 (10YR6/1) 粗砂礫    |                       |
| 3 黄灰色 (2.5Y6/1) 砂質土      | 7 礫層                 | 12 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 細砂  | 16 明黄褐色 (10YR6/6) 粘質土 |
| 4 褐灰色 (10YR6/1) 砂質土      | 8 黒褐色 (10YR3/1) 粘質土  | 13 褐灰色 (10YR6/1) 粗砂礫    | 一炭僅含 (基盤)             |
|                          | 9 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 砂 | 14 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 粗砂礫 |                       |

第110図 調査区南壁 (1/80) ←は工事高を示す。

第110図第16層上面は、調査区東半において標高約22.7mでほぼ水平であった。この広がりを確認するために調査区内に南北トレンチを設定したところ、緩やかに北に下がる状況を確認した。そこで、北隣りの水田での広がりも確認するためT3～7を設定して調査を行ったが、いずれも遺構面や遺物包含層は存在しなかった。第111図第1～4層からは、弥生時代の甕1や室町時代の羽釜2など室町～江戸時代の土器、陶磁器の小片などが出土しており、中世以降の氾濫源であると判断した。図示した鉄器はM1・2が釘、M3は厚みがあるので楔と考えられる。以上の結果から、掘削計画が22.70mでT5北端だけ22.30mだが、北側の水田は調査対象としないこととした。(杉山)



- |                         |                            |
|-------------------------|----------------------------|
| 1 灰黄色 (2.5Y6/2) 粘質砂     | 9 黒褐色 (10YR3/1) 粘質土        |
| 2 灰黄色 (2.5Y7/2) 粘質砂     | 10 黄褐色 (2.5Y5/3) 土         |
| 3 黄灰色 (2.5Y6/1) 砂質土     | 11 明黄褐色 (10YR6/6) 粘質土 (基盤) |
| 4 褐灰色 (10YR6/1) 砂質土     |                            |
| 5 灰白色 (2.5Y7/1) 粗砂      |                            |
| 6 灰黄褐色 (10YR5/2) 砂質土—礫混 |                            |
| 7 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 粗砂礫  |                            |
| 8 灰黄褐色 (10YR5/2) 砂質土    |                            |

第111図 T3～7東壁 (1/80)・出土遺物 (1/3・1/4) ←は工事高を示す。

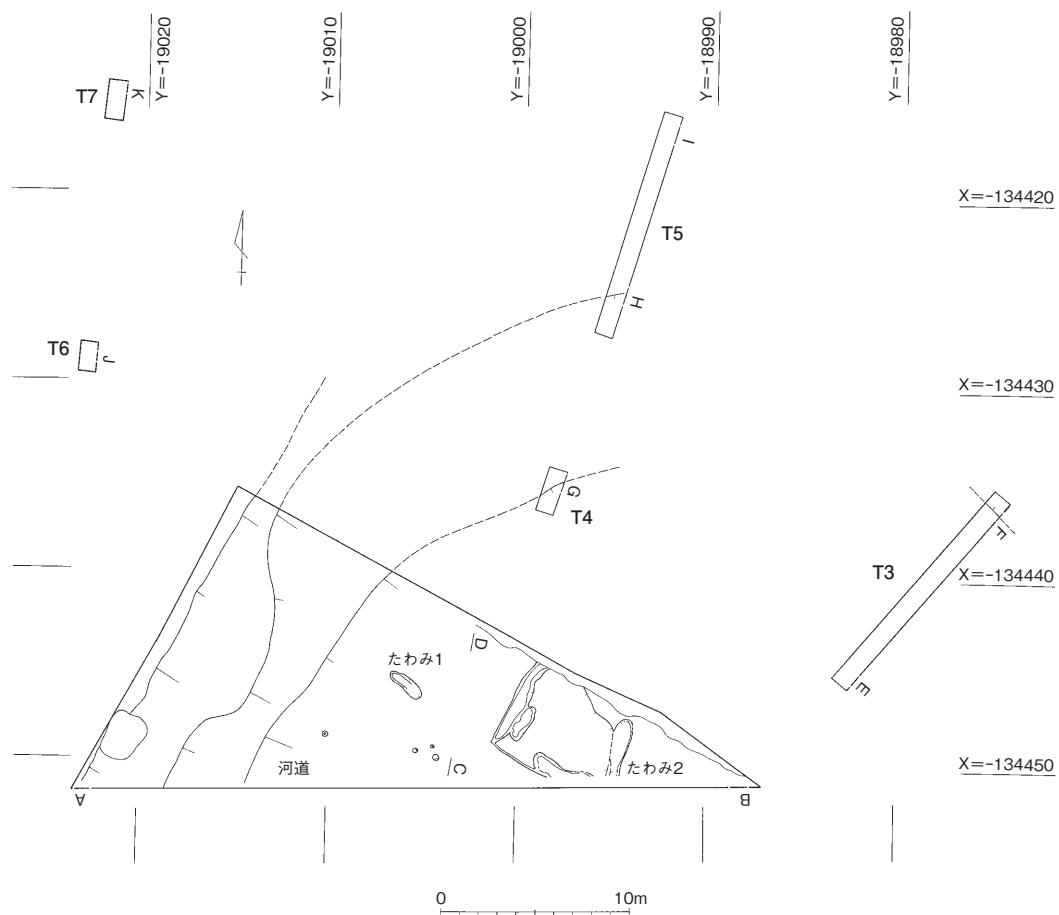
## 第2節 遺構・遺物

第110図第4層上面で中世以降のたわみ2基（第3層）、第5層上面付近で古代の可能性のある柱穴4基を検出した。調査区南壁の土層観察から、標高約22.7mに弥生時代の遺構面が想定されたため、調査区中央に南北トレンチを設定して土層堆積を確認した。その後、このトレンチから西半分について、面的に掘り下げて遺構検出を行ったところ、第4層除去後に砂礫層（第110図第11・12・14層）が帯状に検出された。南壁の観察から旧河道または土石流と考えられたため、中央部分に堆積した第5層土を除去して東斜面を検出した。掘り下げにあたっては、南北トレンチを参考に第111図C・D断面の第3・7・11層（基盤層）を層位的に掘り下げて遺物の包含状況と各層上面で遺構検出を行った。しかし、第7層で弥生土器の細片が若干出土しただけで、明確な遺構は確認されず、基盤面も標高22.4～22.2mと緩やかに北西に下がって行くのみで遺構は存在しなかった。

また、調査区東端部を一部面的に基盤面（第110図第16層上面）まで掘り下げたが、遺構・遺物はなく、標高22.5～22.4mと緩やかに東の和田川へ向かって下がる地形を確認した。中央部と東端部の遺構・遺物包含層の状況結果を受けて、その間の調査区東半分については第4層上面で調査を終えた。

ここでは、たわみ2基と旧河道について報告する。

（杉山）



第112図 全遺構配置図 (1/400)

## 1 たわみ

### たわみ1 (第112・113図)

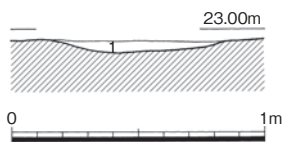
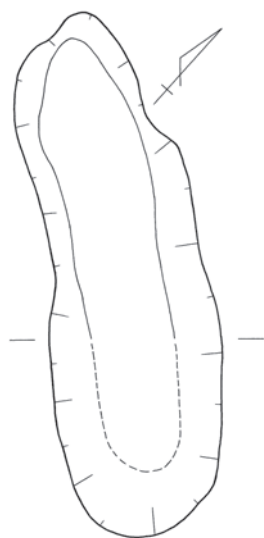
調査区中央部で長さ210cm程が検出された溝状を呈する遺構で、最大幅65cmを測る。深さは、標高22.95mの検出面から最大でも5cmを測るのみである。埋土には、灰白色細砂が1層堆積し、出土遺物はない。

時期は、検出状況などから室町時代頃と考えられる。(内藤)

### たわみ2 (第112・114図、図版21)

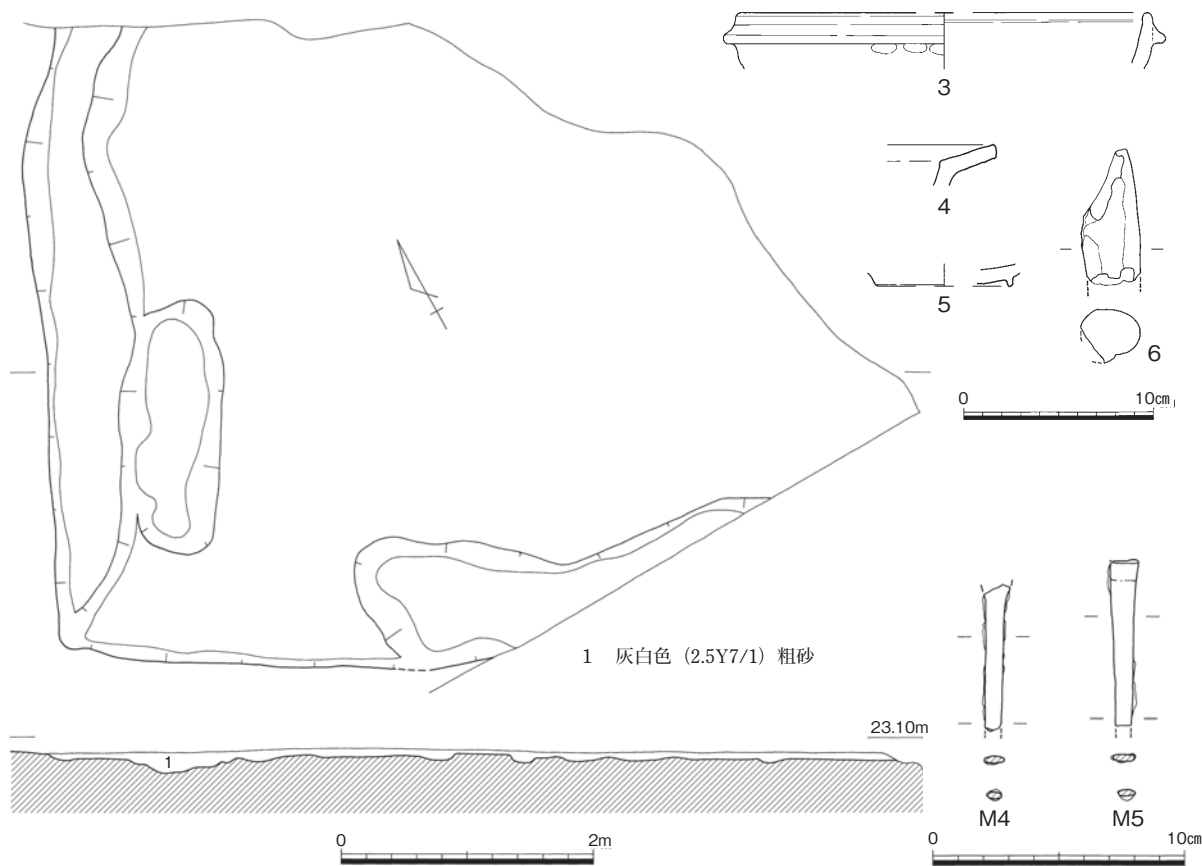
調査区東部に位置し、北辺は現代の水田で削平されている。西辺5m、南辺3.5mの「L」字形で東辺は幅約1mの南北溝と切り合い関係をもつが明確な前後関係は認められなかった。埋土は単層で5~10cmと浅く、底面は凹凸が顕著で西辺と南辺の裾に幅約1mの浅い溝状の窪みが検出されたのみで、遺構に伴う明確な穴などは存在しなかった。

出土遺物は、古代以降の須恵器・土師器や瓦質土器と陶磁器などの小片がある。3~6は瓦質土器で、3は羽釜、4は鍋、6は脚である。5は瀬戸美濃系陶器皿で内外に灰釉がかかる。M4・5は鉄釘である。検出状況から耕作にかかる加工段の可能性があり、遺物から、室町時代以降に機能し洪水によって埋没したと考えられる。(杉山)



1 灰白色 (2.5Y7/1) 細砂

第113図 たわみ1 (1/30)



1 灰白色 (2.5Y7/1) 粗砂

第114図 たわみ2 (1/30)・出土遺物 (1/3・1/4)



## 2 河道

## 河道1 (第110・112・115図)

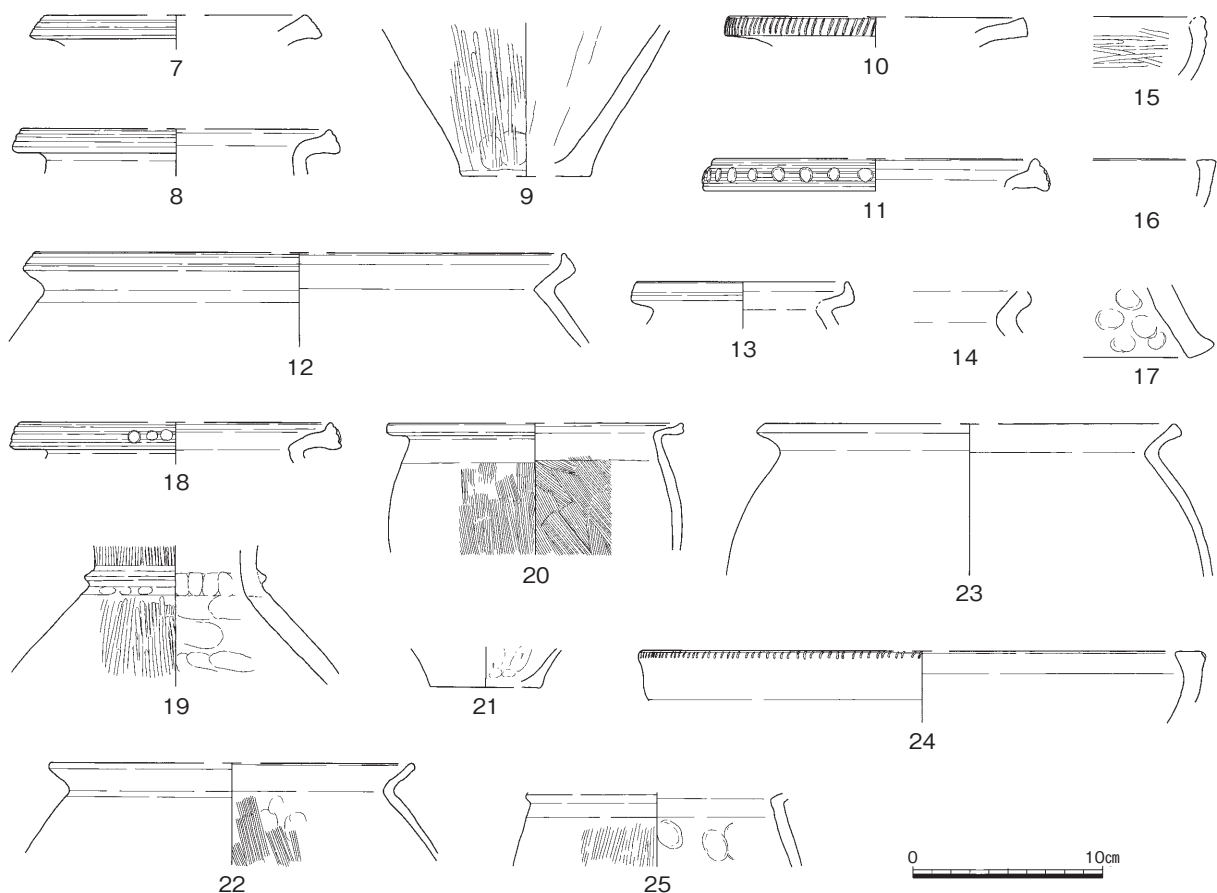
調査区南壁にトレンチを掘り下げた結果、調査区西端から東へ下がる砂礫の堆積がみられ、標高22.5m前後では中央部分で厚く堆積した黒褐色粘質土(第110図第8層)を確認した。また、基盤層第16層は西へ緩やかに下がっていき、人頭大の岩を含む第13・14層は急激に下がっていく。こういった堆積状況から、調査区西半部を河道または土石流が流れていたと考えられる。図示した弥生土器は、7～9が第5層、10～17が第8層中または直下、18～20が第13層、21・22が第14層、23～25が第15層から出土した。いずれもほとんど摩滅がみられないことから、近隣集落からの流れ込みと判断される。

河道の時期は出土遺物から弥生時代中期後葉以降と判断され、第8層の堆積状況から弥生時代後期前葉には安定していたと考えられる。(杉山)

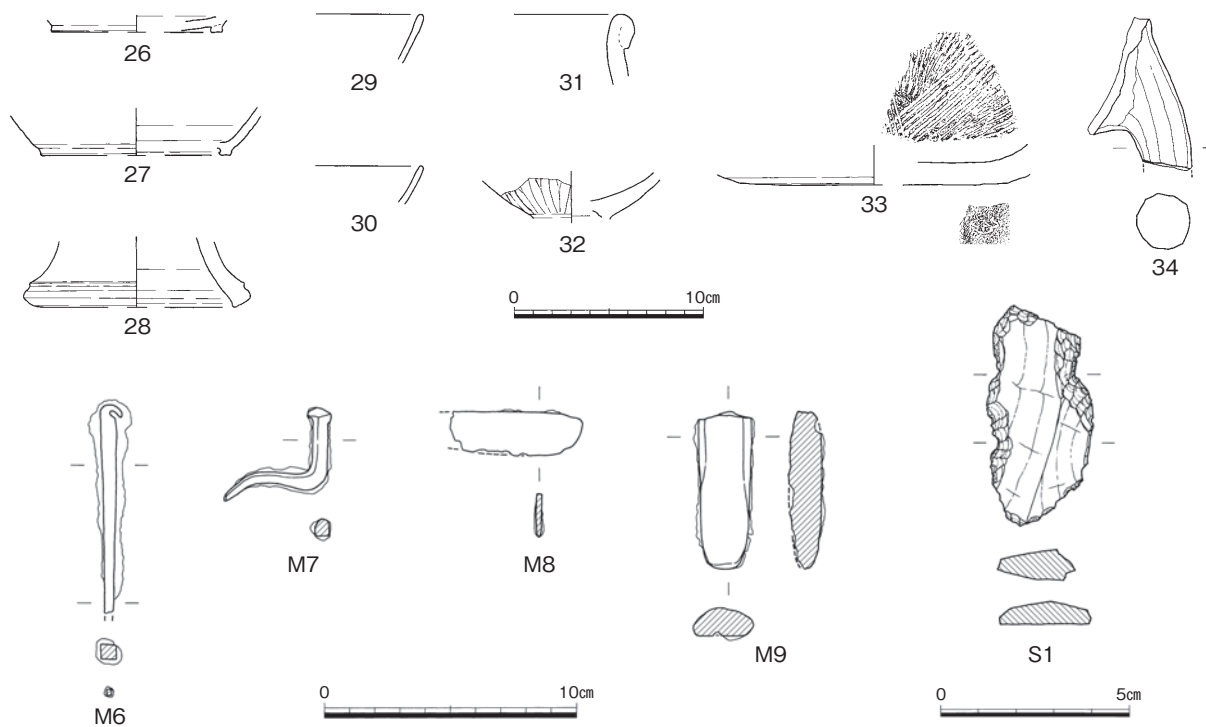
## 3 その他の遺構・遺物 (第116図、図版21)

その他の遺構としては、第110図第5層上面で古代の可能性のある柱穴を4基確認した。

出土遺物は同図第4・5層に弥生時代～中世の遺物が若干みられる。26～27は平安時代の須恵器、29・30は鎌倉時代の備前焼椀、31・32は室町時代で、31は備前焼の壺、32は細弁の龍泉窯の中国製青磁である。33は西端の攪乱坑から出土した江戸時代の備前焼播り鉢で、底部外面に「本」の銘款が



第115図 河道出土遺物 (1/4)



第116図 その他の出土遺物 (1/2・1/3・1/4)

押印されている。34は中世の瓦質土器の脚である。M6・7は断面方形の鉄釘、M8は薄い刀子の先端、M9は断面の形状から楔か鑿と考えられる。S1はたわみ2の埋土から出土した縦型のサヌカイト製石匙で、縄文時代の可能性がある。(杉山)

### 第3節 小結

成ル古屋遺跡は、平成22年度の赤磐市教育委員会による確認調査によって新規に発見された遺跡である。確認トレンチT15の調査結果から、古代～中世の集落遺跡と判断されたが、本発掘調査の結果、古代の可能性のある柱穴4基と室町時代以降のたわみ2基以外明確な集落遺構は確認できなかった。これら古代以降の遺構は砂礫層を基盤層としており、堆積状況から河川の氾濫や土石流によって生活面が形成されたことが明らかとなり、本地点があまり安定した土地ではなかった様子が窺えた。

古代～中世の基盤層以下は、確認調査時には無遺物層であったが、本地点では弥生土器が包含されていた。そこで、さらに下層の土層確認を行ったところ、標高22.2m前後で粘質土層（第110図第16層）、標高約22.5mで弥生時代の遺物包含層（同第8層）を確認した。第16層の広がり、本地点以北や東・西側地点では中世以降の氾濫等によって削り取られており断定は難しいが、遺構こそ確認されなかったものの、弥生時代頃の遺構面の可能性は高いと考えられる。

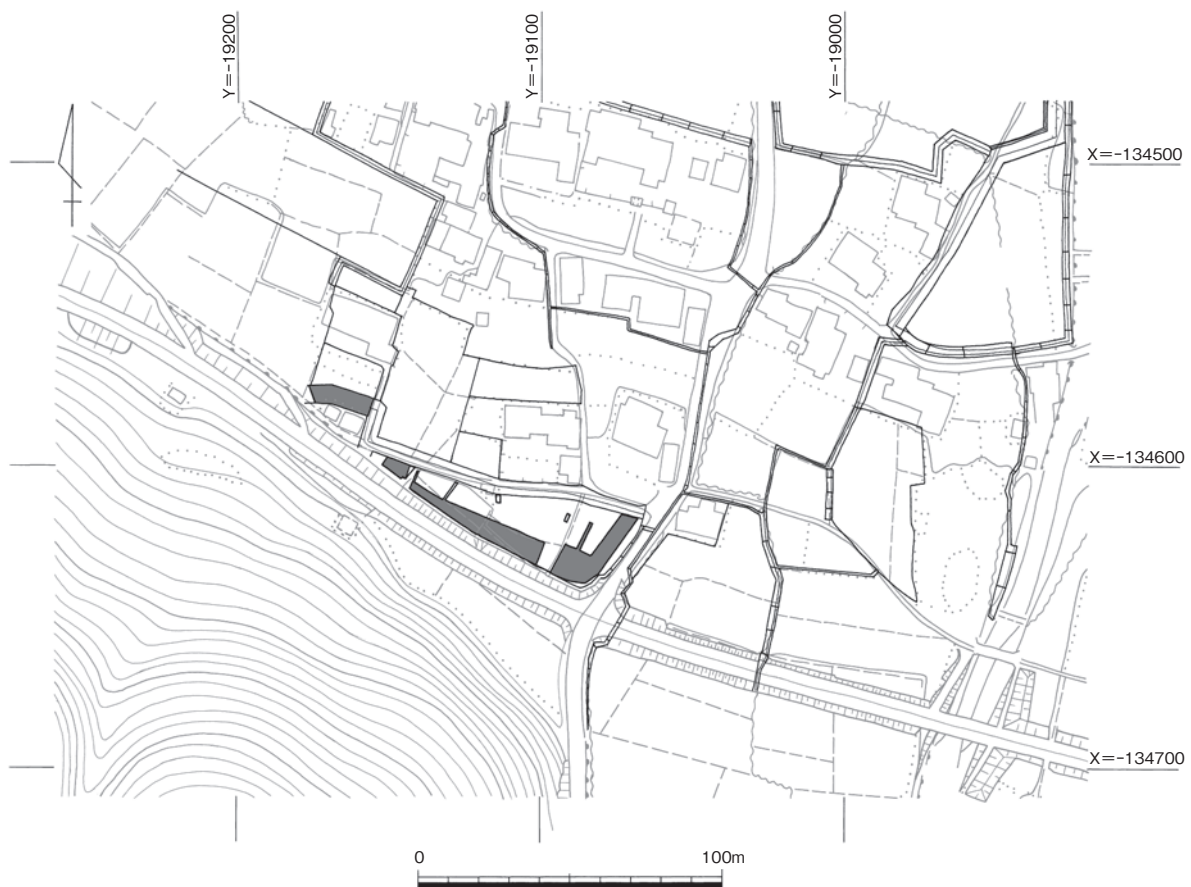
今回の調査地点は熊山山塊から北流する和田川の氾濫平野の中央に位置している。これまで、平野を取り囲む丘陵裾部では弥生時代以降の遺跡や散布地が知られていた。しかし、ここで粘質土層（第110図第16層）を確認したことによって氾濫平野にも弥生時代の集落遺構が残されている可能性が高まった。また、本遺跡では石匙S1の1点のみだが、辺谷中田遺跡では縄文時代後～晩期の土器・石器が出土していることから縄文時代の遺構の存在も期待できる。(杉山)

## 第6章 水口遺跡

### 第1節 調査の概要

水口遺跡は、熊山山塊から北に延びる狭い谷底平野から広い氾濫平野に変わる場所で、丘陵の北斜面裾に立地する。調査区は、平成11年度、広域営農団地農道整備事業で発掘調査（以後、11年度調査という）を実施した地点のすぐ北側にあたる。この調査では、弥生時代中期後半の集落と古墳時代後期の焼土坑のほか中世以降の集落が確認されている。平成22年度の赤磐市教育委員会による確認調査で遺跡が北側に広がること判明した。そこで、工事掘削部分を東から1～3区、道路建設部分を4区として調査区を設定し、本発掘調査の対象とした。

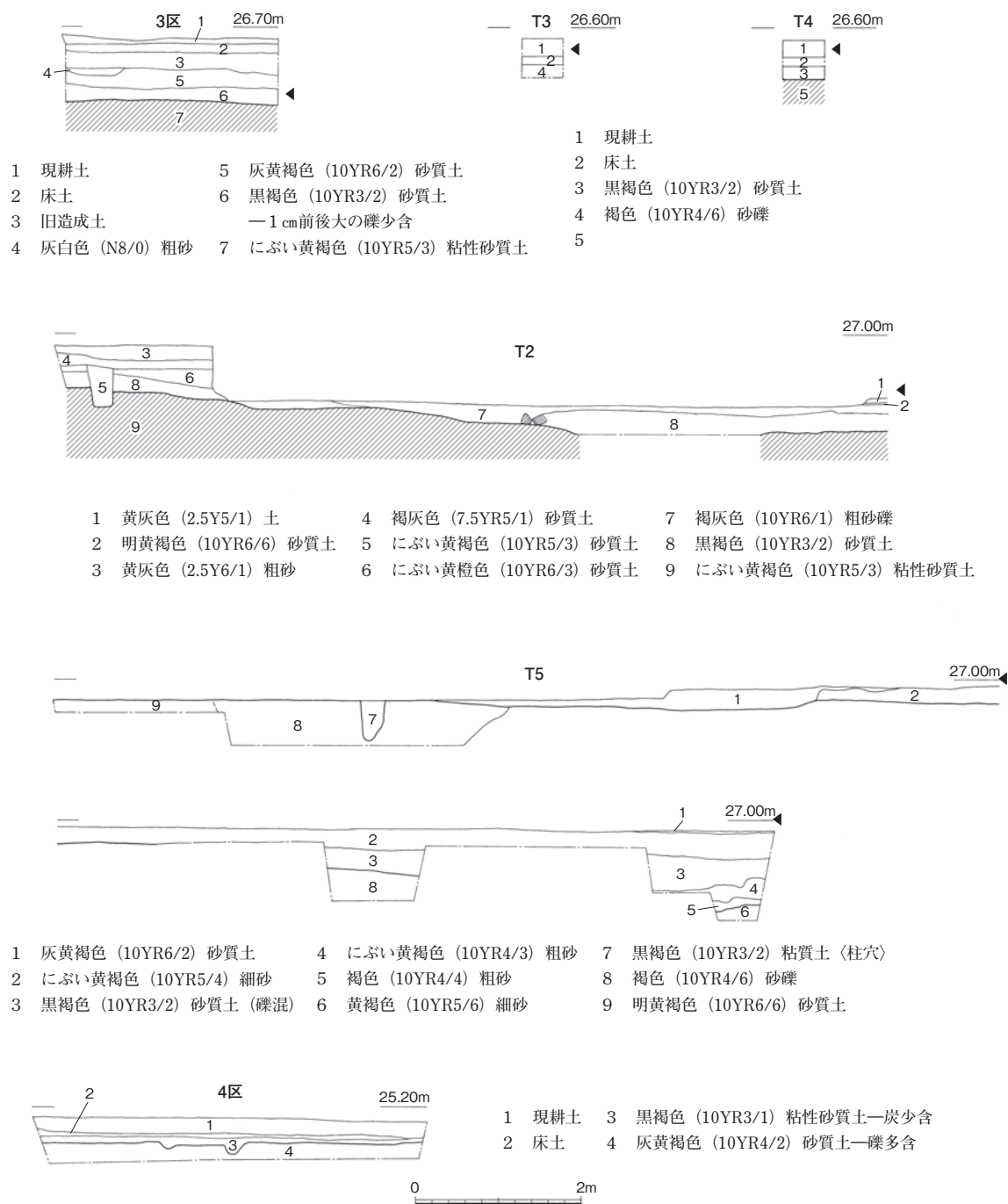
1区は11年度調査の1区東半に隣接し、赤磐市教育委員会の確認トレンチT17が設定された水田である。調査区南側の標高約26.8mで柱穴、焼土坑が検出されたものの、北に向かって遺構面が緩やかに下がっていき、近世の細砂（第118図T5第2層）が堆積していた。調査区中央にT5を設定して遺構面と土層の堆積状況を確認したところ、第2層以下も河道堆積の砂礫層がみられ、遺構は南側の高い部分にのみ存在することを確認した。この結果から、掘削は27.05mで止まる計画であったので、



第117図 基盤整備計画と調査区配置図 (1/2,500)

北西部は調査対象から除外し、検出した焼土坑は現状のまま保存した。

2区は11年度調査の1区西半と2区に隣接する畑で、現況では南北2段の耕作地であった。11年度調査同様に、農道を境に東西に分割して調査を行った。全面調査実施前に南北方向にT1・2、北側の低い畑にT3・4を設定し遺構面の確認を行った。T1では、南端で備前焼の掘り鉢を主体とした近世の斜面堆積を確認し、北端では北に向かって下がる溝又は斜面堆積を検出した。T2では、11年度調査区の第1遺構面に対応する第118図T2第4層下面と第2遺構面に対応する第9層上面を確認した。標高26.60mの第1遺構面では柱穴（T2第5層）を、標高25.90mで溝を検出した。また、第



第118図 3区西壁・4区東壁・T2～5西壁 (1/80) ←は工事高を示す。

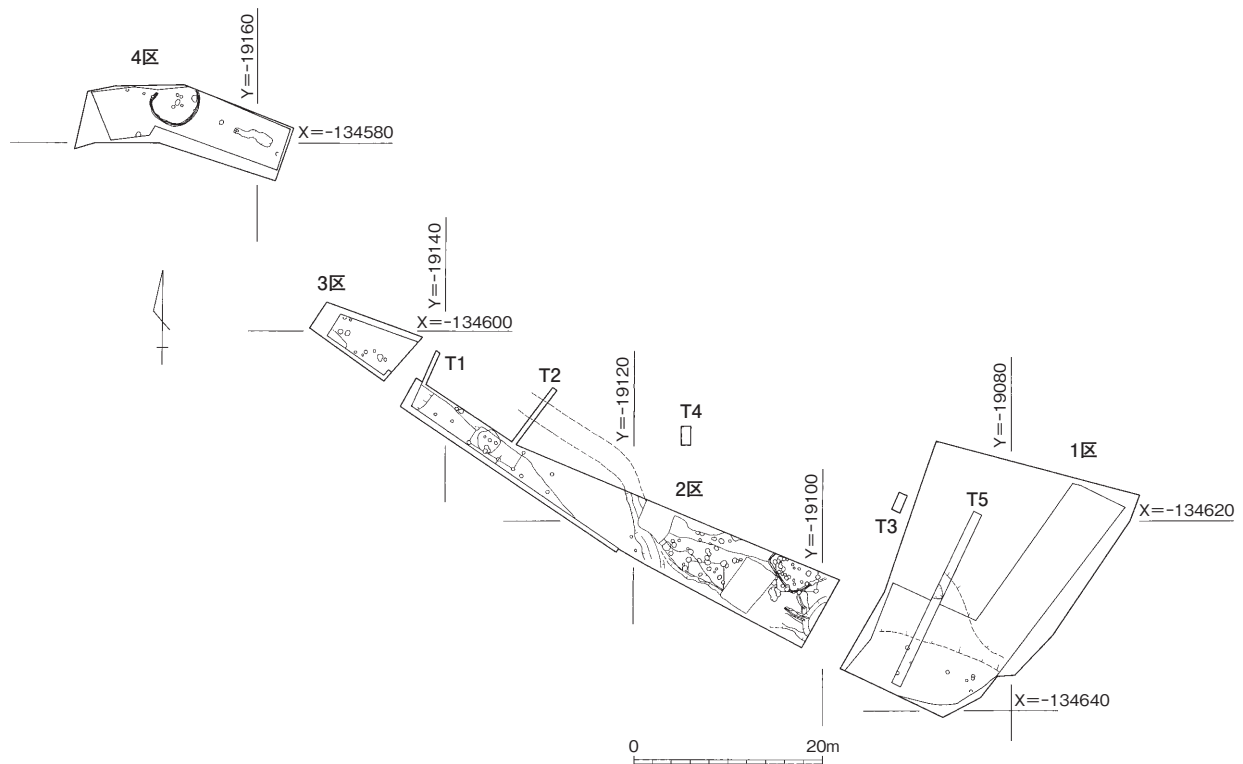
4層下位に堆積した第6層下面も遺構面の可能性があったので、全面調査時に分層して検出作業を行うこととした。T3では第118図T3第4層砂礫層を確認し、1区から河道が入って来ることが判明した。T4では、標高約26.0mで基盤層（同T4第5層、T2第9層対応）を確認し、柱穴を検出した。T1～4の結果を受けて、掘削予定高が26.35mであることから、北側の低い部分については掘削が現耕作土内に止まり、遺構面に影響はないと判断されたので、2区は南側の高い部分のみを調査対象とした。

2区西部は第1遺構面と第2遺構面に加えて第6層上面でも遺構検出を行った。しかし、遺構は確認されず、第6層土出土遺物は中世土器であった。検出した遺構は、第1遺構面で掘立柱建物と柱穴など、第2遺構面でも柱穴と不整形のたわみを確認した。東部は、溝4によって第2遺構面まで削り取られていたため、第1遺構面は存在せず、基盤層上面の第2遺構面で弥生時代の竪穴住居と土坑、古代の溝、中世以降の掘立柱建物と土坑、多数の柱穴を検出した。

3区は、11年度調査の3区東半に隣接する調査区で、浅い谷部にあたるため基盤層（第1118図3区第7層）は2・4区と異なり弥生時代以前の二次堆積土である。計画掘削深度が基盤層の第7層より低いので全面を掘り下げ調査を実施した。遺構は、第5層上面での近世以降の溝状のたわみ1基と基盤面で時期不明の柱穴を確認した。

4区は道路建設部分で、1～3区が丘陵斜面裾部分であったのに対して本地点は平野部に位置する。ここより西の水田で赤磐市教育委員会が調査したT16では海拔24.86mで遺物包含層が確認されたため、これよりも東側の丘陵に近い地区を調査対象とした。第118図に調査区東壁の土層断面を示した。床土の下に薄く包含層（第3層）が残り、それを除去して標高約24.7mで弥生時代の竪穴住居と中世以降のたわみや柱穴を検出した。

(杉山)



第119図 全遺構配置図 (1/800)

## 第2節 古墳時代以前の遺構・遺物

1区では、北側への斜面堆積の肩口、標高約26.7mで壁面の焼けた方形の焼土坑を検出した。2区東部では標高約26.3mで竪穴住居1軒と土坑1基を検出した。同一遺構面で中世以降の柱穴が多数存在しており、それらの埋土と明確な差違がみられなかったため、住居床面で検出したもの以外古代以降の遺構として扱っている。2区西部から3区では、古墳時代の遺物包含層以下の標高約26.3mでたわみ状遺構と柱穴を検出した（写真13）。99年度調査で、この地点には浅い谷が入ることが分かっており、斜面上位からの流出によって包含層が形成されたと考えられる。4区では、標高約24.7mで竪穴住居1軒を検出した。

出土遺物は、後世の削平や近世以降の攪乱のため、ほとんどの遺物が古代以降の遺構や攪乱坑に混入して土器、石器と製錬滓が出土している。ここでは、竪穴住居2軒と土坑1基などを報告する。

（杉山）

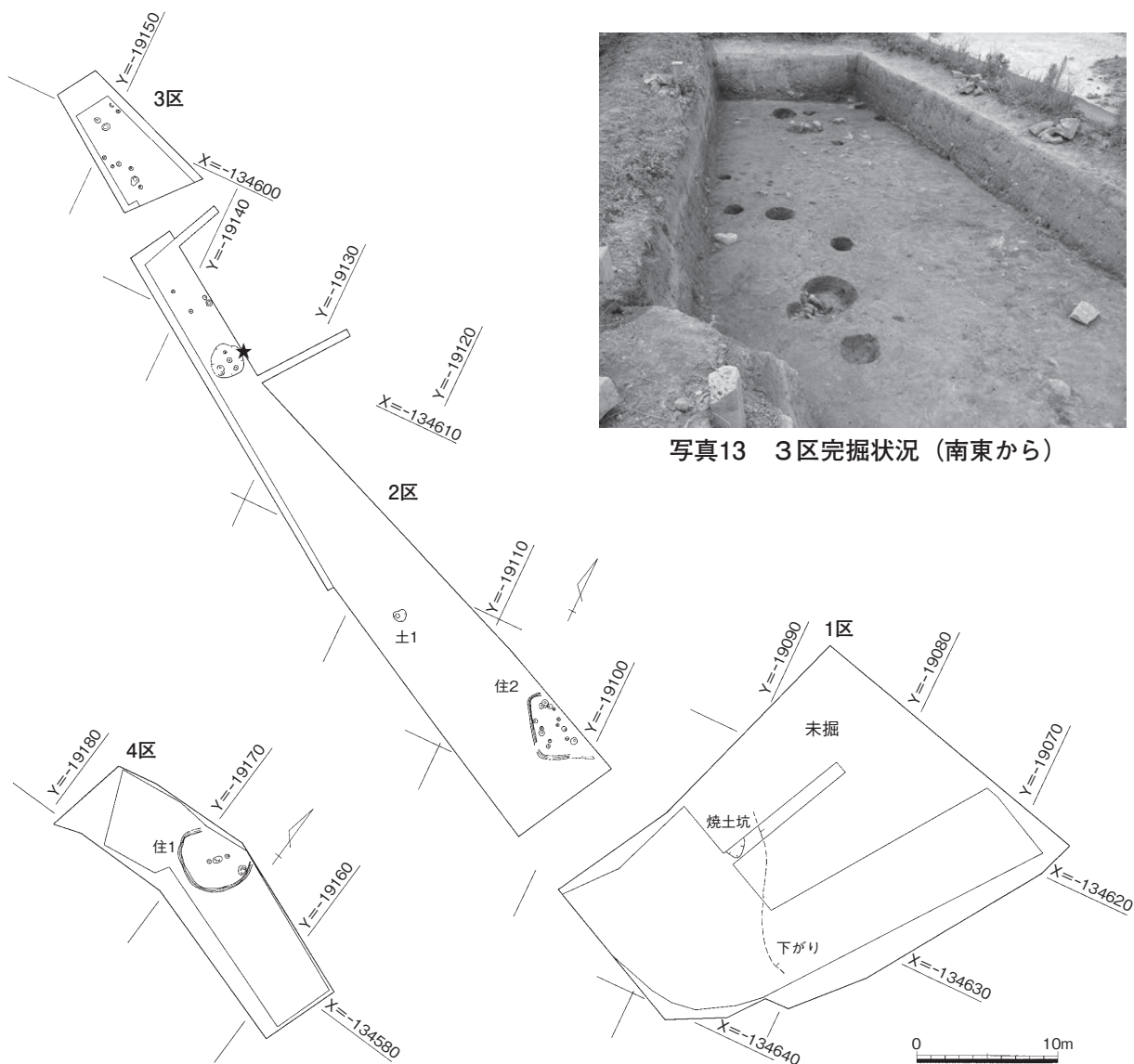


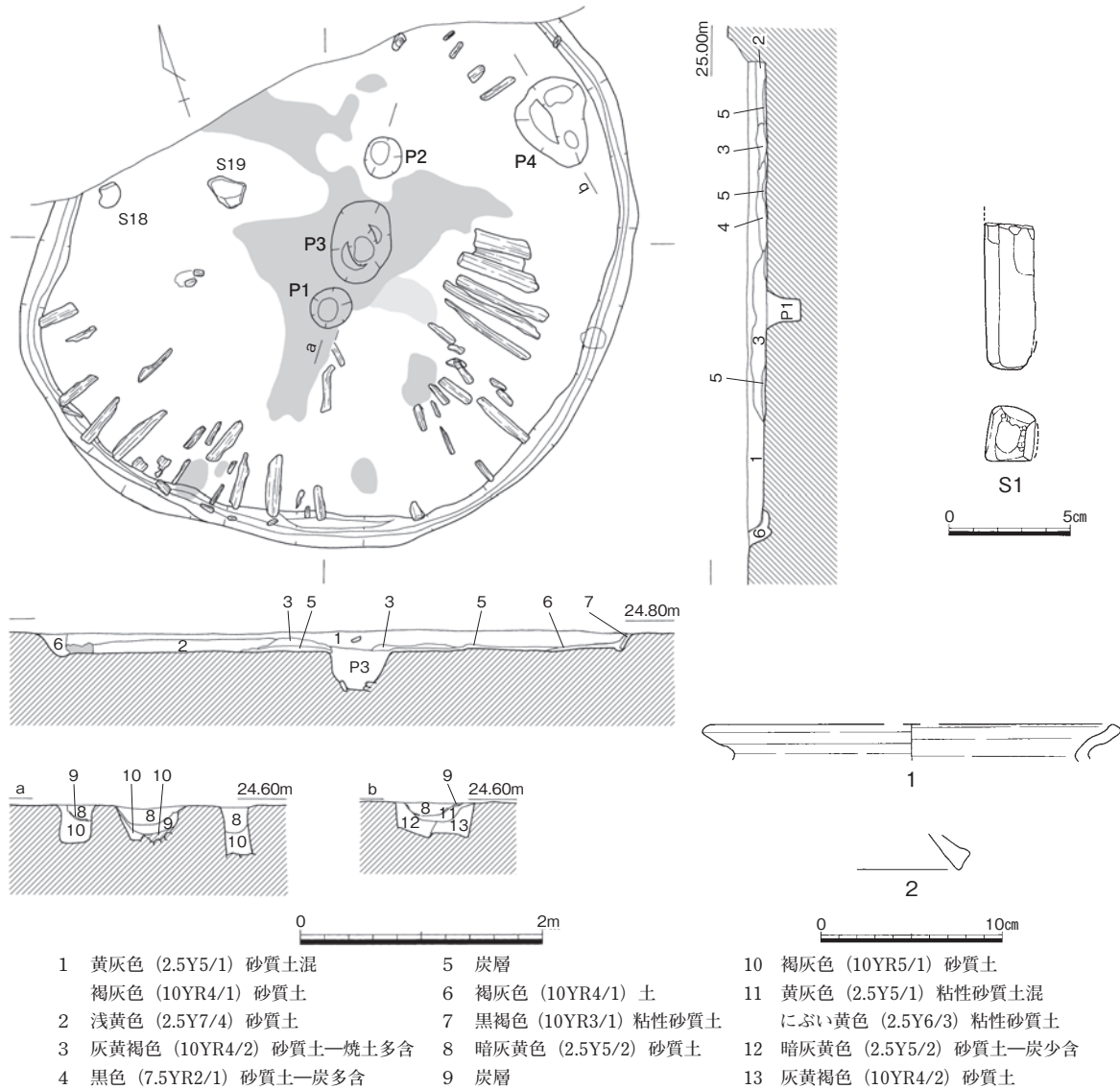
写真13 3区完掘状況（南東から）

第120図 古墳時代以前の遺構配置図（1/500）

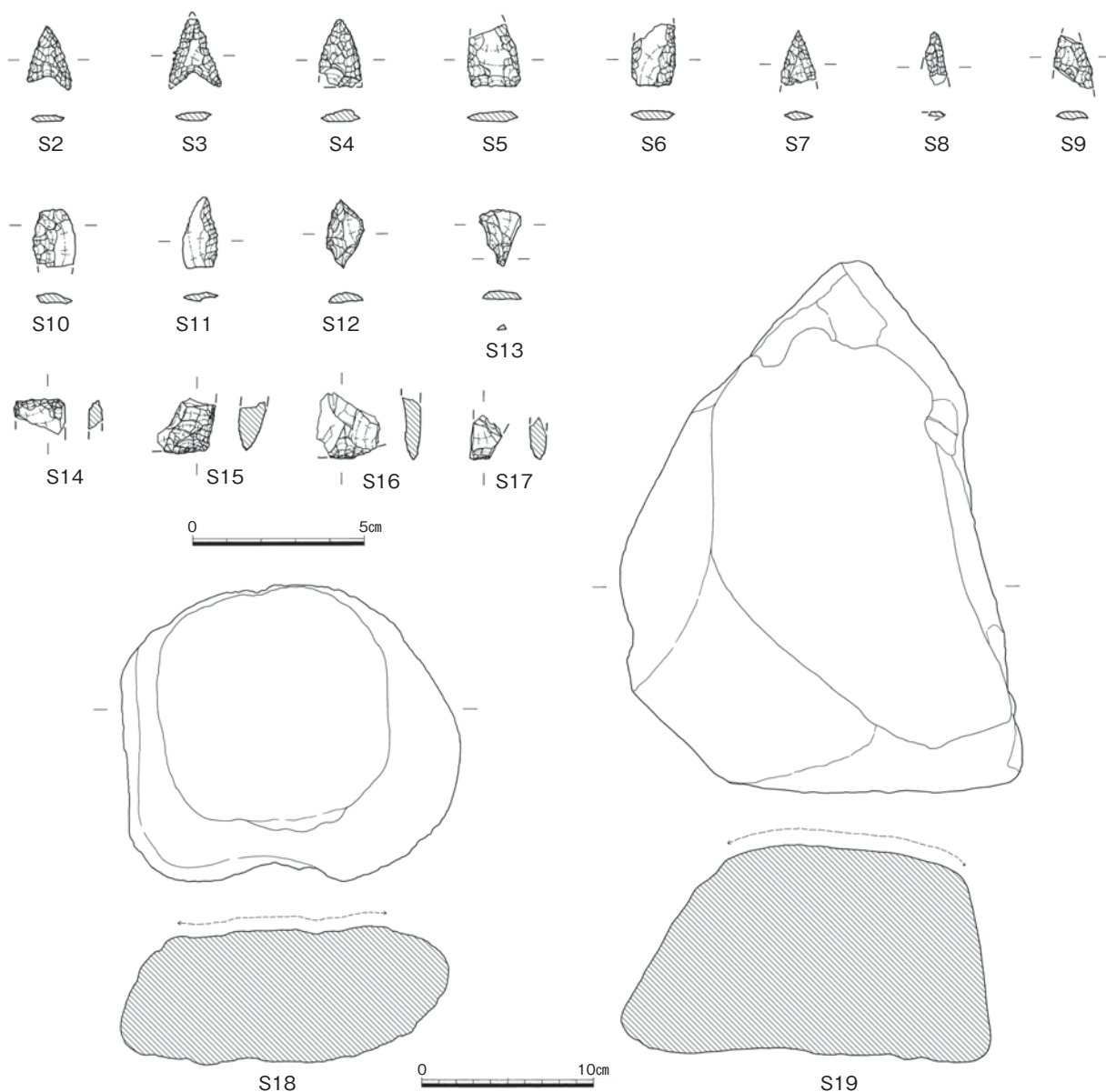
# 1 竪穴住居

## 竪穴住居 1 (第120~122図、図版22・24)

4区中央に位置し、北側は調査区外に延びる。不整形円で東西軸長約480cmを測る。第1層除去中に炭化材が検出され、焼失住居と認識した。残りの良い炭化材で径8~13cmあり、住居中心に向かって放射状にみられる。また、南西部では壁に沿うように横方向の細い材がみられた。住居中央には厚いところで約15cmの焼土が炭化材の上ののって残っていた。壁際には壁帯溝が巡り、中央にP1・2とその間にP3を検出した。床面を精査したが、深さ2~3cmの浅い窪みが数基確認できたのみで、P4も主柱とするには外れた位置にあることから、P1・2を主柱穴とした2本柱であったと判断される。床面には被熱により赤化した箇所があったが、炭化材や焼土と近接することもあり、居住時の痕跡とは断定しがたい。P3付近の床面の浅い窪みからサヌカイト製品と碎片が出土したので、周辺の床面近くとP1~3の埋土は水洗選別を行った。出土土器は、甕1と脚2の他には碎片しかない。石器では、棒状の敲き石S1は、小口に敲打痕が残る。S2~17はサヌカイト製品で、S2~9は鎌、



第121図 竪穴住居 1 (1/60)・出土遺物① (1/3・1/4)



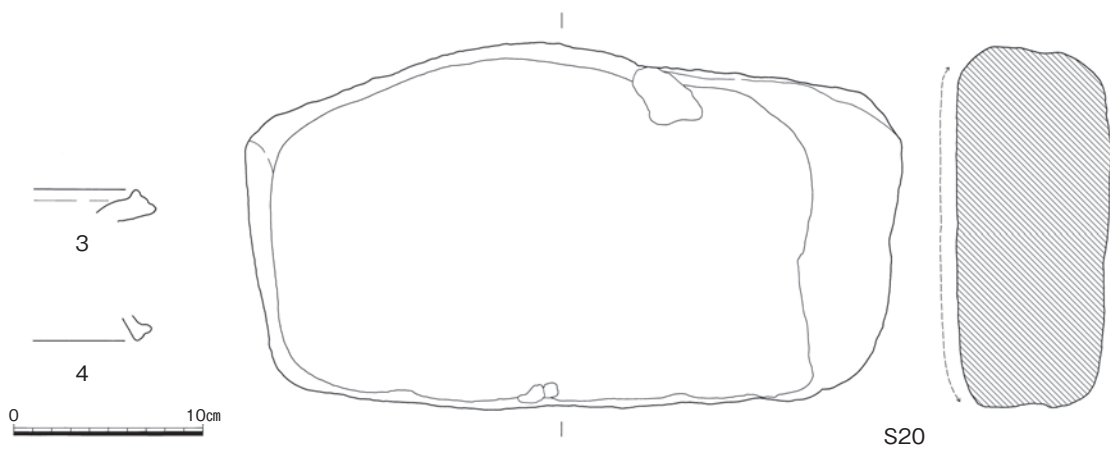
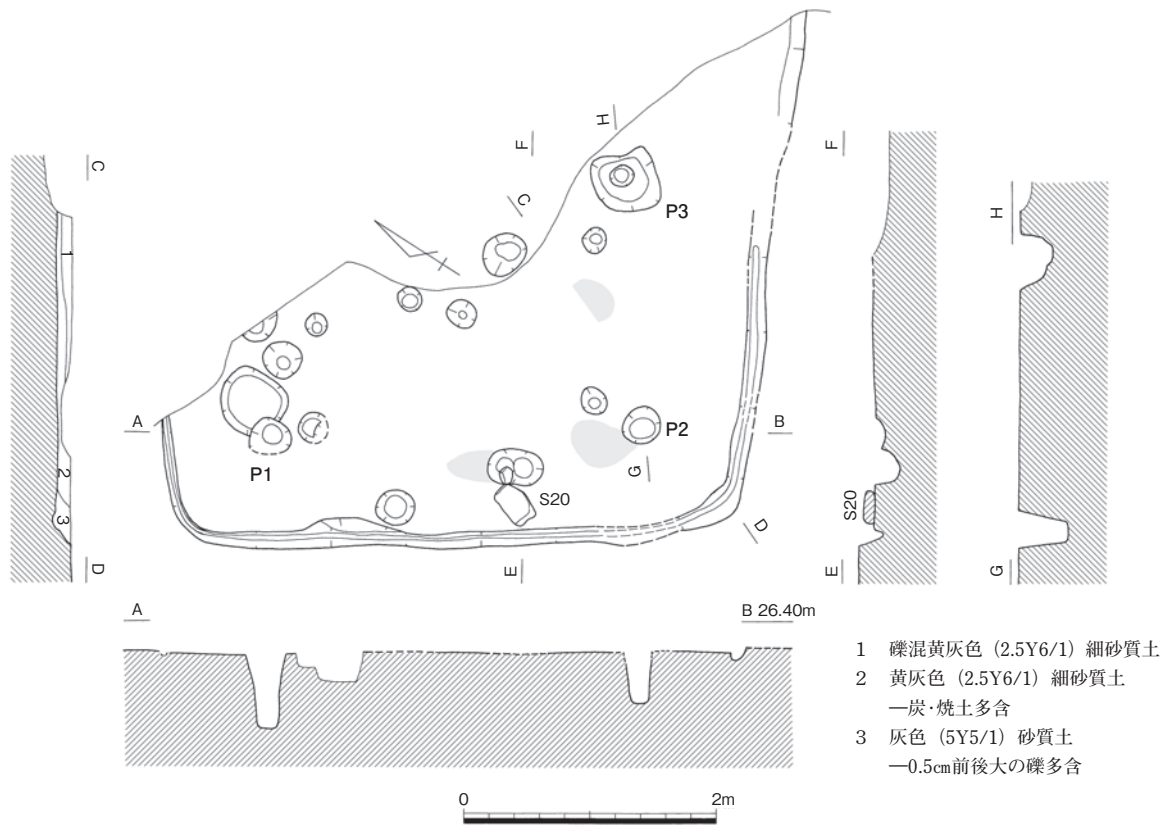
第122図 竪穴住居1 出土遺物② (1/2・1/4)

S10～12は二次調整の状況から鏃の非製品と推される。S13は錐、S14～17は階段状剥離または潰れ痕が顕著であることから楔と判断した。S18・19は北西床面で出土した台石で、被熱による劣化のため、使用痕は明瞭ではない。水洗選別した埋土からは、サヌカイトの碎片（約140g）のみで剥片や残核、他の石材製品もなかったことから、製品の仕上げ又は修繕を行っていたと推察される。住居の時期は、出土土器から弥生時代中期末葉頃と判断される。

**竪穴住居2** (第120・123図、図版22)

2区東部に位置し、調査区北へ延びる西辺約470cmを測る方形の住居である。埋土は10cm程度残っており、第2層には炭が多く含まれていた。壁際に壁帯溝が巡り、床面には炭の散布が3か所みられたが被熱痕はない。主柱穴は、中世の柱穴との切り合い関係と埋土、検出状況からP1～3と考えられる。このほか、床面と同じ色調の埋土を持つ柱穴を検出したが、総じて数cmと浅く性格は不明である。遺物は少なく、壺の口縁3と高杯の脚4、南壁近くで台石S20が出土したのみである。住居の時期は、土器と周辺の状況から弥生時代中期末葉と考えられる。(杉山)





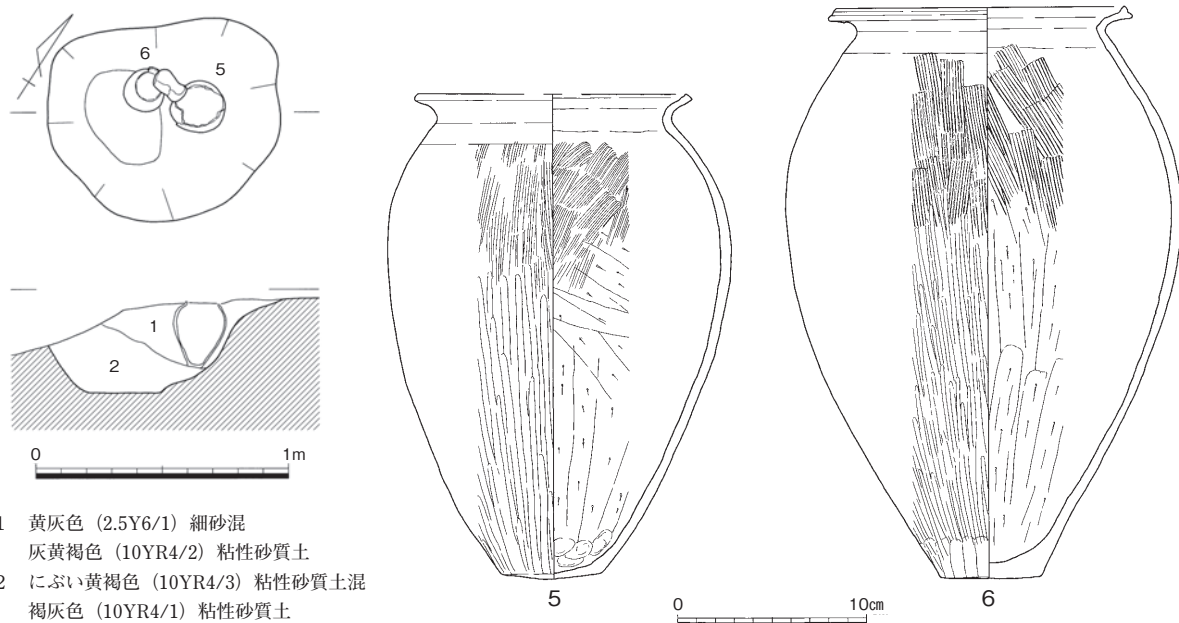
第123図 竪穴住居2 (1/60)・出土遺物 (1/4)

## 2 土坑

### 土坑1 (第120・124図、図版22・24)

2区東部で溝1東肩口の掘り下げ中に、竪穴住居2の西側で検出した。不整楕円形で埋土は2層に分層され、第2層上面に弥生土器の甕5・6が設置したかのように出土した。土器は完形品を長軸に並べて置き、両者の口を跨いで約15×7×5cmの垂角礫が置かれていた。土器内土は水洗選別を行ったが、5mm弱の炭片が微量入っただけであった。

土坑の機能については、明確ではないが、墓の可能性は否定できない。時期は土器から弥生時代中期後葉と考えられる。(杉山)



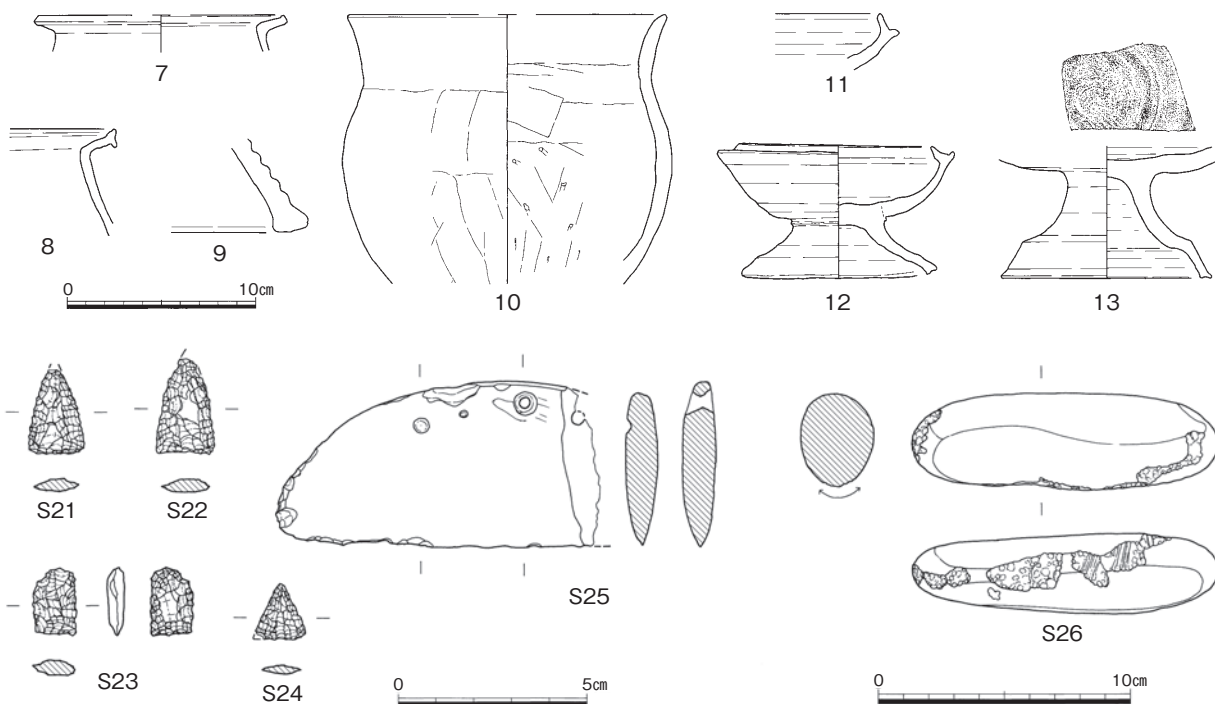
- 1 黄灰色 (2.5Y6/1) 細砂混  
灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性砂質土
- 2 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘性砂質土混  
褐灰色 (10YR4/1) 粘性砂質土

第124図 土坑1 (1/30)・出土遺物 (1/4)

### 3 その他の遺構・遺物 (第125図、図版24)

2区西部と3区では、基盤面で柱穴を検出したが、遺物はなくまとまりも確認できなかった。

古墳時代以前の遺物は、後世の遺構や掘り下げ中に若干出土したが、小片が多い。図示した土器のうち、7・8・13は基盤上層の黒色土(第118図T2第8層)から、10・12は第120図★印のたわみから出土した。13は杯部底面に当て具痕が残る。S23は調整途中で厚みのあるサヌカイト剥片で、石鏃未製品と考えられる。S25は貫通孔以外に未貫通孔が2か所みられる。S26は棒状の円礫の長手側面に敲打痕と線状の使用痕がみられる。(杉山)



第125図 その他の出土遺物 (1/2・1/3・1/4)

### 第3節 古代以降の遺構・遺物

1区は北に向かって地形が下がって行き、南部の標高約26.7mで柱穴8基を検出した。柱穴の中には、色調から古墳時代以前の可能性のあるものを含んでいる。2区東部では溝4の堆積土を除去後、緩やかに北に下がる地形を確認した。遺構検出面は、弥生時代の基盤面と同一で、標高26.4m前後で近世の土坑、古代～近世の溝と中世以降の柱穴を多数検出した。柱穴の中には30cm以上の深さを持つものや底に石を入れたものもあったが、建物にまともった柱穴は2棟分のみであった。2区西部は中世～近世の堆積層を3層確認した（第118図T2第3・4・6層）。遺構は第3層上面でたわみ、第6層上面の標高約26.6mで掘柱立建物と柱穴を検出した。3区では、標高約26.2mで近世以降のたわみ1基を検出した。4区は基盤面の標高約24.7mで中世以降の柱穴とたわみ1基を検出した。2区西部と4区の一部には遺物包含層が残っていたが、他の地区は上面の削平・攪乱が顕著で、遺構に共伴するものは少ない。ただ、2区東部にある近・現代の攪乱坑から古代～近代の遺物が比較的多く出土した。ここでは、掘立柱建物3棟、土坑1基、溝4条などを報告する。（杉山）

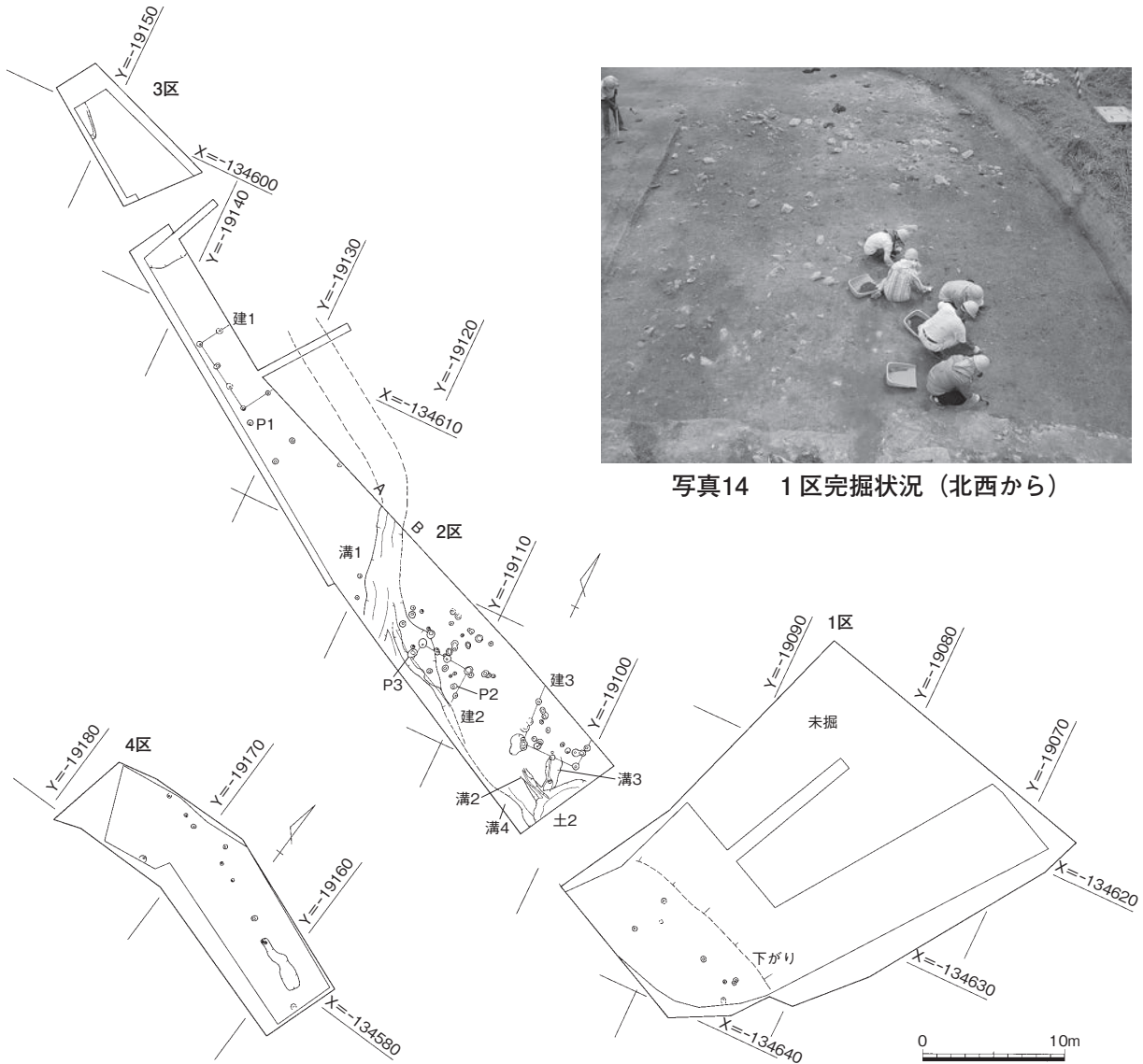


写真14 1区完掘状況 (北西から)

第126図 古代以降の遺構配置図 (1/500)

## 1 掘立柱建物

### 掘立柱建物1 (第126・127図、図版23)

2区の北西部において検出された遺構である。狭い調査区での検出で、調査区外にまで広がる可能性が高く全体の規模は明らかでないが、桁行4間で梁行1間以上の建物と考えられる。後世の削平で検出面は40cm前後の高低がある為、検出された柱穴の規模等は様でないが、直径30~40cm程の円形や楕円形を呈する。柱穴底の高さは、概ね標高26.1~26.2mで揃っているが、P6は10cm程低い。柱間は200~170cmとまちまちである。柱穴の埋土はいずれもにぶい黄褐色砂質土で、土師器や備前焼の細片が出土している。

図示した土器は、いずれもP6から出土した土師器である。14は口径7.8cmを測る小皿で色調は灰白色を呈し、焼成は良好である。15は杯の口縁部片で口径14.2cm程が推定され、外面は灰黄色を呈する。

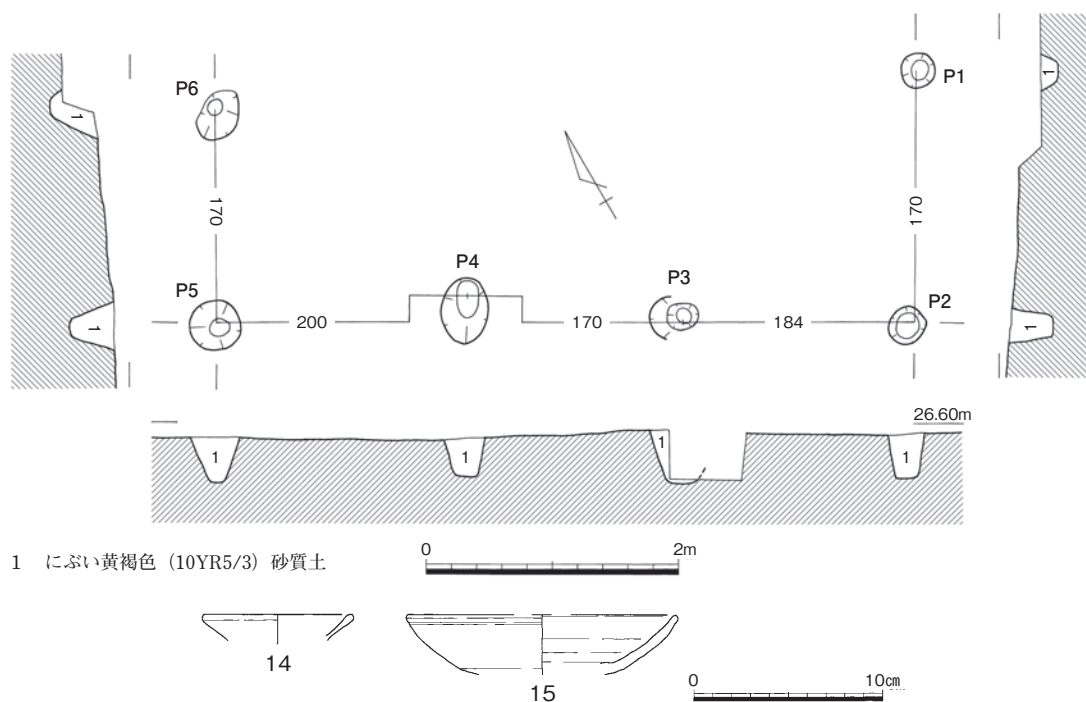
時期は、検出状況などから室町時代後半以降と考えられる。

### 掘立柱建物2 (第126・128図、図版23)

2区の東部において検出された遺構である。南東部は近世の攪乱を受け、東西方向に2間、南北方向には1本の柱穴が確認出来ただけの建物で、全体の規模や棟方向等は明らかでない。柱穴間の柱間は180~200cmを測り、柱穴の深さは標高26.4m前後の検出面から北側の3本が50~60cm、南側のP4は30cmを測る。出土遺物としてはP1から土師器片が、P2から土師器や備前焼の細片がある。16はP3から出土した備前焼碗の口縁部片で、灰白色を呈し焼成は良好である。このほかに土鍋片も出土している。時期は、出土遺物や検出状況などから室町時代頃と考えられる。

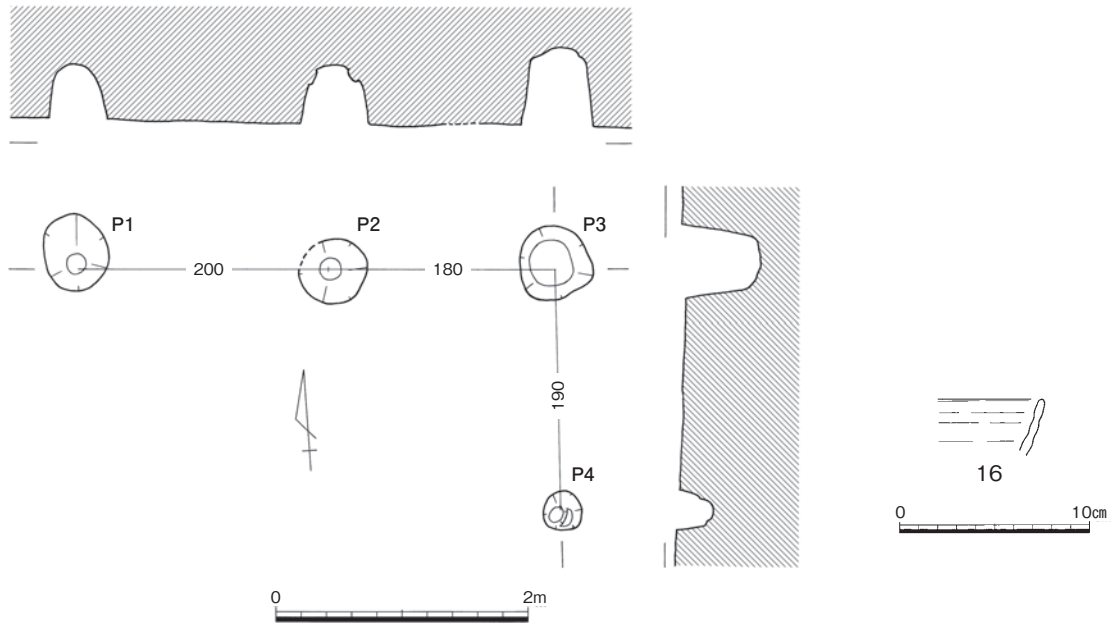
### 掘立柱建物3 (第126・129図、図版23)

2区の東端部、建物2から5.5m東で検出された遺構である。北側が調査区外に及んでおり、全体の規模等は明らかでないが、東西2間で、南北は2間以上の建物が想定される。柱間は160~240cmと

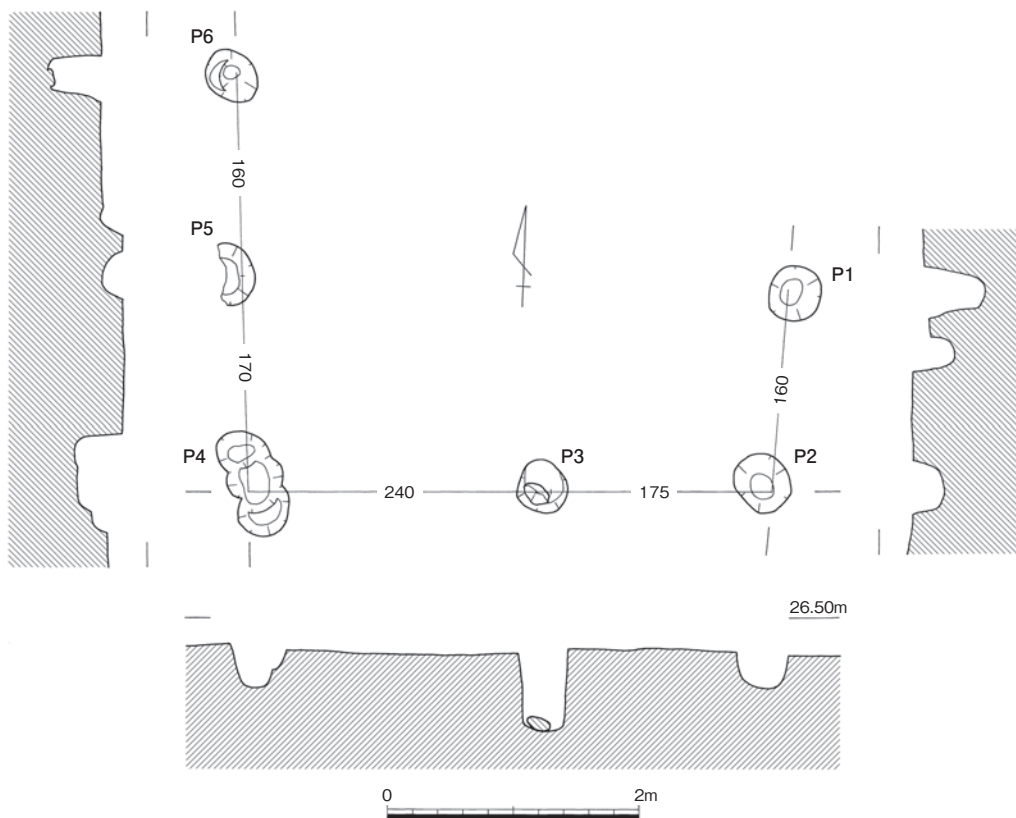


第127図 掘立柱建物1 (1/60)・出土遺物 (1/4)

様々であるが、東西の2間で400cmに対し南北の2間は320cmと間隔が狭い。遺物は、P3とP6の埋土中から土師器の細片などが出土している。P3の底で柱の沈下を防ぐとみられる石が確認されている。この建物の棟方向は建物2と一致又は直交するもので、同時期に存在していたものと考えられる。時期は、これらの検出状況や出土遺物などから室町時代頃と考えられる。(内藤)



第128図 掘立柱建物2 (1/60)・出土遺物 (1/4)



第129図 掘立柱建物3 (1/60)

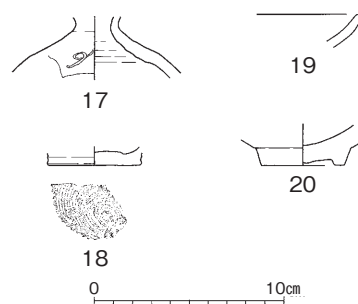
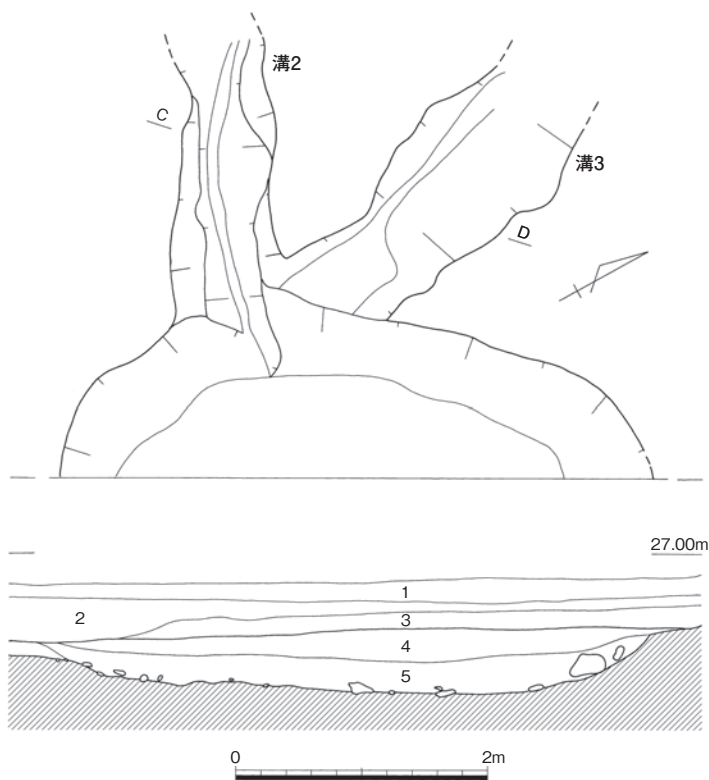
## 2 土坑

### 土坑2 (第126・130図、図版23)

2区東端の調査区境に位置する楕円形の土坑である。上面を溝4の第1～3層土によって被覆されている。埋土も砂礫の多い砂質土で埋没していて、特に床面には20cm前後の礫が多く含まれている。

出土遺物は少ないが、備前焼の壺17、椀18と肥前陶器の灰釉皿19、瀬戸美濃系の天目茶椀20などが

ある。この土坑には溝2・3が付設し、水が流入する状況にあることから、耕作などのための集水施設の可能性がある。使用時期は、肥前陶器19の年代から17世紀初め頃に機能していたと判断される。



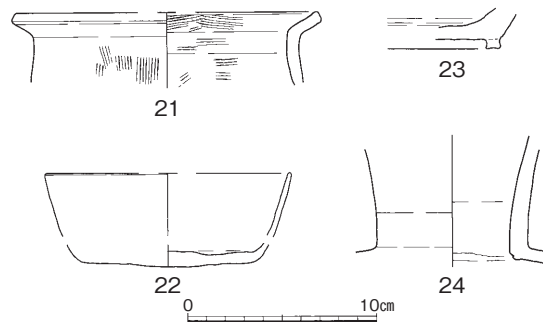
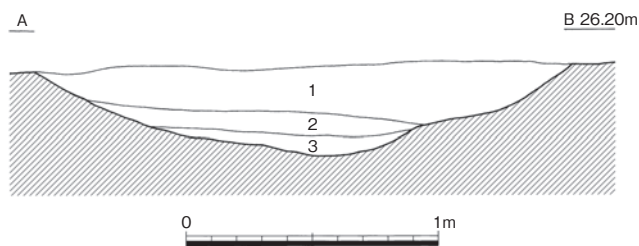
- 1 〈床土〉
- 2 灰黄褐色 (10YR7/2) 砂質土
- 3 褐灰色 (10YR6/1) 砂質土
- 4 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土
- 5 暗褐色 (10YR3/3) 粘性砂質土

第130図 土坑2 (1/60)・出土遺物 (1/4)

## 3 溝

### 溝1 (第126・131図、図版23)

2区東部で南壁に沿って蛇行しながら西流する溝である。北端での埋土は底面に砂が堆積するが、南壁付近には人頭大の角礫が多く含まれる。遺物は、第1層土から平安時代の須恵器・土師器の小片



- 1 黒褐色 (10YR3/1) 粘性砂質土
- 2 粗砂混黒褐色 (10YR3/1) 砂質土
- 3 黄灰色 (2.5Y5/1) 粗砂

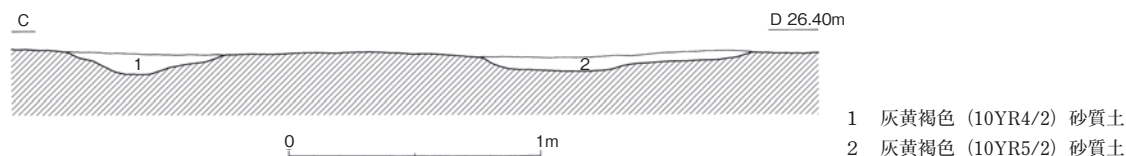
第131図 溝1 (1/30)・出土遺物 (1/4)

が出土した。21は土師器の長胴甕、22は焼成不良品の須恵器杯、23は須恵器で高台付きの底部で、内面の調整から壺と考えられる。24は須恵器の壺である。この溝は流路方向と埋土から11年度調査区の溝1と同一のものと推察され、出土遺物から平安時代には埋没したと考えられる。

溝2・3 (第126・130・132図、図版23)

2区東部で、溝4を掘り下げて基盤面で検出した。溝2は東西方向、溝3は南北方向の流路をもち、土坑2に付設されていたと考えられる。溝2は土坑2底面まで水流の痕跡が残るが、溝3は上面に幅広く痕跡が残る。水流痕跡と流走方向から、溝2が集水、溝3が排水の機能を持つかもしれない。

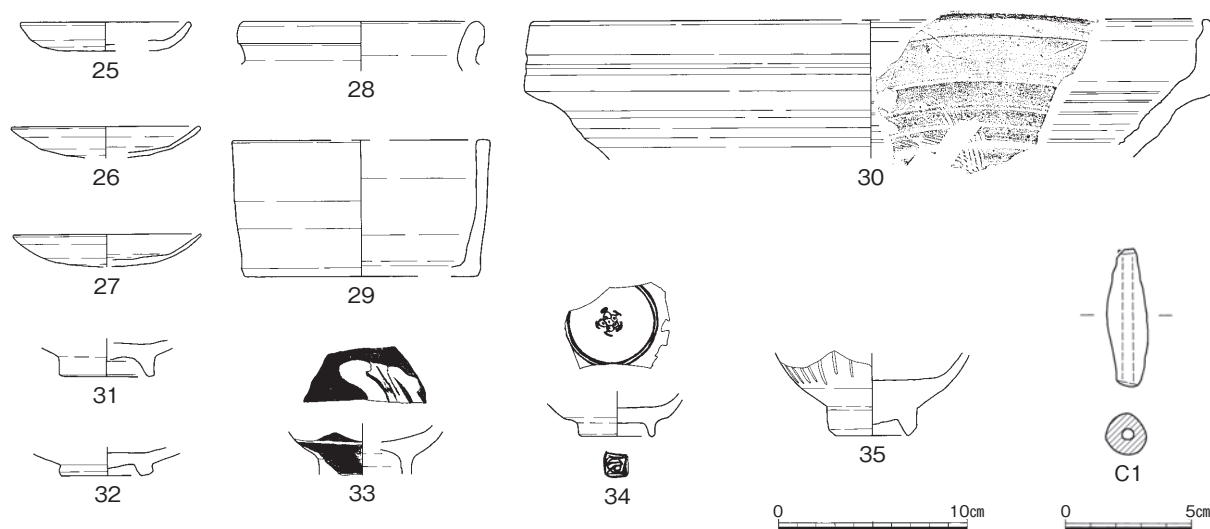
時期は土坑2と同時期で17世紀初め頃と判断される。



第132図 溝2・3 (1/30)

溝4 (第126・130・133図)

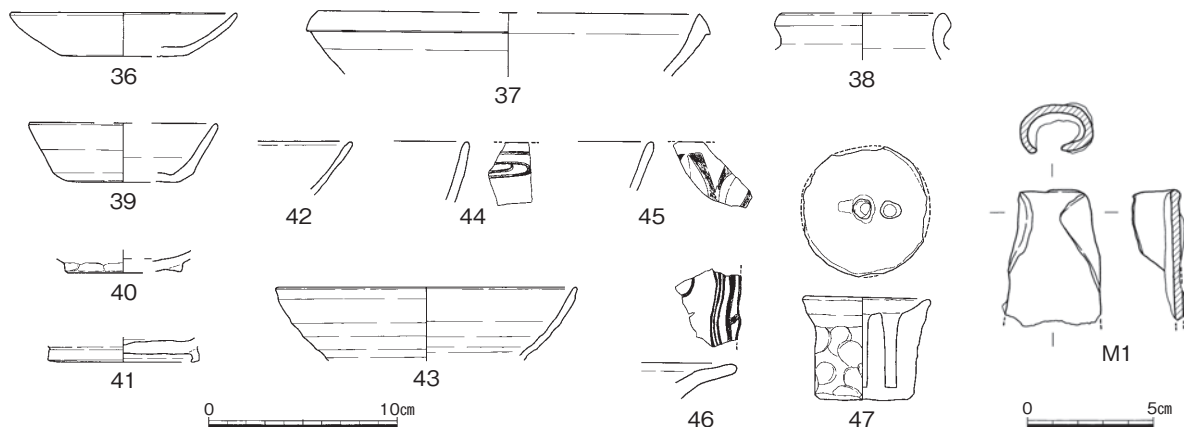
2区東部で、基盤層上面まで約40cm堆積した砂質土を埋土に持つ溝である。東西方向に流れるが、堆積層は2区中央までしか存在しない。埋土中には、少量だが室町～江戸時代のものが混在する。25は土師器、26～30は備前焼、31は京焼系陶器、32・33は肥前陶器、34は肥前系青磁染付、35は焼成不良のため白色だが竜泉窯の青磁である。18世紀後半～末頃に埋没したと考えられる。



第133図 溝4出土遺物 (1/3・1/4)

4 その他の遺構・遺物 (第134図、図版24)

土師器皿36と備前焼鉢37はP1、備前焼壺38はP2、備前焼杯39と土師器碗40はP3から出土した。いずれも鎌倉時代終わりから室町時代の土器で、掘立柱建物の時期を示すと考えられる。42は4区のとわみから出土した和泉型瓦器碗である。44～46は輸入青磁で、46は黄色味を帯びた釉調をもち、波状口縁に合わせて印刻を施す。備前焼47は類例をみないがひょうそくであろうか。M1は近世の包含層から出土した鉄斧である。錆の状態から古墳時代まで遡るかもしれない。



第134図 柱穴1～3・その他の出土遺物 (1/3・1/4)

### 第4節 小結

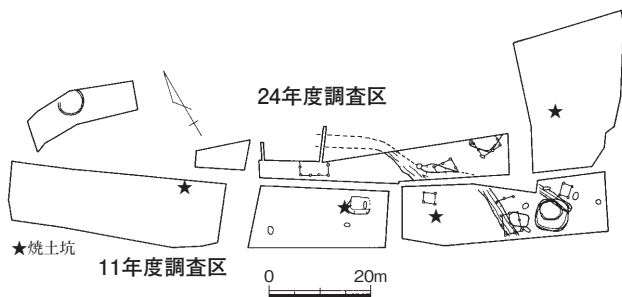
水口遺跡は、11年度調査の1～3区に北接する地点の発掘調査を行った。丘陵裾部の1～3区では、弥生時代中期の竪穴住居1軒と土坑1基、古墳時代の可能性が高い焼土坑1基とたわみ1か所、平安時代の溝1条、室町時代以降の掘立柱建物3棟と土坑1基や溝3条を検出した。氾濫平野部の4区では、弥生時代中期の田竪穴住居1軒と中世のたわみを確認した。

弥生時代の遺構は、11年度調査の1区東部で中期の竪穴住居と長方形竪穴住居状遺構、西部で掘立柱建物が調査された。これら遺構の検出面は標高約26.8mだが、今回も26.6m前後で遺構が確認されたことから、北に下がる緩斜面で比較的日常のよい東部に居住域が展開していたことが分かる。また、4区においても標高約24.7mで竪穴住居を確認したことで、斜面部だけでなく平地部へも集落が展開していたことが明らかとなった。

古墳時代後期の遺構は、11年度調査の1区西部から2区において焼土坑、3区で段状遺構が調査されている。今回も1～2区西部で焼土坑やたわみを検出し、斜面上位から転落した製錬滓の出土を確認した。鍛冶に関連する炭窯の可能性が指摘されている焼土坑と製錬滓の出土から、刃谷製鉄遺跡との関連も含めて本地点の北斜面において鉄生産にかかわる作業が行われていたと考えられる。

古代の遺構としては溝があるが、遺物は11年度調査も含めて奈良～室町時代のものが出土した。本地点周辺には万願寺跡や奥吉原廃寺、熊山山塊には熊山遺跡など古代の遺跡があり、これらに関連する遺構が存在していたと推察される。

中世以降は、掘立柱建物が確認されたが、遺跡北側に山塊に造立された密教系寺院に関する施設が想定されているものの直接これと関連付ける遺物は出土していない。また、土坑2が水溜に関連した遺構と評価できるので、17世紀初め頃には水田化されたと判断される。(杉山)



第135図 中世以前の主要遺構配置図 (1/1,500)



## 第7章 谷山遺跡

### 第1節 調査の概要

奥吉原の谷奥部、東西両側に丘陵が迫り、谷底に向けて東に傾斜する狭隘な斜面に遺跡は立地する。赤磐市教育委員会が実施した確認調査によって周知の万願寺遺跡の範囲が広がると予想されていたが、和田川を隔てて切り離されることから、別遺跡として認識するに至った。一方、和田川より東の地点も万願寺跡として一部発掘調査予定にあったが、確認調査は行われておらず、より具体的な情報を得るために本調査に先立ってトレンチ調査（T3～6）を行った。その結果、微高地と思われた部分は近年の造成による高まりと判明し、その下部には一抱えを越える巨礫を含む砂礫層が堆積していた。また万願寺に関連すると思われる遺物も皆無であったため、調査対象から除外することとなった。

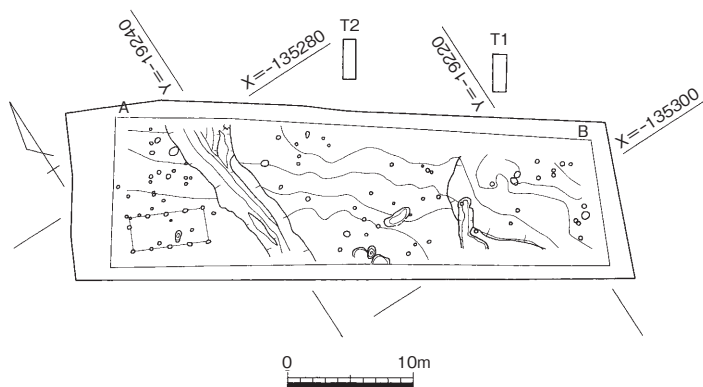
本調査は和田川より西の水田1筆、およそ東西45m×南北13mを対象として行った。当地点は丘陵東斜面裾部で、北東に向かって緩やかに傾斜している。開墾等による削平が著しく、調査区南西端で



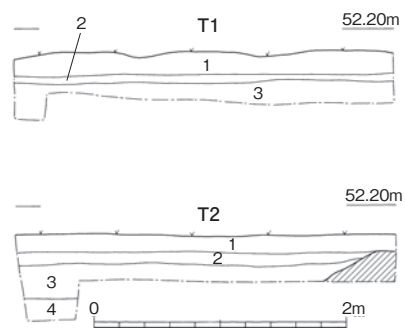
第136図 基盤整備計画と調査区配置図 (1/2,500)

は現床土直下で基盤に達する。弥生時代及び中世の遺構はこの基盤上面で検出した。第139図A B断面第15層上面が遺構面に対応する。第7層は北東にかけての斜面堆積で、その上部に砂礫が堆積しているが、特に第4層は抱え上げられない程大きな礫が詰められており、人為的な造成の痕跡とみられる。すなわち、この時点で大規模な嵩上げが行われ、現水田の平坦面が形成されたと考えられる。

さて、当調査区を含む工区では51.65mまでが工事による影響を受けるとして調査対象であったが、調査区北東端の基盤標高は51.95mを測り、一段低い北側の水田まで遺跡が広がる可能性が浮上してきた。そこでトレンチを2ヶ所設け確認を行った。その結果、T2南端で遺構面の可能性のある基盤層が確認されたものの急激に北に落ち、遺構は確認できなかった。またT1では51.40mまで掘削したが第139図第7層に対応する堆積層が厚く、基盤層は確認できなかった。そこで工事による影響は受けないと判断し、調査対象には含めなかった。(渡邊)

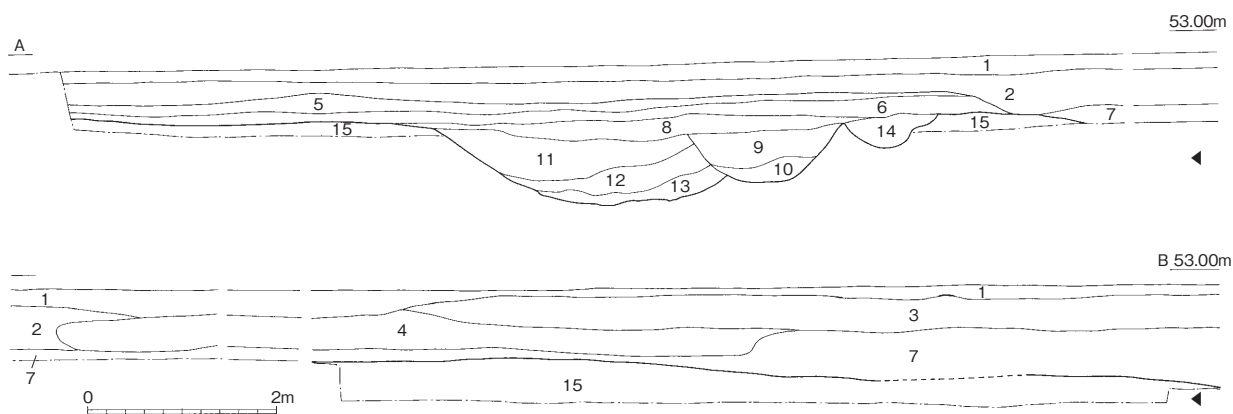


第137図 全遺構配置図 (1/600)



- 1 褐灰色 (10YR4/1) 土 (耕作土)
- 2 灰黄色 (2.5Y6/2) 粘性砂質土 (床土)
- 3 にぶい黄褐色 (10YR6/3) 砂質土  
混暗褐色 (10YR3/4) 砂質土
- 4 礫混暗褐色 (10YR3/4) 砂質土

第138図 T1・2東壁 (1/60)

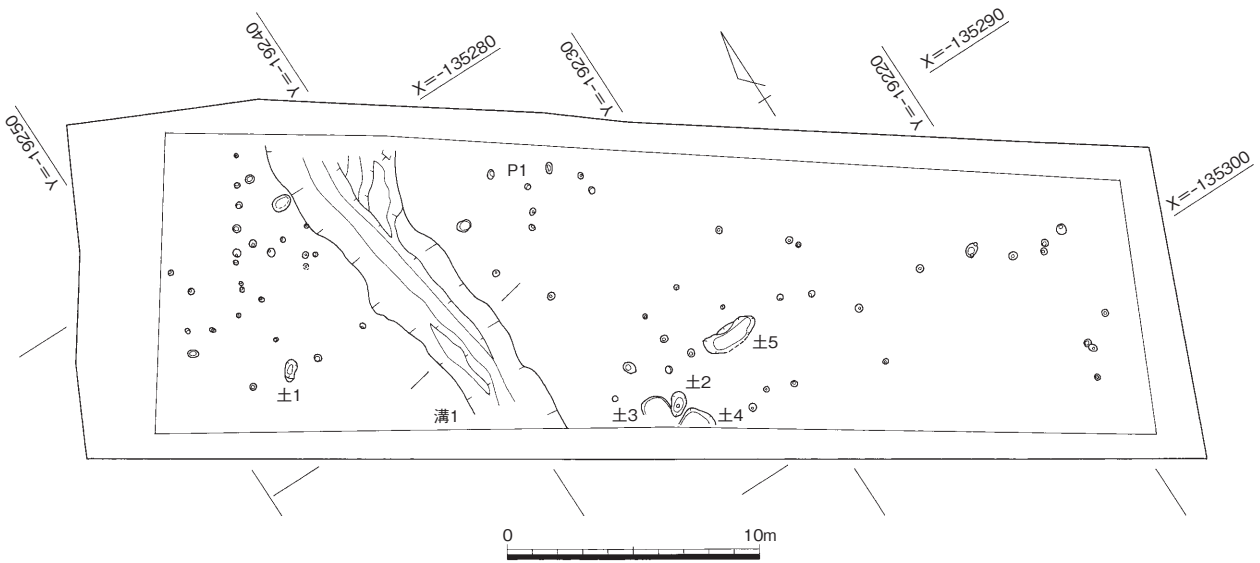


- |                            |                        |                                  |
|----------------------------|------------------------|----------------------------------|
| 1 灰黄色 (2.5Y7/2) 砂質土        | 6 灰黄褐色 (10YR5/2) 砂質土   | 11 灰黄褐色 (10YR4/2) 粗砂             |
| 2 にぶい (10YR5/4) 黄褐色砂質土     | 7 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土 | 12 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粗砂～細砂        |
| 3 灰黄褐色 (10YT5/2) 粗砂一拳头の礫多含 | 8 暗褐色 (10YR3/3) 砂質土    | 13 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂礫           |
| 4 礫層一拳头～人頭大以上の礫・岩          | 9 黒褐色 (10YR3/2) 砂質土    | 14 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土            |
| 5 褐灰色 (10YR6/1) 砂質土        | 10 暗褐色 (10YR3/4) 砂礫    | 15 黄褐色 (10YR5/4) 土 (粗砂・小礫混) (基盤) |

第139図 調査区北壁 (1/80) ←は工事高を示す。

## 第2節 弥生時代の遺構・遺物

弥生時代の遺構は主に調査区の南西半で検出された。柱穴はほぼ全面に広がっているものの、埋土だけでは中世の柱穴と判別し難く、中世の遺物を含むものを除く全てを第140図に示している。ただ、弥生土器を含む柱穴ではやはり南西半に偏在する傾向を示している。地形の改変が著しく弥生時代の地形をとどめていないが、やはり西部が高く、安定していた状況を反映するのであろう。主な遺構は土坑5基と溝1条のみで、出土遺物も少なく、集落の縁辺部にあたると考えられる。(渡邊)



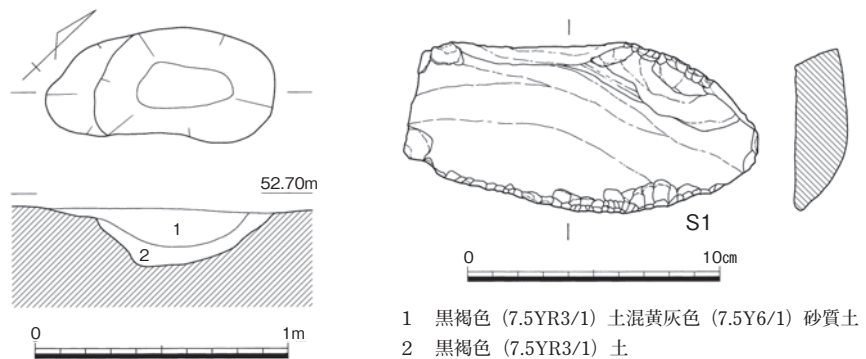
第140図 弥生時代の遺構配置図 (1/300)

### 1 土坑

#### 土坑1 (第140・141図)

調査区南西に位置し、斜面に対して直行する楕円形の土坑である。埋土の状況から自然流入土で埋没したと考えられるが、性格は不明である。

遺物は第1層下面で出土したスクレイパー S1のみである。円礫を打ち割った横長剥片の長辺に片側から細かく剥離し刃部を作り出している。時期は明確ではないが、周辺の状況から弥生時代であろうか。(杉山)



第141図 土坑1 (1/30)・出土遺物 (1/3)

**土坑2** (第140・142図、図版26)

調査区の中央部南寄り、土坑3と4に挟まれる位置で検出された土坑である。長径92cm・短径64cm程の楕円形を呈し、検出面から30cm程測る底の中央部に、径10cm前後で深さ15cmの小穴が認められる埋土は、2層で土器の細片が出土している。時期は、弥生時代と考えられる。

**土坑3** (第140・143図)

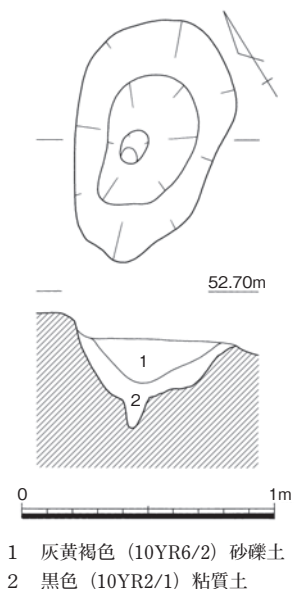
調査区中央部の南寄り、調査区境に位置し南西部は調査区外に及ぶ土坑で、東西107cmを測り底面は平坦である。検出面から底まで5cmを測るのみの浅い土坑で、埋土は焼土を含む黒褐色砂質土が1層である。出土遺物はないが、検出状況などから弥生時代と考えられる。

**土坑4** (第140・144図)

調査区の中央部南寄り、南部は調査区外にのび遺構の一部が検出できたのみで、性格等は不明であるが、検出面から平坦な底面までは23cmを測る。埋土の暗褐色砂礫中から1の弥生土器が出土している。肥厚した口縁端面に凹線を巡らせ円形浮文を貼り付けた壺の口縁片で器面は明赤褐色を呈し焼成は良好である。時期は弥生時代中期後葉頃と考えられる。

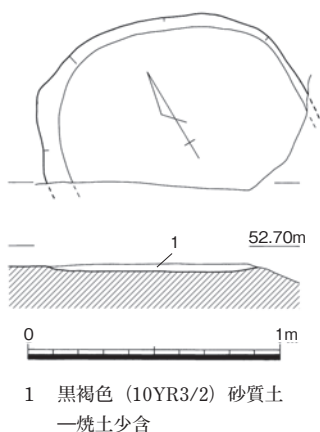
**土坑5** (第140・145図)

調査区の中央部で検出された、東西方向に長い土坑で、深さ45cmを測る。埋土は南側からの堆積で、弥生土器の細片が若干出土している。時期は、検出状況から弥生時代と考えられる。(内藤)



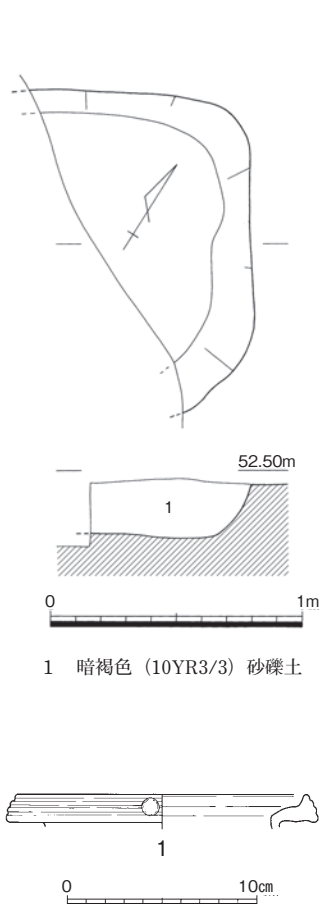
- 1 灰黄褐色 (10YR6/2) 砂礫土
- 2 黒色 (10YR2/1) 粘質土

第142図 土坑2 (1/30)



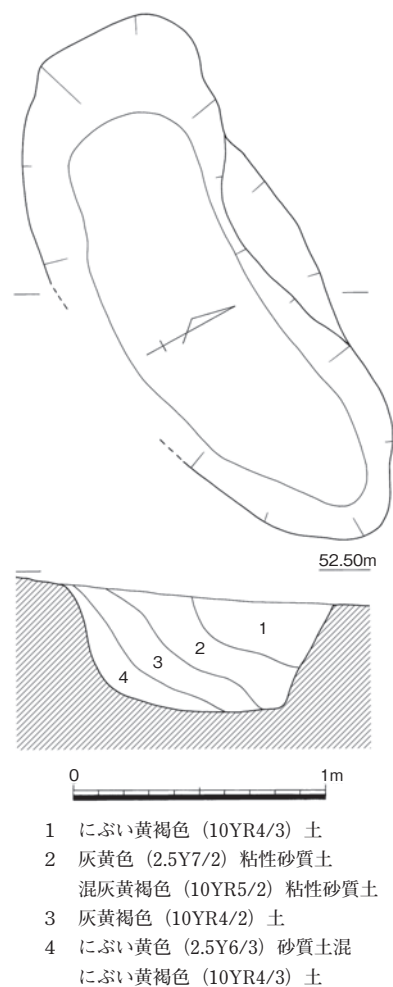
- 1 黒褐色 (10YR3/2) 砂質土  
— 焼土少含

第143図 土坑3 (1/30)



- 1 暗褐色 (10YR3/3) 砂礫土

第144図 土坑4 (1/30)・  
出土遺物 (1/4)



- 1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 土
- 2 灰黄色 (2.5Y7/2) 粘性砂質土  
混灰黄褐色 (10YR5/2) 粘性砂質土
- 3 灰黄褐色 (10YR4/2) 土
- 4 にぶい黄色 (2.5Y6/3) 砂質土混  
にぶい黄褐色 (10YR4/3) 土

第145図 土坑5 (1/30)

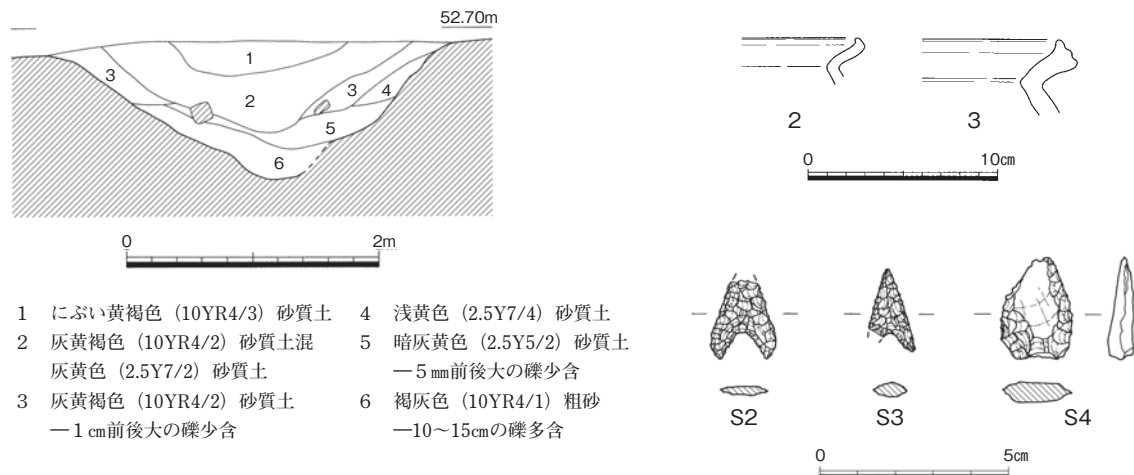
## 2 溝

### 溝1 (第140・146図、図版26)

調査区西側を等高線に直行して南北に走る溝である。最大幅約5m、深さ1m強を測り、断面台形を呈しており、底面は南北で約30cmの勾配を持つ。埋土は大きく6層に分層され、堆積状況から複数回の流れが確認できる。溝の南半の基盤は検出面から約70cmで岩石を多く含む層に変わっており、第6層掘り下げ時に基盤との区別が困難であったが、粗砂の堆積状況から底面と認識した。

出土遺物は少なく、弥生時代後期の甕2・3とサヌカイト製石鏃S2・3がある。2・3は第1～2層で出土した。2は口縁端部をナデにより上方につまみあげている。3の口縁部には2条の凹線が残る。S2は第6層から、S3は第1層、S4は第1～5層から出土した。S2は表裏共に二次加工を丁寧に施し全体に薄手に仕上げている。S3も表裏共に丁寧な二次加工を施し直線的な側縁に仕上げる。また、急角度で細部調整を行い、基部に最大厚を作り出している。S4は、基部にまだ敲打による潰れが残り、表裏には主要剥離面を残して粗く周縁の二次調整を施している。調整の状況から鏃の製作途中品と考えられるが、表面左上からの調整部分が非常に薄いことから非製品の可能性もある。

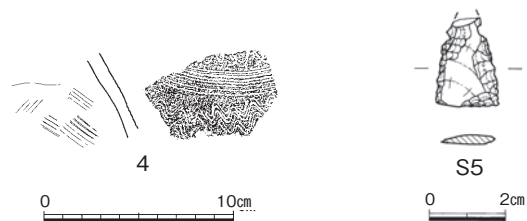
溝の時期は、土器から弥生時代後期前葉頃に埋没したと判断される。(杉山)



第146図 溝1 (1/60)・出土遺物 (1/2・1/4)

### 3 その他の遺構・遺物 (第140・147図)

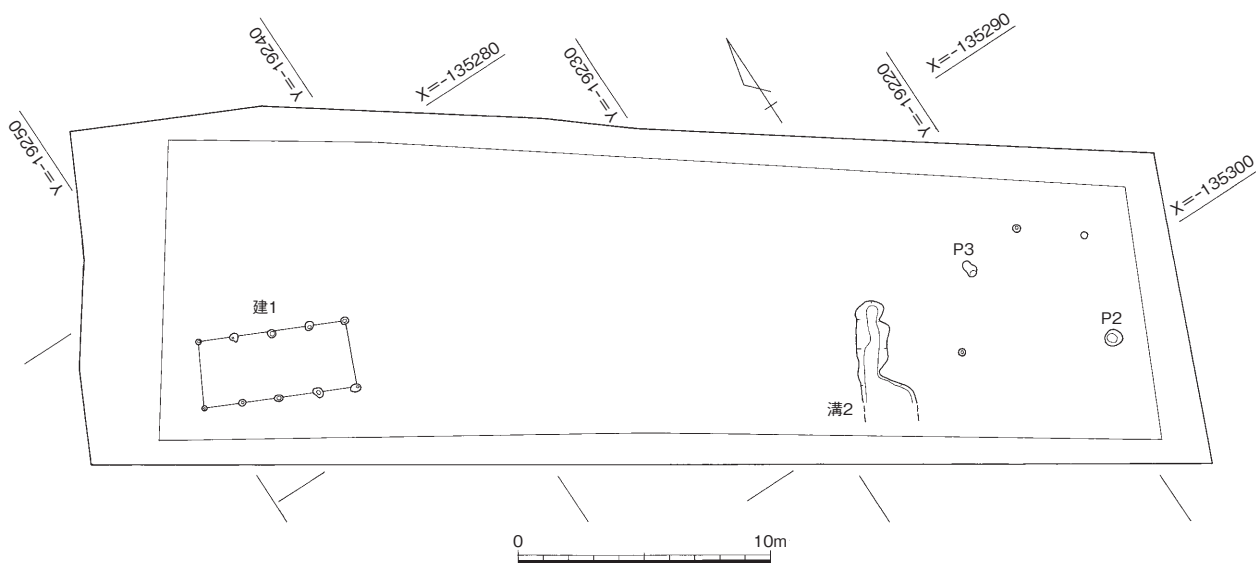
弥生土器を出土した柱穴は11基にすぎない。掘り下げや検出中に出土した弥生土器や石器も少なく、遺構の希薄さを反映した状況を示す。分布では微高地上方にあたる調査区南西部に偏在する傾向を示す。壺4は柱穴1から、石鏃S5は掘り下げ中に出土した。時期の特定できる土器は僅かであったが、弥生時代中期に属するものが主体を占めており、本弥生集落の存続期間が短期間であったことを示唆している。(渡邊)



第147図 柱穴1・その他の出土遺物 (1/2・1/4)

### 第3節 中世以降の遺構・遺物

中世の遺構面も削平が著しく旧地形は明らかでないが、調査区北東部にかけて僅かではあるが中世の遺物を含む砂質土（第139図第7層）が堆積しており、やはり緩斜面地であったと想定される。その中で最も高所にあたる南西部の平坦地で掘立柱建物を1棟検出した。北東の低位部では柱穴が数基検出されたに過ぎない。また、第137図の等高線に認められるように調査区東部は大きく地形が改変されており、その境で溝状の遺構を検出している。



第148図 中世以降の遺構配置図 (1/300)

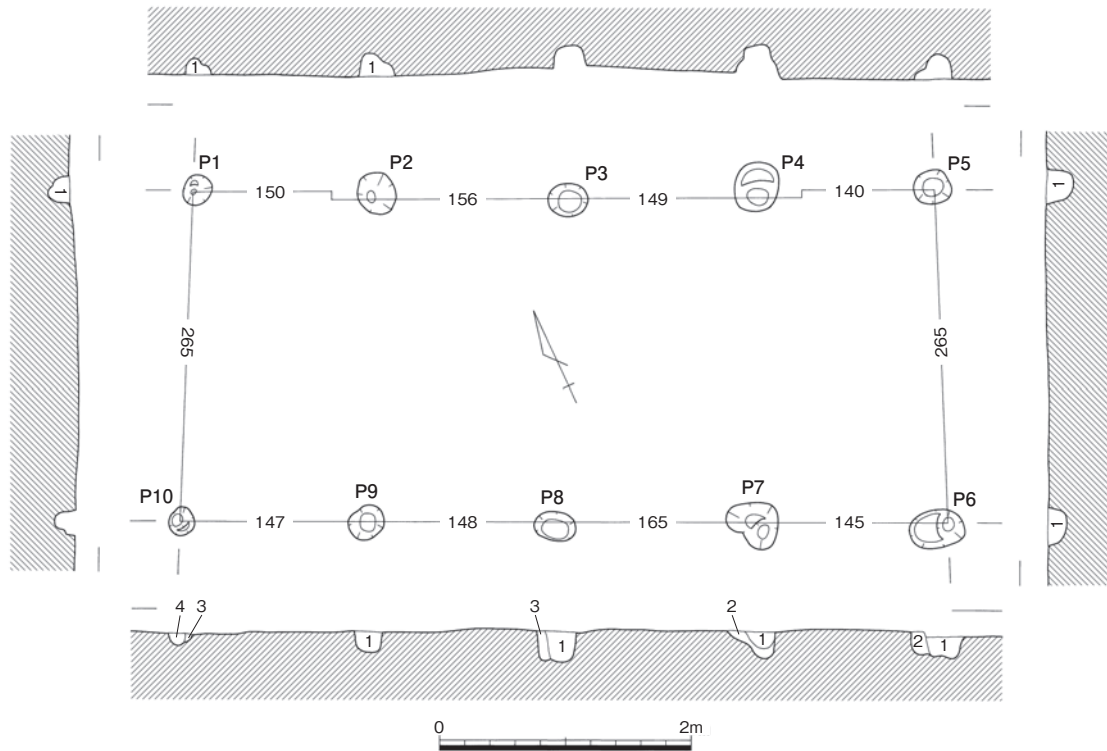
#### 1 掘立柱建物

##### 掘立柱建物1 (第148・149図、図版26)

調査区南西角に位置する。現水田に伴う床土直下で検出された。検出面の標高は52.65mで、柱底面の標高は52.34～52.45mを測る。

東西4間×南北1間の細長い東西棟で、主軸は現在の地割りとは異なり、若干南に振れている。身舎の面積は約15.9㎡である。柱穴は径20～40cmと小さく、深さも最も深いものでも25cmと浅い。P6～8では柱痕跡を確認した。柱間距離は梁側が東西両側一致しているが、桁側では各柱間にバラツキがあり、柱通りもあまり良いとは言えない。なお、P3・4は確認調査時に単独の柱穴として掘られていたため、埋土の状況や出土遺物は明らかでない。

遺物はP5及びP7から弥生土器の細片が出土したのみであり、また埋土の状況に弥生時代と中世に明瞭な差は見い出せず、弥生時代に属する可能性も十分に考えられた。しかし細長い平面形を呈することや柱穴規模が小さい点から、中世の掘立柱建物であろうと判断した。おそらく後述する柱穴2・3と同じ頃に存続していたと考えられる。



1 褐灰色 (7.5YR4/1) 砂質土 2 黒褐色 (10YR3/1) 砂質土 3 黄灰色 (2.5Y5/1) 砂質土 4 褐灰色 (10YR5/1) 粘性砂質土

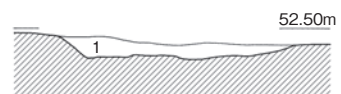
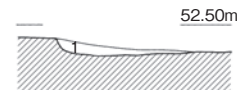
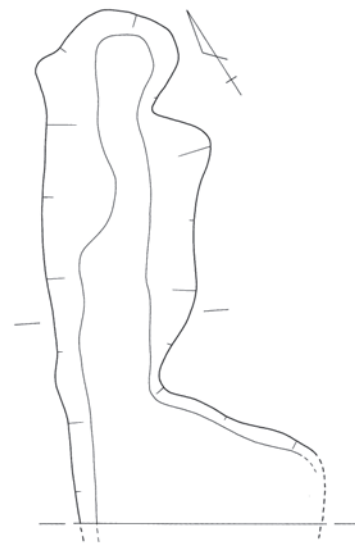
第149図 掘立柱建物 1 (1/60)

## 2 溝

### 溝 2 (第148・150図)

調査区中央やや東寄りに位置する。南北方向に直線的に延び、現地地形と一致している。北端は途切れ、南側は調査区外となる。検出面の標高は52.4mを測る。

幅は南端で1.85m、深さは10~15cmと浅い。斜面の傾斜変換ライン上にあり、斜面上部にあたる西側の壁面は直角近く立ち上がるのに対し東側は不明瞭であることから、溝として掘削されたものではなく、地形改変に際して東側を削平した痕跡の可能性もある。出土遺物はないが埋土の状況から近世以降に掘削されたと考えられる。



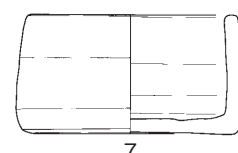
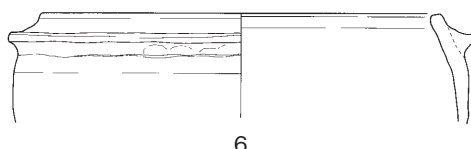
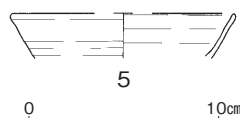
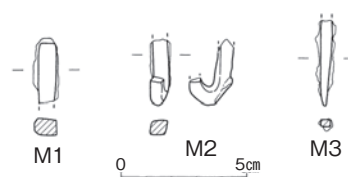
1 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘性砂質土—Mn多含

第150図 溝 2 (1/60)

### 3 その他の遺構・遺物 (第148図・151図)

中世の遺物を含む柱穴は低位部にあたる東部で検出された。いずれも斜面堆積層下で検出されており、削平を免れた結果とみられる。備前焼碗**5**は柱穴3から、瓦質の羽釜**6**は柱穴2から出土した。特に**6**は完形には復元できなかったが比較的大きな破片が柱穴内に数片入っており、意図的に埋められたものと見られる。掘立柱建物1はこれらの柱穴出土遺

物の示す中世に属する可能性が高い。斜面堆積である第7層からも中世の土器が出土したが、凶化し得なかった。またその上方に堆積した耕作土や近世以降の耕作に伴う痕跡からは江戸時代後半以降の備前焼や磁器などが出土している。備前焼の匣形の鉢7は近世以降の水路と思われる攪乱土から出土した。M1・2は北側溝掘削中に第140図第4・7層に対応する層序から出土した。



第151図 柱穴2・3・その他の出土遺物 (1/3・1/4)

## 第4節 小結

弥生時代の遺構は土坑数基と溝・柱穴のみと希薄で、調査地は集落の縁辺部にあたり、集落の中心は地形からみて現在宅地が並ぶ西側の丘陵沿いにあったと想定される。弥生時代の遺構で特に注目されるのは溝1で、平面規模や断面形状から集落の主要な水路と位置付けられよう。ただし、溝1より東側にも土坑や柱穴があることから、集落の境界をめぐる可能性は低い。恐らく居住地を貫くように掘削され、高所の排水と低所への給水を目的とした用水路ではないだろうか。当然水田への水配りも想起されるが、今回の発掘調査ではどの遺跡においても水田は確認できなかった。出土遺物は少ないが、土器は弥生時代中期を示している。柱穴1から出土した壺4は中期前半に遡る可能性もあるが、土坑4・溝3から出土した土器の示す中期後葉が集落の盛行時期と考えた方がよいだろう。遺構・遺物の少なさから、非常に短い間のみ営まれた集落とみられる。

さて、本遺跡で調査前から念頭に置いていたのは万願寺との関連である。かつて奈良時代の瓦が採取されたという。しかし残念ながら周知の万願寺跡に含まれる和田川東側の高まりは後世の堆積で何の遺物も出土しなかった。山陽自動車道建設に伴い西側の丘陵裾部で確認調査が行われたが、遺構・遺物とも発見できず、本調査地においても古代の遺物は皆無であった。また和田川より東では河川の氾濫による堆積層が厚く、基盤も確認できなかったことから、万願寺跡の推定地そのものを見直さなければならぬのではなかろうか。

中世に入って、希薄ながらも再び遺構が認められるようになる。他遺跡や周辺の古墓の様相からもこの時期に奥吉原地区への入植が盛んであったことが看取される。江戸時代以降、小規模なまち直しや家屋の移動はあったものの、現在へ続く景観がこの頃形作られていったのであろう。(渡邊)

### 註

〔山陽自動車道建設に伴う発掘調査報告11〕『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』99 岡山県教育委員会 1995



# 第8章 辺谷製鉄遺跡及び辺谷中田遺跡出土 製鉄関連遺物の金属学的調査

日鉄住金テクノロジー（株）八幡事業所・TACセンター 大澤 正己

## 調査概要

### (1) 辺谷中田遺跡（6世紀後半～7世紀代）

製鉄・鍛冶操業による一貫体制の可能性が遺物構成から確認できた。竪穴住居12より羽口と小割り鉄塊が出土した。鉄塊は磁鉄鉱石由来（表皮スラグがファヤライト）の過共析鋼（ $>0.77\%C$ ）で、強靱刃物用鍛冶原料鉄の可能性をもつ。土坑16出土の焼土塊は花崗閃緑岩の風化残積土（真砂）である。組成は羽口や炉壁の材料土になり得るが、焼土塊の用途そのものの特定は今後の検討課題となる。河道に散布する鉄鉱石組成は、磁鉄鉱と赤鉄鉱からなり、少量のマグネタイトを伴う。少量含まれる脈石は石英である。共伴鉄滓は、主にファヤライト晶出で、少量のキルシュタイナイトを含む。製錬滓で、鉄鉱石原料を裏付ける。

### (2) 辺谷製鉄遺跡（7世紀前半）

灰鉄ザクロ石に磁鉄鉱を伴うスカルン鉱床の露頭鉄鉱石を原料とした製鉄遺跡である。炉壁は石英を主とした花崗岩風化真砂であり、被熱により生じた少量のクリストバライト、ムライト、ガラスが認められた。耐火度は $1300^{\circ}C$ を保つ。製錬滓の鉱物相は、主にファヤライトからなり、少量のキルシュタイナイトと磁鉄鉱、ウスタイトなど伴うところは、前述辺谷中田遺跡出土製錬滓に近似する。注目すべきは、含鉄製錬滓の含鉄部分である。亜共晶組成白鑄鉄（ $<4.23\%C$ ）から過共析鋼と、こちら側も高炭素鋼生産指向が窺えた。

## 1 いきさつ

辺谷中田遺跡と辺谷製鉄遺跡は、岡山県赤磐市吉原地区にほぼ隣接して所在する。前者は吉井川に向けて緩く下る斜面地に立地し、住居跡から羽口や小割り鉄塊など鍛冶関連遺物を出土する。更に土坑から焼土塊、河道から鉄石や製錬滓など製鉄関連遺物が検出された。片や後者は、山裾の北東向き斜面で、製鉄本体から若干外れた調査区である。堆積層から大量の炉壁片や鉄滓、鉄鉱石などの出土をみた。この両遺跡の当該期における鉄生産の実態を把握する目的から分析調査の運びとなった。

## 2 調査方法

### 2-1. 供試材

表5に示す。辺谷中田遺跡出土品は5点、辺谷製鉄遺跡は17点の合計22点の調査である。

### 2-2. 調査項目

(1) 肉眼観察、(2) 顕微鏡組織、(3) ビッカース断面硬度、(4) EPMA (Electron Probe Micro Analyzer) 調査、(5) X線回折は九州大学名誉教授井澤英二先生を介して九州大学地球資源工学部門

のX線回折装置（理学Ultima IX）を使用。X線はCu K $\alpha$ 1（40KV、20mA）を用い、走査速度2°/minで2-65°（2 $\theta$ ）を走査範囲とした。井澤先生コメント援用、（6）化学組成分析

### 3 調査結果

#### 3-1 辺谷中田遺跡出土品

**OHN-1** 鉄塊系遺物（小割り鉄塊）：全面破面で気孔少なく緻密な6.2gの小塊である。表皮滓の鉱物相は、ファヤライト（2FeO・SiO<sub>2</sub>）と少量のウスタイト（FeO）を晶出した磁鉄鉱由来の製錬滓を残す。金属鉄組織を写真18の1段3に示す。黒色層状パーライト地に針状セメントイト（Fe<sub>3</sub>C）を析出した過共析鋼（>0.77% C）である。硬度値は263～283Hvを呈する。強靱な刃物製作に適した鍛冶原料の鋼に分類できる。鉄中の非金属介在物の調査結果を写真16の上段に示す。分析点12の5 $\mu$ m前後の介在物組成は80.2% FeO-35.7% Sで硫化鉄（磁硫鉄鉱：Fe<sub>1-x</sub>S）が同定される。砂鉄特有元素のTi、Vを含まぬところから鉱石原料を裏付ける。表皮滓の分析結果が写真15である。分析点14の淡灰色盤状結晶は62.0% FeO-31.8% SiO<sub>2</sub>組成からファヤライト、分析点13の白色粒状結晶が89.0% FeO組成からウスタイト（FeO）に判定できる。顕微鏡観察結果と矛盾はない。

**OHN-2** 焼土塊：キメ細かな精製粘土からなる淡黄色焼土塊である。X線回折（紙面の都合で回折図は割愛）では石英、斜長石、カリ長石を主とし、普通角閃石と黒雲母を伴い、被熱によるガラスを示す。花崗閃緑岩の風化残積土（真砂）である。強熱減量（Ig loss）は8.41%と熱影響を殆んど受けてない胎土であり、耐火度は1160℃を呈した。15.94% Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>、1.80% 塩基性成分からの実績値である。

**OHN-3** 鉄鉱石：節理割れで全面破面の磁鉄鉱鉱石である。色調は暗灰色で強磁性、稜線は若干磨滅気味で、明確な敲打痕は認められない。顕微鏡組織を写真18の2段3に示す。淡灰色地は磁鉄鉱（magnetite：Fe<sub>3</sub>O<sub>4</sub>）、白色針状結晶は赤鉄鉱（hematite：Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>）で黒色不定形状は僅かであるが脈石の石英が認められる。磁鉄鉱の硬度値は534Hvと文献硬度値の505～592Hvの範囲内に収まり、磁鉄鉱組織を保障する。なお、X線回折結果も検鏡結果に準ずる。ただし、少量のマグヘマイト（maghemite： $\gamma$ -Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>）を伴う。化学組成（表6）は全鉄分が63.66%と高く、有害元素は0.002% S、0.03% P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>と極低値の高品位磁鉄鉱石であった。

**OHN-4** 炉底塊：表皮剥離で395gの炉底塊破片。底面は石英含みの淡灰色白色粘土を付着する。顕微鏡組織は写真18の3段3に示す。ファヤライトとウスタイトが主なる鉱物相である。ファヤライトの硬度値は652Hvで、文献硬度値の655～713Hv<sup>(注1)</sup>の下限值を僅かに割るが、ファヤライトに同定できる。X線回折の主要鉱物はファヤライトで、少量のキルシュスタイナイトとウスタイトを伴う。化学組成は全鉄分43.50%に対して、スカルン鉱床の特徴である0.18% TiO<sub>2</sub>、0.01% Cr<sub>2</sub>O<sub>3</sub>、0.03% V、0.01% ZrO<sub>2</sub>など微量傾向が著しい。磁鉄鉱鉱石由来の製錬滓に分類できる。

**OHN-5** 流出孔滓：製鉄炉の排滓孔（径4.0cm程度）の溜り滓である。顕微鏡組織は写真18の4段目3に示す。ファヤライト主体で硬度値は風化の影響から588Hvを示す。X線回折の主要鉱物はファヤライト。化学組成も39.83% Total Feに対して微量TiO<sub>2</sub>含有量傾向で磁鉄鉱鉱石由来の製錬滓。

#### 3-2. 辺谷製鉄遺跡出土品

**OHS-1** 炉壁：土坑6から出土した10g強の炉壁小片である。平面は不整三角形で全面が破面。緻密質で気孔少なく微磁性。顕微鏡組織を写真18の5段3に示す。ガラス中に淡灰色不定形結晶のファヤライト（硬度値は646Hv）を晶出。写真16の下段にEPMA調査結果を示す。淡灰色結晶を対象とし

た分析点16、17はMgOとCaO固溶のファヤライト。磁鉄鉱石の製錬派生物の確認が取れた。

**OHS-2** 炉内滓：前述土坑共伴となる炉内滓破片である。上面は流動状の生きた面を僅かに残すが、大部分が破面で8g強の薄片。微磁性。顕微鏡組織を写真19の1段3に示す。淡灰色柱状小結晶のファヤライトを晶出。硬度値は489Hvと低値の異常値だった。ファヤライトの小型結晶からくる誤差であろう。磁鉄鉱石の製錬滓に判別できる。

**OHS-3** 鉄鉱石：脈石を断面にもつ75gの分割磁鉄鉱石である。顕微鏡組織を写真19の2段3に示す。右側淡灰白色が磁鉄鉱で、左灰黒色部が脈石である。脈石の硬度値は771Hv。X線回折の主要鉱物は、大量の灰鉄ザクロ石 ( $3\text{CaO} \cdot \text{Fe}_2\text{O}_3 \cdot 3\text{SiO}_2$ ) に磁鉄鉱を伴う低品位のスカルン鉄鉱石の結果が出た。これに微量の石英、カリ長石が検出された。脈石の灰鉄ザクロ石は、スカルン鉱床産出の指標となる。化学組成(表6)は脈石の影響が大きく現われて、23.77% Total Feに27.01% CaOと34.84%  $\text{SiO}_2$ が高めは、灰鉄ザクロ石のカルシウムのケイ酸塩鉱物を構成する。

**OHS-4** 炉壁：前述鉄鉱石と排滓場に共伴するガラス化なし炉壁片である。淡褐色胎土は、幅10mmで断面形が半円形の繊維痕を残す。X線回折では石英を主とし、カリ長石、斜長石、黒雲母を伴う。弱い被熱により生じた少量のクリストバライト、ムライト、ガラスが認められる。花崗岩風化真砂で耐火度は1300℃を保つ。強熱減量 (Ig loss) 6.47%の化学組成は鉄分 ( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ) 1.78%と少なく軟化性に勝れ、塩基性成分 (CaO+MgO) が0.66%と低値が耐火性に効いたと考えられる。

**OHS-5** 炉内流動滓：上面の生きた面に小じわをもつ炉内流動滓。側面はすべて破面で緻密質。顕微鏡組織を写真19の3段3に示す。鉱物相はファヤライトとウスタイトやガラスで構成される。ファヤライトの硬度値は635Hvを呈した。X線回折では検鏡に準じた鉱物検出で、これに少量のキルシュスタイトと磁鉄鉱を伴う。化学組成は38.29% Total Feに0.24%  $\text{TiO}_2$ 、0.01%  $\text{Cr}_2\text{O}_3$ 、0.03% V、0.03%  $\text{ZrO}_2$ など微量はスカルン産磁鉄鉱の製錬滓の成分系を表わした。

**OHS-6** 滓付着鉄塊系遺物：直径約20mmの球状鉄塊を付着した滓。写真19の4段2の埋込み試料の右上面は鉄塊断面を示す。銹化して金属鉄組織の痕跡は留めない。3は滓側の鉱物相である。淡灰色短柱状結晶のファヤライトと、その下側に半還元磁鉄鉱石の残留を示す。磁鉄鉱石の製錬滓の晶癖が確認できる。但し、ファヤライトの硬度値は529Hvと異常値だった。

**OHS-7** 炉底塊：炉壁に接した緻密な384gの炉底塊破片。上面は流動状皮を僅かに残すがすべて破面。顕微鏡組織を写真19の5段3に示す。鉱物相はファヤライトと、白色粒状結晶のウスタイトを少量晶出する。ファヤライトの硬度値はここでも527Hvと異常値を呈した。化学組成はスカルン産磁鉄鉱の特徴をもち、44.92% Total Feに対して、低チタン傾向をとる。磁鉄鉱石由来の製錬滓である。

**OHS-8** 含鉄流出孔近傍滓：製鉄炉の流出孔より炉外へ放出された溝滓主体。元側の窄まり部上面は急冷により小じわ発生。上下面は生きて長軸両端が破面。拡がり部下面は、1.5~3.0mm大の礫を多数付着する。写真20の1段2は埋込み試料断面を示す。明白部に金属鉄を残す。その周囲の灰黒色部は滓で、ファヤライトを晶出(組織は割愛)。3は金属鉄のetch後の組織である。黒色層状パーライト地に白色針状セメンタイトを析出した過共析鋼 (>0.77% C)。強靱な鋼(刃鋼)である。滓の化学組成は前述してきた近似のスカルン産磁鉄鉱石の成分系であった。

**OHS-9** 炉壁溶融物：平面は不定形で上面に僅かに黒色ガラス質被膜を残すが、大部分は無光沢淡茶褐色。緻密で強磁性である。顕微鏡組織を写真20の2段3に示す。鉱物相は白色多角形結晶のマグネタイトが多発する。硬度値は569Hvと磁鉄鉱(マグネタイト)の文献硬度値505~592Hvの範疇に収ま

る。製鉄炉内送風孔近傍で酸素濃度の高い酸化雰囲気個所で生成されたマグネタイト系遺物。

**OHS-10** 木舞孔滓か：直径34mmのパイプ状滓である。内径は16mmの空洞をもち、長軸両端は破面。色調は淡灰褐色の緻密質。顕微鏡組織を写真20の3段3に示す。鉱物相はファヤライトを主とし、微量の樹枝晶ウスタイトを晶出。ファヤライトの硬度値は628Hv、磁鉄鉱石由来の製錬滓である。

**OHS-11** 炉内滓：直径25mm木炭を抱込んだ後の抜殻状滓。樹皮が黒鉛化木炭として残る。顕微鏡組織を写真20の4段3に示す。鉱物相はファヤライト、硬度値は538Hvと異常。磁鉄鉱石由来の製錬滓。

**OHS-12** 炉壁：平面が不整六角形状の強磁性炉壁破片。上面は生きたガラス面、黒紅色で酸化雰囲気に曝された痕跡を残す。下面の約半分は石英含みの淡赤褐色粘土で3mm弱の砂を噛み、1～5mm大の繊維を含む。写真20の5段3は黒色ガラス地に白色多角形結晶のマグネタイトを晶出した炉壁溶融物。磁鉄鉱石の製錬滓。

**OHS-13** 炉壁：平面は不整五角形状で側面は全て破面。内面は黒色ガラス化溶融面をもち、下方へ滴下流動痕跡を留める。外面は明赤灰色粘土で1mm弱の石英粒子と2～3mm繊維痕が観察される。顕微鏡組織を写真21の1段3に示す。半還元磁鉄鉱石粒子と微小白色マグネタイトの晶出が認められる。硬度値は529Hvで、磁鉄鉱粒子の文献硬度値の509～592Hv内に収まる。

**OHS-14** 炉壁粘土：平面は不定形粘土片。上面は錆の浮いた淡茶褐色被膜に包まれて弱く被熱痕跡を留める。下面は石英含みの白色粘土に10mm弱の繊維痕がみられる。顕微鏡組織を写真21の2段3に示す。非晶質ガラスで硬度値は701Hvを呈する。ガラスの文献硬度値の639～884Hvの範囲内に収まる。X線回折は石英を主とし、カリ長石、斜長石、黒雲母、磁鉄鉱を伴う。被熱によって生じた少量のムライトとガラスが認められる。耐火度は1007℃と低めは化学組成の強熱減量（Ig loss）の4.91%と低下、高鉄分の9.72% Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>、更に1.81%高塩基性成分が効いている。いずれにしる鉄分を除くと、該品はOHN-2焼土塊、OHS-4炉壁粘土などと同系花崗岩風化真砂に分類できる。

**OHS-15** 滓附着鉄塊系遺物：滓は黒褐色緻密質に小じわの寄った流動滓上に弱磁性で約20mm球状鉄塊が乗る。顕微鏡組織を写真21の3段に示す。2は球状鉄塊の半裁断面である。錆化が進み鉄輪郭を残して内部は空洞化する。3は輪郭部の一部に辛うじて残存した金属鉄痕跡で、オーステナイト初晶と地はレデブライトをもつ垂共晶組成白鑄鉄（<4.23%C）が酸化して色調逆転で読み取れる。銑生産のあった事も示唆する貴重な資料である。

**OHS-16** 炉内滓：平面が不定形で上面に平坦面をもたない炉内滓。下面は4mm前後の礫を僅かに付着。炉底塊の分類も可能。色調は淡茶色で無光沢。側面は破面で1mm径の気孔を発生するも緻密質。顕微鏡組織を写真21の4段3に示す。鉱物相はファヤライト（硬度値は598Hv）が主で、僅かにマグネタイトを晶出。化学組成は28.95% Total Feに低チタン成分系（0.24% TiO<sub>2</sub>）で、スカルン産磁鉄鉱石由来の製錬滓の特徴を呈する。

**OHS-17** 含鉄流動滓：平面は不定形で、上面に錆を浮かせて小じわ発生の流動滓破片で強磁性である。側面は全て破面で気孔少なく緻密質。顕微鏡組織を写真21の5段3に示す。半還元磁鉄鉱石と白色多角形結晶のマグネタイトで構成。強磁性は還元鉄が少なく、マグネタイト鉱物からの影響が強い。磁鉄鉱石由来の製錬滓。

注

(1) 日本学術振興会製鉄第54委員会『焼結鉍組織写真および識別法』日刊工業新聞社 1968

磁鉄鉍：505～592Hv、ウスタイト：446～503Hv、赤鉄鉍：1020～1084Hv、ファアライト：655～713Hv、ガラス：639～884Hv

表5 供試材の歴史と調査項目

符号	遺跡名	出土位置	遺物 No.	遺物名称	推定年代	計測値		磁着度	メタル度	調査項目										備考
						大きさ (mm)	重量 (g)			マクロ組織	顕微鏡組織	断面硬度	ビッカース	X線回折	E P M A	化学分析	耐火度	カロリー		
OHN-1	辺谷中田遺跡	竪穴住居12	M 4	鉄塊系遺物	6世紀後半～7世紀代	20×14×11	6.19			○	○		○							
OHN-2		土坑16	C 2	焼土塊		81×64×26	116.28			—		○		○	○					
OHN-3		河道1	S 96	鉍石		47×28×15	36.30			○	○	○		○						
OHN-4		河道1	M 6	炉底塊		96×58×48	394.97			○	○	○		○						
OHN-5		1区中央トレンチ	M 7	流出孔滓		77×57×40	177.80			○	○	○		○						
OHS-1	辺谷製鉄遺跡	土坑6	C 1	炉壁	7世紀前半	32×23×20	10.81			○			○							
OHS-2		土坑6	M 1	炉内滓		24×19×19	8.58			○										
OHS-3		排滓場	S 23	鉍石		43×43×28	75.34			○	○	○		○						
OHS-4		排滓場	C 6	炉壁粘土		79×65×33	133.08			—		○		○	○					
OHS-5		溝1	M 2	炉内流動滓		54×38×46	116.40			○	○	○		○						
OHS-6		排滓場第1層	M 8	滓付着鉄塊系遺物		46×40×32	52.26			○										
OHS-7		排滓場第1層	M11	炉底塊		80×70×59	381.46			○	○			○						
OHS-8		排滓場第1層	M15	含鉄流出孔近傍滓		144×103×48	532.39			○	○			○						
OHS-9		排滓場第1層	M 3	炉壁熔融滓(磁力大)		44×38×30	45.11			○				○						
OHS-10		排滓場第1層	M 7	木舞孔滓か		58×36×36	50.89			○										
OHS-11		排滓場第1層	M10	炉内滓		55×53×33	99.61			○										
OHS-12		排滓場第II層	M 4	炉壁(磁力大)		72×55×36	125.74			○										
OHS-13		排滓場第III層	M 5	炉壁(磁力大)		45×44×21	32.76			○										
OHS-14		排滓場第III層	C 7	炉壁粘土		45×39×27	32.78			○		○		○	○					
OHS-15		排滓場第III層	M 9	滓付着鉄塊系遺物		35×32×21	18.61			○										
OHS-16		排滓場第IV層	M12	炉内滓		78×64×56	219.76			○	○			○						
OHS-17		排滓場第IV層	M13	含鉄流動滓(磁力大)		39×32×21	21.56			○										

表6 供試材の組成

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	二酸化珪素 (SiO <sub>2</sub> )	酸化アルミニウム (Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	*	*	*	*
OHN-2	辺谷中田遺跡	土坑16第6層	焼土塊	6世紀後半～7世紀代	3.10	0.11	3.88	0.04	63.71	15.94	1.02	0.78				
OHN-3		河道1	鉍石		63.66	0.01	3.48	87.14	9.54	0.30	0.17	0.07				
OHN-4		河道1	炉底塊		43.50	0.06	51.42	4.96	30.57	5.31	2.59	0.86				
OHN-5		河道1	流出孔滓		39.83	0.08	45.18	6.62	29.34	7.11	4.81	1.25				
OHS-3		辺谷製鉄遺跡	排滓場		鉍石	23.77	0.03	2.73	30.91	34.84	1.03	27.01	1.05			
OHS-4	排滓場		炉壁粘土	1.93	0.02	0.86	1.78	72.05	12.20	0.43	0.23					
OHS-5	溝1		炉内流動滓	38.29	0.06	42.52	7.41	30.90	4.59	6.26	4.05					
OHS-7	排滓場第1層		炉底塊	44.92	0.05	44.10	15.14	24.09	3.29	8.10	0.72					
OHS-8	排滓場第1層		含鉄流出孔近傍滓	28.02	0.07	20.97	16.66	33.66	6.03	11.50	0.68					
OHS-14	排滓場第III層		炉壁粘土	10.28	0.02	4.45	9.72	57.96	15.83	1.62	0.19					
OHS-16	排滓場第IV層		炉内滓	28.95	0.10	20.25	18.74	34.87	6.88	7.38	0.46					

* * *		Σ*												
酸化カリウム (K <sub>2</sub> O)	酸化ナトリウム (Na <sub>2</sub> O)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO <sub>2</sub> )	酸化クロム (Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	硫黄 (S)	五酸化燐 (P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> )	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	二酸化ジルコニウム (ZrO <sub>2</sub> )	耐火度 (°C)	造滓成分	造滓成分 Total Fe	TiO <sub>2</sub> Total Fe
2.64	1.69	0.19	0.58	0.01	0.011	0.07	Ig loss 8.41	0.01	0.01	-	1160	85.78	27.671	0.187
<0.01	<0.01	0.11	0.01	0.03	0.002	0.03	0.02	0.02	0.01	0.02	CW0.35	10.08	0.158	0.000
1.53	0.51	0.20	0.18	0.01	0.018	0.31	0.07	0.03	<0.01	0.01	-	41.37	0.951	0.004
1.49	0.64	0.41	0.31	0.01	0.028	0.37	0.18	0.03	<0.01	0.05	-	44.64	1.121	0.008
<0.01	<0.01	1.49	0.09	0.02	0.004	0.10	0.04	0.03	<0.01	0.05	CW0.29	63.93	2.690	0.004
2.87	0.56	0.05	0.31	0.02	0.008	0.03	Ig loss 6.47	<0.01	0.01	-	1300	88.34	45.772	0.161
1.07	0.22	0.57	0.24	0.01	0.008	0.14	0.13	0.03	<0.01	0.03	-	47.09	1.230	0.006
0.68	0.13	1.18	0.13	0.01	0.007	0.17	0.08	0.02	<0.01	0.01	-	37.01	0.824	0.003
1.07	0.22	1.64	0.26	0.01	0.012	0.43	0.23	0.03	<0.01	<0.01	-	53.16	1.897	0.009
2.63	0.71	0.23	0.23	0.01	0.012	0.09	Ig loss 4.91	<0.01	0.01	-	1007	78.94	7.679	0.022
1.16	0.44	0.79	0.24	0.01	0.012	0.29	0.22	0.03	<0.01	0.02	-	51.19	1.768	0.008

Σ\* SiO<sub>2</sub>+Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>+CaO+MgO+K<sub>2</sub>O+Na<sub>2</sub>O=造滓成分

表7 供試材の調査結果

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	顕微鏡組織・X線回折
OHN-1	辺谷中田遺跡	竪穴住居12	鉄塊系遺物	6世紀後半 ~7世紀代	表皮スラグ：F+W、金属鉄；介在物FeS、Pe・Ce
OHN-2		土坑16	焼土塊		q、Pl、kf、hb、
OHN-3		河道1	鉱石		mt、hm、mh、q
OHN-4		河道1	炉底塊		F+微量W、Ks
OHN-5		河道1	流出孔滓		F+微量W、q、Pl
OHS-1	辺谷製鉄遺跡	土坑6	炉壁	7世紀前半	glass中にF
OHS-2		土坑6	炉内滓		F
OHS-3		排滓場	鉱石		ad、mt、q、kf
OHS-4		排滓場	炉壁粘土		q、kf、pl、c、ml
OHS-5		溝1	炉内流動滓		F、ks、mt、w、q
OHS-6		排滓場第I層	滓附着鉄塊系遺物		半還元磁鉄鉱石、F、銹化鉄 gt
OHS-7		排滓場第I層	炉底塊		F+少量W
OHS-8		排滓場第I層	含鉄流出孔近傍滓		滓：F、金属鉄：Pe、Ce
OHS-9		排滓場第I層	炉壁溶融滓（磁力大）		mt、glass
OHS-10		排滓場第I層	木舞孔滓か		F
OHS-11		排滓場第I層	炉内滓		F
OHS-12		排滓場第II層	炉壁（磁力大）		mt、glass、半還元磁鉄鉱石屑
OHS-13		排滓場第III層	炉壁（磁力大）		半還元磁鉄鉱石屑、glass
OHS-14		排滓場第III層	炉壁粘土		q、kf、Pl、mt、ml、g
OHS-15		排滓場第III層	滓附着鉄塊系遺物		滓：F、銹化鉄：le痕跡
OHS-16		排滓場第IV層	炉内滓		F+微量W
OHS-17		排滓場第IV層	含鉄流動滓（磁力大）		半還元磁鉄鉱石屑、mt

化学組成 (%)								所見
Total Fe	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	塩基性成分	TiO <sub>2</sub>	V	MnO	ガラス質成分	Cu	
-	-	-	-	-	-	-	-	磁鉄鉱石由来の過共析鋼 (>0.77% C)、鍛冶用原料鉄か
3.10	0.04	1.80	0.58	0.01	0.19	85.78	0.01	耐火度1160℃、花崗岩風化真砂
63.66	87.14	0.24	0.01	0.02	0.11	10.08	0.01	磁鉄鉱石 (高品位)
43.50	4.96	3.45	0.18	0.03	0.20	41.37	<0.01	磁鉄鉱石由来の製錬滓
39.83	6.62	6.06	0.31	0.03	0.41	44.64	<0.01	磁鉄鉱石由来の製錬滓
-	-	-	-	-	-	-	-	磁鉄鉱石由来の製鉄炉・炉壁
-	-	-	-	-	-	-	-	磁鉄鉱石の製錬滓
23.77	30.91	28.06	0.09	0.03	1.49	63.93	<0.01	含脈石 (灰鉄ザクロ石) 磁鉄鉱石
1.93	1.78	0.66	0.31	<0.01	0.05	88.34	0.01	耐火度1300℃、花崗岩風化真砂
38.29	7.41	10.31	0.24	0.03	0.57	47.09	<0.01	磁鉄鉱石由来製錬滓
-	-	-	-	-	-	-	-	磁鉄鉱石由来製錬滓、球状鉄塊は銹化
44.92	15.14	8.82	0.13	0.02	1.18	37.01	<0.01	磁鉄鉱石由来製錬滓
28.02	16.66	12.18	0.26	0.03	1.64	53.16	<0.01	磁鉄鉱石由来製錬滓に過共析鋼 (>0.77% C) 含み
-	-	-	-	-	-	-	-	磁鉄鉱石由来製錬滓 (マグネタイト系遺物)
-	-	-	-	-	-	-	-	磁鉄鉱石製錬滓
-	-	-	-	-	-	-	-	磁鉄鉱石製錬滓
-	-	-	-	-	-	-	-	磁鉄鉱石由来製鉄炉・炉壁
-	-	-	-	-	-	-	-	磁鉄鉱石由来製鉄炉・炉壁
10.28	9.72	1.81	0.23	<0.01	0.23	78.94	0.01	耐火度1007℃、花崗岩風化真砂
-	-	-	-	-	-	-	-	磁鉄鉱石由来製錬滓に亜共晶組成白鑄鉄
28.95	18.74	7.84	0.24	0.03	0.79	51.19	<0.01	磁鉄鉱石由来の製錬滓
-	-	-	-	-	-	-	-	磁鉄鉱石由来の製錬滓

F: fayalite (2FeO・SiO<sub>2</sub>)、W: Wüstite (FeO)、Pe: Pearlite (フェライトとセメンタイトの共析)、Ce: Cementite (Fe<sub>3</sub>C)、mt: magnetite (Fe<sub>3</sub>O<sub>4</sub>) 磁鉄鉱、hm: hematite (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) 赤鉄鉱、Pl: 斜長石 (Na、Ca) (Si、Al) AlSi<sub>2</sub>O<sub>8</sub>、Kf: カリ長石 (K<sub>2</sub>O・Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>・SiO<sub>2</sub>)、q: quartz (SiO<sub>2</sub>)、gt: goethite (α-FeO (OH))、le: ledebulite (オーステナイトとセメンタイトの共晶)、hb: 普通角閃石 (Ca<sub>2</sub>(Mg、Fe)<sub>4</sub>AlSi<sub>7</sub>AlO<sub>22</sub>(OH))、Ks: キルシュスタイナイト (CaO・FeO・SiO<sub>2</sub>)、ab: 灰鉄ザクロ石 (3CaO・Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>・3SiO<sub>2</sub>)、C: クリストバライト (SiO<sub>2</sub>)、ml: ムライト (3Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>・2SiO<sub>2</sub>)、g: glass、mh: マグヘマイト (γ-Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)

OHN-1-②

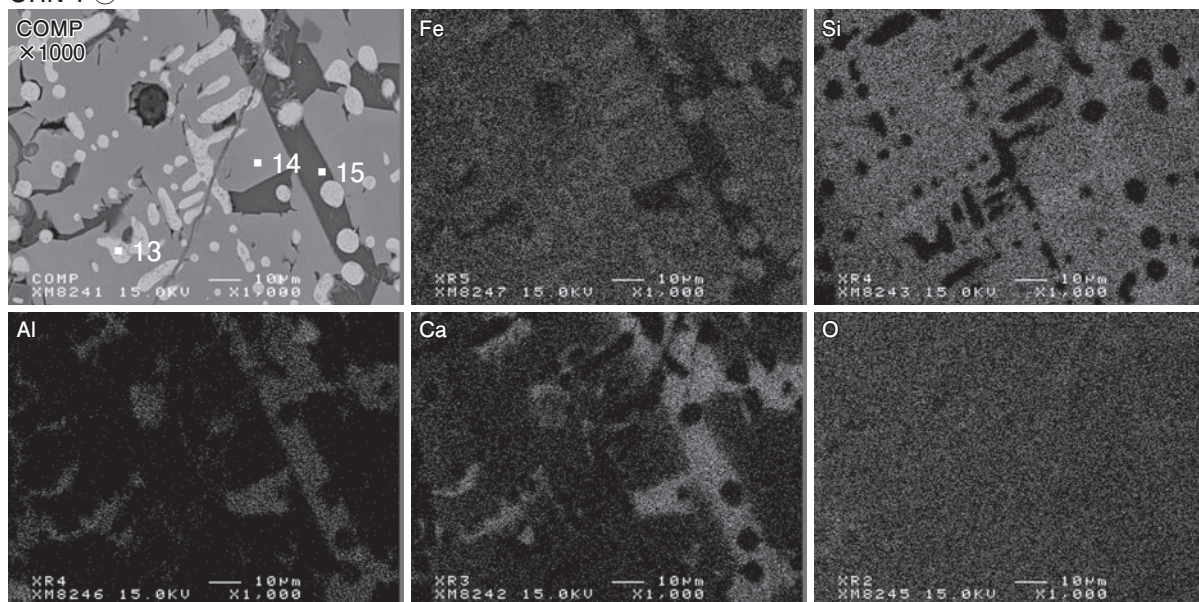
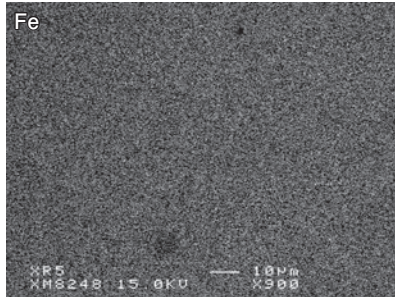


写真15 鉄塊系遺物のEPMA調査

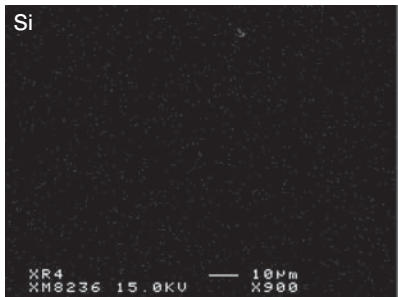
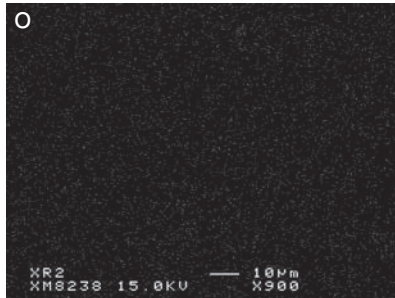
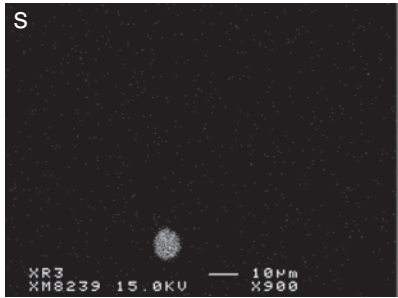
OHN-1-①



OHN-1

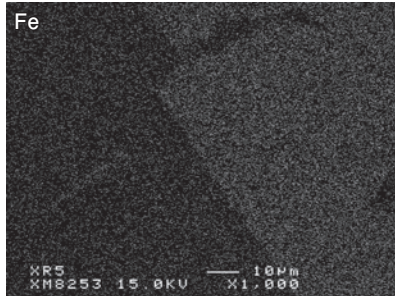
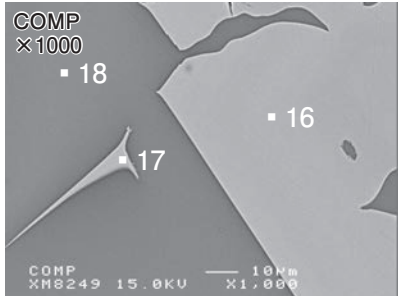
Element	11	12	13	14	15
Na <sub>2</sub> O	0.056	-	0.008	0.013	0.150
P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	0.111	0.031	-	-	0.682
F	-	-	-	-	-
Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	-	0.080	-	0.025	0.029
S	0.017	35.663	0.015	0.007	0.076
MgO	0.028	-	0.178	4.425	0.062
K <sub>2</sub> O	0.004	-	-	-	3.096
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	0.143	-	1.796	0.081	16.872
CaO	0.007	-	0.060	1.109	14.762
SiO <sub>2</sub>	11.438	0.061	1.796	31.777	42.086
TiO <sub>2</sub>	-	0.004	0.288	0.015	0.121
MnO	0.004	0.077	0.058	0.266	0.051
FeO	11.030	80.231	89.005	62.018	19.596
ZrO <sub>2</sub>	0.013	0.064	0.033	0.038	0.036
V <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	-	0.015	0.008	0.017	-
CuO	-	0.033	0.072	-	-
SrO	0.023	-	-	0.164	0.457
Total	※22.874	116.259	93.317	99.955	98.076

※介在物ではない



分析点11：計が22.8%と小さく定量分析失敗、定性的にはファヤライト  
 分析点12：計が116%と過大、周囲の鉄の影響か、磁硫鉄鉱 (Fe<sub>1-x</sub>S)  
 分析点13：Al固溶 (ウスタイト、FeO)  
 分析点14：MgOとCaO固溶のファヤライト (2FeO・SiO<sub>2</sub>)  
 分析点15：ガラス (非晶質珪酸塩)

OHS-1



OHS-1

Element	16	17	18	19	20	21
Na <sub>2</sub> O	-	-	0.034	0.015	0.015	0.034
P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	0.015	0.108	0.287	-	0.071	0.516
F	-	-	-	-	-	0.285
Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	-	0.081	-	0.013	-	-
S	0.006	-	0.044	-	0.004	0.015
MgO	7.368	5.585	1.228	0.309	1.134	0.123
K <sub>2</sub> O	-	0.316	2.118	0.009	0.193	3.068
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	0.065	0.443	7.781	6.312	0.423	11.104
CaO	2.724	3.065	13.390	0.017	11.409	16.053
SiO <sub>2</sub>	32.991	33.225	43.014	0.538	32.565	49.168
TiO <sub>2</sub>	0.025	0.026	0.241	0.209	-	0.059
MnO	1.749	1.615	0.762	0.357	1.451	0.399
FeO	55.161	55.768	30.005	83.251	50.341	21.060
ZrO <sub>2</sub>	0.048	-	0.003	-	0.022	0.045
V <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	0.009	-	0.012	0.002	0.028	0.010
CuO	-	-	-	-	-	-
SrO	0.171	0.185	0.171	0.030	0.175	0.328
Total	100.332	100.417	99.090	91.062	97.831	102.147

分析点16：MgOとCaO固溶ファヤライト (2FeO・SiO<sub>2</sub>)  
 分析点17：MgOとCaO固溶ファヤライト (2FeO・SiO<sub>2</sub>)  
 分析点18：ガラス (非晶質珪酸塩)

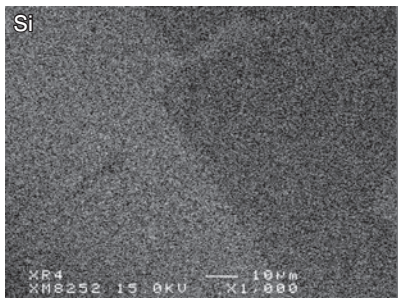
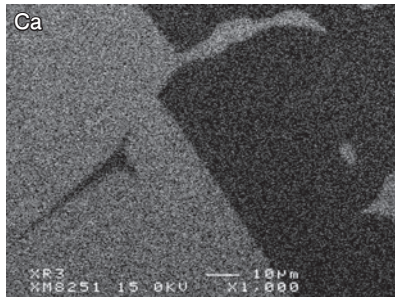
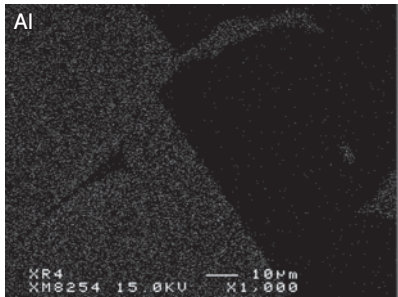
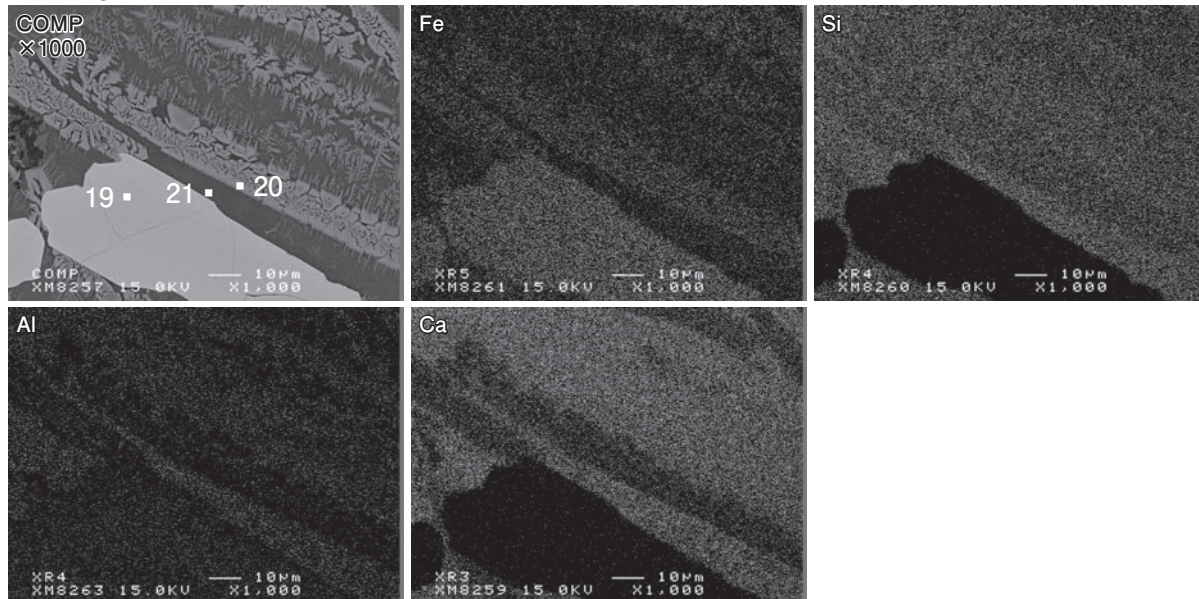


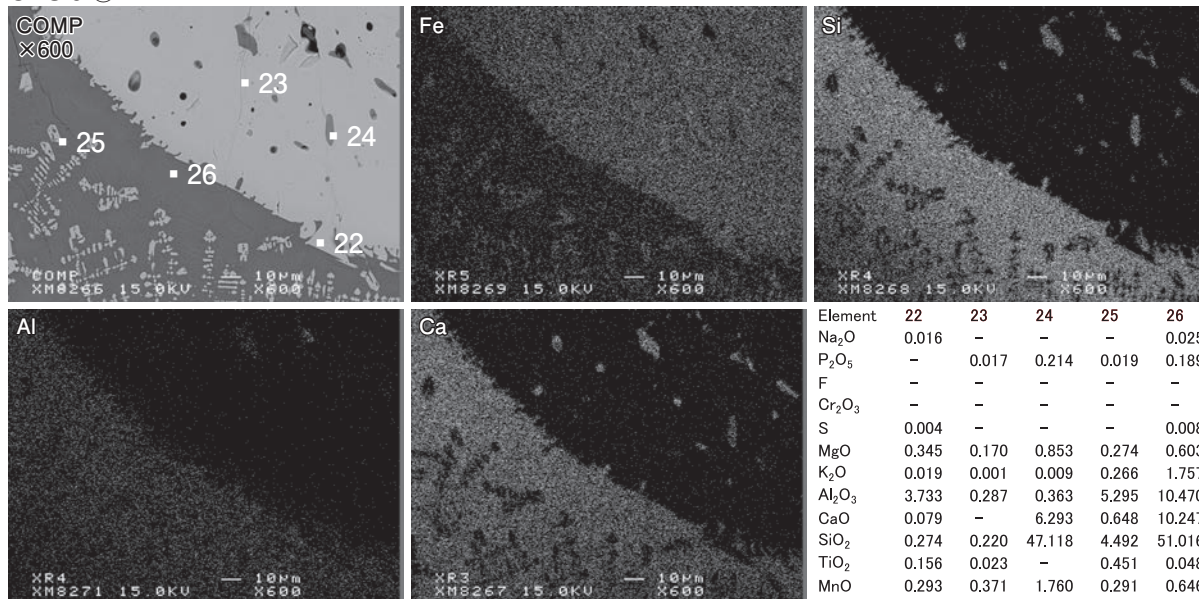
写真16 鉄塊系遺物・炉壁のEPMA調査

OHS-9-①



分析点19：計が91%と小さい、Al固溶磁鉄鉱（マグネタイト、 $Fe_3O_4$ ）  
 分析点20：CaO固溶のファヤライト（ $2FeO \cdot SiO_2$ ）  
 分析点21：ガラス（非晶質珪酸塩）

OHS-9-②



分析点22：計が90%と小さい、Al固溶磁鉄鉱（マグネタイト、 $Fe_3O_4$ ）  
 分析点23：計が90%と小さい、磁鉄鉱（マグネタイト、 $Fe_3O_4$ ）  
 分析点24：CaO固溶の $Fe_2Si_2O_8$ 組成、フェロシライト（鉄珪輝石）  
 あるいは単斜フェロシライト（単斜鉄珪輝石）  
 分析点25：計が93%と小さい、AlとSi固溶磁鉄鉱（マグネタイト、 $Fe_3O_4$ ）  
 分析点26：ガラス（非晶質珪酸塩）

Element	22	23	24	25	26
Na <sub>2</sub> O	0.016	-	-	-	0.025
P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	-	0.017	0.214	0.019	0.189
F	-	-	-	-	-
Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	-	-	-	-	-
S	0.004	-	-	-	0.008
MgO	0.345	0.170	0.853	0.274	0.603
K <sub>2</sub> O	0.019	0.001	0.009	0.266	1.757
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	3.733	0.287	0.363	5.295	10.470
CaO	0.079	-	6.293	0.648	10.247
SiO <sub>2</sub>	0.274	0.220	47.118	4.492	51.016
TiO <sub>2</sub>	0.156	0.023	-	0.451	0.048
MnO	0.293	0.371	1.760	0.291	0.646
FeO	85.327	88.827	44.181	81.091	26.617
ZrO <sub>2</sub>	-	0.018	-	-	0.043
V <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	-	-	-	0.016	-
CuO	-	0.115	-	0.047	-
SrO	0.018	-	0.280	0.035	0.266
Total	90.264	90.049	101.071	92.925	101.935

写真17 炉壁熔融滓のEPMA調査



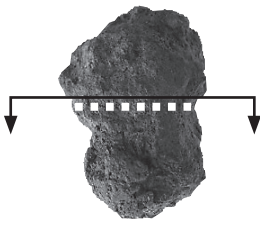
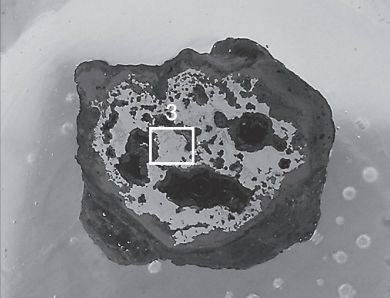
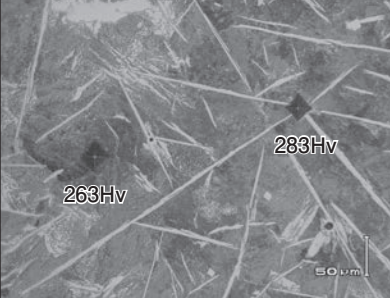
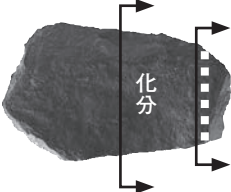
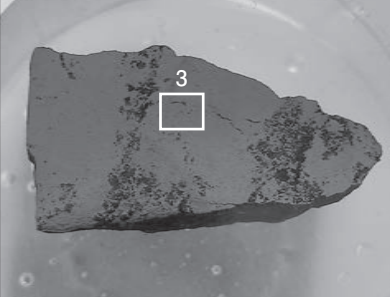
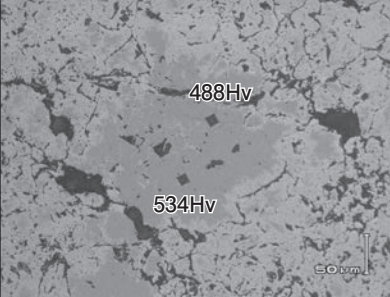
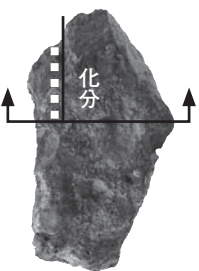
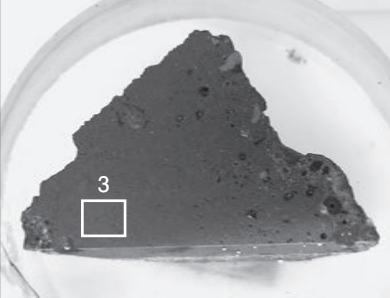
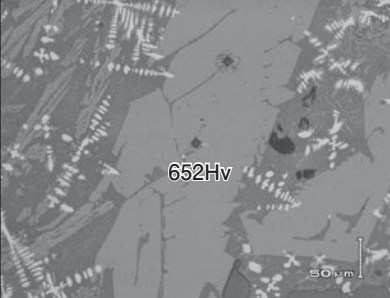
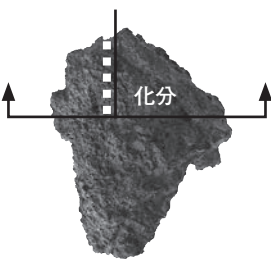
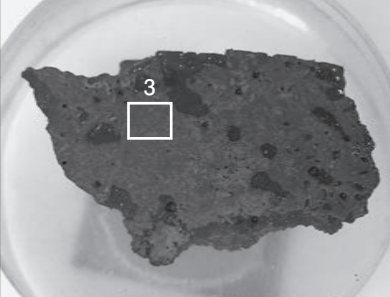
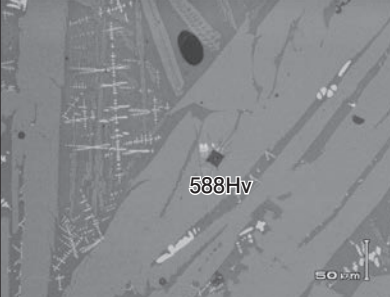
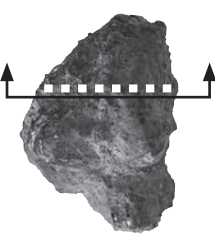
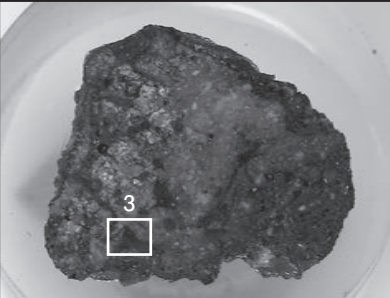
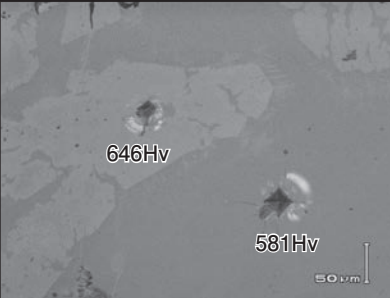
		
<p>OHN-1 1. 鉄塊系遺物 外観写真</p>	<p>2. 埋込み試料</p>	<p>3. etch 過共析鋼 (&gt;0.77% C)</p>
		
<p>OHN-3 1. 磁鉄鉱石 外観写真</p>	<p>2. 埋込み試料</p>	<p>3. 磁鉄鉱 (magnetite)</p>
		
<p>OHN-4 1. 炉底塊 外観写真</p>	<p>2. 埋込み試料</p>	<p>3. ファヤライト：鉱石製錬滓</p>
		
<p>OHN-5 1. 流出孔滓 外観写真</p>	<p>2. 埋込み試料</p>	<p>3. ファヤライト：鉱石製錬滓</p>
		
<p>OHS-1 1. 炉壁 外観写真</p>	<p>2. 埋込み試料</p>	<p>3. ガラス中のファヤライト</p>

写真18 顕微鏡組織①

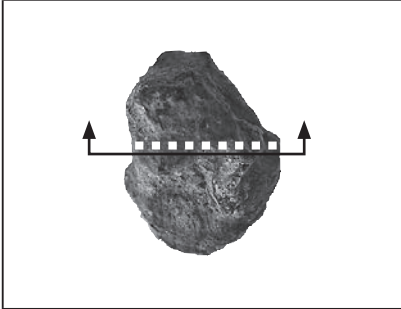
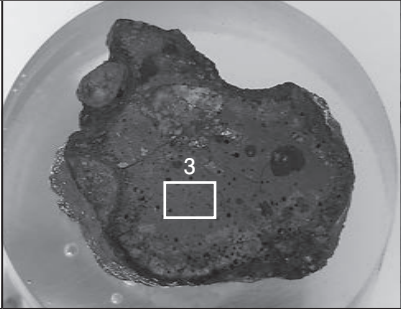
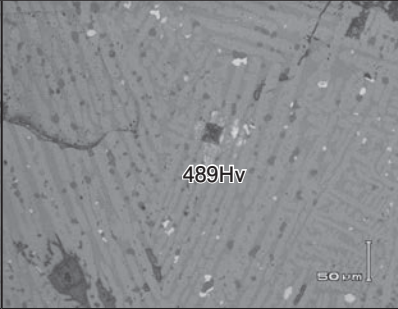
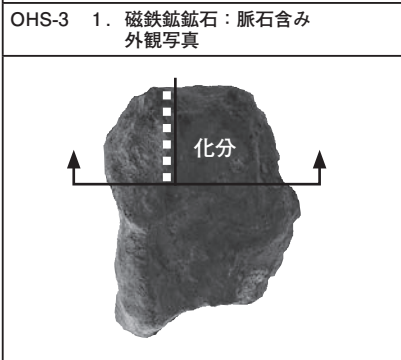
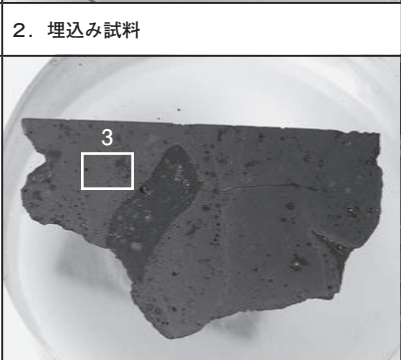
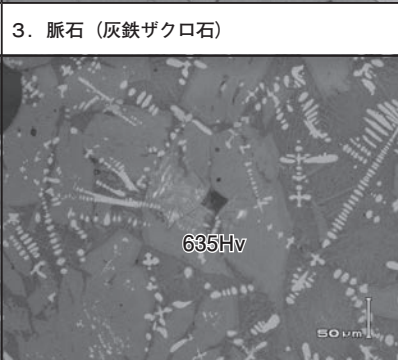
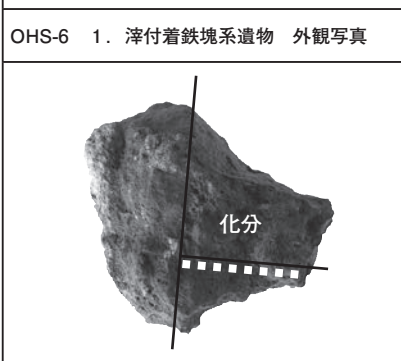
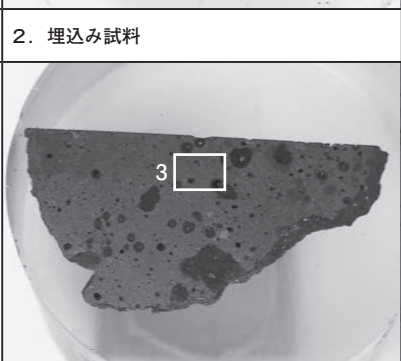
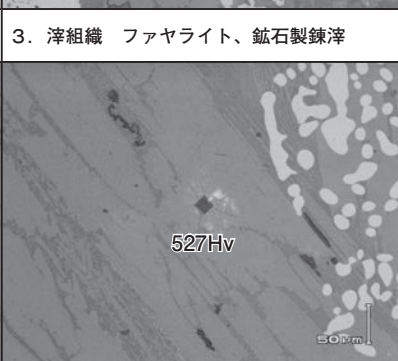

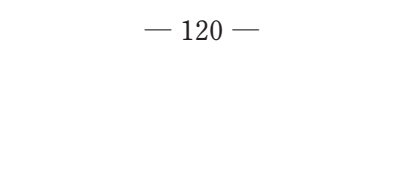

		
<p>OHS-2 1. 炉内滓 外觀写真</p>	<p>2. 埋込み試料</p>	<p>3. ファヤライト：鉍石製錬滓</p>
		
<p>OHS-3 1. 磁鉄鉍鉍石：脈石含み 外觀写真</p>	<p>2. 埋込み試料</p>	<p>3. 脈石（灰鉄ザクロ石）</p>
		
<p>OHS-5 1. 炉内流動滓 外觀写真</p>	<p>2. 埋込み試料</p>	<p>3. ファヤライト：鉍石製錬滓</p>
		
<p>OHS-6 1. 滓付着鉄塊系遺物 外觀写真</p>	<p>2. 埋込み試料</p>	<p>3. 滓組織 ファヤライト、鉍石製錬滓</p>
<p>OHS-7 1. 炉底塊 外觀写真</p>	<p>2. 埋込み試料</p>	<p>3. ファヤライト：鉍石製錬滓</p>

写真19 顕微鏡組織②

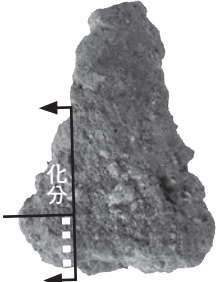
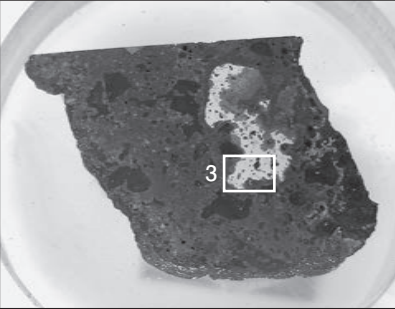
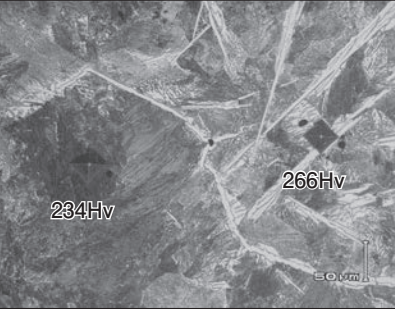
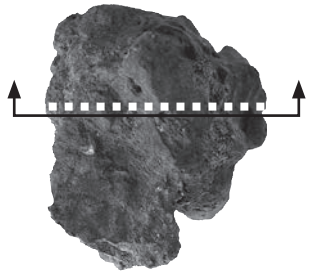
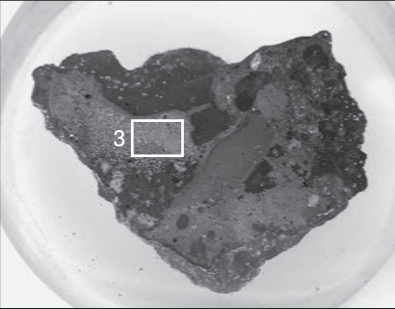
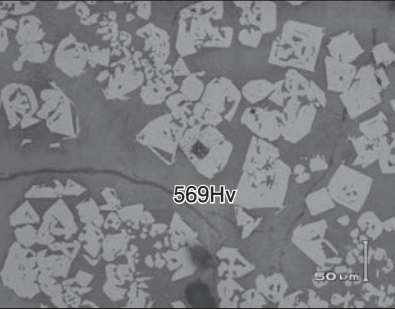
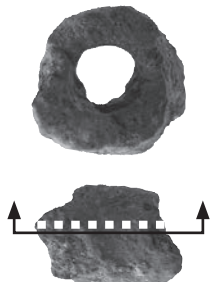
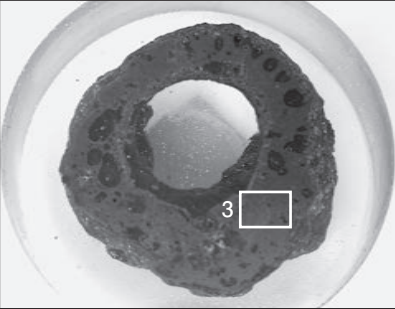
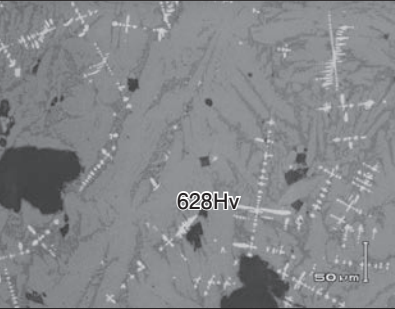
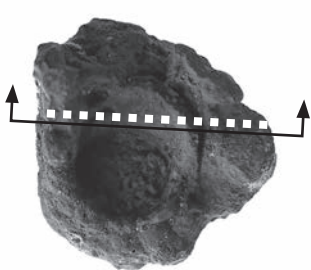
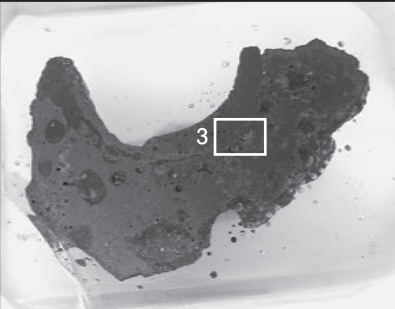
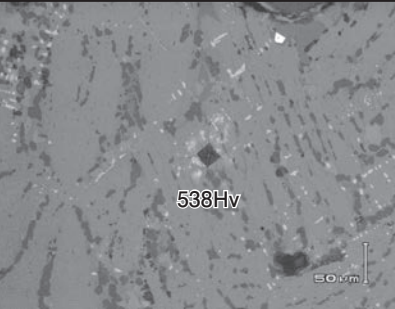
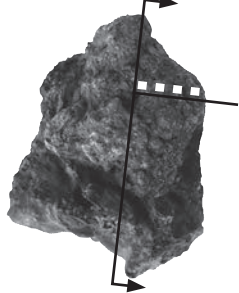
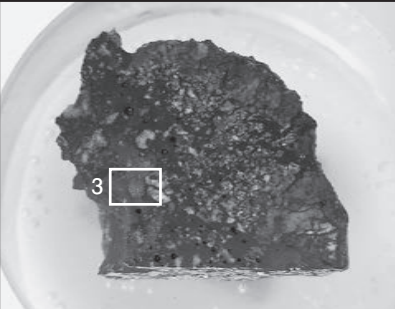
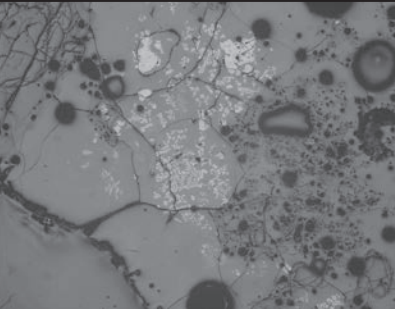
		
<p>OHS-8 1. 含鉄流出孔近傍滓 外観写真</p>	<p>2. 埋込み試料</p>	<p>3. 含鉄部分 etch 過共析鋼</p>
		
<p>OHS-9 1. 炉壁溶融滓 外観写真</p>	<p>2. 埋込み試料</p>	<p>3. 滓化部分：マグネタイト</p>
		
<p>OHS-10 1. 木舞孔滓？ 外観写真</p>	<p>2. 埋込み試料</p>	<p>3. ファヤライト：鉍石製錬滓</p>
		
<p>OHS-11 1. 炉内滓 外観写真</p>	<p>2. 埋込み試料</p>	<p>3. ファヤライト：鉍石製錬滓</p>
		
<p>OHS-12 1. 炉壁</p>	<p>2. 埋込み試料</p>	<p>3. 炉壁 ガラス中のマグネタイト ×15</p>

写真20 顕微鏡組織③

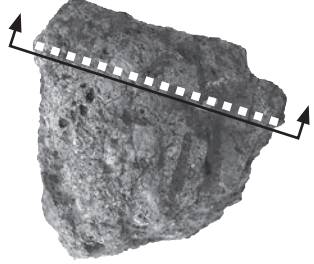
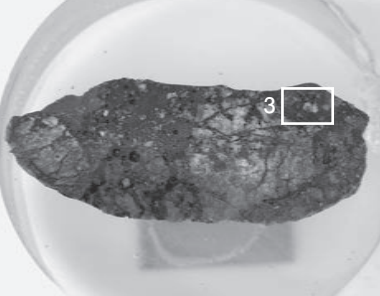
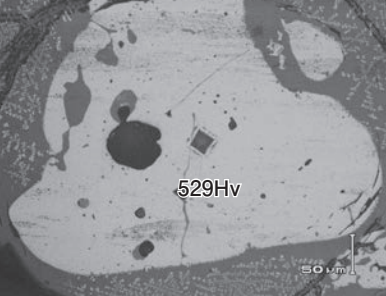
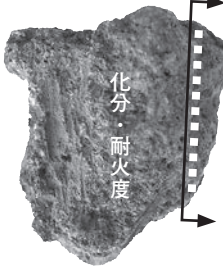
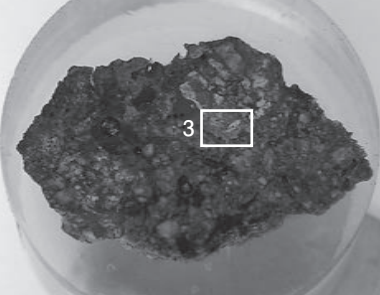
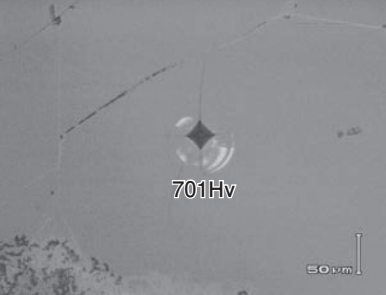
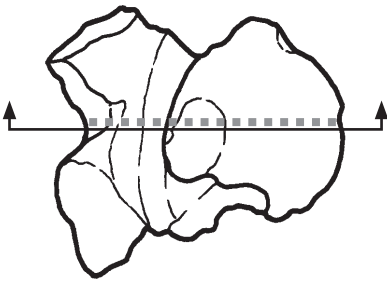
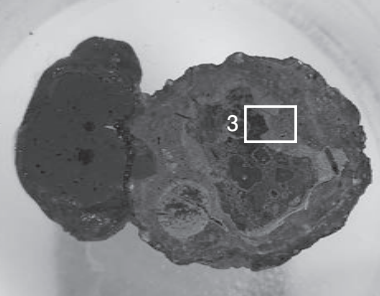
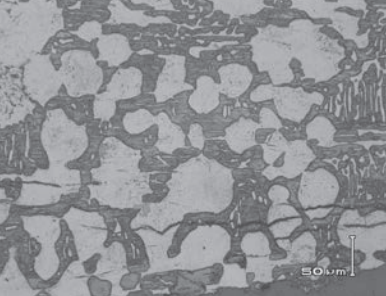
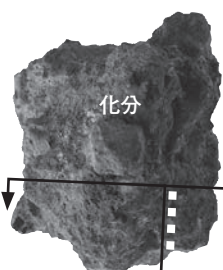
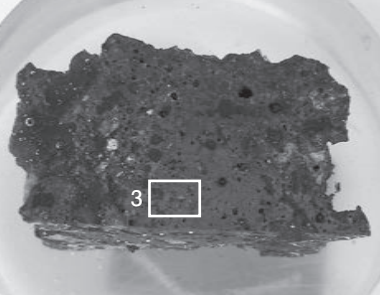
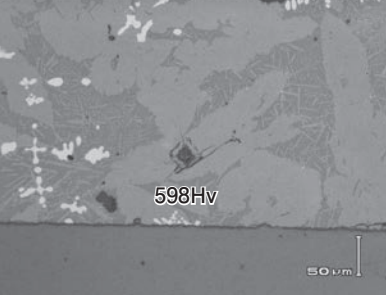
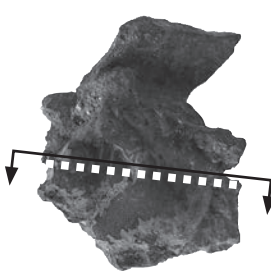
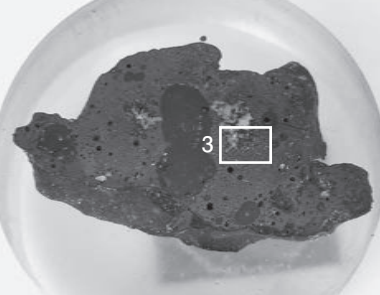
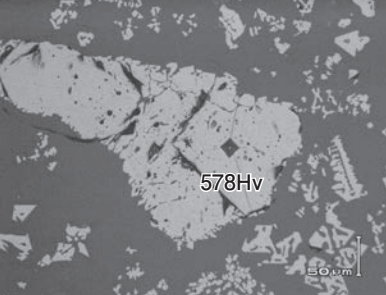
		
<p>OHS-13 1. 炉壁 外観写真</p>	<p>2. 埋込み試料</p>	<p>3. ガラス中の半還元磁鉄鉱粒</p>
		
<p>OHS-14 1. 炉壁</p>	<p>2. 埋込み試料</p>	<p>3. ガラス (炉壁溶融)</p>
		
<p>OHS-15 1. 滓附着鉄塊系遺物 外観写真</p>	<p>2. 埋込み試料</p>	<p>3. 鉄塊側 (錆化鉄：白鑄鉄痕跡)</p>
		
<p>OHS-15 1. 滓附着鉄塊系遺物 外観写真</p>	<p>2. 埋込み試料</p>	<p>3. 鉄塊側 (錆化鉄：白鑄鉄痕跡)</p>
		
<p>OHS-16 1. 炉内滓 外観写真</p>	<p>2. 埋込み試料</p>	<p>3. ファヤライト</p>

写真21 顕微鏡組織④

## 第9章 総括

### 第1節 調査の概要

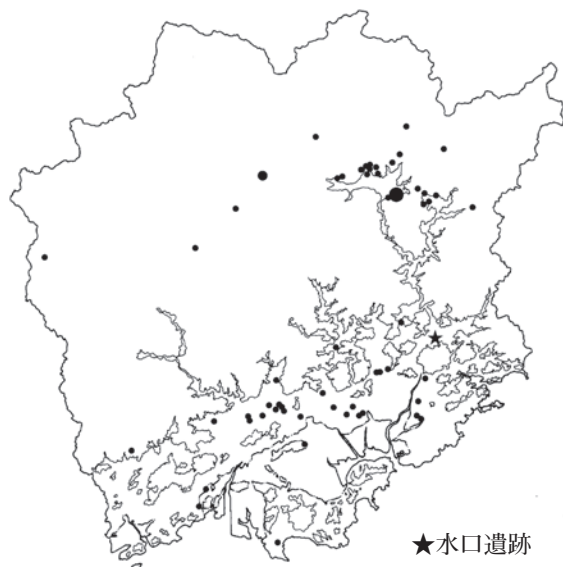
このたびの圃場整備に伴い、確認調査において周知の遺跡の状況を把握すると共に辺谷中田遺跡・辺谷遺跡・成ル古屋遺跡・成ル遺跡を発見し、その結果を受けて辺谷製鉄遺跡・辺谷中田遺跡・成ル古屋遺跡・水口遺跡・谷山遺跡の本発掘調査を実施した。遺跡は丘陵斜面や段丘上、低地平野部など至る所に立地し、縄文時代～近世にわたる多種多様な遺構・遺物を確認する事ができた。とりわけ、辺谷製鉄遺跡の操業が7世紀初頭まで遡る事、辺谷中田遺跡など東備地域では数少ない平野部における集落遺跡の実態が明らかとなった事が特筆される。各遺跡の調査成果は第3～7章に述べてきた通りであるが、ここではそれらを時代を追って振り返り、概観していきたい。

奥吉原最古に位置付けられるのは辺谷中田遺跡から出土した縄文時代後期中葉の土器片である。しかし、摩滅も著しく、弥生時代の基盤層からも出土する事から、山塊から流入した土砂に混在しているものと判断され、遺跡周辺への居住を示す確証は得られていない。成ル古屋遺跡でも中世のたわみに縄文時代と思われる石器が混入していた。一方、辺谷中田遺跡2区西半では縄文時代晩期中頃の土器を含む柱穴が数基まとまってあり、遅くともこれまでには平野部で生活を始めていたと推察される。本地点は和田川と吉井川の合流点に近く、低地氾濫原の中でも比較的早い段階で微高地が形成され、他に先駆けて集落を営み得たのであろう。

弥生時代中期には辺谷中田遺跡に竪穴住居、土坑、木棺墓が営まれ、水口遺跡・谷山遺跡が出現する。辺谷製鉄遺跡や成ル古屋遺跡のほか、複数の確認調査トレンチから弥生時代中期後半～後期の遺物が出土しており、当該期には奥吉原地内に複数の集落遺跡が点在していたと判断される。辺谷中田遺跡竪穴住居3及び谷山遺跡柱穴1からは櫛描沈線文の壺が出土しており、弥生集落の初現が中期中葉古段階以前に遡る可能性もあるが、中期後半における遺跡の急増が認められ、県下の集落遺跡の動向<sup>1</sup>と合致するものとして注目される。ただし、辺谷中田遺跡はこの後古墳時代前期まで継続するのに対し、水口遺跡・谷山遺跡は後期前半には廃絶するなどの差がある。谷山遺跡は水田経営には不向きと思われる峽歪な斜面に立地するが、西側の千躰方面に抜ける車ヶ峠の出入り口にあたり、単に洪水を避けただけではなく、奥吉原地内への出入りを見張るなど、何らかの役割を担っていた可能性が考えられる<sup>2</sup>。また、辺谷中田遺跡竪穴住居3及び広域営農団地農道整備事業に伴い発掘調査された水口遺跡竪穴住居2<sup>3</sup>からは朱関連資料が出土しており、個々の集落が孤立していたのではなく、有機的に結び付いていたことが窺われる。

さて、ここで竪穴住居の中央土坑に着目すると、「1〇型」と「松菊里型」の2形態に分類することができる。前者は辺谷中田遺跡1・3・7、後者は水口遺跡竪穴住居1で、辺谷中田遺跡竪穴住居2は両者の折衷型とみなすことができる。このうち、1〇型中央土坑は播磨を中心に分布するもので、地理的にも近接する播磨との交流を示すものと捉えられよう。山崎敏昭氏によれば、その初現は弥生時代中期中頃で、岡山には後期に広まる<sup>4</sup>とされていたが、辺谷中田遺跡竪穴住居3は中期中葉に遡

り、最古段階に位置付けられる。一方、松菊里型住居は朝鮮半島に起源があるとされ、弥生時代前期には県南平野部に点在するが、中期後半以降では津山盆地を中心とした県北東部や、県南でも丘陵部を中心に分布している（第152図）。この状況から、吉備中央部との結びつきよりもむしろ、吉備外部



第152図 中期後半以降における松菊里型住居の分布

との関わりを示すと解される。奥吉原は吉井川によって津山盆地と繋がっており、直接的な影響を受けた可能性もある。

出土土器には、やや大形で口縁端部を上方に引き出した浅い椀形を呈する口縁形態（辺谷中田遺跡73・130）や円形透かしを多用した脚部（同2・3・114）など、旧熊山町内に所在する前内池遺跡<sup>5</sup>や谷の前遺跡<sup>6</sup>と共通する特徴を有する土器があり、独自の様相が看取される。奥吉原の所在する旧熊山地域は、上東式土器の分布<sup>7</sup>や葬送儀礼の特質から、いわゆる吉備の東限に位置するとされる<sup>8</sup>が、今後、より細かな地域単位を設定する上で、有効な指標の一つになるのではないかと期待している。

古墳時代の集落は辺谷中田遺跡のみで、他には遺物の散布も見られない。逆に、辺谷中田遺跡ではこれまでに希薄であった1区にも竪穴住居が建てられ、居住域の拡大が認められる。しかし、これは一時的な現象で、古墳時代中期に比定される遺構・遺物は確認されていない。

状況が一転するのは古墳時代後期で、辺谷中田遺跡に再び集落が営まれ、辺谷製鉄遺跡及び水口遺跡で製鉄に関連した遺構が確認されている。丘陵上には多くの古墳も築造されており、奥吉原が最も発展した時期と言える。辺谷中田遺跡・水口遺跡の被熱土坑の存在や鉄鉱石・鉄滓の出土など、急速な発展の背景にはやはり鉄生産との関わりが想起される。また、辺谷中田遺跡竪穴住居12内カマドからは羽口が出土しており、工人が居住していた可能性が高い。鉄生産の推移に関しては後節に詳しいが、森林資源や吉井川を介した水運に恵まれたこの地が、製鉄の拠点の一つに選ばれた事は想像に難くない。なお、辺谷製鉄遺跡では製鉄炉本体の確認はできなかったが、作業面を切り込んだ溝から6世紀末～7世紀初頭の須恵器が出土しており、遅くともそれまでに操業が始まったと考えられる。一方、辺谷中田遺跡竪穴住居12は6世紀後半に位置付けられ、辺谷製鉄遺跡の操業開始が遡るか、もしくは近傍にさらに古い未周知の製鉄遺跡が存在する可能性が有る。

古代には、辺谷中田遺跡河道2及び水口遺跡溝1のほか明確な遺構は無く、集落の存在は定かではない。確認調査の結果から成ル古屋遺跡は平安時代の集落と想定されていたが、本発掘調査で検出された柱穴は古代の遺物を包含する砂礫層から掘削されており、古代と特定するには至らなかった。同様の砂礫層は広範囲で確認されており、土砂が激しく流入する環境下にあったと想定される。また、万願寺跡も後世の土砂による高まりであったことが判明し、推定地そのものを見直す必要が生じる結果となった。なお、河道2からは奈良時代の土師器高杯が出土している。奈良時代築成とされる熊山

遺跡との関わりの中で理解できようか。

中世には再び活況を呈し、辺谷中田遺跡・水口遺跡・谷山遺跡で遺構が散見される。山腹には谷山窯・板場池窯の2つの備前焼窯も知られ<sup>9</sup>、熊山宝篋印塔や奥吉原宝篋印塔などの石造物、奥吉原廃寺も建立されるなど、多くの足跡を残している。辺谷中田遺跡土坑墓2には輸入白磁2点や腰刀が副葬されており、富裕層の存在も示唆される。しかし、微高地北側は吉井川の旧流路で浸食され、上面は吉井川の氾濫がもたらした洪水砂で覆われていることから、低地平野部は居住に適しているとはいえない状況であった。微高地上面には溝が掘削されており、耕地化されていた可能性が高い。一方、丘陵裾部などやや高い場所に立地する水口遺跡・谷山遺跡には掘立柱建物が建てられ、居住地としての利用が認められる。なお、善坊跡の確認調査及び善坊跡に隣接する水口遺跡では、それに関連する遺構・遺物は確認されなかった。

近世は辺谷中田遺跡・成ル古屋遺跡・水口遺跡に土坑やたわみ、溝があるのみであった。今回調査された至る所で耕地化や土石流に起因する地形の改変を確認している。文献に記された万願寺池の決壊<sup>10</sup>を想起させる状況も看取され、これにより消滅したのも少なくないと思われる<sup>11</sup>。出土陶磁器の指し示すピークは18～19世紀であるが、16世紀代の中国産磁器や16世紀末～17世紀前半の国産陶磁器も僅かに含まれている。尾根上には戦国期の山城が築かれており、関連した施設の存在が示唆される。また、水口遺跡では17世紀初め頃の水溜りに関連した遺構が確認されており、この頃には、段丘上にも耕地化が及んでいたと判断される。

## 註

- 1) 重根弘和「岡山県南部の弥生時代集落遺跡」『環瀬戸内海の考古学—平井勝氏追悼論文集—』下巻 古代吉備研究会 2002・松木武彦「墓と集落および人口からみた弥生—古墳移行期の社会変化—吉備南部を分析対象として」『古代吉備』第25集 2013など
- 2) 和気あるいは伊部に抜ける剣抜峠付近には舟下谷遺跡があり、同様の性格を有していた可能性がある
- 3) 「水口遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』163 岡山県教育委員会 2002
- 4) 山崎敏昭「1〇（いちまる）型中央土坑と関連遺構のひろがり—兵庫県南西部から瀬戸内海沿岸地域に展開した弥生時代後半の炉跡—」『兵庫発信の考古学』間壁霞子先生喜寿記念論文集刊行会編 2009  
1〇型中央土坑を有する竪穴住居からは「サヌカイトの剥片や碎片が多量に出土し、石器製作が行われていたことを示す事例、朱の精製をおこなっていた可能性のある事例」がみられるという。辺谷中田遺跡竪穴住居3からは中央土坑周辺で比較的多くのサヌカイト片や朱が出土し、床面には被熱痕跡が多く残されていることから、一般的な住居ではなく、特殊な性格を有していた可能性が高い。
- 5) 「前池内遺跡 前池内古墳群 佐古遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』174 岡山県教育委員会 2003
- 6) 「土井遺跡 谷の前遺跡 慶雲寺遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』191 岡山県教育委員会 2005
- 7) 高橋 護「弥生後期の地域性」『吉備の考古学的研究』（上）近藤義郎編 1992
- 8) 光永真一「遺跡の位置と環境」『水口遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告163 岡山県教育委員会 2002
- 9) 日笠博之「第4章第六節四 町域の備前焼窯址」『熊山町史』通史編上巻 熊山町史編纂委員会 1994
- 10) 定兼学「第5章第五節 村社会の特徴」『熊山町史』通史編上巻 熊山町史編纂委員会 1994
- 11) 地元には、かつて和田川右岸の万願寺跡周辺に集落があったが、洪水により、現在の場所＝谷山丘陵裾部に移転したと伝えられている。

## 第2節 吉井川中下流域の製鉄関連遺跡

岡山県東部を南北に貫流する吉井川の下流左岸に位置する奥吉原地区では、辺谷製鉄遺跡、辺谷中田遺跡と水口遺跡で、古時代後期に製鉄・鍛冶に関連する遺構・遺物が確認された。ここではこれら遺跡の吉井川流域に分布する製鉄に関連した遺跡の中での位置づけについて見ていきたい。第153図に旭川東岸から吉井川流域で周知されている主な製鉄関連遺跡の分布を示した<sup>1</sup>。

古墳時代後期の遺跡としては、吉井川本流の上流に大蔵池南遺跡（6世紀後半～7世紀前半・砂鉄原料）が、下流域には奥吉原の遺跡群があり、中流域の支流である吉野川流域には上相遺跡（6世紀後半）、下坂遺跡（6世紀末～7世紀初頭・鉄鉱石と砂鉄原料）などが所在する。その後、奈良～平安時代になると吉井川本流の中下流域での分布が目立ち、八ヶ奥製鉄遺跡（～平安時代・鉄鉱石と砂鉄原料）、石生天皇遺跡（8世紀末～9世紀・砂鉄原料）、西祖山方前遺跡（5世紀代か7～9世紀・鉄鉱石原料）が分布する。

6世紀後半～7世紀代の遺跡だけみると、吉野川流域と奥吉原地区に分布が集中する。奥吉原地区にある遺跡群の原料が鉄石であることは磁鉄鉱石が出土していることから明らかだが、その産地については定かではない。この地区が流紋岩地帯に位置することから現地での調達を考えるのは難しいだろう。一方で、吉井川本流の柵原鉄山や吉野川上流の瀬戸鉄山と江見鉄山では磁硫鉄鉱石を産しており、鉄山の所在する地域が原料調達の候補地といえる。このことが鉄石を原料とする該期の遺跡が吉野川流域に分布する一要因と推察でき、奥吉原地区まで鉄石が運ばれていた可能性は高いと考えられる。実際、辺谷中田遺跡では集落北を流れていた旧河道から鉄鉱石が出土しており、河川を利用していた運搬が想起させる。

鉄生産は当時の先端技術であるから、当然原料鉄石の産する場所はその地域の集団によって管理されていたであろう。そうすると、産地に近い上相遺跡や下坂遺跡を営んでいた集団が鉄鉱石を入手し、製鉄を行っていたのは理解できる。しかし、奥吉原地区から最短距離にある柵原鉄山でさえ約25km、瀬戸鉄山に至っては50km以上離れている。これら地域から原料鉄石を調達していたとするならば、辺谷製鉄遺跡などを運営していた奥吉原地区の集団は他集団から原料を入手していたことになり、当時の製鉄における集団間の協力関係を考えていく上で重要になるであろう。こういった、広い地域間での原料の流通や製鉄作業の分業については、旭川下流域でも指摘されている。沖積地に所在する集落遺跡の原尾島遺跡や津島遺跡では、遺跡の北約20kmに位置する金山や佐野鉄山の所在する地域で産出したと考えられる鉄鉱石や製錬・鍛冶滓が出土している。原尾島遺跡を整理した宇垣は、炉壁粘土の分析結果から遺跡北東部地域の砂川流域を粘土の採取地候補と考え、この地域に古墳時代後期～古代の製鉄遺跡が集中することから原尾島遺跡で原料鉄石の入手・選別・粉碎を、砂川中流域の遺跡で製錬作業を行い、生産された鉄塊が再び原尾島遺跡に搬入され精錬以後の作業を行っていたと推測している<sup>2</sup>。では、吉井川流域で生産された鉄塊はどこで精錬以後の作業を行っていたのであろうか。残念ながら、集落遺跡の調査例が少なく判然とはしない。奥吉原地区においては、辺谷中田遺跡で6世紀後半の竪穴住居から鞆の羽口と鉄塊系遺物が出土したり、焼けた方形土坑が検出されたりしている。これは、製錬作業場の近くで鍛冶作業が行われていたことが明らかとなり、鉄生産から製品又は鉄素材を製作するまでの一貫した作業を示す貴重な例である。



吉井川流域では7世紀代に鉱石と砂鉄を原料とする遺跡が確認されており、その後砂鉄へ変わって行くことが知られている<sup>3</sup>。奥吉原地区周辺では、他地域が原料を砂鉄に変えている8世紀以降も石生天皇遺跡などで引き続き鉄生産が行われている。本地域は、吉井川下流域の中でも和気町域も含めて比較的広い谷底平野が形成されており、河川や古代山陽道を利用した東西南北の交通の結節点で、集落が発展しやすい立地環境にある。この環境を生かして安定した鉄製品の供給を行うために、敢えて鉱石原料での製鉄技術を継承したのかもしれない。今後、吉井川中下流域の調査が進めば、古墳時代後期から古代にかけての製鉄技術や生産体制を解明していく上で重要な地域になると考えられる。

(杉山)

註

- 1) 主に『岡山県遺跡地図』第6～9分冊 岡山県教育委員会 2003を参考に作成した。
- 2) 宇垣匡雅 「原尾島遺跡（藤原光町3丁目地区）」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』139 岡山県教育委員会 1999
- 3) 大澤正己・鈴木瑞穂 「付載3 下坂遺跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査」「大河内遺跡 稲穂遺跡 下坂遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』216 岡山県教育委員会 2008



第153図 旭川東岸から吉井川中下流域の主な製鉄関連遺跡 (1/625,000)

表8 遺構一覽表  
竪穴住居

遺跡名	遺構名	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	床面積 (㎡)	床面標高 (cm)	柱穴	中央穴			中央土坑			焼土面	壁体溝	高床部	時期	備考
								形状	深さ (cm)	形状	長×短 (cm)	深さ (cm)						
辺谷中田	1	円	391	378		18.25	6	だ円	65	不整形	82×50	4	○	○	-	弥生後期中葉	中央土坑に周提	
	2	円	986	-		18.25	(6)	円	57	だ円	220×120	5	○	○	○	弥生後期後～末葉	中央土坑に周提	
	3	隅方	516	-		18.20	(3)	だ円	54	だ円	103×(37)	6	○	○	-	弥生中期中葉		
	4	隅方?	-	-		18.35	(2)	-	-	-	-	-	-	○	-	弥生中期後葉		
	5	円?	-	-		18.19	(1)	-	-	-	-	-	-	?	-	弥生中期中葉以前?		
	6	円?	-	-		-	-	-	-	-	-	-	-	○	-	弥生中期中～後葉		
	7	円	621	617		18.25	4	円	37	だ円	168×(115)	5	-	○	-	弥生後期中～後葉	屋内土坑2基	
	8	だ円?	-	-		18.44	(2)	-	-	-	-	-	-	○	-	弥生中期後半		
	9	-	-	-		17.97	4	円	40	-	-	-	-	○	?	-	古墳前期?	
	10	方	-	-		17.92	4	円	40	-	-	-	-	○	-	古墳前期		
	11	方?	-	-		18.48	-	-	-	-	-	-	-	○	-	古墳		
	12	方?	638	-		18.47	-	-	-	-	-	-	-	○	-	6世紀後半	カマド	
	13	長方?	527	405		18.25	-	-	-	-	-	-	-	○	-	古墳前期		
	14	長方	392	287		17.95	-	円	8	-	-	-	-	○	-	古墳初頭		
水口	1	円	-	476		24.52	(2)	だ円	26	-	なし	-	-	○	-	弥生中期後半		
	2	方	468	-		26.12	(3)	-	-	-	なし	-	-	○	-	弥生中期後葉		

掘立柱建物

遺跡名	遺構名	規模	柱間距離 (cm)		桁行 (cm)	梁行 (cm)	面積 (㎡)	棟方向	時期	備考
			桁	梁						
水口	掘立柱建物1	3×	170~200	170~200	554	(200)		N-59° -W	室町	
	掘立柱建物2	2×	190	180~200	(190)	(380)		N-4° -E	中世	
	掘立柱建物3	2×	160~170	175~240	(330)	415		N-3° -W	中世	
谷山	掘立柱建物1	1×4	140~165	265	585・605	265		N-65° -E	中世	

土坑・墓

遺跡名	遺構名	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面海拔高 (m)	時期	備考
辺谷製鉄	土坑1	溝状	台形	219	(50)	5	28.08	古墳後期	
	土坑2	だ円	皿	183	80	11	27.98	古墳後期	
	土坑3	だ円	台形	149	86	24	27.68	古墳後期	
	土坑4	?	台形	137	(62)	22	27.92	古墳後期	
	土坑5	だ円	台形	91	(63)	26	27.62	古墳後期	
	土坑6	だ円	台形	166	71	42	27.50	古墳後期	
辺谷中田	土坑1	不整形	台形	(118)	(62)	17	17.82	弥生後期後葉	
	土坑2	隅丸長方形	台形	(155)	124	9	17.88	弥生後期	
	土坑3	不整形?	台形	118	103	41	17.51	弥生後期?	
	土坑4	隅丸長方形?	U字	(100)	(55)	37	17.69	弥生後期後葉	
	土坑5	?	台形	(162)	(60)	34	18.07	弥生後期中葉	
	土坑6	不整形	不整形	(176)	(112)	25	18.30	弥生後期中葉	
	土坑7	だ円	台形	162	106	37	18.17	弥生後期前～中葉	
	土坑8	隅丸長方形	台形	110	75	17	18.07	弥生後期中葉	
	土坑9	隅丸長方形?	台形	(126)	90	42	17.74	弥生後期中葉	
	土坑10	長方形	台形	150	97	52/85	17.42	弥生後期中葉	
	土坑11	だ円	台形	219	99	25/28	17.95	弥生後期	
	土坑12	長方形	台形	215	121	47/75	17.64	弥生後期前～中葉	
	土坑13	長方形	台形	167	125	41/67	17.66	弥生後期中葉頃	
	土坑14	だ円	台形	112	90	13	18.03	弥生後期中葉頃	
	土坑15	長方形	台形	127	94	51	17.70	弥生後期中葉頃	
	土坑16	方	台形	133	119	21	17.59	古墳後期	被熱土坑
	土坑17	だ円	皿	93	79	18	17.65	古墳後期?	炭
	土坑18	不整形	台形	204	169	28	17.54	古墳後期?	
	土坑19	方形	台形	122	110	27	17.64	古墳後期?	一部被熱
	土坑20	隅丸長方形	皿	164	117	18	17.82	古墳後期?	
	土坑21	だ円	台形	-	-	39	17.04	6世紀後半	
	土坑22	だ円	U字	132	103	37	17.27	古墳後期	
	土坑23	だ円	-	(128)	115	77	17.10	近世	
	土坑24	長だ円	台形	243	69	28	17.60	19世紀代	
	土坑25	長だ円	台形	295	107	39	17.26	19世紀代	
墓1	長方形	台形	206	74	20	18.36	弥生中期後半	木棺痕跡有	
墓2	-	台形	(80)	(40)	11	17.62	鎌倉		
水口	土坑1	だ円	U字	92	78	38	25.88	弥生中期	
	土坑2	だ円?	皿	(469)	(150)	48	25.95	～18C後半	溝2・3と共に機能
谷山	土坑1	だ円	U字	90	43	23	52.41	弥生	
	土坑2	だ円	U字	92	(64)	36	52.15	弥生	
	土坑3	だ円	皿	(107)	(68)	3	52.60	弥生	
	土坑4	?	台形	(125)	(62)	23	52.23	弥生	
	土坑5	だ円	台形	226	(92)	45	51.92	弥生	

表9 遺物観察表

土器

試掘確認

番号	遺構・層位	種別	器種	計測値 (cm)			状態	番号	遺構・層位	種別	器種	計測値 (cm)			状態
				口径	底径	器高						口径	底径	器高	
1	T3No.3土坑	土師器	甕	12.6	-	(6.1)	破片	2	T15暗褐色土層	備前焼	皿	[8.8]	6.2	1.9	破片







水口遺跡

番号	遺構・層位	種別	器種	計測値 (cm)			状態	番号	遺構・層位	種別	器種	計測値 (cm)			状態
				口径	底径	器高						口径	底径	器高	
1	竪穴住居1	弥生土器	甕	[22.0]	-	(2.1)	破片	25	溝4	土師器	皿	7.9	7.0	1.6	破片
2		弥生土器	高杯	-	-	(2.0)	破片	26		備前焼	皿	9.9	-	(1.7)	破片
3		竪穴住居2	弥生土器	壺?	-	-	(1.7)	破片		27	備前焼	皿	9.7	-	(1.7)
4	弥生土器		高杯	-	-	(1.4)	破片	28		備前焼	甕	12.4	-	(2.6)	破片
5	土坑1	弥生土器	甕	[14.2]	5.2	25.7	復元完	29		備前焼	鉢	(12.4)	(12.0)	(7.2)	破片
6		弥生土器	甕	15.2	5.3	30.1	復元完	30		備前焼	搦鉢	[35.6]	-	(7.3)	破片
7		弥生土器	甕	-	-	(2.0)	破片	31		肥前陶器	碗	-	5.0	(2.0)	破片
8	その他	弥生土器	甕	-	-	(5.7)	破片	32		肥前陶器	皿	-	4.7	(1.5)	底完
9		弥生土器	器台	-	-	(5.0)	破片	33		肥前陶器	碗	-	-	(2.6)	破片
10		土師器	甕	[16.6]	-	(14.2)	破片	34		肥前青磁	碗?	-	2.8	(2.3)	底完
11		須恵器	杯身	-	-	(2.7)	破片	35	輸入青磁	碗	-	3.8	(4.4)	底完	
12		須恵器	高杯	10.1	10.3	7.2	復元完	36	土師器	皿	11.8	6.6	2.3	破片	
13		須恵器	高杯	-	11.0	(6.9)	破片	37	備前焼	鉢	[20.1]	-	(3.3)	破片	
14		掘立柱建物1	土師器	皿	7.8	-	(1.4)	破片	38 P 1	備前焼	壺	[8.4]	-	(2.5)	破片
15	土師器		皿	[14.2]	-	(3.1)	破片	39 P 2	備前焼	杯	[9.9]	6.0	3.1	破片	
16	掘立柱建物2	備前焼	碗	-	-	(3.0)	破片	40 P 3	土師器	碗	-	(6.0)	(1.2)	破片	
17	土坑2	備前焼	壺	-	-	(3.2)	破片	41	須恵器	杯	-	8.0	(1.3)	破片	
18		備前焼	碗	-	4.8	(1.0)	破片	42	瓦器	碗	-	-	(3.2)	破片	
19		肥前陶器	皿	-	-	(1.8)	破片	43	備前焼	碗	15.7	-	(3.9)	破片	
20		陶器	碗	-	4.4	(2.1)	破片	44	輸入青磁	碗	-	-	(3.4)	破片	
21	溝1	土師器	甕	[15.8]	-	(4.0)	破片	45	輸入青磁	碗	-	-	(3.6)	破片	
22		須恵器	杯	(12.9)	9.1	(5.0)	破片	46	輸入青磁	皿?	-	-	(1.9)	破片	
23		須恵器	壺?	-	-	(2.2)	破片	47	備前焼	ひょうそく	6.6	4.7	5.5	ほぼ完	
24		須恵器	壺	-	-	(6.8)	破片								

谷山遺跡

番号	遺構・層位	種別	器種	計測値 (cm)			状態	番号	遺構・層位	種別	器種	計測値 (cm)			状態
				口径	底径	器高						口径	底径	器高	
1	土坑4	弥生土器	壺	15.2	-	(1.8)	破片	5	P 3	須恵器	碗	[11.6]	-	(2.4)	破片
2	溝1	弥生土器	甕	-	-	(2.5)	破片	6	P 2	土師器	羽釜	21.1	-	(5.8)	破片
3		弥生土器	甕	-	-	(3.9)	破片	7	その他	備前焼	匣鉢	10.6	11.0	6.3	復元完

土製品

試掘・確認調査

番号	遺構名・層位	器種	計測値 (mm)				重量 (g)	胎土	残存状況・備考
			最大長	最大幅	最大厚	孔径			
C1	T15暗褐色土層	錘	(44.0)	9.0	9.0	4.5			ほぼ完

辺谷製鉄遺跡

番号	遺構名・層位	器種	計測値 (mm)				重量 (g)	胎土	残存状況・備考
			最大長	最大幅	最大厚	孔径			
C1	土坑6	炉壁	32.0	23.0	20.0		10.81		分析：OHS01
C2		炉壁	(145.0)	(92.0)	(36.0)		(403.79)	3~25mm大の礫多	
C3		炉壁	(70.0)	(58.0)	(41.0)		(148.17)	3~7.5mm大の礫多	
C4		炉壁	(117.0)	(63.0)	(55.0)		(450.58)	9mm以下の礫多	
C5	排滓場Ⅰ層	炉壁	(123.0)	(150.0)	(39.0)	[47.0]	(507.05)	スズ痕跡多	
C6	排滓場	炉壁	(79.0)	(65.0)	(33.0)		133.08		分析：OHS04
C7	排滓場Ⅲ層	炉壁	(45.0)	(39.0)	(27.0)		32.78		分析：OHS14

辺谷中田遺跡

番号	遺構名・層位	器種	計測値 (mm)				重量 (g)	胎土	残存状況・備考	
			最大長	最大幅	最大厚	孔径				
C1	竪穴住居12	羽口	(187.0)	(130.0)	(118.5)	31.0~108.0	(1218.50)		一部欠、小口ガラス質化	
C2	土坑16	焼土塊	81.0	64.0	26.0	26.0	116.28	1mm以下のスズ痕跡多	完、分析：OHN2	
C3	溝4	羽口	(45.0)	(57.0)	(31.5)	[36.0]	(49.55)	2.5mm以下の砂粒多	破片、ガラス質化顕著	
C4		羽口	(72.0)	(72.0)	(30.0)	[35.0]	(97.54)	2.5mm以下の砂粒多	破片	
C5	溝7	錘	43.0	12.0	12.5	3.8	7.15	2.5mm以下の砂粒多	完	
C6	河道1	錘	(35.0)	10.0	10.0	4.5	(3.27)	精良	1/3欠	
C7		錘	(51.0)	13.0	(12.0)	4.5	(9.34)	1.5mm以下の砂粒多	一部欠	
C8		錘	25.0	33.5	(16.0)	15.0	(14.53)	1.5mm以下の砂粒多	1/2欠、須恵質	
C9		錘	34.5	10.0	10.5	3.0	3.36	1mm以下の砂粒少	ほぼ完	
C10		錘	(35.0)	13.0	13.0	4.5	(6.04)	2.5mm以下の砂粒多	1/3欠	
C11		錘	(37.0)	13.0	12.5	4.5	(6.81)	2mm以下の砂粒多	1/3欠	
C12		錘	41.0	13.5	13.5	4.0	7.64	1.5mm以下の砂粒中	完	
C13		錘	42.0	10.0	10.0	3.0	4.19	精良	完	
C14		河道2	錘	42.0	12.0	12.0	3.5	(6.06)	1.5mm以下の砂粒多	ほぼ完
C15			錘	44.5	12.0	10.5	4.0	(6.46)	1.5mm以下の砂粒多	ほぼ完
C16	錘		(46.0)	10.5	10.0	4.5	(3.44)	精良	一部欠	
C17	錘		(46.0)	10.5	10.0	4.0	(4.36)	精良	一部欠	
C18	錘		45.0	13.0	12.5	4.0	8.50	精良	完	
C19	錘		54.0	12.0	12.0	4.0	8.33	1.5mm以下の砂粒多	完	
C20	P 8	錘	(55.0)	10.0	10.0	4.5	(5.40)	1.5mm以下の砂粒中	一部欠	
C21		錘	37.5	12.0	10.5	4.0	(4.36)	1mm以下の砂粒中	ほぼ完	
C22		錘	(20.0)	11.0	10.0	2.8	(1.87)	精良	1/2欠	
C22		その他	錘	(40.0)	11.5	10.0	4.0	(4.43)	精良	一部欠
C23			錘	(37.0)	10.5	10.0	3.5	(3.75)	精良	一部欠
C25			錘	50.0	11.0	11.0	3.5	5.57	精良	完
C26	錘		(63.0)	13.5	13.5	4.0	(10.90)	1.5mm以下の砂粒少	一部欠	

水口遺跡

番号	遺構名・層位	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	胎土	残存状況・備考
			最大長	最大幅	最大厚			
C1	その他	錘	54.5	16.0	16.5	4.5	(11.32) 1mm以下の砂粒中	ほぼ完

石器

辺谷製鉄遺跡

番号	遺構名・層位	器種	残存状況	計測値 (mm)			重量 (g)	材質	備考
				最大長	最大幅	最大厚			
S1	土坑1	鉱石	完	40.0	20.0	14.5	21.80	磁鉄鉱石	
S2	排滓場	鉱石	完	11.0	11.0	8.0	1.69	磁鉄鉱石	
S3	排滓場	鉱石	完	17.5	16.0	11.0	5.28	磁鉄鉱石	
S4	排滓場I層	鉱石	完	20.0	16.0	13.0	7.63	磁鉄鉱石	
S5	排滓場	鉱石	完	25.0	15.0	12.0	6.91	磁鉄鉱石	
S6	排滓場	鉱石	完	21.0	17.0	14.0	6.81	磁鉄鉱石	
S7	排滓場I層	鉱石	完	28.0	18.5	14.5	12.12	磁鉄鉱石	
S8	排滓場	鉱石	完	24.5	22.5	18.5	43.55	磁鉄鉱石	
S9	排滓場	鉱石	完	28.5	20.0	15.0	17.23	磁鉄鉱石	
S10	排滓場	鉱石	完	28.0	26.0	21.0	24.69	磁鉄鉱石	
S11	排滓場	鉱石	完	30.0	22.0	19.0	13.92	磁鉄鉱石	
S12	排滓場	鉱石	完	30.0	28.0	20.0	31.83	磁鉄鉱石	
S13	排滓場I層	鉱石	完	46.0	22.0	8.0	15.96	磁鉄鉱石	
S14	排滓場	鉱石	完	30.0	26.5	21.0	23.72	磁鉄鉱石	
S15	排滓場	鉱石	完	37.0	21.5	15.0	18.00	磁鉄鉱石	
S16	排滓場	鉱石	完	36.0	33.0	22.0	42.24	磁鉄鉱石	
S17	排滓場I層	鉱石	完	37.0	26.0	25.0	41.26	磁鉄鉱石	
S18	排滓場I層	鉱石	完	34.0	33.0	23.0	41.24	磁鉄鉱石	
S19	排滓場	鉱石	完	37.0	32.0	23.0	47.85	磁鉄鉱石	
S20	排滓場I層	鉱石	完	42.0	32.0	26.0	16.19	磁鉄鉱石	
S21	排滓場I層	鉱石	完	29.0	37.0	36.0	64.56	磁鉄鉱石	
S22	排滓場II層	鉱石	完	48.0	37.0	21.5	72.39	磁鉄鉱石	
S23	排滓場	鉱石	完	43.0	32.0	30.0	75.34	磁鉄鉱石	
S24	排滓場	鉱石	完	45.0	45.0	32.0	126.65	磁鉄鉱石	
S25	排滓場	鉱石	完	63.5	48.5	32.5	171.76	磁鉄鉱石	
S26	排滓場	鉱石	完	78.0	37.0	30.0	126.98	磁鉄鉱石	
S27	排滓場III層以下	鉱石	完	70.5	66.0	63.0	593.50	磁鉄鉱石	
S28	排滓場	砥石?	欠	(131.0)	(97.0)	62.0	(725.90)	流紋岩質凝灰岩	
S29	排滓場I層	白石	欠	(146.0)	(110.0)	95.0	(1782.06)	流紋岩	敲打面に錆び
S30	排滓場	槌石	完	152.0	112.0	88.0	2270.00	細粒花崗岩	

辺谷中田遺跡

番号	遺構名・層位	器種	残存状況	計測値 (mm)			重量 (g)	材質	備考
				最大長	最大幅	最大厚			
S1	竪穴住居1	石鏃	先端部欠	(16.5)	15.0	3.0	(0.70)	サヌカイト	平基
S2		石鏃	先端部欠	(20.5)	17.0	3.0	(1.03)	サヌカイト	平基
S3		石鏃	先端・基部欠	(20.0)	(15.0)	3.0	(0.70)	サヌカイト	平基
S4		石鏃	先端部欠	(17.3)	14.5	2.2	(0.47)	サヌカイト	
S5		石鏃	先端・脚部欠	(19.0)	13.0	4.0	(0.64)	サヌカイト	凹基
S6		石鏃	完	16.5	7.5	3.0	0.33	サヌカイト	
S7		磨製石斧	刃部のみ残	(65.0)	70.0	(36.0)	(215.48)	安山岩	大型蛤刃
S8		白石	完	148.0	113.0	56.0	1490.42	流紋岩質凝灰岩	
S9		砕片	完	18.3	7.0	3.3	0.25	姫島産黒曜石	
S10		石鏃	完	16.5	10.0	4.0	0.64	サヌカイト	平基
S11	石鏃	ほぼ完	21.3	15.5	3.5	1.06	サヌカイト	平基	
S12	石鏃非成品	完	24.0	13.5	3.5	1.18	サヌカイト		
S13	竪穴住居2	石鏃	完	19.5	14.3	2.8	0.58	サヌカイト	凹基
S14		二次加工のある剥片	完	57.5	53.0	13.0	48.58	サヌカイト	摩滅痕
S15		磨製石斧か	完	130.0	69.5	39.0	481.69	安山岩	基部・刃部に研磨痕
S16		石鏃	完	95.0	92.5	38.0	482.76	安山岩	打ち欠き
S17	砥石	欠	(56.0)	43.0	15.0	(58.00)	流紋岩		
S18	砕片	完	22.5	15.5	8.5	2.65	姫島産黒曜石		
S19	石鏃	完	22.0	13.5	4.5	1.14	サヌカイト	平基	
S20	石鏃	完	21.0	15.0	4.5	1.18	サヌカイト	凹基	
S21	竪穴住居3	石鏃	ほぼ完	22.3	15.0	2.5	(0.75)	サヌカイト	凹基
S22		石鏃	ほぼ完	(29.3)	18.5	3.0	(1.37)	サヌカイト	有茎
S23		鏃	完	31.3	22.5	3.0	2.54	サヌカイト	
S24		使用痕のある剥片	完	53.0	28.5	6.5	8.59	サヌカイト	
S25	打製石斧	先端部欠	(78.0)	37.0	11.0	(50.06)	緑色片岩	摩滅痕	
S26	砥石	欠	(106.0)	35.0	19.5	(111.20)	デイサイト (石英安山岩)	棒状	
S27	竪穴住居5	砥石	欠	(35.0)	(51.5)	9.8	(28.44)	流紋岩	
S28		石鏃	先端部欠	(10.5)	17.5	2.5	(0.60)	サヌカイト	平基
S29		石鏃	基部欠	21.0	(17.0)	2.5	(0.75)	サヌカイト	
S30		石鏃	完	28.0	18.0	4.5	1.64	サヌカイト	凹基
S31	竪穴住居7	石鏃	ほぼ完	21.0	10.5	3.5	(0.75)	サヌカイト	
S32		楔	完	28.5	42.0	7.0	7.85	サヌカイト	
S33		磨製石包丁	ほぼ完	(116.0)	40.0	7.5	(51.71)	粘板岩 (ホルンフェルス)	孔径: 5.0~5.5mm
S34		砥石	欠	191.0	45.5	40.0	(423.93)	石英砂岩	被熱
S35		支石か	完	182.0	94.0	74.0	2330.00	安山岩	片面のみに被熱痕、頂部に円形に煤付着

番号	遺構名・層位	器種	残存状況	計測値 (mm)			重量 (g)	材質	備考
				最大長	最大幅	最大厚			
S36	竪穴住居 7	台石	完	268.0	128.0	82.0	4050.00	流紋岩	
S37	竪穴住居 8	使用痕のある剥片	完	59.0	33.0	5.3	10.78	サヌカイト	
S38	墓 1	石鏃	基部欠	18.0	(12.0)	4.3	(0.92)	サヌカイト	平基
S39		石鏃	先端部欠	(18.5)	14.0	2.8	(0.83)	サヌカイト	凹基
S40		石鏃	先端部欠	(17.5)	16.0	4.0	(1.06)	サヌカイト	平基
S41		石鏃	先端部完	(19.0)	13.5	3.0	(0.70)	サヌカイト	平基、摩滅痕
S42		石鏃	先端部欠	(24.5)	15.7	5.0	(1.73)	サヌカイト	平基
S43		石鏃	完	32.0	17.0	4.0	2.08	サヌカイト	平基
S44		石鏃	先端部欠	(20.5)	11.0	2.5	(0.65)	サヌカイト	尖基
S45		石鏃	先端・脚部欠	(19.5)	(17.0)	3.2	(0.93)	サヌカイト	凹基
S46		石鏃	先端部欠	(27.0)	14.0	4.5	(1.49)	サヌカイト	凹基
S47		石鏃	完	30.0	14.0	4.0	1.48	サヌカイト	平基
S48		石鏃	完	16.4	16.0	2.5	0.43	サヌカイト	平基
S49		石鏃	先端・基部欠	(22.5)	14.0	3.8	(0.89)	サヌカイト	平基
S50		石鏃	先端部欠	(25.0)	15.0	3.8	(1.28)	サヌカイト	平基
S51		石鏃	完	25.5	15.0	4.8	1.36	サヌカイト	平基
S52		石鏃	先端部欠	(27.8)	14.5	3.5	(1.34)	サヌカイト	平基
S53		石鏃	完	17.8	12.0	3.8	0.64	サヌカイト	凹基、摩滅痕
S54		石鏃	先端部欠	(17.0)	10.0	3.3	(0.53)	サヌカイト	凹基
S55	碎片	完	14.5	17.0	3.0	0.63	サヌカイト		
S56	土坑 5	石鏃	完	18.5	11.3	2.5	0.62	サヌカイト	
S57	土坑 6	石鏃	完	16.0	13.7	3.5	0.63	サヌカイト	平基
S58		石鏃	先端部欠	(20.0)	14.0	3.0	(0.80)	サヌカイト	凹基
S59		敲き石・磨り石	欠	128.0	(73.0)	63.0	(830.79)	流紋岩	
S60	土坑 7	石鏃	完	28.5	14.5	3.0	1.22	サヌカイト	平基
S61		石鏃	完	26.5	15.5	3.0	1.07	サヌカイト	凹基
S62		打製石斧	完	92.5	34.5	19.0	75.07	粘板岩	板状円礫使用
S63		打製石斧	完	87.0	39.0	19.0	89.60	デイサイト	
S64	河道 1	打製石斧	基部のみ	(78.0)	43.0	20.5	(72.54)	泥岩 (少しホルンフェルス化)	失敗品か
S65		磨製石斧	基部欠	(40.0)	27.5	10.0	(19.85)	カタクレーサイト (圧砕花崗岩)	
S66	河道 2	石鏃	基部欠	23.0	(12.5)	3.0	(0.84)	サヌカイト	平基
S67		錐	錐部欠	(24.0)	19.0	4.0	(1.48)	サヌカイト	
S68		スクレイパー	欠	(61.0)	(29.0)	8.3	(15.13)	サヌカイト	
S69		スクレイパー	一部欠	(65.5)	56.5	6.5	(24.87)	サヌカイト	
S70		残核	ほぼ完	58.0	52.0	15.0	(45.40)	サヌカイト	
S71		残核	ほぼ完	44.0	77.5	18.0	(57.57)	サヌカイト	
S72		打製石斧か	基部欠	(51.5)	62.0	14.0	(69.57)	デイサイト	裏面敲打調整か
S73		打製石斧	側面欠	82.0	49.0	15.5	(72.54)	粘板岩	
S74		敲き石	欠	(77.0)	22.2	12.3	(28.68)	粘板岩	棒状
S75		敲き石	完	101.2	22.6	18.9	72.74	結晶片岩 (石榴石含有)	棒状、線状の使用痕
S76		石棒	基部欠	(118.6)	(24.3)	(17.8)	(73.60)	結晶片岩	敲き石に転用か
S77		石錘	完	89.0	66.0	17.5	140.30	安山岩	打ち欠き
S78		凹石	完	124.5	105.6	35.6	714.05	花崗岩	板状
S79		磨り石	完	92.6	94.0	52.8	716.11	流紋岩	
S80		凹石	完	146.2	90.2	73.5	1386.80	細粒花崗岩	塊状
S81	その他	石鏃	完	20.0	13.2	3.0	0.82	サヌカイト	平基
S82		石鏃	基部欠	19.0	(14.0)	3.5	(0.69)	サヌカイト	平基
S83		石鏃	先端部欠	(18.0)	14.5	3.0	(0.62)	サヌカイト	平基
S84		石鏃	完	20.5	14.7	4.0	0.76	サヌカイト	凹基
S85		石鏃	片脚欠	27.5	(11.5)	4.5	(1.05)	サヌカイト	凹基
S86		石鏃	先端・片脚部欠	19.0	14.3	3.0	(0.93)	サヌカイト	凹基
S87		石匙	先端部欠	(36.5)	(25.0)	7.5	(6.28)	サヌカイト	
S88		打製石斧	基部のみ残	(92.5)	63.5	27.0	(176.70)	安山岩	
S89		打製石包丁	ほぼ完	71.0	41.0	11.0	(32.10)	サヌカイト	
S90		スクレイパー	完	62.0	33.5	7.3	15.57	サヌカイト	
S91		楔	完	30.0	35.0	10.5	13.37	サヌカイト	
S92		残核	完	75.0	87.0	20.5	142.74	サヌカイト	
S93		石錐	ほぼ完	86.0	31.0	10.5	(26.22)	サヌカイト	
S94	石錐	一部欠	(94.0)	53.0	22.5	(99.90)	サヌカイト	残核転用	
S95		凹石	完	174.5	111.0	82.8	2340.00	花崗岩 (花崗閃緑岩?)	塊状
S96	河道 1	碎片	完	47.0	28.0	15.0	36.30	磁鉄鉱石	分析: OHN3
S97	その他	碎片	完	31.0	15.0	13.5	9.24	磁鉄鉱石	
S98	河道 1	石筆	完	38.0	6.5	6.3	2.29	鱗石	
S99	河道 2	硯	海部欠	(96.0)	(64.0)	21.0	(202.28)	砂岩 (植物片含有)	

成ル古屋遺跡

番号	遺構名・層位	器種	残存状況	計測値 (mm)			重量 (g)	材質	備考
				最大長	最大幅	最大厚			
S1	その他	石匙	完	58.0	28.5	8.0	13.22	サヌカイト	

水口遺跡

番号	遺構名・層位	器種	残存状況	計測値 (mm)			重量 (g)	材質	備考
				最大長	最大幅	最大厚			
S1	竪穴住居 1	敲き石	欠	(61.0)	(21.0)	23.0	(54.05)	細粒流紋岩	棒状
S2		石鏃	完	19.0	12.5	2.5	0.42	サヌカイト	凹基
S3		石鏃	欠	(19.5)	15.0	2.5	(0.58)	サヌカイト	凹基
S4		石鏃	欠	19.5	(12.0)	3.8	(0.68)	サヌカイト	平基
S5		石鏃	欠	(18.0)	15.0	3.0	(0.97)	サヌカイト	平基



番号	遺構名・層位	器種	残存状況	計測値 (mm)			重量 (g)	材質	備考	
				最大長	最大幅	最大厚				
S6	竪穴住居 1	石鏝	欠	(18.0)	12.5	2.8	(0.79)	サヌカイト	平基	
S7		石鏝	欠	(16.0)	(10.0)	2.5	(0.32)	サヌカイト		
S8		石鏝	欠	(15.0)	(6.5)	(2.5)	(0.17)	サヌカイト		
S9		石鏝非成品	欠	(15.0)	(11.5)	2.8	(0.50)	サヌカイト		
S10		石鏝非成品	欠	(17.0)	12.0	3.2	(0.72)	サヌカイト		
S11		石鏝非成品	完	20.5	10.0	3.0	0.59	サヌカイト		
S12		石鏝非成品	完	20.0	10.0	3.0	0.53	サヌカイト		
S13		石錐	完	16.5	12.0	2.5	0.46	サヌカイト		
S14		楔	欠	(14.8)	10.0	4.0	(0.65)	サヌカイト		
S15		楔	欠	(16.5)	(16.0)	9.0	(2.23)	サヌカイト		
S16		楔	欠	(18.0)	(19.0)	7.5	(1.98)	サヌカイト		
S17		楔	欠	(15.0)	(9.0)	5.0	(0.69)	サヌカイト		
S18		台石か	完	197.0	172.0	86.0	3600.00	凝灰角礫岩		
S19		台石か	完	309.0	233.0	130.0	11850.00	流紋岩質凝灰岩		
S20		竪穴住居 2	台石	完	347.0	194.0	83.0	11850.00	凝灰角礫岩	
S21		その他	石鏝	欠	(22.0)	14.5	3.8	(1.18)	サヌカイト	平基
S22			石鏝	欠	(25.0)	15.2	4.0	(1.60)	サヌカイト	凹基
S23			石鏝非成品	完	17.8	11.5	4.5	1.12	サヌカイト	
S24			石鏝	ほぼ完	15.0	(13.0)	2.5	(0.39)	サヌカイト	凹基
S25	磨製石包丁		欠	(85.0)	44.0	9.0	(48.14)	粘板岩		
S26	敲き石		完	121.0	38.0	32.0	220.32	デイサイト	棒状	

#### 谷山遺跡

番号	遺構名・層位	器種	残存状況	計測値 (mm)			重量 (g)	材質	備考
				最大長	最大幅	最大厚			
S1	土坑 1	スクレイパー	完	140.0	68.0	21.0	276.15	安山岩	横刃形石器
S2	溝 1	石鏝	先端部欠	(20.5)	17.3	2.8	(0.79)	サヌカイト	
S3		石鏝	片脚欠	22.0	(12.5)	4.0	(0.63)	サヌカイト	
S4		石鏝非成品	完	27.0	18.5	7.0	(3.50)	サヌカイト	
S5	その他	石鏝	先端部欠	(23.5)	16.5	3.0	(1.27)	サヌカイト	

#### 木製品

##### 試掘・確認調査

番号	遺構名・層位	器種	計測値 (mm)			樹種	木取り	時期	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
W1	T4シルト下層	加工痕ある木器	181.0	48.0	29.0		丸木		

#### 金属製品

##### 辺谷製鉄遺跡

番号	遺構名・層位	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	材質	残存状況・備考
			最大長	最大幅	最大厚			
M1	土坑 6	滓	24.0	19.0	19.0	8.56		分析：OHS02
M2	溝 1	炉内流動滓	53.5	38.0	46.0	116.40		分析：OHS05
M3	排滓場 I 層	炉壁溶融物	44.0	38.0	30.0	45.11		分析：OHS09
M4	排滓場 I 層	炉壁	72.0	55.0	36.0	125.74		分析：OHS12
M5	排滓場 III 層	炉壁	45.0	44.0	21.0	32.76		分析：OHS13
M6	排滓場 I 層	木舞滓	40.5	26.0	12.5	20.50		木舞径：26.0mm
M7	排滓場 I 層	木舞孔か	58.0	36.0	36.0	50.89		分析：OHS10
M8	排滓場	滓付着鉄塊系遺物	46.0	39.5	32.0	52.26		分析：OHS06
M9	排滓場	滓付着鉄塊系遺物	35.0	32.0	21.0	18.61		分析：OHS15
M10	排滓場	黒鉛化木炭、滓化?	55.0	53.0	38.0	99.61		分析：OHS11
M11	排滓場	炉底塊	80.0	70.0	59.0	381.46		分析：OHS07
M12	排滓場 IV 層	炉内滓	78.0	64.0	56.0	219.76		分析：OHS16
M13	排滓場 IV 層	含鉄流動滓	39.0	32.0	21.0	21.56		分析：OHS17
M14	排滓場	木舞痕のある滓炉壁	88.0	133.0	51.5	385.23		木舞径：26.0～30.0mm
M15	排滓場	流出孔近傍滓	144.0	103.0	48.0	531.39		分析：OHS08
M16	排滓場	流出孔手前滓	90.0	63.0	54.0	251.63		

##### 辺谷中田遺跡

番号	遺構名・層位	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	材質	残存状況・備考
			最大長	最大幅	最大厚			
M1	竪穴住居 2	鏝か	(27.8)	12.2	2.1	(2.84)	鉄	基部欠、柳葉?
M2	竪穴住居 7 一屋内土坑 2	破片	30.0	23.0	1.5	5.03	鉄	完、板状
M3		破片	34.9	18.8	1.0	2.24	鉄	完、板状
M4	竪穴住居 12	鉄塊系遺物	20.0	14.0	11.5	6.19	鉄	完
M5	竪穴住居 14	不明	(35.8)	7.5	3.0	(3.23)	鉄	頭・先端部欠、棒状
M6	河道 1	炉底塊	(96.0)	58.0	48.0	394.97	鉄	完
M7	その他	流出孔滓	(77.0)	57.5	40.0	177.80	鉄	完
M8	墓 2	刀	335.0	32.0	8.5	337.08	鉄	完、柄長：82.0mm
M9	溝 5	分銅	11.8	7.8	4.4	1.75	銅	完
M10	溝 7	釘	(34.1)	11.2	(7.0)	(6.52)	鉄	頭・先端部欠
M11	河道 1	釣り針	(21.0)	4.1	4.3	(0.78)	鉄	
M12		釘	(85.0)	9.7	7.8	(29.83)	鉄	頭部欠
M13		刀	(77.5)	35.1	6.0	(64.86)	鉄	身片
M14		包丁か	(78.0)	32.6	5.5	(29.90)	鉄	身片
M15	河道 2	鏝	(46.9)	(19.2)	身：4.0、茎：5.0	(7.50)	鉄	先端・茎部欠
M16		釘	(42.6)	8.5	5.0	(8.91)	鉄	頭・先端部欠

番号	遺構名・層位	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	材質	残存状況・備考
			最大長	最大幅	最大厚			
M17	河道2	釘	(73.8)	7.8	5.0	(20.09)	鉄	頭・先端部欠
M18		釘	(25.5)	7.5	2.5	(1.94)	鉄	頭・先端部欠
M19		釘	32.5	9.0	6.5	(6.19)	鉄	先端部欠
M20		釘	(48.3)	8.0	6.0	(7.78)	鉄	先端部欠
M21		釘	(53.7)	11.0	6.0	(13.66)	鉄	先端部欠
M22		釘	(55.0)	7.2	6.0	(7.86)	鉄	頭・先端部欠
M23		釘	(59.3)	8.0	6.3	(12.24)	鉄	頭・先端部欠
M24	その他	釘	(90.8)	6.3	4.5	(16.55)	鉄	頭・先端部欠
M25		釘	(107.3)	13.6	5.0	(36.96)	鉄	頭端部欠
M26		釘か	(106.9)	11.0	5.5	(22.78)	鉄	先端部欠
M27		釘	72.1	8.0	3.0	7.04	鉄	完
M28		釘	(62.7)	13.0	5.0	(17.67)	鉄	先端部欠
M29		釘	(52.0)	13.1	4.5	(15.35)	鉄	先端部欠
M30		飾金具	(29.3)	(37.9)	飾り：2.5、地金：2.1	(15.04)	鉄・銅	飾り部完

成ル古屋遺跡

番号	遺構名・層位	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	材質	残存状況・備考
			最大長	最大幅	最大厚			
M1	T3	釘	(35.8)	7.5	2.0	(2.92)	鉄	頭部欠
M2		釘	(64.4)	6.5	6.0	5.90	鉄	完
M3	T5	楔	(51.3)	19.6	5.5	(19.60)	鉄	頭部欠
M4	たわみ2	釘	(57.4)	7.0	2.5	(3.34)	鉄	頭部欠
M5		釘	(66.3)	10.0	3.5	(5.08)	鉄	先端部欠
M6		釘	(82.0)	6.0	6.0	(17.44)	鉄	先端部欠
M7	その他	釘	7.0	6.0	6.5	(7.33)	鉄	ほぼ完
M8		刀子	(52.0)	17.0	2.0	(7.12)	鉄	茎部欠
M9		鏝?	(62.6)	21.0	12.5	(27.34)	鉄	一部欠

水口遺跡

番号	遺構名・層位	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	材質	残存状況・備考
			最大長	最大幅	最大厚			
M1	その他	斧	(54.0)	(48.5)	3.5	(37.50)	鉄	

谷山遺跡

番号	遺構名・層位	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	材質	残存状況・備考
			最大長	最大幅	最大厚			
M1		釘	(26.1)	9.1	6.5	(4.76)	鉄	先端欠
M2	その他	釘	(26.2)	6.0	7.1	(3.85)	鉄	頭部欠
M3		釘	(34.0)	4.8	3.5	(1.93)	鉄	頭部欠

表10 遺構名称新旧対照表

辺谷製鉄遺跡

掲載遺構名	旧遺構名	掲載遺構名	旧遺構名	掲載遺構名	旧遺構名
土坑1	No.1	土坑4	No.6	溝1	No.4
土坑2	No.5	土坑5	No.10	作業面	No.9
土坑3	No.13	土坑6	No.8	排滓場	No.3・7・11

辺谷中田遺跡

掲載遺構名	旧遺構名	掲載遺構名	旧遺構名	掲載遺構名	旧遺構名	掲載遺構名	旧遺構名
河道1	1・3区No.8・9	竪穴住居14	2区No.31	土坑15	2区No.19	溝3	2区No.5
河道2	2区No.14	土坑1	1区No.6	土坑16	3区No.3	溝4	2区No.29
竪穴住居1	2区No.8	土坑2	1区No.12	土坑17	3区No.4	溝5	3区No.7
竪穴住居2	2区No.21	土坑3	1区No.5	土坑18	3区No.5	溝6	1区No.3
竪穴住居3	2区No.22	土坑4	1区No.17	土坑19	1区No.14	溝7	1区No.1
竪穴住居4	2区No.23	土坑5	2区No.2	土坑20	1区No.4	溝8	1区No.13
竪穴住居5	2区No.24	土坑6	2区No.28	土坑21	1区No.16	溝9	2区No.7
竪穴住居6	2区No.35	土坑7	2区No.25	土坑22	1区No.9	溝10	2区No.1
竪穴住居7	2区No.6	土坑8	2区No.24ビット1	土坑23	1区No.18	(石組1)	1区No.15
竪穴住居8	2区No.32	土坑9	2区No.17	土坑24	1区No.10	(柱穴)	1区No.20
竪穴住居9	1区No.11	土坑10	2区No.12	土坑25	1区No.19		2区No.18
竪穴住居10	1区No.7	土坑11	2区No.10	墓1	2区No.20	竪穴住居7屋内土坑1	2区No.26
竪穴住居11	2区No.3	土坑12	2区No.9	墓2	2区No.16	竪穴住居7屋内土坑2	2区No.27
竪穴住居12	2区No.4	土坑13	2区No.11	溝1	2区No.30		2区No.34
竪穴住居13	2区No.15	土坑14	2区No.13	溝2	2区No.33		3区No.6

成ル古屋遺跡

掲載遺構名	旧遺構名	掲載遺構名	旧遺構名	掲載遺構名	旧遺構名
たわみ1	No.1	たわみ1	No.2	河道	-

水口遺跡

掲載遺構名	旧遺構名	掲載遺構名	旧遺構名	掲載遺構名	旧遺構名	掲載遺構名	旧遺構名
竪穴住居1	No.17	掘立柱建物2	No.15	土坑2	No.7	溝3	No.11
竪穴住居2	No.10	掘立柱建物3	No.14	溝1	No.5	溝4	No.6
掘立柱建物1	No.3	土坑1	No.13	溝2	No.12		

水口遺跡

掲載遺構名	旧遺構名	掲載遺構名	旧遺構名	掲載遺構名	旧遺構名	掲載遺構名	旧遺構名
掘立柱建物1	No.1	土坑2	No.5	土坑4	No.6	溝1	No.3
土坑1	No.2	土坑3	No.4	土坑5	No.8	溝2	No.7



1 奥吉原地区北部遠景（南東上空から）



2 奥吉原地区南部遠景（南上空から）



1 調査区全景  
(南西上空から)



2 遺構全景  
(南西から)



3 排滓場土層堆積  
状況 (東から)



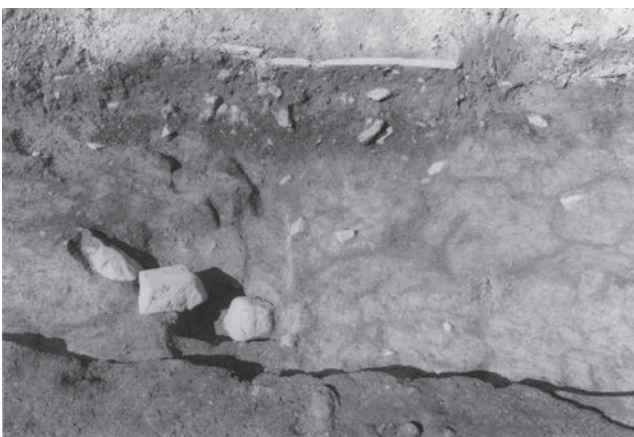
1 排滓場下層遺構全体 (西から)



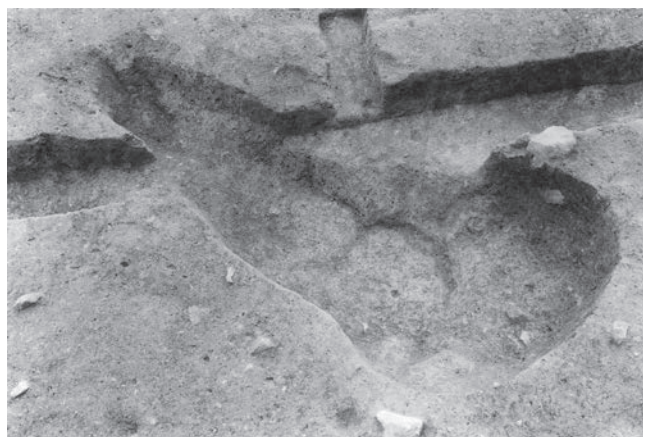
2 排滓場上面検出状況 (西から)



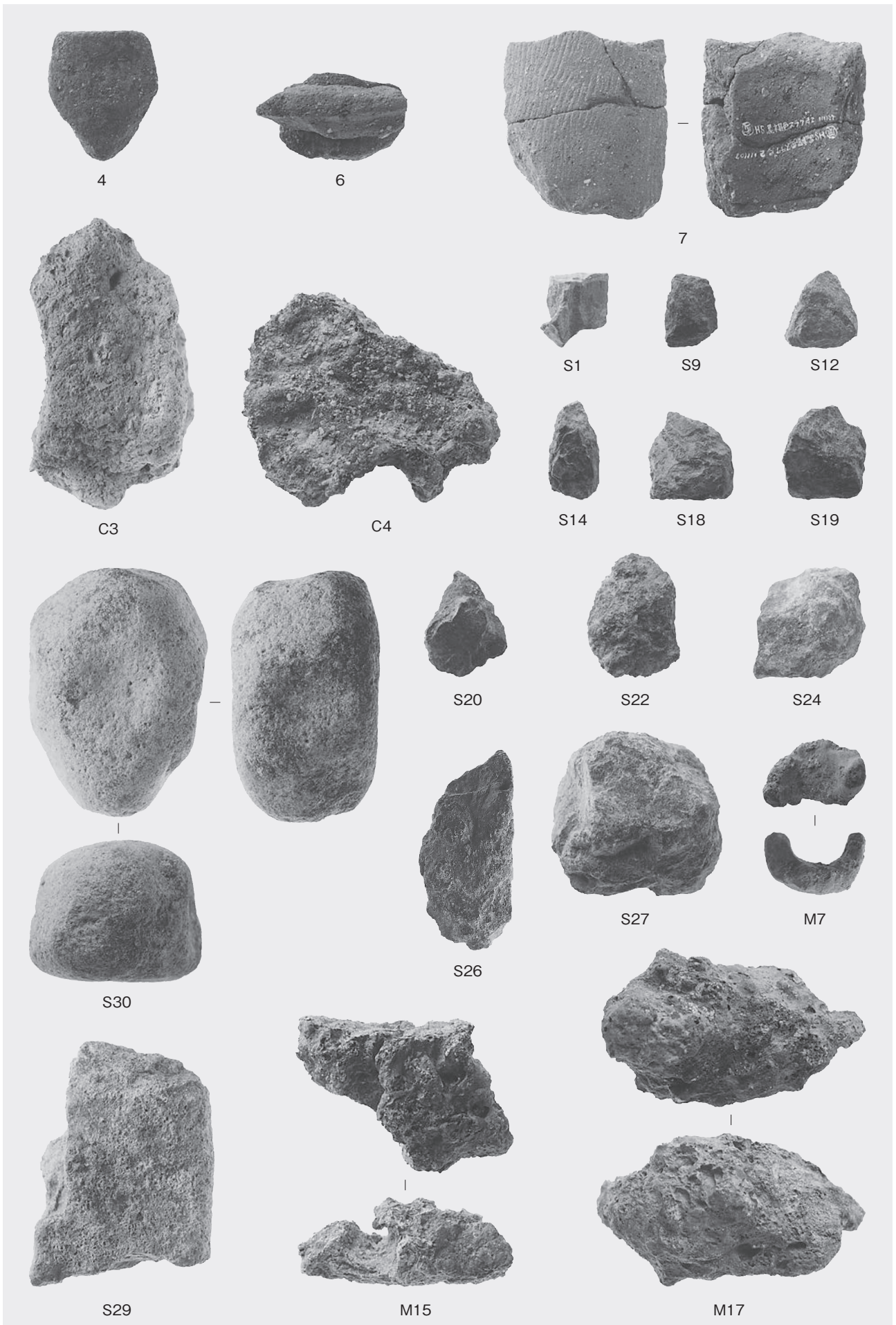
3 排滓場検出状況 (西から)



4 土坑4 (南東から)



5 土坑6 (北から)



出土土器、土製品、石器、金属製品



1 1・3区調査区全景  
(上空から、上が北)



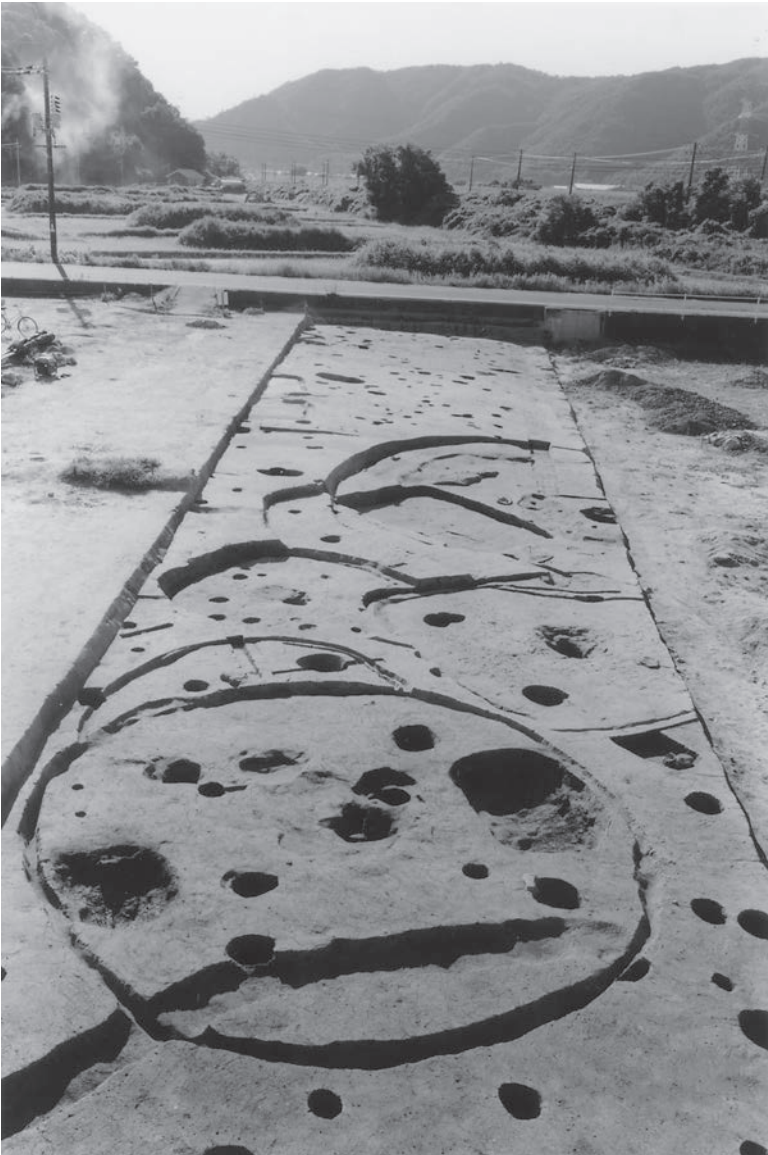
2 1区西半古墳時代以前の遺構全景 (北から)



3 1区東半遺構全景  
(南西から)



1 2区調査区全景  
(上空から、上が北東)

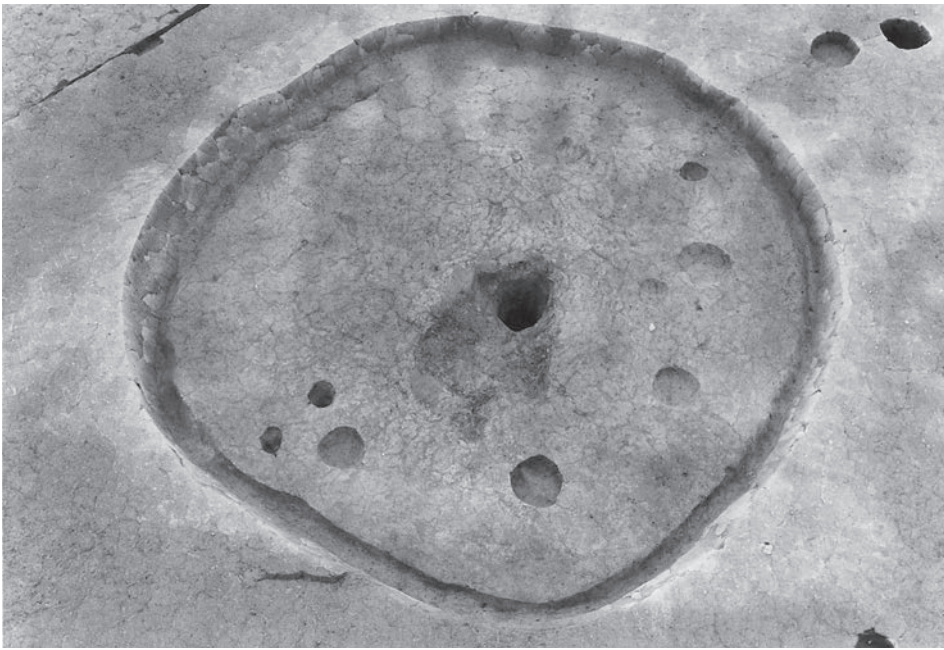


2 2区西半遺構全景  
(南東から)



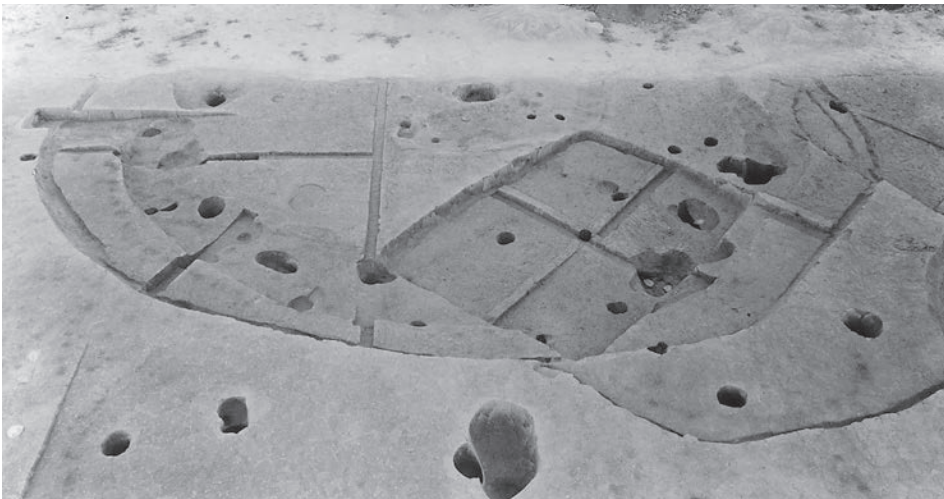


2区弥生～古墳時代の竪穴住居群（北西から）



1 竪穴住居 1  
遺物出土状況  
(北東から)

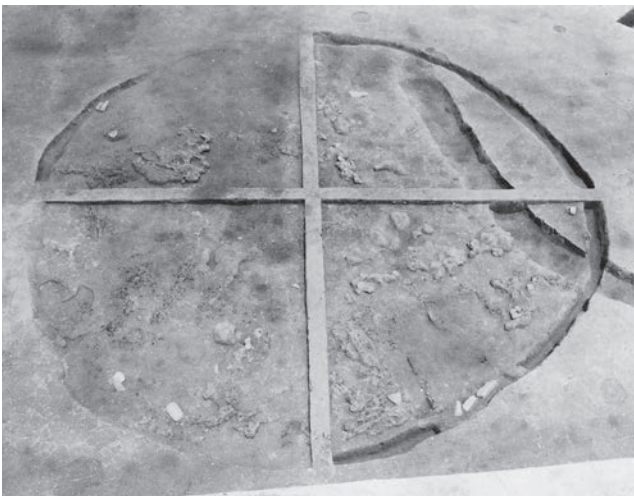
2 竪穴住居 1  
埋土完掘状況  
(南西から)



3 竪穴住居 2  
埋土完掘状況  
(南西から)



1 豎穴住居7・8埋土完掘状況（南西から）



2 豎穴住居7検出状況（南西から）



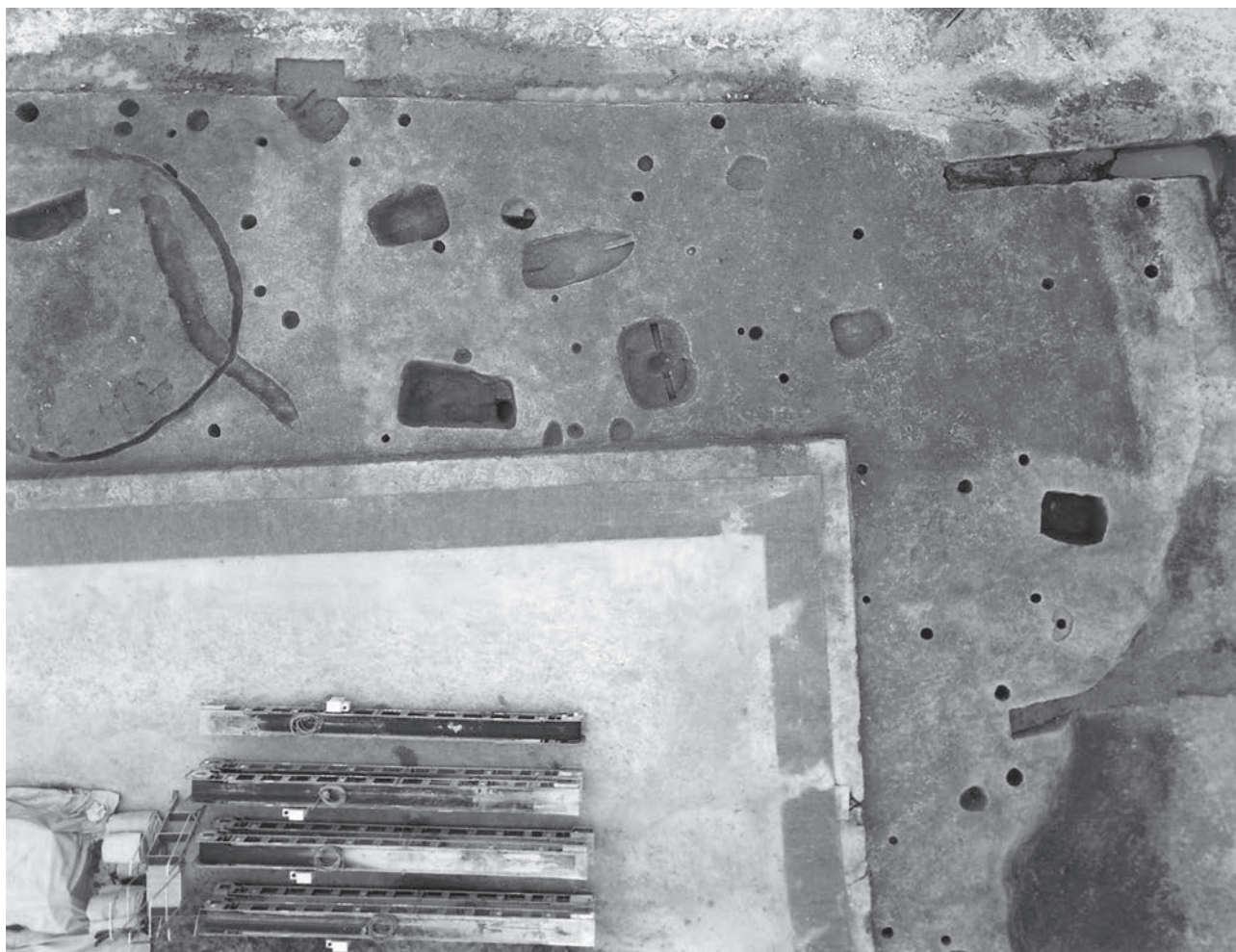
3 豎穴住居7屋内土坑1（北から）



4 豎穴住居7屋内土坑2（北から）



5 豎穴住居3（北東から）



1 土坑9~15、溝3 (上空から、上が北)



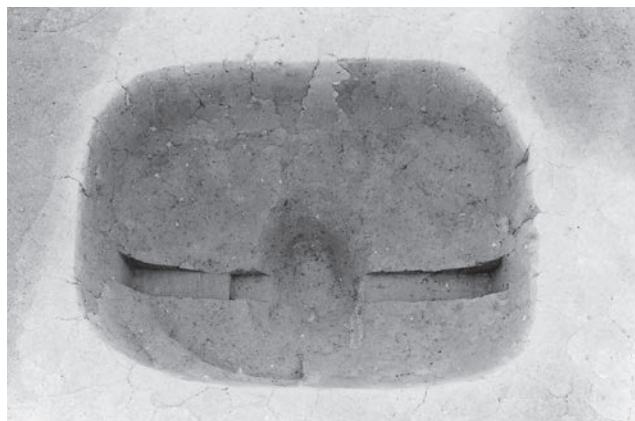
2 土坑7遺物出土状況 (南東から)



3 土坑11 (南から)



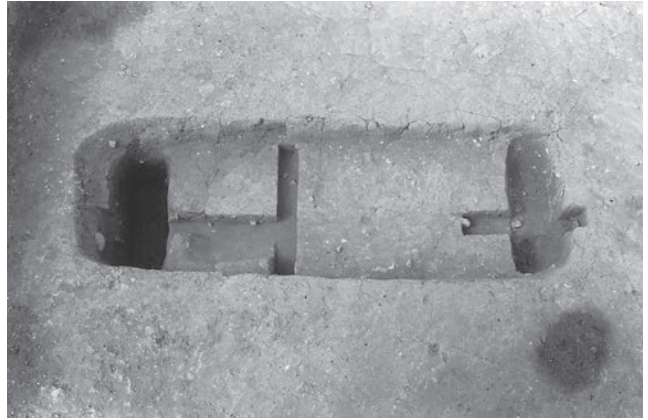
4 土坑13埋土完掘状況 (東から)



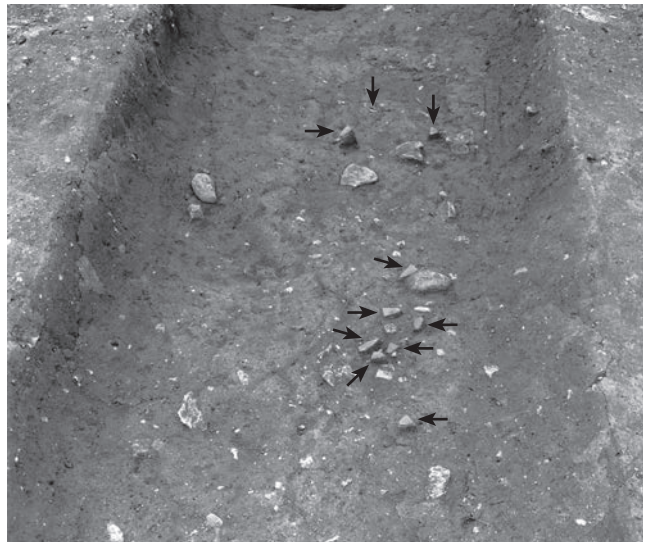
5 土坑13底面堆積土完掘状況 (東から)



1 墓1埋土完掘状況（北西から）



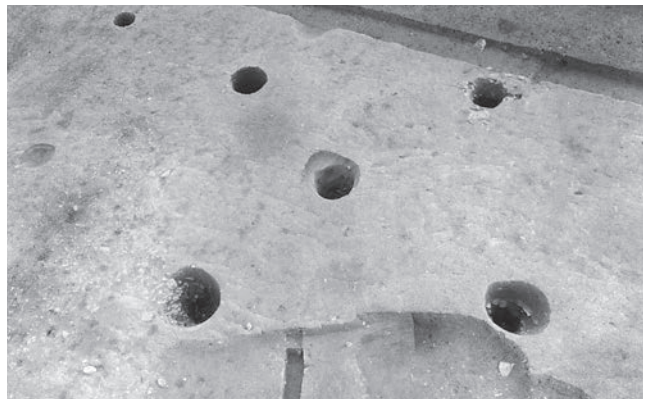
2 墓1掘り方完掘状況（南西から）



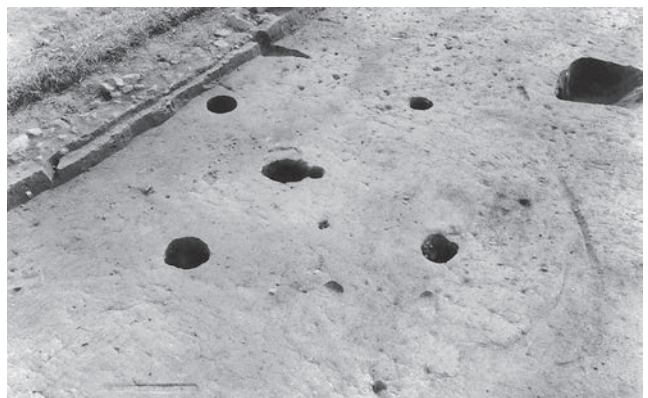
3 墓1石器出土状況（南東から）



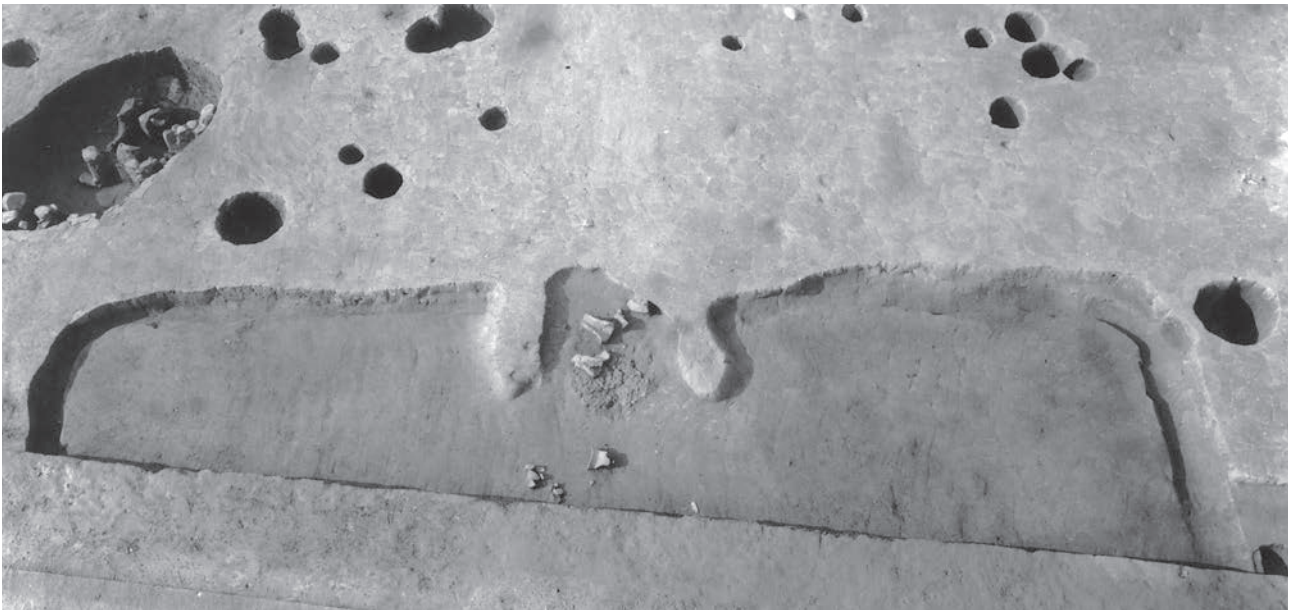
4 溝3（南東から）



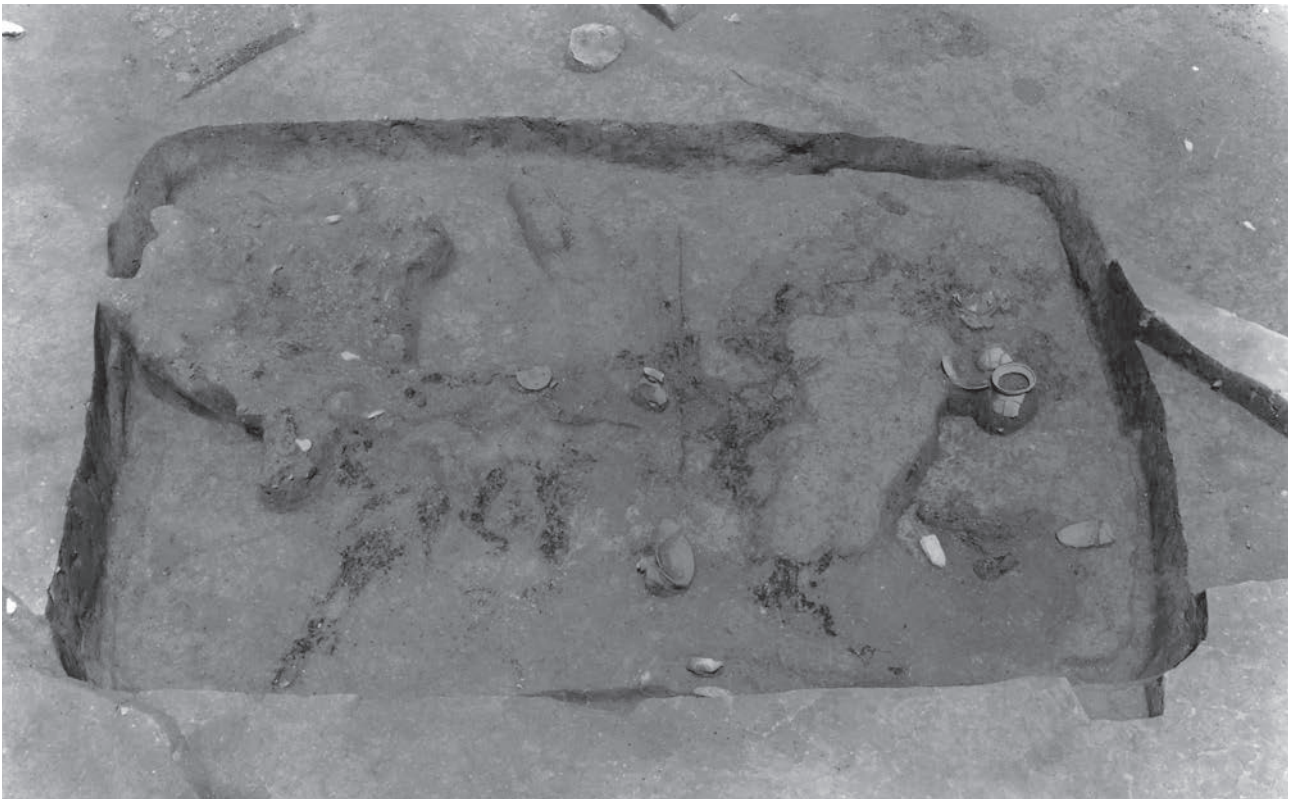
5 竪穴住居9（北西から）



6 竪穴住居10（北西から）



1 竪穴住居12 (南から)



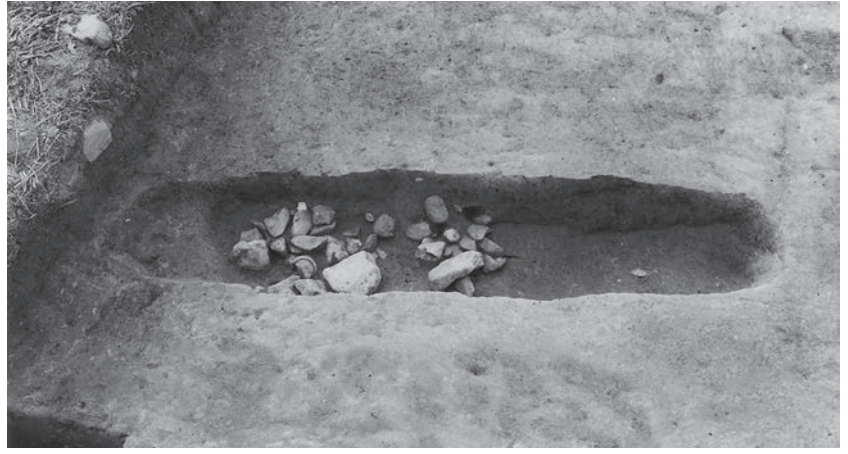
2 竪穴住居14炭化材・遺物出土状況 (南東から)



3 竪穴住居14埋土完掘状況 (南東から)



4 土坑21 (北から)



1 土坑24 (北から)



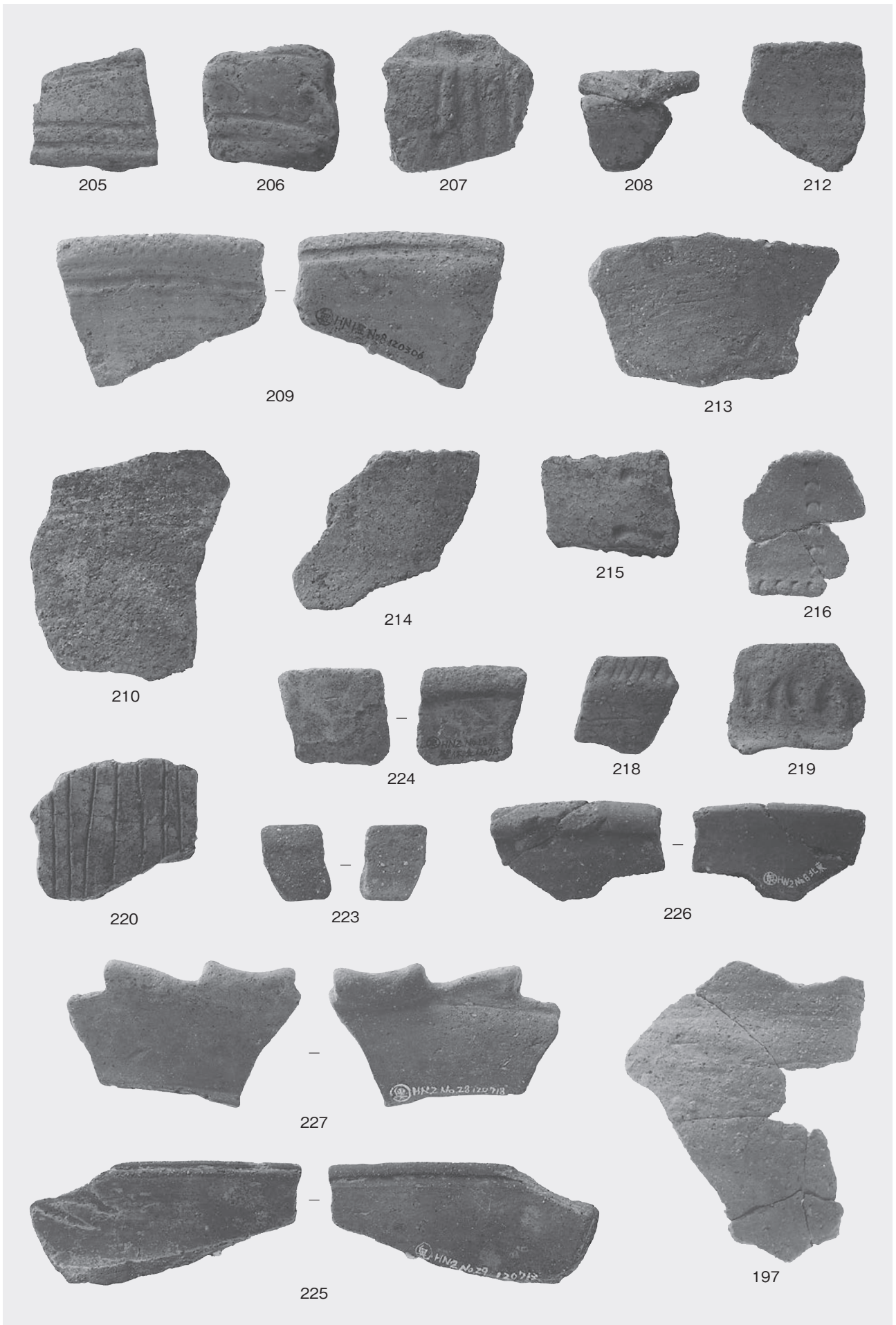
2 墓2 遺物出土状況  
(南東から)



3 溝6・7 (東から)



4 河道2 (南西から)



出土土器①（縄文土器）





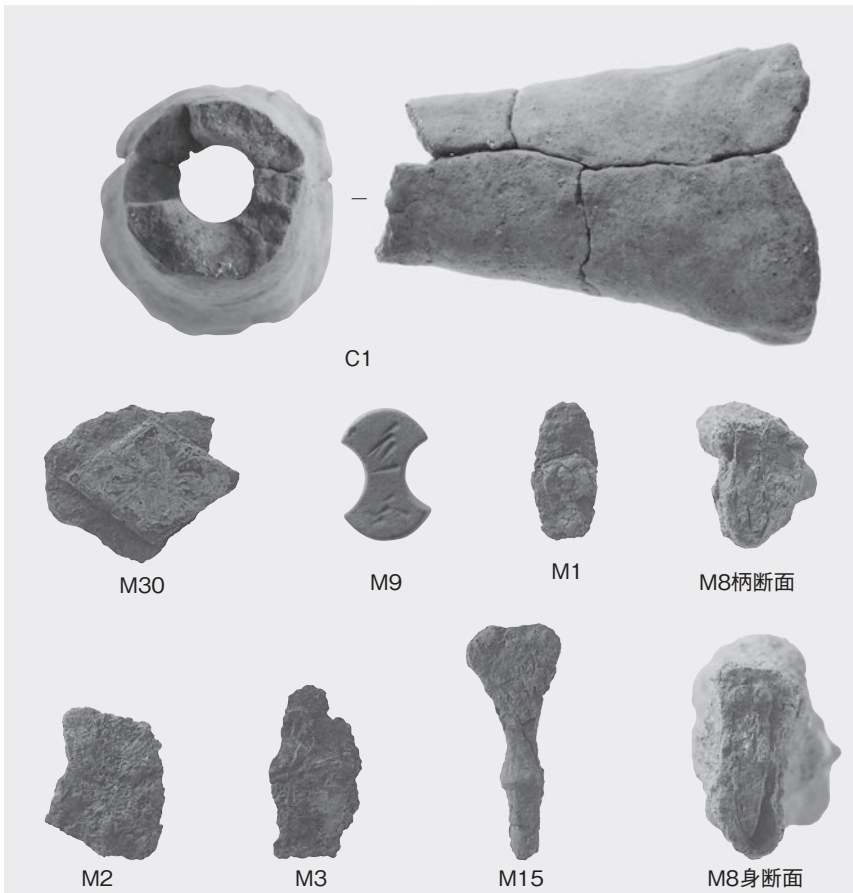
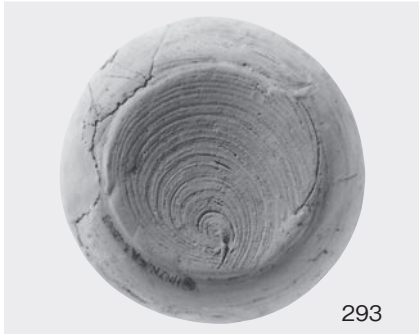
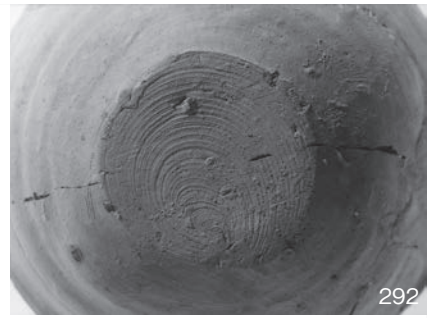
出土土器②（豎穴住居 1・2）



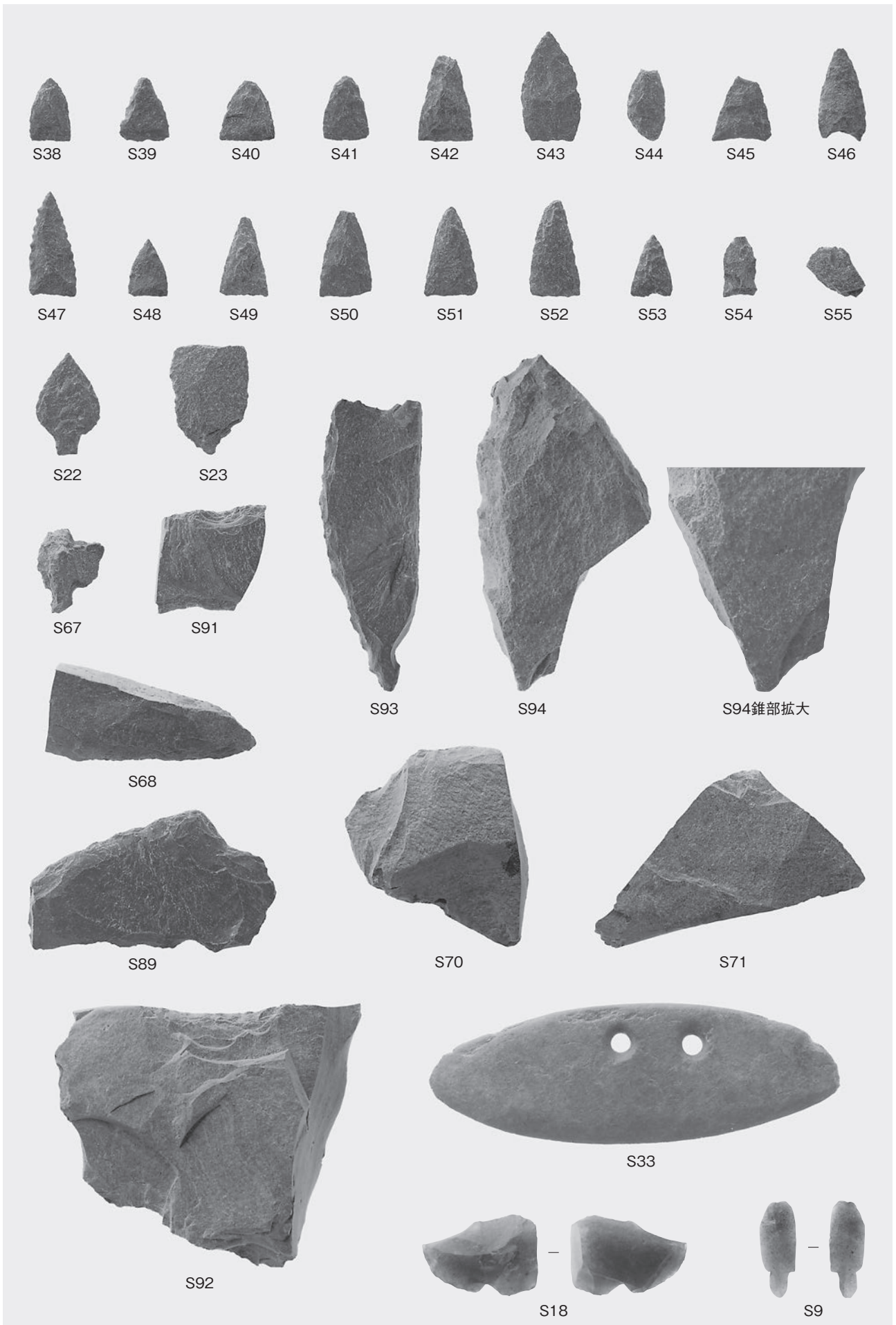
出土土器③（竪穴住居 3・10・12、土坑 6・10、河道 1、ピット）



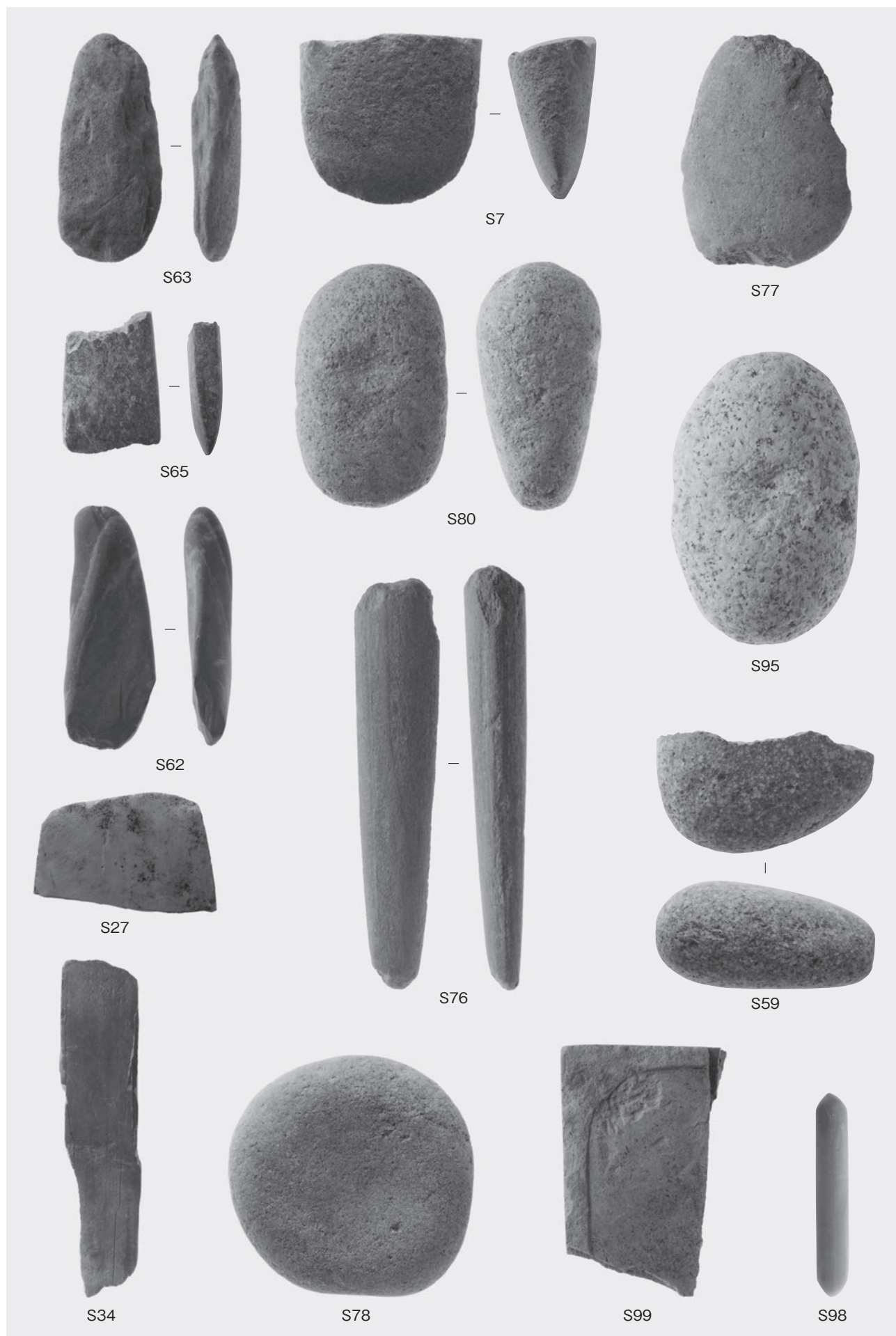
出土土器④（竪穴住居13・14、墓2）



出土土器⑤ (墓2)、土製品、金属製品



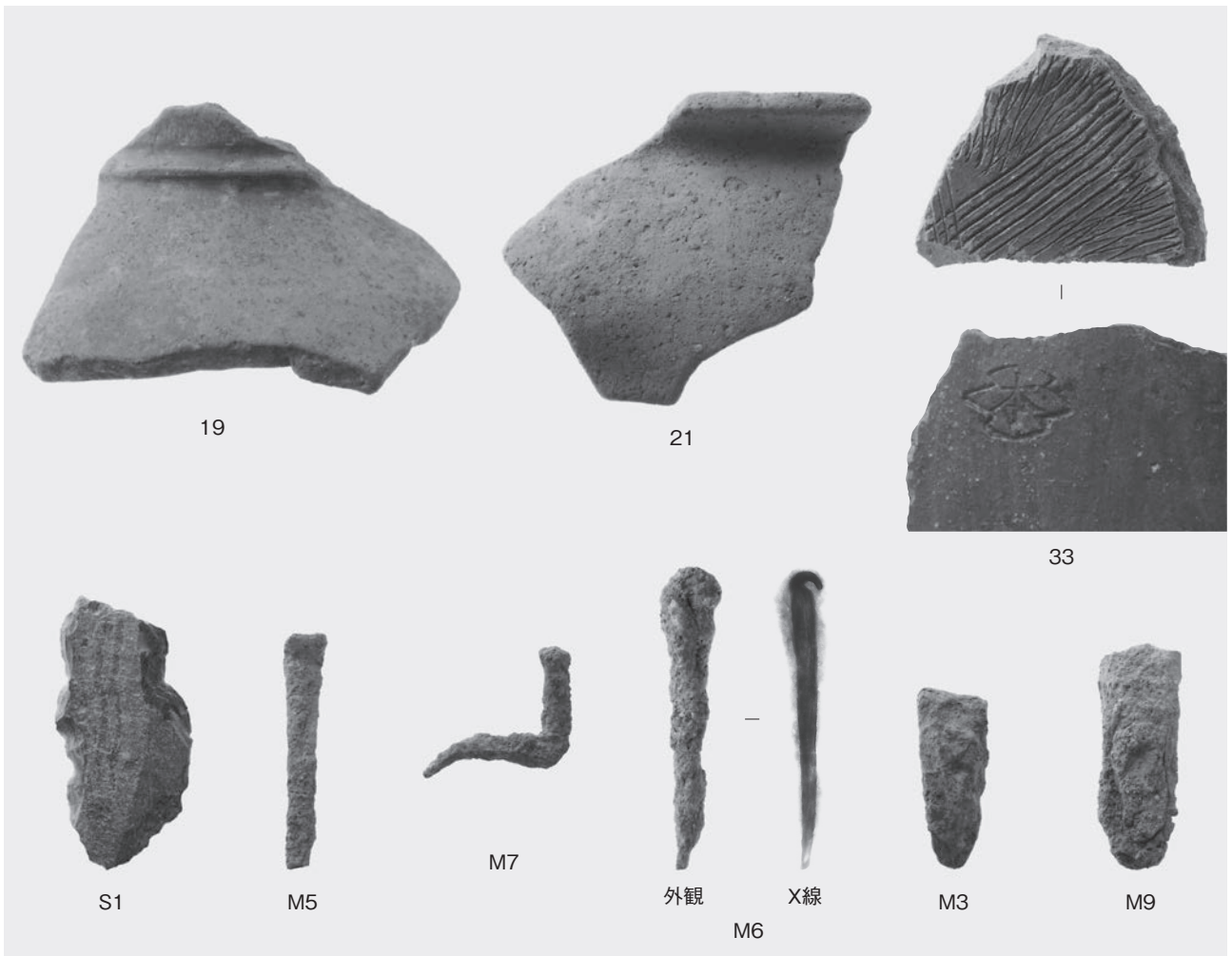
出土石器①



出土石器②



1 調査区全景（西から）



2 出土土器、石器、金属製品



1 竪穴住居 1 炭化材検出状況 (北から)



2 竪穴住居 1 埋土完掘状況 (北から)



3 4区遺構全景 (南東から)



4 竪穴住居 2 (南東から)



5 土坑 1 土器出土状況 (南東から)





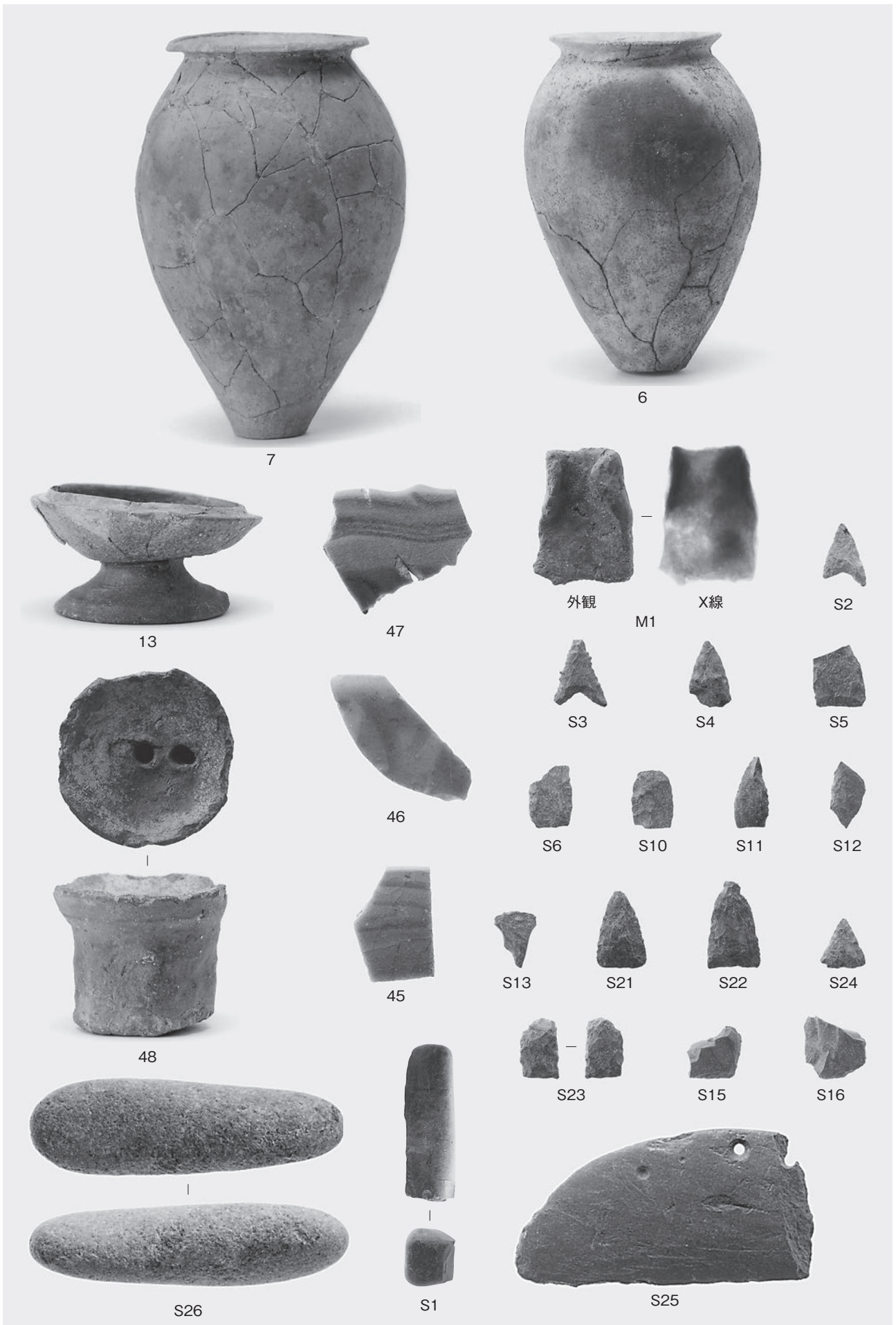
1 土坑2、溝2・3  
(南東から)



2 溝1 (北西から)



3 2区東半遺構全景  
(南東から)



出土土器、石器、金属製品



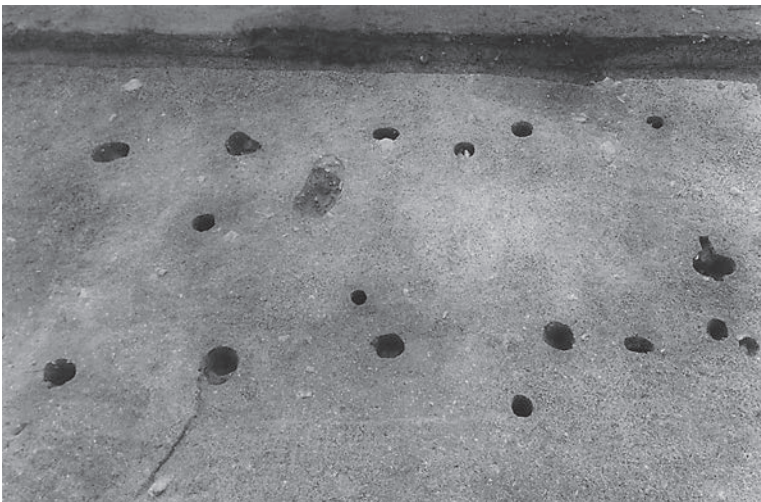
1 調査区全景（上空から、下が北）



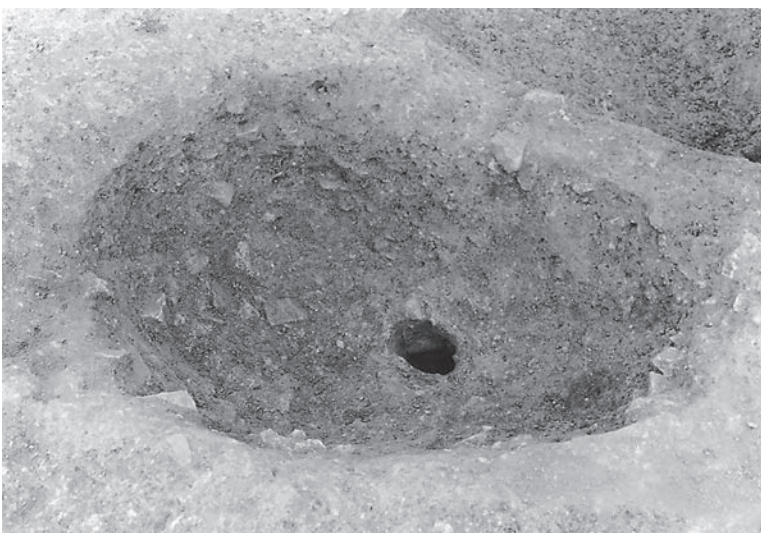
2 遺構全景（上空から、下が北）



1 調査区西半遺構全景  
(南東から)



2 掘立柱建物1  
(北東から)



3 土坑2 (北西から)

# 報告書抄録

ふりがな	へたにせいてついでせき	へたになかんだいせき	なるふるやいせき	みなくちいせき	たにやまいせき
書名	辺谷製鉄遺跡	辺谷中田遺跡	成ル古屋遺跡	水口遺跡	谷山遺跡 ほか
副書名	経営体育成基盤整備事業（奥吉原地区）に伴う発掘調査				
巻次					
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告				
シリーズ番号	240				
編著者名	杉山一雄・渡邊恵里子・内藤善史・有賀祐史・大澤正己				
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター				
所在地	〒701-0136 岡山県岡山市北区西花尻1325-3 TEL 086-293-3211 URL <a href="http://www.pref.okayama.jp/kyoiku/kodai/kodaik.htm">http://www.pref.okayama.jp/kyoiku/kodai/kodaik.htm</a>				
発行機関	岡山県教育委員会				
所在地	〒700-8570 岡山県岡山市北区中山下2-4-6 TEL 086-224-2111				
発行年月日	2014年3月31日				

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
へたにせいてついでせき 辺谷製鉄遺跡	おかやまけん 岡山県 あかいわし 赤磐市 おくよしほら 奥吉原	33213		34° 47' 16"	134° 07' 15"	2009.10.29～2009.12.22 2011.11.01～2011.12.22	190	記録保存調査
へたになかんだいせき 辺谷中田遺跡				34° 47' 26"	134° 07' 33"	2009.11.10～2009.12.17 2011.12.06～2012.03.16 2012.04.25～2012.08.10	2,315	記録保存調査
なるふるやいせき 成ル古屋遺跡				34° 47' 17"	134° 07' 33"	2009.11.09～2009.11.20 2012.01.12 2012.04.09～2012.05.02	335	記録保存調査
みなくちいせき 水口遺跡			333240309	34° 47' 11"	134° 07' 29"	2009.11.04～2009.12.18 2012.06.25～2012.06.26 2012.07.17～2012.09.21	715	記録保存調査
たにやまいせき 谷山遺跡				34° 46' 51"	134° 07' 25"	2009.12.01～2009.12.04 2012.09.03～2012.10.25	457	記録保存調査
まんがんじいせき 万願寺遺跡			333240313	34° 46' 48"	134° 07' 29"	2009.12.02	2	試掘・確認調査
まんがんじあと 万願寺跡			333240312	34° 46' 48"	134° 07' 29"	2009.11.27～2009.12.01	4	試掘・確認調査
ぜんぼうあと 善坊跡			333240308	34° 47' 16"	134° 07' 23"	2009.10.23～2009.10.30	10	試掘・確認調査
おくよしほらはいじ 奥吉原廃寺			333240258	34° 47' 21"	134° 07' 15"	2009.11.02～2009.11.09	10	試掘・確認調査
くまやまちょうなんぼ-262さんぷら 熊山町No.262散布地			333240262	34° 47' 14"	134° 07' 18"	2009.10.27～2009.11.06	10	試掘・確認調査
へたにいせき 辺谷遺跡			34° 47' 21"	134° 07' 20"	2009.10.24～2009.11.24	4	試掘・確認調査	
なるいせき 成ル遺跡			34° 47' 22"	134° 07' 33"	2010.01.06～2010.01.12	10	試掘・確認調査	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
辺谷製鉄遺跡	生産 散布地	縄文～弥生時代		弥生土器・石器	
		古墳時代後期	土坑6、溝1、作業面1、 排滓場1	土師器・須恵器・鉄滓・炉壁・鉄鉞 石・台石・敲き石	7世紀初頭頃の製鉄遺跡
		中世～近世		土師器・陶器・磁器	
辺谷中田遺跡	集落	縄文時代		縄文土器・石棒	後期土器と石棒が出土
		弥生時代	竪穴住居8、土坑15、墓1、 溝3、河道1	弥生土器・石器・鉄器	
		古墳時代	竪穴住居6、土坑7、溝1、 河道1	土師器・須恵器・鉄滓・羽口	カマド付き住居が出土
		古代～近世	墓1、土坑3、溝5、河道1、 石組み1	土師器・須恵器・瓦質土器・備前焼・ 陶器・磁器・土製品・鉄器	

成ル古屋遺跡	集落	弥生時代	河道	弥生土器・石器
		古代～近世	たわみ2	土師器・須恵器・瓦質土器・備前焼・陶器・磁器・土製品・鉄器
水口遺跡	集落	弥生時代	竪穴住居2、土坑1	弥生土器・石器
		古墳時代		土師器・須恵器・鉄滓
		古代～近世	掘立柱建物3、溝4	土師器・須恵器・瓦質土器・備前焼・陶器・磁器・土製品・鉄器
谷山遺跡	集落	弥生時代	土坑5、溝1	弥生土器・石器
		古墳時代～近世	掘立柱建物1、溝1	土師器・須恵器・備前焼・陶器・磁器・鉄器
万願寺遺跡	集落	弥生～古墳時代		弥生土器・土師器・須恵器・石器
万願寺跡	社寺	古代～中世		土師器・須恵器・陶器・磁器
善坊跡	社寺	弥生～近世		弥生土器・土師器・須恵器・瓦質土器・白磁・陶器
奥吉原廃寺	社寺	古代～近世		土師器・須恵器・青磁・平瓦
熊山町No262散布地	散布地	古墳～近世	自然流路	土師器・陶器・磁器
辺谷遺跡	集落	弥生	土坑・柱穴	弥生土器
	散布地	古墳～近世		土師器・須恵器・備前焼・陶器・磁器・土錘
成ル遺跡	散布地	古代～近世	ピット	土師器・須恵器・備前焼・陶器・磁器

要 約	<p>辺谷製鉄遺跡は、氾濫平野奥の丘陵東斜面裾に位置する7世紀初頭頃の製鉄遺跡である。調査では、土坑、作業場、溝、排滓場などを検出し、磁鉄鉱石やこれを原料とした鉄滓や炉壁が多量に出土した。製鉄に直接関連する遺構は確認されなかったが、調査区北側に製鉄炉本体が存在すると推測される。</p>			
	<p>辺谷中田遺跡は、谷底平野の中央で吉井川の川岸に位置する縄文時代から近世の集落遺跡である。竪穴住居、墓、土坑など弥生時代中期～古墳時代後期の遺構が密集しており、遺物も多量に出土した。弥生～古墳時代の遺構・遺物からは、吉備南部地域や播磨地域との交流が窺える。また、古墳時代後期の製鉄関連遺構からは、辺谷製鉄遺跡や周辺の丘陵に点在する製鉄遺跡との関連が推測される。</p>			
	<p>水口遺跡は、丘陵の北斜面裾に位置する弥生時代中期から近世の集落遺跡である。今回は、1999年度の発掘調査区に北接した地点の調査を行い、竪穴住居、掘立柱建物、土坑と溝が検出し、丘陵裾から平野にかけて集落が広がることを確認した。また、1999年度調査同様に古墳時代後期の被熱土坑と斜面上位から流入したと考えられる鉄滓が出土しており、背後の丘陵で製鉄が行われていた可能性が推測される。</p>			
	<p>谷山遺跡は、狭い谷の丘陵東斜面に位置する。土坑や掘立柱建物、溝の検出から弥生時代中期～近世の集落遺跡であることが明らかとなり、平野部だけでなく谷奥でも集落が存在することが明らかとなった。</p>			
	<p>万願寺遺跡は、谷底平野の南奥で狭い谷の丘陵北斜面裾から谷中央に位置する。弥生～古墳時代の集落遺跡で、確認調査では弥生時代の遺物と柱穴を確認した。</p>			
	<p>万願寺跡は、谷底平野の南奥で狭い谷の中央に位置する奈良～室町時代の寺院跡である。かつて布目瓦が採集されたことから寺院跡と推定されている。確認調査では、古代～中世の遺物包含層が確認されたのみであったが、古代の土師器や須恵器が比較的まとまって出土した。</p>			
	<p>善坊跡は、氾濫平野の中央南奥に位置する鎌倉～室町時代の寺院跡である。確認調査では、古代～中世の遺物包含層以外には、土石流の痕跡を確認した。</p>			
	<p>奥吉原廃寺は、丘陵東斜面に位置する奈良～平安時代の寺院跡である。確認調査では遺構は確認できなかったが、古代～中世の遺物包含層を確認した。</p>			
	<p>熊山町No262散布地は、丘陵北斜面裾に位置する古墳～奈良時代の遺物散布地である。確認調査では、古墳時代～近世までの遺物包含層と時期不明の流路を確認した。</p>			
	<p>辺谷遺跡は、試掘調査で新規に発見された弥生時代～近世の複合遺跡である。谷底平野の中央西側に位置し、弥生時代の土坑・柱穴などを確認した。</p>			
<p>成ル遺跡は、試掘調査で新規に発見された古代～近世の複合遺跡である。谷底平野の中央に位置し、遺物包含層を確認した。</p>				

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 240

辺谷製鉄遺跡  
辺谷中田遺跡  
成ル古屋遺跡  
水口遺跡  
谷山遺跡ほか

経営体育成基盤整備事業(奥吉原地区)に伴う発掘調査

平成26年3月7日 印刷

平成26年3月14日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター  
岡山市北区西花尻1325-3

発行 岡山県教育委員会  
岡山市北区内山下2-4-6

印刷 サンコー印刷株式会社  
総社市真壁871-2